# 筑後川下流用水事業に係る 文化財調査報告書 5

坊所三本松遺跡 下 中 杖 遺 跡 田手二本松遺跡 薬 師 森 遺 跡

> 1998年3月 佐賀県教育委員会

# 筑後川下流用水事業に係る 文化財調査報告書5

坊所三本松遺跡 下 中 杖 遺 跡 田手二本松遺跡 薬 顔 顔

1998年3月

佐賀県教育委員会

この調査報告書は、佐賀県教育委員会が水資源開発公団の委託を 受けて、昭和56年度から実施している筑後川下流用水事業に伴う埋 蔵文化財発掘調査の記録の一部で、平成3年度から平成8年度に発 掘調査を行った上峰町・三田川町・佐賀市に所在する坊所三本松遺 跡・下中杖遺跡・田手二本松遺跡・薬師森遺跡に関するものです。

調査の結果、縄文時代晩期末から弥生時代初頭にかけての溝・遺物包含層等や、弥生時代から中世にかけての住居跡・井戸跡・土坑等の遺構が明らかになり、甕棺・椀・皿等の当時の暮らしぶりを生々しく伝える多数の遺物が出土しました。

調査の成果は本書に詳しいところですが、その内容が学術文化の 向上に寄与するとともに、県民の皆様が郷土の歴史と文化財を愛し、 守っていくための資料として広く活用して頂ければ幸いに存じます。 最後になりましたが本報告書の発刊にあたり、水資源開発公団及び 地元の皆様をはじめとする関係各位から賜わった深い御理解と多大 な御協力に対し、心から厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

佐賀県教育委員会

教育長 川久保善明

## 例 言

- 1. 本報告書は筑後川下流用水事業に伴う事前調査のうち、平成3年度から平成8年度に発掘 調査を行なった三養基郡上峰町所在の坊所三本松遺跡、神埼郡三田川町所在の下中杖遺跡・ 田手二本松遺跡、佐賀市久保泉町所在の薬師森遺跡の調査報告書である。
- 2. 発掘調査は、水資源開発公団の依託を受けて佐賀県教育委員会が実施した。
- 3. 発掘調査にあたっては、上峰町・三田川町・佐賀市の各教育委員会・土地改良課、並びに 地元の方々の協力を得た。
- 4. 本書の執筆と編集は下記の分担で行なった。

執筆:第1章及び第2章下中杖・田手二本松・薬師森遺跡,川副麻理子,第2章坊所三本松 遺跡,小松 譲,第3章(株)古環境研究所

編集:小松譲、百崎正子の協力を得て川副麻理子が行った。

5. 調査記録の整理と報告書作成作業は佐賀県文化財課及び文化財調査研究資料室で行った。 遺構実測:江島美恵子・山口美佐子・上瀧光子・三好文子・谷口加代子・野田美恵子・嬉野 みつ代・百崎正子・小松譲・武谷和彦・市川浩文・高瀬哲郎・川副麻理子・(株)埋蔵文化財 サポートシステム<委託>

遺物整理:田中ハルミ・中島美須三・陣内加代子・森崎和子・山口カズヨ・田中美穂子・ 江頭千昭

遺物実測:江島美恵子・上瀧光子・山口美佐子・江副朋子・鶴田啓子・村里育子・大場孝夫 川副麻理子

製図:江副朋子・鶴田啓子・村里育子

遺構写真撮影:高瀬哲郎·小松譲·立石泰久·市川浩文·川副麻理子· (有)空中写真企画 資料整理:百崎正子·川久保純子

遺物写真撮影:川副麻理子・黒木優子・市川浩文

写真現像焼付:黒木優子

- 6.発掘調査及び報告書作成に際して下記の方々から指導・助言をいただいた。 高橋学・外山秀一・藤尾慎一郎・前田達男・中野 充・安村俊史・宮崎泰史・草野誠司(敬 称略)
- 7. 遺構は遺跡ごとに一連番号を付け、SH:竪穴住居跡, SB:掘立柱建物跡, SE:井戸, SD:溝, SK:土坑, SJ:甕棺墓, SP:土壙墓, P:柱穴・小穴, SX:その他・不明遺構の略号を用いて標記した。
- 8. 測定地の表示に用いた寸法は、遺構がm、遺物がcmを基本とする。
- 9. 方位は坊所三本松遺跡は座標北で他は磁北である。
- 10. 本書使用の地形図は国土地理院発行に基づくものである。

## 目 次

<b>%</b> 1		1000000000000000000000000000000000000
1		D経過····································
2	調査組	且織1
3	発掘器	<b>  査の概要3</b>
4	地理的	· 京環境···································
第2	SCHOOL STAN	亦各説9
坊		公遺跡
I	100,00000000000000000000000000000000000	り概要11
	1 地	理的・歴史的環境・・・・・・11
	(1)	地理的環境
	(2)	歷史的環境
	200, 100,00	<b>遺跡の概要13</b>
I		17
		<b>単文時代の遺構17</b>
	(1)	土坑
	2 3	尔生時代の遺構
	(1)	竪穴式居跡
	(2)	土坑27
	(3)	円形周溝34
	(4)	構状遺構35
	(5)	<b></b>
	3 7	ち墳時代後期~奈良時代の遺構37
	(1)	竪穴住居跡38
	(2)	掘立柱建物跡
I	遺物	43
	1 3	尔生時代の土器43
	(1)	竪穴住居跡出土土器
	(2)	土坑出土土器45
	(3)	円形周溝出土土器
	(4)	溝状遺構出土土器

	(5) 甕棺	5
	2 古墳時代後期~奈良	時代の土器
	(1) 古墳時代後期、飛	鳥時代の土器
	(2) 奈良時代の土器 …	
	① 竪穴式住居跡出	土土器 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
	② 土坑出土土器 …	
	3 石器・石製品・土製	品
N ±	とめ	
1	佐賀平野の弥生中期後半	〜後期初頭の土器群
2	遺跡の立地と弥生時代集	落の変遷
下中杖	遺跡	/
I 遺	跡の概要	
Ⅱ 遺	構・遺物	
1	O区 (1-1区) ············	
	(1) 遺構	(2) 遺物
	<ol> <li>土坑</li> </ol>	① 土坑出土遺物
	② 溝状遺構	② 井戸出土遺物
	③ 井戸	
	④ 小穴	
2	P区 (1-2区) ·······	
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 溝状遺構	
3	Q区 (1-7区) ····································	
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 井戸	① 井戸出土遺物
4	R区 (1-3区)	
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 井戸	① 竪穴住居跡出土遺物
	② 土坑	② 井戸出土遺物
		③ 土坑出土遺物
		④ 不明遺構出土遺物
		⑤ 溝状遺構出土遺物

5	S区 (2-4区) ····································	93
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 土塁状遺構	① 土塁状遺構出土遺物
	② 溝状遺構	② 溝状遺構出土遺物
	③ 土坑	③ 小穴出土遺物
		④ 検出面出土遺物
6	T⊠ (2-5⊠) ·······	96
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 溝状遺構	① 不明遺構出土遺物
		② 井戸出土遺物
		③ 土坑出土遺物
		④ ビット出土遺物
		⑤ 埋土出土遺物
7	U区 (2-6区) ·······	101
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 土坑	① 井戸出土遺物
	② 井戸	② 不明遺構出土遺物
	③ 円形周溝	③ 小穴出土遺物
	④ 不明遺構	④ 検出面出土遺物
8	v⊠ (3-8⊠) ······	106
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 土坑	① 土坑出土遺物
	② 井戸	② 井戸出土遺物
9	w⊠ (3-1⊠) ······	110
	(1) 遺構	(2) 遺物
	① 井戸	① 不明遺構出土遺物
		② 小穴出土遺物
I	まとめ	111
田手	二本松遺跡	123
-	追助でが、女	124

	I 🗵124
	(1) 溝状遺構・・・・・・124
	(2) 遺物包含層・・・・・・124
2	II 🛭126
	(1) 溝状遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・126
	(2) 遺物包含層
Ш	遺物
	(1) I区出土遺物
	(2) Ⅱ区出土遺物
IV	まとめ134
薬部	<b>市森遺跡·······</b> 143
I	歴史的環境と遺跡の概要・・・・・・144
	歴史的環境······144
2	2 遺跡の概要
П	遺構146
1	SX001不明遺構
2	2 SD002溝状遺構
4	3 遺物包含層
Ш	遺物150
	SD002溝状遺構出土遺物
2	2 SX001不明遺構出土遺物
3	3 包含層出土遺物
IV	まとめ
第:	3章 自然科学分析
-	・

## 挿 図 目 次

調査の	概要	Fig.29	SB09握立柱建物路(1/40)
昭和56	6年~平成8年度調査区位置図(1/50000)	Fig.30	SH01 · 04 · 05堅穴住居跡出土土器 (1/4)
坊所三	本松遺跡	Fig.31	SH05竪穴住居跡出土土器 (1/4)
Fig.1	周辺遺跡分布図(1/50000)12	Fig.32	SH06·07·08·16竪穴住居跡出土土器(1/4)
Fig.2	坊所三本松遺跡位置図(1/2500)14	Fig.33	SH13 · 46 · 47堅穴住居跡出土土器 (1/4)
Fig.3	遺構配置図(1/200)15~16	Fig.34	SK17 · 19 · 21土坑出土土器 (1/4)
Fig.4	SK23·49土坑(1/40)17	Fig.35	SK22・27土坑出土土器 (1/4)5
Fig.5	SH01竪穴住居跡 (1/60)19	Fig.36	SK26·42土坑出土土器 (1/4)
Fig.6	SH03竪穴住居跡 (1/60)20	Fig.37	SK28·45·50土坑出土土器 (1/4)
Fig.7	SH04·05堅穴住居跡 (1/60)21	Fig.38	SX18円形周溝、SD29溝状遺構出土土器(1/4)56
Fig.8	SH06竪穴住居路(1/60)22	Fig.39	SJ41軣棺(1/4)57
Fig.9	SH07·44堅穴住居跡 (1/60)22	Fig.40	古墳時代~奈良時代土器(1/4)62
Fig.10	SH08堅穴住居跡(1/60)23	Fig.41	土製品、石製品 (1/2)
Fig.11	SH13竪穴住居跡、SK50土坑(1/40)24	Fig.42	<b>夔</b> 口禄部、底部分類66
Fig.12	SH46·47竪穴住居跡(1/40)25	Fig.43	弥生土器(中期~後期初)器種分類・・・・・・・・・・73
Fig.13	SH48堅穴住居跡(1/60)26	Fig.44	弥生中期後半~後期初頭主要器種編年試案
Fig.14	SK17・21・31・32・33土坑(1/40)29		
Fig.15	SK19・20・22土坑(1/40)	下中核	<b>过遗跡</b>
Fig.16	SK26・27土坑(1/40)31	Fig.1	下中杖遺跡調査区位置図(1/7500)81
Fig.17	SK28·30·40·45土坑(1/40)32	Fig.2	O区SK001·003·005土坑(1/40)
Fig.18	SK42·43土坑(1/40)33	Fig.3	O・P・Q・R区遺構配置図 (1/200)83~84
Fig.19	SX18円形周溝(1/40)35	Fig.4	O区SD006清状遺構、SE007・009井戸(1/40)
Fig.20	SD29溝状遺構(1/40)36	Fig.5	O区出土道物 (1/4)
Fig.21	SJ41養棺墓(1/20)36	Fig.6	P区SD001溝状遺構(1/4)87
Fig.22	SH02竪穴住居跡 (1/40)	Fig.7	Q区SE001井戸、R区SE004井戸・SK003-009土坑(1/4)88
Fig.23	SH10堅穴住居跡 (1/40)38	Fig.8	Q区出土遺物 (1/4)
Fig.24	SH11堅穴住居跡 (1/40)39	Fig.9	R区出土遺物 (1/4)90
Fig.25	SH12堅穴住居跡(1/40)・竜(1/30)	Fig.10	S区遺構配置図(1/100)92
Fig.26	SH14竪穴住居跡(1/60)・竈(1/40)41	Fig.11	S区土塁土層図(1/50)93
Fig.27	SH15堅穴住居跡(1/40)	Fig.12	S区SK030土坑(1/40)94
Fig.28	SH16竪穴住居跡 (1/40)	Fig.13	S区出土造物 (1/4)

T・U区遺構配置図 (1/200)97~98	Fig.6	Ⅱ区出土遺物1 (1/4)132
5 T区SD002 · 003 · 009講状遺構(1/60) · · · · · · · · · 100	Fig.7	Ⅱ区出土遺物2 (1/4)133
5 T区出土遺物 (1/4)101	Fig.8	Ⅱ区出土遺物3(1/4)134
U区SK010・014・015土坑	Fig.9	I区·I区出土遺物 土製品·石製品 (1/2) ······135
SE032 · 034井戸 · SX001不明遺構(1/40) · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		
U区SR020円形周溝(1/40)103	薬師系	<b>渠遺跡</b>
) U区出土遺物1 (1/40)104	Fig.1	周辺遺跡分布図(1/50000)145
U区出土遺物2 (1/40)106	Fig.2	薬師森遺跡調査区位置図(1/1000)147
V·W区遺構配置図(1/200)107~108	Fig.3	遺構配置図およびグリッド図 (1/100)148
・ V区SK001・002・003・009土坑、SE005井戸(1/40)・・・・・109	Fig.4	SD002溝状遺構(1/40)149
v·w区出土遺物 (1/4)111	Fig.5	E-W土層図・ドットマップ (1/100)150
S区土塁およびSD002溝状遺構出土石塔1 (1/6)112	Fig.6	SD002溝状遺構出土遺物1(1/4)151
S区SD002溝状遺構出土石塔2 (1/6)113	Fig.7	SD002溝状遺構出土遺物2(1/4)153
: 土製品·石製品 (1/4.5)114	Fig.8	包含層出土遺物1 (1/4)155
	Fig.9	包含層出土遺物2 (1/4)157
二本松遺跡	Fig.10	包含層出土遺物3 (1/4)158
田手二本松遺跡調査区位置図(1/5000)125	Fig.11	包含層出土遺物4 (1/4)159
I 区遺構配置図(1/100)126	Fig.12	包含層出土遺物5(1/4)160
Ⅱ区造構配置図(1/150)およびグリッド図(1/300)…128	Fig.13	包含層出土遺物6·SX001不明遺構出土遺物(1/2·1/4) ···161
I 区土帰図・ドットマップ (1/40)129	Fig.14	包含層出土遺物7 (1/4)162
I 区出土遺物(1/4)131		
表目	目次	
三本松遺跡	Tab.2	道構一覧表118
縄文時代土坑一覧表18	Tab.3	遺物観察表120
弥生時代土坑一覧表27		
土坑分類一覧表27	田手二	本松遺跡
<b>弥生土器観察表58</b>	Tab.1	田手二本松遺跡深鉢分類表136
坊所三本松遺跡遺構別幾口禄·底部分類表 ······71	Tab.2	直物観察表138
遺構別器種分類表74		
	薬師森	连遺跡
支遺跡	Tab.1	莱節森遺跡深鉢分類表163
下中枝遺跡調査地区一覧表117	Tab.2	<b>遣物観察表</b>
	T区SD002・003・009講状遺構 (1/60) 100   101   101   101   101   101   101   101   101   101   101   101   101   101   101   102   102   102   102   102   103   102   103   102   104   104   104   105   106   107   108   106   107   108   107   108   108   109   107   108   109   107   108   109	T区SD002・003・009溝状遺構(1,60)

## 図 版 目 次

## 坊所三本松遺跡

- PL.1 1.調査区全景 2.調査区西側 3.SK49土坑
- PL2 1.5H01堅穴住居跡 2.5H02 · 04 · 05 · 08堅穴住居跡 PL2 1.1区全景 2.遺物出土状況1 3.遺物出土状況2 3.SH03竪穴住居跡
- PL3 1.SH07竪穴住居跡 2.SH08竪穴住居跡 3.SH13堅穴住居跡
- PL4 1.SH48竪穴住居跡、SK28·33土坑 2.SK26 · 27土坑 3.SK28土坑
- PL.5 1.SK21土坑 2.SX18円形周溝 3.SJ41甕棺墓
- PL6 1.SH10 · 11堅穴住居跡 2.SH14堅穴住居跡 3.SH14竪穴住居跡 4.SB09掘立柱建物跡
- PL.7 弥生土器 裹
- PL.8 弥生土器 鉢、高杯、器台、袋状口縁壷 PL.3 1.Eグリッド西壁土層 2.C・D拡張区
- PL.9 弥生土器 鉢
- PL10. 弥生土器 壶、石器、石製品

## 下中柱清跡

- PL.1 1.R区全景 2.S区土显部分(调查前全景) 3.S区全景 PL.6 1.小壹出土出土状况 (C·D拡張区)
- PL.2 1.U区全景 2.V区全景
- PL3 1.W区全景 2.0区SE001井戸 3.S区土塁土屬
- PL.4 1.S区SD002溝状遺構内石塔出土状況
- PL.5 1.U区土錘出土状況 2.U区P.019 3.V区SE005井戸 PL.10 包含屬出土遺物 4.作業風景
- PL6 O区出土遺物 S区出土遺物 T区出土遺物
- PL.7 T区出土遺物 U区出土遺物 V区出土遺物
- PL8 S区出土石塔類
- PL9 土製品、石製品

## 田手二本松遺跡

- PL.1 Ⅱ区全景
- PL3 1.SD002溝状遺構 2.SD003溝状遺構 (畦畔)
  - 3.A-15グリッド土場
- PL4 I区出土遺物 II区出土遺物
- PL5 I · Ⅱ区出土石器 Ⅲ区出土線刻土器

#### 華師森遺跡

- PL.1 1.遺跡遠景 2.調査区全景
- PL.2 1.遺跡遠景 2.SD002溝状遺構
  - 3.D·E·F·Gグリッド段落ち部
  - - 3.Fグリッド西壁土層 4.SD002溝状遺構土層
- PL4 1.杭出土状況 2.A・Bグリッド遺物出土状況 3C・Dグリッド遺物出土状況
- PL.5 1.Eグリッド遺物出土状況 2.Fグリッド遺物出土状況
- - 2.C·D拡張区遺物出土状況 3.作業風景
- PL.7 SD002溝状遺構出土遺物
- PL8 包含層出土遺物
- 2.U区SR020円形周溝 3.U区SB033掘立柱建物 PL9 包含層出土遺物 SX001不明遺構出土遺物

# 第1章 調査の概要

## 調査の概要

## 1. 調査の経過

筑後川下流用水事業(佐賀東部導水路・大詫間幹線水路)に伴う埋蔵文化財調査は、昭和56 年度から始まり、関係市町村は佐賀市、佐賀郡諸富町、神埼郡神埼町・三田川町・千代田町、 三養基郡北茂安町・上峰町の1市6町に及んでいる。

このうち発掘調査を行なった地区については、整理作業が進み次第順次報告書を刊行してきており、これまでに4冊を作成した。今回は5冊目にあたり、平成3年度~平成8年度までに発掘調査を行った地区について報告を行う。

今回の報告を行うのは平成3年度調査上峰町坊所三本松遺跡、平成4年度・平成7年度調査 三田川町下中杖遺跡、平成5年度・平成6年度調査三田川町田手二本松遺跡、平成8年度調査 佐賀市薬師森遺跡の4遺跡に関するものである。

平成3年度は上峰町坊所三本松遺跡(760㎡)で発掘調査を行い、佐賀市久保泉地区、三田川町中部地区で確認調査を行った。

平成4年度は三田川町下中杖遺跡 (980㎡) で発掘調査を行い、北茂安町千栗地区で確認調査を行った。

平成5年度は三田川町田手二本松遺跡 (132m) で発掘調査を行い、佐賀市久保泉南部地区で 確認調査を行った。

平成6年度は引続き三田川町田手二本松遺跡(262m)で発掘調査を行い、上峰町・北茂安町・諸富町で確認調査を行った。

平成7年度は、三田川町下中杖遺跡(413m)で、発掘調査を行い、上峰町・北茂安町・諸富町で確認調査を行った。

平成8年度は、佐賀市薬師森遺跡(358m)で発掘調査を行い、佐賀市で確認調査を行った。 筑後川下流用水事業における発掘調査は平成8年度で終了し、平成9年度は報告書作成年度 である。

### 2. 調査組織

## 調查主体

佐賀県教育委員会

(発掘調査:平成3年度~平成8年度)

### 総括

堤 清行 佐賀県教育長(平成3年度~平成5年度)

林田重人 (平成6年度~平成7年度)

川久保善明 (平成8年度~)

## 事務局

局 長 高 島 忠 平 文化財課長 (平成3年度~平成8年度)

中牟田賢治 文化財課長補佐(平成3年度~平成7年度)

西村貞幸 (平成2年度~平成4年度)

瀬戸明廣 (平成5年度~平成7年度)

深 町 昌 司 (平成8年度~)

田平徳栄 (平成7年度~)

庶務会計 永 松 和 久 文化課 庶務係長(平成3年度~平成6年度)

岩瀬茂生 〃 (平成7年度~)

濱野清子 \* 主査 (平成3年度~平成6年度)

古屋きよみ ク (平成7年度)

富 窪 道 代 《 主事 (平成8年度~)

小 林 宣 洋 (平成3~4年度)

鷲 崎 義 彦 / 主査 (平成5年度~平成7年度)

池田 学 , 主事 (平成3年度~平成8年度)

松 瀬 弘 " (平成2~4年度)

久保信行 (平成8年度~)

## 調査員

調查主任 高 瀬 哲 郎 文化財課調查係長 (平成2年度~平成5年度)

天本洋一 " (平成6年度)

東中川 忠 美 / 調査発金調整主査 (平成7年度)

森田孝志 , (平成8年度~)

調 查 員 小 松 譲 文化財課調查係指導主事 (平成3年度)

川 副 麻理子 "文化財保護主事(平成4年度~)

市川浩文 "《平成5年度》

百 崎 正 子 , 嘱託 (平成3年度~平成6年度)

(報告書作成:平成9年度)

総括 川久保善明 佐賀県教育長

## 事務局

局 長 佛 坂 勝 男 文化財課長

次 長 深 町 昌 司 文化財課長補佐

田平徳栄 〃

大橋康二 "

庶務会計 岩 瀬 茂 生 文化課庶務係長

久 保 信 行 文化課主査

吉 村 俊 也 文化課主事

富 窪 道 代 文化課主事

## 調査員

調查主任 森田 孝志 文化財課調查班企画調整主查

調 查 員 川 副 麻理子 文化財課文化財保護主事

百 崎 正 子 文化財課嘱託

## 調査協力

水資源開発公団筑後川下流用水建設所,建設省佐賀河川総合開発工事事務所 佐賀県農林部 上峰町,三田川町,佐賀市各教育委員会,土地改良課 地元各位

## 3. 発掘調査の概要

坊所三本松遺跡 [略号:BJS]

所 在 地 佐賀県三養基郡上峰町大字坊所字三本松

調 査 期 間 平成3年10月4日~11月20日

調查面積 760m

遺跡の内容 縄文時代~古墳時代 竪穴式住居跡・掘建柱建物跡・甕棺墓・土坑他

下中杖遺跡 [略号:SNT]

所 在 地 佐賀県神埼郡三田川町大字豆田・大字立野

調 查 期 間 平成4年6月1日~10月23日, 平成7年9月4日~10月6日

調 査 面 積 980m. 413m

遺跡の内容 弥生時代・古代~中世 溝・井戸・土坑等

田手二本松跡遺跡 「略号:TDM]

所 在 地 佐賀県神埼郡三田川町大字田手字二本松

調 查 期 問 平成6年2月25日~3月4日,平成6年5月9日~5月31日

調 査 面 積 132m, 262m

遺跡の内容 縄文時代晩期末~弥生時代初頭 遺物包含層・畦畔?等

薬師森遺跡 [略号:YMR]

所 在 地 佐賀県佐賀市久保泉町大字薬師丸字薬師森

調 查 期 間 平成8年12月16日~平成9年2月24日

調 査 面 積 358m

遺跡の内容 縄文晩期末 - 弥生時代初頭 溝・遺物包含層

## 筑後川下流用水事業に係る埋蔵文化財発掘調査地区一覧

遺 跡 名	所 在 地	時期	調査年度	報告 書発行年月
野田遺跡	佐賀県神埼郡 神埼町大字竹	弥生時代 一鎌倉時代	1981 1982	1985.3
川寄吉原遺跡	佐賀県神琦郡 神琦町大字竹	弥生時代後期	1982	同上
尾崎土生遺跡	佐賀県神埼郡 神埼町大字尾崎	弥生時代 〜室町時代	1982 1983	同上
下六丁遺跡	佐賀県神埼郡 神埼町大字横武字灰巻	室町時代 江戸時代	1987	1989.3
横武四本黑木遺跡	佐賀県神埼郡 神埼町大字横武字四本黒木	室町時代	1987	同上
馬郡遺跡1~3区	佐賀県神埼郡 神埼町大字鶴字馬郡	弥生時代 ~中世	1985	同上
杉龍遺跡	佐賀県神埼郡 三田川大字田手字杉籠・二本杉	弥生時代 ~中世	1986	同上
小杭村中遺跡	佐賀県佐賀郡諸宮町 大字山領字小杭分二本松大字字一本杉・四本谷	古墳時代 ~中世	1987	同上
本村遺跡	佐賀県佐賀市久保泉町 大字下和泉字本村一本松·二本松·永屋	古墳時代後期 平安時代後期~室町時代	1989	1991.3
吉野ヶ里遺跡 吉野ヶ里丘陵地区V区 (馬郡遺跡4区)	佐賀県神埼郡 神埼町大字鶴・大字志波屋 三田川町大字田手 東脊振村大字辛上	弥生時代	1986	1994.3
吉野ヶ里遺跡 吉野ヶ里丘陵地区田区 (吉野ヶ里丘陵遺跡)	佐賀県神埼郡 神埼町大字鶴・大字志波屋 三田川町大字田手 東脊振村大字辛上	弥生時代	1986	同上
太田本村遺跡	佐賀県神埼郡 諸宮町大字大堂字太田	弥生時代 ~古墳時代	1986	同上
原の町西遺跡	佐賀県神埼郡 千代田町大字境原字七本松	近世	1989	同上
坊所三苯松遺跡	弥生時代 奈良時代	1991	1998.3 (本書)	
下中杖遺跡	佐賀県神埼郡 三田川町大字豆田・大字立野	弥生時代 平安時代	1992 1995	同上
伯美三苯松遺跡	佐賀県神埼郡 三田川町大字田手字二本松	繩文時代晚期末 弥生時代初頭	1993 1994	同上
薬師森遺跡	佐賀県佐賀市 久保泉町大字薬師丸字薬師森	繩文時代晚期末 弥生時代初頭	1996	同上

## 4 地理的環境

今回報告の対象となっている4遺跡は、丘陵縁辺部及び水田部に所在し、標高約3.8~8.2mの間に立地する遺跡である。丘陵縁辺部に所在する遺跡は、坊所三本松遺跡(上峰町:平成3年度調査)、下中杖遺跡(三田川町:平成4年・平成7年度調査)である。水田部に所存する遺跡は、田手二本松遺跡(三田川町:平成5年・平成7年度)、薬師森遺跡(佐賀市:平成8年度)である。また、遺跡は便宜上、城原川を境として以東、以西に区分している。

城原川以東は、背振山麓から延びる目達原高地の南側縁辺部に坊所三本松遺跡、中杖高地に下中杖遺跡、吉野ヶ里丘陵東部、田手川東岸の微高地上に田手二本松遺跡がそれぞれ位置している。遺跡の周辺には、田手川のほか城原川・井柳川・切通川などの大小の河川が存在する。次いで城原川以西の薬師森遺跡であるが、ここは周辺でももっとも低い位置にあたり巨瀬川の氾濫源であると考えられる。遺跡の周辺には巨瀬川のほか焼原川などのほか縦横にクリークが走る。このクリークは佐賀平野の特徴であり、東は三根町から西は白石平野の有明海沿岸部一帯に存在している。しかしながら、近年の農業基盤整備事業に伴い農業用水路の整備が行われ、次第に姿を変えつつある。筑後川下流用水事業(佐賀東部導水路・大詫間幹線水路)に伴う調査は、昭和54年度から平成8年度までの18年間に16遺跡17地点について行った。この事業は、農業用水の確保を主たる目的とした事業であったため、標高10m以下の地点を調査することが多かった。これまでに調査を行った遺跡の標高は約2m~16mで、その中でも最も低い位置に立地するのは諸富町所在の小杭村中遺跡で標高2.1m(昭和61年度調査)、最も高い位置に立地するのは神崎町所在の吉野ヶ里丘陵地区3区で標高16.5m(昭和61年度調査)である。

## 参考文献

徳富則久 1995「脊振山系南麓洪積台地及びその周辺における弥生~古墳時代前期集落の立地と動向

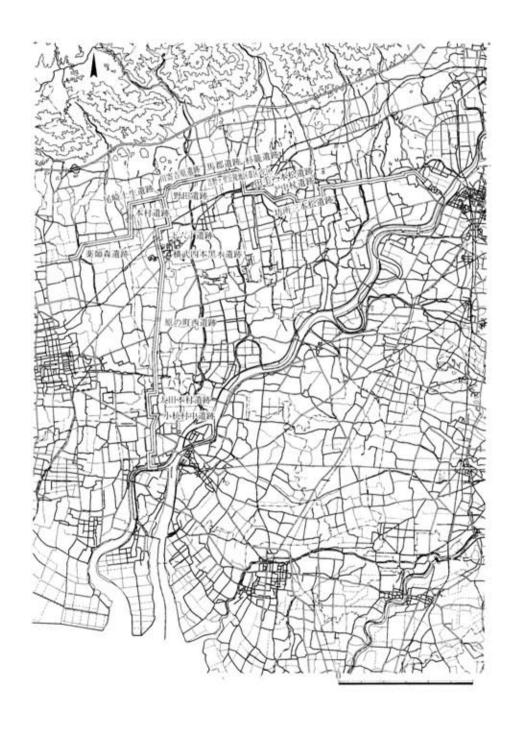
(1) (佐賀平野の集落Ⅱ)」佐賀考古2

徳富則久 1995「目達原段丘郡及びその周辺における弥生~古墳時代前期集落の立地と動向 (佐賀平野の集落3)」佐賀考古□)」佐賀考古3

神埼町史編さん委員会 1972 神埼町史

三田川町史編さん委員会 1980 三田川町史

佐賀県教育委員会 1976 佐賀縣史蹟名勝天然記念物調查報告



昭和56年~平成8年度調査区位置図(S=1/50000)

## 報告書抄録

				1100	T 11 17 3						
ふりがな	ほうしょう	ほうしょさんほんまついせき・しもなかつえいせき・たでにほんまついせき・やくしもりいせき									
副書名	坊所三	坊所三本松遺跡・下中杖遺跡・田手二本松遺跡・薬師森遺跡									
書名	筑後川	筑後川下流用水事業に係る文化財調査報告書									
卷次	5										
シリーズ名	佐賀県	文化則	力調查報	告書							
シリーズ番号	第13	6 集									
編著者名	川副麻	理子									
編集機関	佐賀県	教育委	会員会								
所在地	€840-	8570仏	質市城!	内1丁目:	1番595	TE	L (0952	) 2	5 -	7232	
発行年月日	西暦 1	998	年3月	3 1 日							
ふりがな	ふりカ	5な	7	- 'F'	11.60	als éx	00 DH :4: 100	調査	面積	-00 sk: ps/ (pr	
所収遺跡名	所在地			遺跡番号	北緯	東経	調査期間		$m^{\vec{r}}$	調査原因	
坊所三本松	町大字		413453	2022	33° 18' 45" 6070	130°25′13″ 5241	19911004 ~19911120	760		筑後川下流用 水事業	
下中杖	1550	神埼郡三田川町 大字立野・豆田		2019,4001 5004	33° 18' 38" 3123	130°24' 41"0932	19920601 ~ 1023 19950904 ~ 1006	139	3	筑後川下流用 水事業	
前手二本松	神埼郡三大字田手	1000 400	413232	2025	33° 18' 59" 1351	130°23°42″ 9510	19940225~0304 0509~0531	394		筑後川下流用 水事業	
薬師森	佐賀市久 薬鰤丸薬	T. 6. W	412015 2115		33°17'34" 9336	130° 19° 09° 0623	19961216 ~19970224	358		筑後川下流用 水事業	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物			特記事項		
坊所三本松	集落	縄文弥生	土坑 竪穴住居跡 土坑 円形周溝 斐棺墓			弥生土 磨製石	弥生土器、石包丁、 磨製石剣			列状の陥穴群 弥生中期から後 期初頭の集落、 中期後半に集著 は衰退。	
		奈良	堅穴住居跡 掘立柱建物跡		6 基	須恵器、土師器、砥石		塔の塚廃寺近く の集落。			
下中杖	集落	弥生~ 中世	井戸、土坑、溝、円形周溝 掘立柱建物跡			弥生土器、須恵器、 土師器、瓦質土器 輸入陶磁器					
田手二本松	包含層	晚期	溝状遺構			深鉢、浅鉢、壺、高杯			0.5000	大遺構は畦野 可能性あり。	
薬師森	包含層	縄文晩期	溝状遺	溝状遺構			戋鉢、壺、管 十刃石斧	王、			

# 第2章 遺跡各説

坊所三本松遺跡

所在地: 佐賀県三養基郡上峰町大字坊所

## 坊所三本松遺跡

## I 遺跡の概要

## 1 地理的環境と歴史的環境

## (1)地理的環境

南は有明海、北は脊振山系に挟まれた佐賀平野は南北に細長くのびる段丘面と有明海を臨む 平坦低地からなる。坊所三本松遺跡はその佐賀平野の東部地域にあたり田手川と切通川に挟ま れた標高8~9mの目達原段丘の南先端に位置する。脊振山系から南方にのびるこれらの段丘 には多くの遺跡が立地する。これら段丘の形成過程についてはその構成層について下山・西田 (1994) に詳しく記述されておりここでは大曲層以前に形成された段丘をまとめて地名を用いた 通称名として使う。本遺跡の立地する目達原段丘は佐賀平野東部地域では最も広い段丘面で、 田手川を挟んで西方には城原川の間に志波屋段丘が細長くのびる。目達原段丘の東方に流れる 切通川を挟んで、寒水川との間に二塚山段丘がある。

佐賀平野の平坦低地は標高4~5mで一見全く起伏の見られない平坦地にみえるがこの中にも微高地があり、遺跡はこの微高地を利用して形成されている。この佐賀平野平坦低地の弥生 ~古墳時代集落の立地と動向については徳富(1994)が論じている。

### (2)歷史的環境

旧石器時代の遺跡は本格的調査例は少なく、八藤遺跡(上峰町)・船塚遺跡(神埼町)・山 古賀遺跡(中原町)で集石・包含層が確認されている。特に八藤遺跡では集石のほか包含層中 から黒耀石製の細石核等が出土している。また、阿蘇4火砕流(ASO-4)によって倒され た巨大な樹木(太古木)が発見されており人工遺物は出土していないものの炭化物の分析結果 8万年前の火砕流堆積物であることが判明している。船塚遺跡ではサヌカイト製ナイフ形石器 を主体とした2,000点を越える石器が出土しているし、山古賀遺跡ではナイフ形石器が出土して いる。

縄文時代の遺跡は旧石器時代に比べ山麓部を中心に増加の傾向にある。遺物包含層の調査が 多いがタケ里遺跡(東脊振村)・船塚遺跡では住居跡や墓地の調査が行われている。戦場が谷遺跡(東脊振村)は北部九州における縄文時代早期の標識遺跡として学史的に著名であるが近年の調査でも包含層中から早期~前期にかけての集石や押型文土器も多数出土している。船塚遺跡からは前期の土坑及び晩期の竪穴式住居跡をタケ里遺跡では後期の竪穴住居跡及び鐘ケ崎式土器・北久根山式土器の良好な資料が出土している。

弥生時代になると遺跡は更に増加し丘陵部・中位段丘上~平野部・複合扇状地の広範囲にわ たってみられるようになる。代表的な遺跡として吉野ケ里遺跡(神埼町・三田川町・東脊振村) 松原遺跡・西石動遺跡(東脊振村)、船石南遺跡(上峰町)、検見谷遺跡(北茂安町)等があげ られる。吉野ケ里遺跡は前期~後期の大規模な環濠をもつ集落であり、物見櫓等複雑な構造を

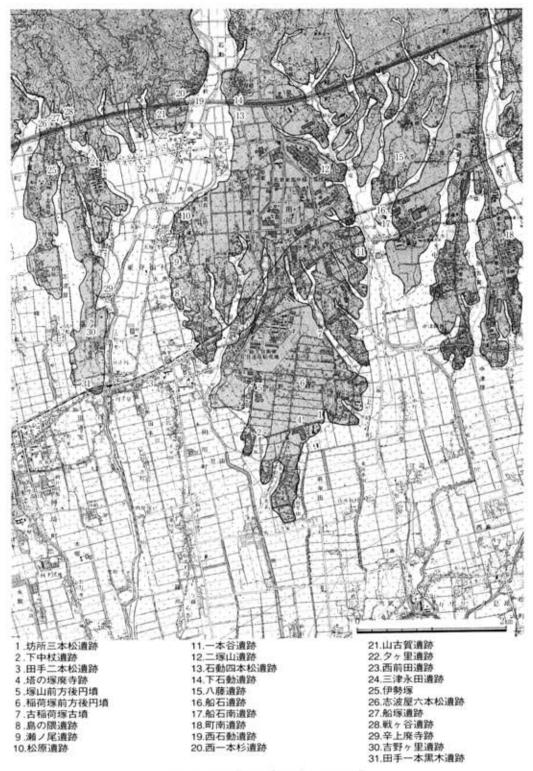


Fig.1 周辺遺跡分布図 (S=1/50000)

伴う出入口施設等も検出されており、後期の環濠は内郭を多重に囲んでいる。この地域の「クニ」の拠点的集落である。松原遺跡は吉野ケ里遺跡の東側に位置し同じく多重環濠を持つ集落遺跡であることから吉野ケ里遺跡との関連が考えられる。船石南遺跡は環濠を持たない大規模な集落遺跡であり、吉野ケ里遺跡と対比できる一般集落である。西石動遺跡は甕棺墓を主体とした遺跡で中国鏡等の青銅器を副葬している。近隣には石棺墓を主体とした石動四本松遺跡がありここからも鏡が出土している。これらの墓地群の中には副葬品をまったく持たない墓地もありその有無により有力者と一般層の階層をみることができる。その他埋納遺跡としては検見谷遺跡(北茂安町)があげられる。土坑中から中広形銅矛12本が出土しているがすべてに綾杉状の研ぎ別けがみられ青銅器祭祀を研究するうえで重要である。

古墳時代は船石遺跡(神埼町)・夕ケ里遺跡(東脊振村)等の集落の他、西一本杉古墳(東 脊振村)・目達原古墳群(三田川町・上峰町)・伊勢塚(神埼町)等の大型墳墓や山麓部には 群集墳がみられるようになる。西一本杉古墳は帆立貝式前方後円墳で、4世紀の初現的な古墳 と考えられており庄内式土器が出土している。目達原古墳群は初代米多国造都紀女加女王の墳 墓といわれている上のびゅう塚を含め前方後円墳7基及び円墳5基が存在していたが戦時中の 飛行場造営のため多くが壊され現在は1基が残るのみである。伊勢塚は前方後円墳であったが 現在は県道島栖一川久保線により分断されている。また、山麓部には多くの群集墳が見られる。 古代・中世は下中枝遺跡・島の隈遺跡・田手一本黒木遺跡(三田川町)吉野ケ里遺跡等のほ か塔ノ塚廃寺(三田川町)・辛上廃寺(東脊振村)といった寺院もみられる。吉野ケ里遺跡で は官衙跡と考えられる建物跡や鳥の隈遺跡の切通しから伸びる側溝をもった官道が確認されて いる。また、鳥の隈遺跡・田手一本黒木遺跡は「神埼荘」に比定されており貿易陶磁器が大量 に出土している。

下中枝遺跡では古代から中世にかけての集落が検出されており、それに伴い多くの貿易陶磁器が出土している。また、山麓部には綾部城(中原町)・崇福寺城・横武城(神埼町)といった山城や姉川城(神埼町)・直島城(千代田町)といった平野部にあり多重の水路に囲まれた平城等が見られる。

### 2. 遺跡の概要

坊所三本松遺跡は標高9mの目達原段丘の南端に位置し眼下には平坦低地を臨む。その比高差は約5mである。遺跡の立地する段丘南端部は舌状に南方に突出しその東西両側には谷地形が入る。段丘面上には比高差1m未満の微高地があるがこの微高地はFig1の8mの等高線であり径約80m、面積にして約7000mの広がりをもつ。調査区はこの微高地の北側縁辺であり、集落は調査区の南側に広がっていることが予想されることから、遺跡の中心はこの微高地一帯と考えてよいであろう。

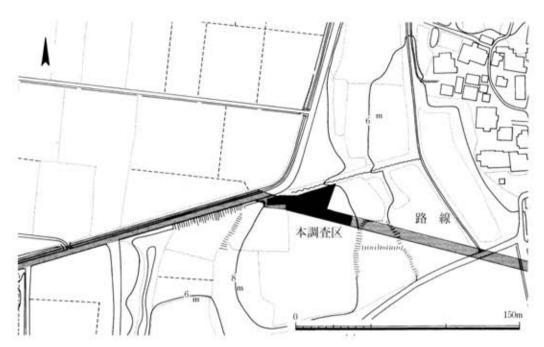


Fig.2 坊所三本松遺跡位置図 (S=1/2500)

坊所三本松遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代後期~飛鳥時代、奈良時代の集落跡である。 縄文時代の土坑は10基検出した。出土遺物はないものの、土坑の埋土、形態、配置などからこれらの土坑群は陥し穴と推定した。

弥生時代中期~後期初頭の集落では堅穴住居跡12軒、土坑約20基、円形周溝1基ほかを検出した。集落は4~5時期の変遷が考えられる。その変遷は出土土器と遺構の検討によるものである。須玖式を4期に分けると1期に形成された集落は4期に途絶えるかあるいは衰退し、後期初頭に再び集落が形成されるという特徴をもつ。1期はSH03、04の円形住居跡でSH03は中央炉跡の両端に二つの小穴があり松菊里型の系譜をひくものであろう。他にSK50、26、SJ41なども当時期である。2期の住居跡としてSH13、46がありSX18円形周溝も当時期であろう。3期にはSH01、06、08などの方形、長方形、不整形の竪穴住居がつくられる。佐賀平野の当該時期の住居はSH08のような不整形が多い。4期は前述のとおり集落は衰退し、後期に入りSH05、07、SK17、21、22などが形成される。坊所三本松遺跡の弥生集落の変遷は徳富(1994)が述べるように佐賀平野平坦集落の動向と軌を一にするように中期後半に衰退するという現象がみれ興味深い。

古墳時代後期~飛鳥時代の遺構はSK20、34のほかSH15も当時期の所産であろう。 奈良時代には集落形成の活動が一段と活発になり竈付きの住居がつくられる。SH02、10、 11、12、14、16のほかSB09も奈良時代の遺構である。住居の切り合いがSH10 と11の2軒で集落の存続時期は短いと推定する。

Fig.3 遺構配置図 (S=1/200)

## Ⅱ. 遺構

本調査にて検出した主な遺構として縄文時代の陥し穴と思われる土坑10基と弥生時代中期~ 後期初頭の竪穴住居跡12軒、土坑20基、円形周溝1基、溝状遺構1条、甕棺墓1基と古墳時代 後期の竪穴住居跡1軒、飛鳥時代の土坑1基、奈良時代の竪穴住居跡6軒、掘立柱建物跡1棟、 土坑3基がある。

縄文時代の土坑は出土遺物もなくその時期決定は埋土および遺構の形態、遺構の配置による。 弥生時代と奈良時代の遺構埋土の明確な違いはなかった。以下時代、遺構種別ごとに記述する。

## 1. 縄文時代の遺構

## (1)土坑 (Fig.4)

土坑の埋土および形態などから縄文時代の遺構と推定した土坑が10基ある。これらの土坑から縄文土器などの遺物は全く出土しておらず、その時期を推定した根拠は前述のとおり埋土およびその形態からである。これらの土坑群はいずれも長軸1m前後の平面隅丸長方形、楕円形でSK23、SK49は坑底に径20~30cmの小穴があるが、この2基はFig.4に掲載する。これらの土坑の埋土はすべて共通して茶褐色土1層で検出面でも明確に埋土と地山の区別ができず、不明瞭ではあるが遺構があることがわかった。ほとんどの土坑は長軸を南北方向に向ける。また調査区内の土坑の分布は東西方向に一列に並ぶ。これら土坑の配置やSK23、SK49のように坑底に小穴があることなどからこれらの土坑群は陥し穴と推定した。

これらの土坑についてはTab.1にその規模などを示す。

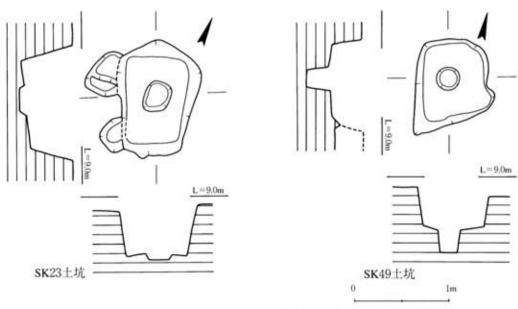


Fig.4 SK23·49土坑 (S=1/40)

遺構番号	平面形態	規模	(中央長、	備考		
週刊サログ	一面形然	長軸	短軸	深さ	1111 15	
S K 2 3	隅丸長方形	1.23	0.77	0.54	坑底に径0.3mの小穴あり。	
SK24	長楕円形	1.16	0.66	0.48		
SK49	不整形	0.91	0.75	0.31	坑底に径0.25mの小穴あり	
S K 5 1	不整形	0.85	0.68	0.45		
S K 5 2	方形	0.9	0.8	0.5		
S K 5 3	長方形	1.42	0.44	0.29		
S K 5 4	楕円形	1.09	0.68	0.09		
S K 5 5	隅丸長方形	1.15	0.7	0.53	181	
S K 5 6	楕円形	1.25	0.75	0.33		
S K 5 7	長方形	0.97	0.62	0.37		

Tab.1 縄文時代土坑一覧表

## 2. 弥生時代の遺構

## (1)竪穴住居跡

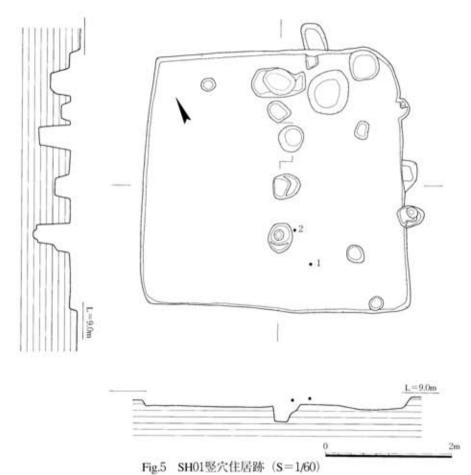
弥生時代の竪穴住居跡は12軒検出した。その時期は中期から後期初頭にあたる。竪穴住居跡は調査区のほぼ中央部に9軒、東側に3軒分布する。調査区の南側が遺構密度も高く、集落はさらに調査区南側にかけて広がっていると思われる。住居跡の平面形態は1、円形(SH03、SH04)2、方形(SH01、SH05、SH13)3、長方形(SH06、SH07)4、不整形(SH08、SH44、SH46、SH48)がある。以下、個別の住居跡について記す。

## SH01竪穴住居跡 (Fig.5)

弥生時代の竪穴住居跡としては調査区内では最も西側に位置する。住居跡の南辺はSK19 土坑と切り合う。西辺は縄文時代の土坑SK49を切り、古墳時代後期の土坑SK20から切られる。平面形は方形で規模は南北方向中央長で4.15m、東西方向中央長で4.13mを測る。柱穴は住居跡中央に南北に並ぶ3穴と思われる。3つとも径40cm前後でP1、P2は床面からの深さは40~50cmである。壁面は緩やかに立ち上がり、遺存高は10~20cmである。遺物は床面から数cm浮いた状態で出土しており、いずれも小片であり住居廃絶後の埋没に伴う遺物である。

### S H 0 3 竪穴住居跡 (Fig.6)

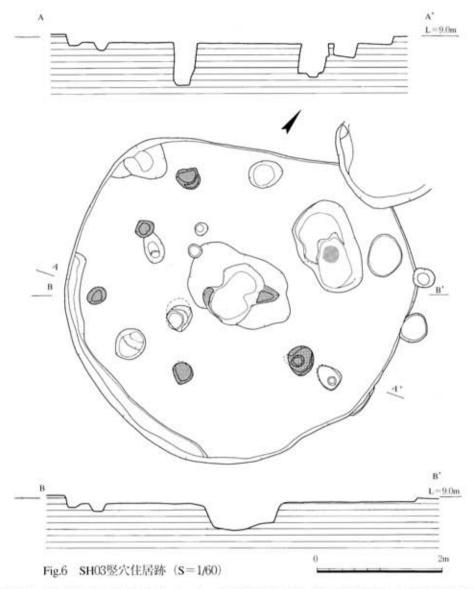
調査区の北側に位置する。SH03の西側約2mにはSH06、SH07がある。本住居跡の北側はSK22土坑から切られる。平面形は円形で規模は径約5.6mを測る。本調査において平面円形の住居跡は本住居跡とSH04の2軒である。壁面は垂直気味に立ち上がり、遺存高は10~15cmである。住居跡南壁に沿って幅10~20cm、深さ5cm前後の周壁溝がめぐるが全周しない。このSH03を特徴づけるものに床面中央の土坑がある。これは平面楕円形で長軸1m、短軸60cmで、深さ約30cmを測る。短軸両側に柱穴をもつ。土坑埋土は褐色土で炭化物を混入す



る。炉であり松菊里型住居跡の系譜をひくものであろう。炉の北方に並ぶ隅丸長方形の土坑は 住居跡より古い土坑で埋土、黄褐色でこの土坑を切ってSH03の柱穴を検出した。SH03 の柱穴は中央の炉を囲むように6つ配される。それぞれ柱穴の深さは13cm~54cmと一定しない。 住居跡東西方向のA-A′断面の中央の小穴はやや位置がずれるものの深さ66cmを測り、柱穴 にはふさわしい。出土遺物のうち土器は小片のみで、石包丁が周壁溝から出土している。

## SH04竪穴住居跡 (Fig.7)

調査区の南側に位置し、住居跡の南西部をSH05から切られる。また、西方1.5mには本住居跡よりやや新時期のSH08がつくられる。平面円形で規模は径約5.7mを測る。壁面は垂直気味に立ち上がり遺存高は約15cmである。住居跡内の小穴P1から完形の支脚3個が立った状態で出土しており、あたかも意図的に埋めたものと思われる。P1は長径42cm、短径32cm、深さ46cmの平面楕円形の小穴である。柱穴については図中スクリーントーンで示す。調査中、柱穴と考えたはP2~4、P6で深さは15~31cmを測る。P5は整理作業において他の柱穴との配列などから柱穴と判断したが深さは10cmと最も浅く、平面径も小さい。SH03に



見られるような床面中央の炉はもたないし、柱穴数も異なる。埋土は茶褐色土で白色砂粒混入。 SH05竪穴住居跡 (Fig.7)

SH04を切りさらに奈良時代のSB09掘立柱建物跡から本住居跡の西側を切られる。西 方1mにはSH08が位置する。平面方形で規模は南北4.2m、東西4.1mを測る。壁面は垂直気 味に立ち上がり、遺存高は40~50cmである。北壁側床面に幅約1.4m、高さ5cmのベッド状遺構 がある。明確な柱穴を検出することはできなかった。SH04との切り合いを調査するため C-D間の土層精査を実施した。遺物は主に1層にて検出した。床面からは30~40cm浮いた状態で多くの土器が水平に堆積した状態で出土した。本調査中の遺構で最も多くの遺物が出土し

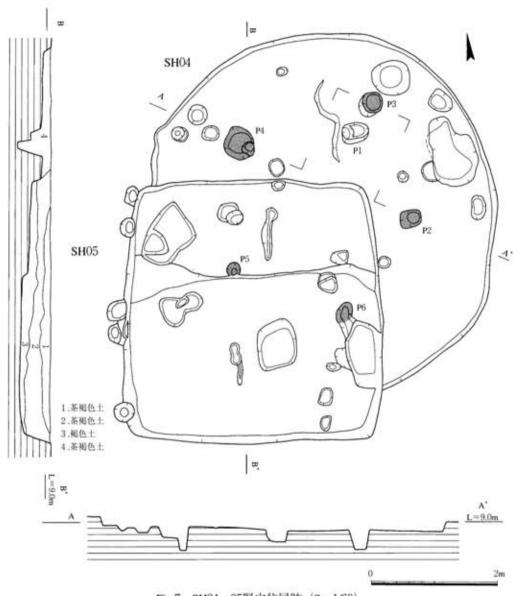
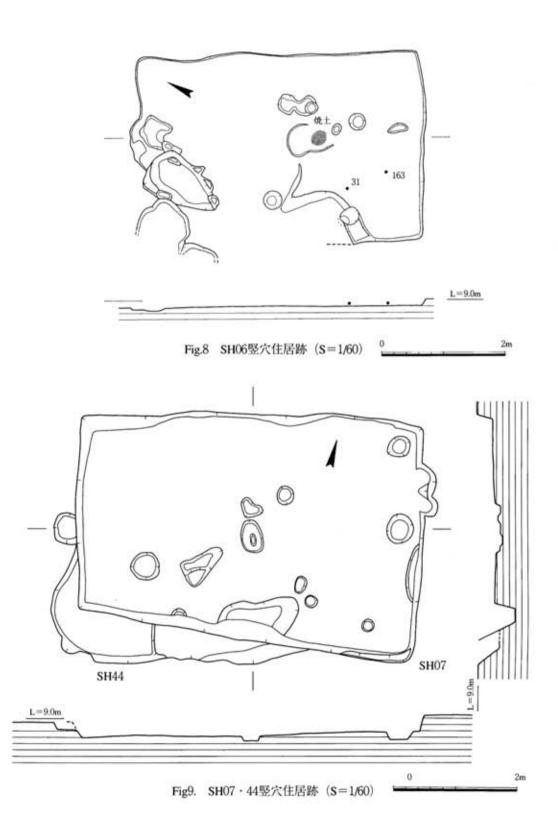


Fig.7 SH04·05堅穴住居跡 (S=1/60)

ている。 1、2層は色調では識別困難で、遺物の出土状況で分層した。床面は特に硬いという状態ではなく黄褐色土と黒色土の混合土であった。

## SH06竪穴住居跡 (Fig.8)

調査区の北側に位置する。南方50cmにはSH07が東方2mにはSH03がある。北壁付近では径約1mの平面楕円形の土坑と切り合う。また、東壁中央付近では縄文時代の土坑を切る。 平面長方形で規模は南北4.5m、東西3mを測る。遺存高は南壁で約10cmで、住居跡の北西部では 床面まで削平される。床面には径30cmの焼土があるものの、炉状に掘り窪めはされていない。



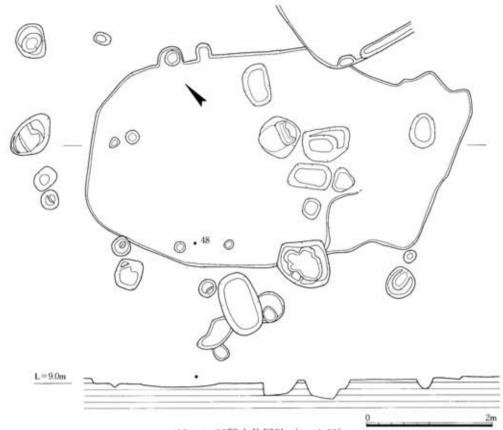


Fig.10 SH08竪穴住居跡 (S=1/60)

明確な柱穴は検出できず、図中にある小穴も検出面で確認できたものである。床面は黒色土と 黄褐色土の混合土であり、厚さ2~3cmの貼床状を呈している。埋土は褐色土で石剣や土器は 床面から2~3cm浮いて出土した。

## SH07竪穴住居跡 (Fig.9)

調査区のほぼ中央に位置する。北方50cmにはSH06が西方1.5mにはSH01があり、SH44を切る。平面長方形で、主軸を東西方向にとる。規模は東西5.5m、南北3.5mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり遺存高は20~30cmを測り本調査検出の住居跡では比較的遺存状態は良好である。床面は特に硬化することなく軟らかい。床面を確認するため住居の西側中央にサブトレンチを設定し、床面の断ち割りを行った。南壁中央には長径1.2m、深さ35cmの屋内土坑がつくられる。明確に柱穴と思われるものはなく、径40~50cm、深さ10cm前後の穴が数個検出できた。埋土は茶褐色土で白色砂粒を多量に含む。埋土中より比較的多くの土器と床面から約5cm浮いて軽石が出土した。

## SH08竪穴住居跡 (Fig.10)

調査区の中央よりやや南側に位置する。東方約1mにはSH05、04がある。本住居跡の北

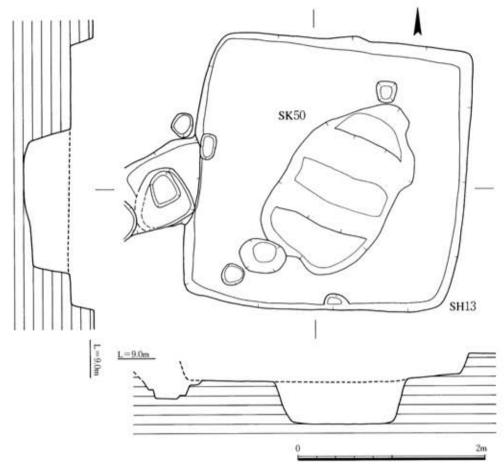


Fig.11 SH13竪穴住居跡·SK50土坑(S=1/40)

東部をSH02から切られる。平面形態は隅丸の大方長方形ではあるものの、住居南側は不整 形である。規模は長軸5.8m、短軸3.4mを測る。壁遺存高は6cm内外である。明確な柱穴は確認 できず、床面中央に深さ20~30cmの小穴が配される。

## SH13竪穴住居跡 (Fig.11)

調査区のほぼ中央に位置する。北方3mにはSH03が南方3.5mにはSH04がある。床面のほぼ中央のSK50を切り、西壁の土坑と切り合う。平面方形で規模は南北2.9m、東西2.9mのほぼ正方形である。壁面は垂直気味に立ち上がり遺存高は約20cmである。主柱穴にあたるものは検出できず、深さ約10cmの小穴を5つ確認した。埋土は褐色土で、白色砂粒を混入する。

## SH44竪穴住居跡 (Fig.9)

本住居跡の大半をSH07からきられ、その平面形態もよくわからない。SH07の北壁で 中央よりやや東の部分に不自然に屈曲する箇所があり、ここをSH44の北西隅と考え、残存 する平面形などからSH08のような不整形を呈すると推定した。壁面は緩やかに立ち上がり

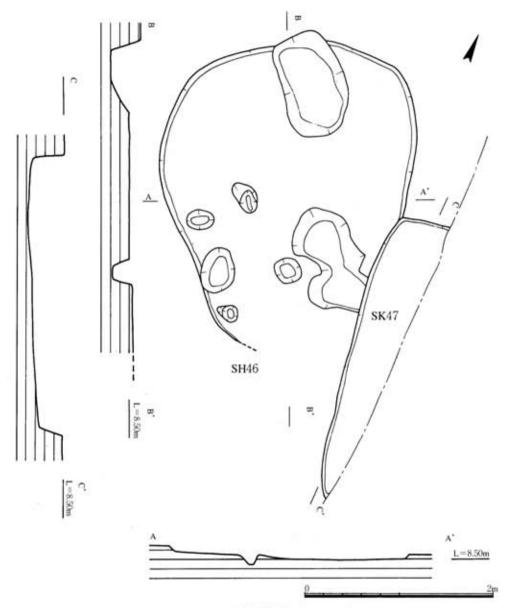


Fig.12 SH46·47堅穴住居跡 (S=1/40)

遺存高は約35cmを測る。柱穴は検出できず、図化できるような遺物もなかった。

## SH46竪穴住居跡 (Fig.12)

調査区の東端に位置する。住居跡南側を削平され、さらにSH47から切られる。南方に隣接して長方形の土坑であるSK33やSK28がある。平面は隅丸方形状である。壁面遺存高は5cm前後で、南側を削平されることから考えても遺存状態は悪い。北壁にかかるように長軸1.1m、深さ約20cmの隅丸長方形土坑の上面で、かつSH46の床面と同レベルで遺物が出土し

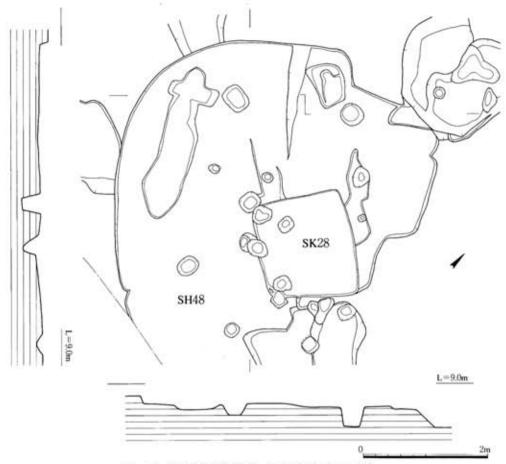


Fig.13 SH48竪穴住居跡·SK28土坑(S=1/60)

ておりSH46がこの土坑を切っている。主柱穴は検出できず、住居跡内小穴の深さは9~20cmを測る。埋土は黄褐色土と黒色土の混合土である。

## SH47竪穴住居跡 (Fig.12)

調査区の東端に位置し、本住居跡の東側大半は調査区外にのびる。SH46を切り西側1.5m にはSK33がある。大半が未調査の為不明であるが、北西隅がほぼ直角にまがることなどか ら、平面形態は長方形になると思われる。壁面は垂直に立ち上がり、遺存高は30cmを測る。埋 土は茶褐色土で遺物は床面から20~25cm浮く。

### SH48竪穴住居跡 (Fig.13)

調査区の南東部に位置する。SK28と切り合い、さらに住居跡北側はSK34から切られる。図化できるような遺物も出土しておらず、調査時においてこれが住居跡であるか否か判断に苦しんだが、ここでは住居跡として報告する。平面形は不整形で、とくに東側が形をなさない。壁遺存高は10cm前後で全体的に遺存状況は悪い。主柱穴と思われるような小穴の配列はない。

## (2)土坑

弥生時代の土坑は20基検出した。その一覧表をTab.2に示す。出土しているが掲載していない土器の器種は()をつけて表記している。この出土土器をもとにして時期を記述している。この一覧表掲載の土坑の中で時代が決定できるような出土土器がないものがSK25、31、38であるが埋土や形態などから弥生時代と判断した。また、SK20の出土遺物は須恵器坏蓋であるがその形態、埋土などから弥生時代の土坑と判断した。土坑の平面形態は正方形、長方形、長楕円形、隅丸方形、不整形に分類できる。その分類一覧をTab.3に示す。平面長方形の土坑はA,Bにさらに細分してみた。とくにSK26、27は形態、規模が似る。各土坑の説明について遺構番号順に記す。

98.486.49.10	717 FE 182 68	規模(中央長、m)			n#: 000	de 1.30 de	200.00
遺構番号	平面形態	長軸	短軸	深さ	時期	出土遺物	備考
SK17	長楕円形	1.55	1.1	0.45	須玖Ⅱ新	甕、袋状口緑壺	
SK19	不整形	(2.45)	1.62	0.57	須玖Ⅱ新	拠	
S K 2 0	不整形	1.64	1.3	0.38		須恵器蓋	
S K 2 1	長方形	1.03	0.8	0.16	須玖Ⅱ新	蹇、鉢、袋状口縁壺	
S K 2 2	不整形	2.1	1.15	0.5	須玖Ⅱ	甕、高坏、支脚	
S K 2 2	不整形	1.7	1.7	0.7			
S K 2 5	不整形	1.55	0.75	0.1	<i>i.</i> — =		
SK26	長方形	1.77	0.8	0.58	須玖I中	魙	SK27と切り合う
SK27	長方形	1.82	0.98	0.3	須玖Ⅱ	甕、高坏	SK26と切り合う
SK28	方形	1.63	1.55	0.33	須玖Ⅱ	鉢、甕	
S K 3 0	方形	1.35	1.25	0.2	須玖Ⅱ?	(変)	
S K 3 1	長方形	1.55	1.03	0.2			
S K 3 2	隅丸方形	1.95	1.8	0.38	須玖Ⅱ?	(甕、鉢)	
S K 3 3	長方形	2.15	1.65	0.4	須玖Ⅱ?	(甕、器台)	
S K 3 8	不整形	0.57	0.47	0.19			
S K 3 9	不整形	2.4	1.8	0.9	須玖 1 ?	(甕、壺)	
SK40	方形	1.13	1.0	0.5	須玖Ⅱ?	(甕)	
SK42	隅丸方形	1.58	1.2	0.48	須玖 1 古~中	甕、高坏	
SK43	不整形	1.66	1.23	0.7	須玖Ⅱ?	(瓷)	
SK 4 5	方形	1.34	1.27	0.55	須玖Ⅱ	瓷、	
SK50	長楕円形	1.91	1.2	0.5	須玖 I	甕、壺	SH13から切られる。

Tab2. 弥生時代土坑一覧表

## SK17土坑 (Fig.14)

調査区の北側に位置する。西方1mには SH06が南東1.5mにはSH03がある。 平面形態は長楕円形で規模は長軸1.55m、 短軸1.1m、深さ0.45mを測る。壁は垂直気 味に立ち上がり、坑底は平坦である。遺物 は埋土中位から坑底にかけて出土している。

平面形態	遺構名
正方形	SK28, 30, 40, 45
長方形A	SK21, 31, 33
長方形B	SK26, 27
長楕円形	SK17, 50
隅丸方形	SK32, 42 SK19, 20, 22, 25, 39, 43
不整形	SK19, 20, 22, 25, 39, 43

Tab.3 土坑分類一覧表

### SK19土坑 (Fig.15)

調査区の西南に位置し、SH01の南壁を切る。また、縄文時代の土坑であるSK49は本土坑を掘り上げて検出できた。平面形態は中央部がふくらみ南北に長い楕円形で規模は長軸2.45m、短軸1.62m、深さ0.57mを測る。壁は緩やかに立ち上がり坑底は細長く平坦である。埋土は4層に分かれるが上位の2層の色調は同じ黒褐色で黄褐色、茶色土ブロックの混入により分層した。全体的にはSK20の埋土と類似する。

#### SK20土坑 (Fig.15)

調査区の中央部やや西よりに位置し、SH01の西壁に隣接する。平面形態は中央部がふくらむ楕円形で規模は長軸1.64m、短軸1.3m、深さ0.38mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

### SK21土坑 (Fig.14)

調査区の北側に位置し、東方1mにはSH06がある。平面形態は台形気味の長方形で規模は長軸1.03m、短軸0.8m、深さ0.16mを測る。壁は垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。遺物は床面直上からほぼ完形の鉢のほか甕、袋状口縁壺などが出土している。

#### SK22土坑 (Fig.15)

調査区の北側に位置し、SH03を切る。遺構検出時には平面形態が瓢箪形で切り合いはわからなかったが、遺構を半裁し土層観察、および調査時の所見より、2つの土坑の切り合いと 判明した。遺構番号については南側の不整形土坑がSK22、北側の円形土坑はSK22 とし遺物取り上げもそれに従った。規模はSK22の長軸2.1m、短軸1.55m、深さ0.7m、SK22 の径1.7m、深さ0.7mである。SK22の埋土は3層からなり上層の茶褐色土から土器片が多量に出土した。炭、焼土も混入しており、下層、中層が堆積したのち一定の面をもって遺物などが堆積した状況であった。土坑の壁からは白色粘土も検出した。SK22 の埋土は黒褐色土である。

#### SK25土坑

調査区の西方に位置し、他の遺構と分布を異にする。平面形は不整形で規模は長軸1.55m、 短軸0.75m、深さ0.1mを測る。土坑の検出面に要2個体分が破片で出土した。

## SK26土坑 (Fig.16)

調査区の東側に位置し、同様の形態をしたSK27から切られる。北方2.5mにはSK39が 南方2mにはSK43がある。平面形態は長方形で規模は長軸1.77m、短軸0.88m、深さ0.58mを 測る。壁は垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。埋土は4層に分かれ、遺物は遺構検出面か

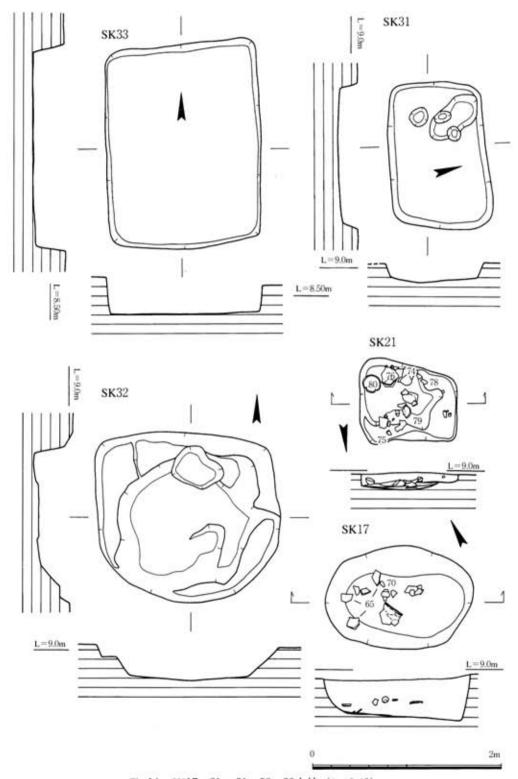


Fig.14 SK17·21·.31·32·33土坑 (S=1/40)

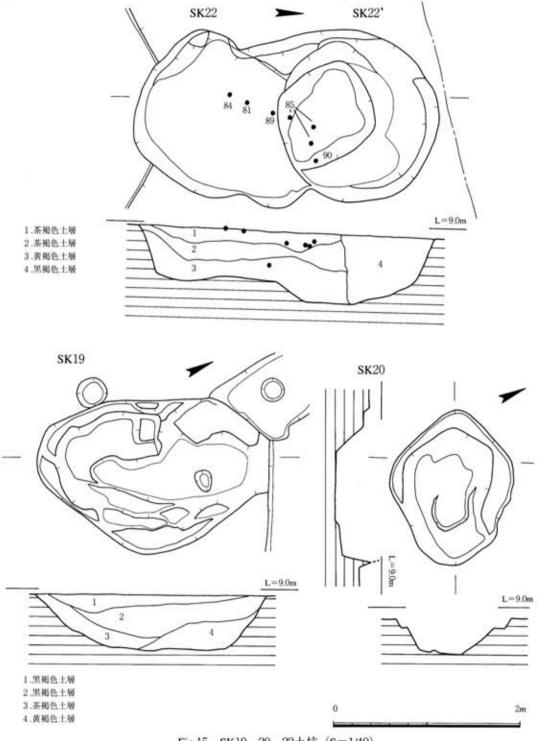


Fig.15 SK19·20·22土坑 (S=1/40)

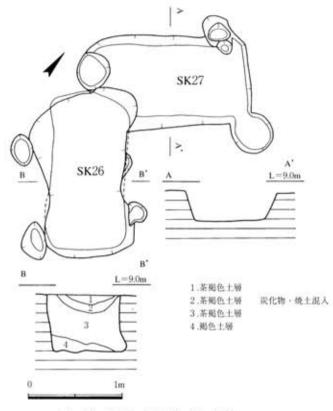


Fig.16 SK26·27土坑 (S=1/40)

ら10~20cm掘り下げた位置から多く出土した。この遺物を包含した2層は炭、焼土を混入する。 SK27土坑 (Fig.16)

調査区の東側に位置し、同様の形態をしたSK26を切る。北方1mにはSK39が南方2mにはSK43がある。平面形態は長方形で規模は長軸1.82m、短軸0.98m、深さ0.3mを測る。 平面形態、規模はSK26と類似するが深さに違いがあり、壁の立ち上がりもやや緩やかである。坑底は平坦である。出土遺物は少ない。

### SK28土坑 (Fig.17)

調査区の東側に位置し、SH48と切り合う。北東1mにはSK33がある。平面形態は正方形で規模は長軸1.63m、短軸1.55m、深さ0.33mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり坑底は平坦である。埋土は1層からなり、茶褐色土に黄褐色土ブロックを混入する。坑底から5cmほど浮いてほぼ完形の鉢が出土している。

#### SK30土坑 (Fig.16)

調査区のほぼ中央に位置し、北方0.5mにはSK32が南西0.8mにはSH04がある。平面形態はややいびつな正方形で規模は長軸1.35m、短軸1.25m、深さ0.2mを測る。壁はやや緩やかに

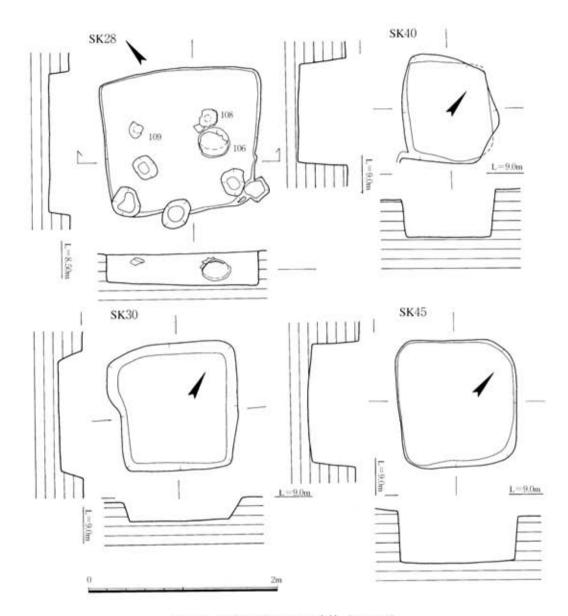


Fig.17 SK28·30·40·45土坑 (S=1/40)

立ち上がり坑底は平坦である。埋土は上下の2層に分層でき、上下層とも色調は茶褐色土で下 層は地山の黄褐色土ブロックを混入する。

# SK31土坑 (Fig.14)

調査区のほぼ中央に位置し、西方に隣接してSK32が南東2mにはSK30がある。平面形態は端正な長方形で規模は長軸1.55m、短軸1.03m、深さ0.2mを測る。壁はやや緩やかに立ち上がる。埋土は白色砂粒をふくんだ茶褐色土1層からなる。

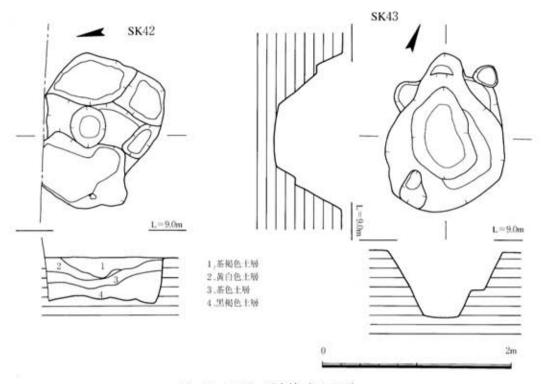


Fig.18 SK42 · 43土坑 (S=1/40)

### SK32土坑 (Fig.14)

調査区のほぼ中央に位置し、東方には隣接してSK31が南方0.5mにはSK30がある。平面形態は隅丸方形でひとつの辺が円弧を描く。規模は長軸1.95m、短軸1.8m、深さ0.38mを測る。 壁は緩やかに立ち上がり南から東の壁ぎわは2段掘りになる。坑底は平坦である。埋土はレンズ状の堆積をなす。上下2層からなり上層は白色砂粒を含んだ茶褐色土で、下層は地山をベースとした黄褐色土である。

#### SK33土坑 (Fig.14)

調査区の東端に位置し、南西1mにはSK28がある。平面形態は長方形で規模は長軸2.15m、短軸1.65m、深さ0.4mを測る。壁は垂直に立ち上がり坑底は平坦である。埋土は茶褐色土をベースとして径5~7cmの黄褐色土プロックを多量に混入する。自然堆積ではなく一度に埋めた状況である。

# SK38土坑

調査区の中央に位置し北方1mにSH07がある。平面形態は楕円に近い不整形で規模は長軸0.57m、短軸0.47m、深さ0.19mを測り、他の土坑にくらべ小さい。埋土は2層に分かれ、上層は茶褐色土、下層は褐色土である。

#### SK39土坑

調査区の北西に位置しSK40と切り合う。平面形態は不整形で規模は長軸2.4m、短軸1.8m、 深さ0.9mを測る。埋土は黒褐色土を基本とし地山の黄褐色土ブロックを混入する。堆積状況は 一度に埋戻した状況である。

### SK40土坑 (Fig.17)

調査区の北東端に位置しSK39と切り合う。東方2mにはSK42がある。平面形態は方形で規模は長軸1.13m、短軸1.0m、深さ0.5mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり坑底は平坦である。埋土は茶褐色土に地山状の黄褐色土プロックを混入する。

#### SK42土坑 (Fig.18)

調査区の北東端に位置し土坑の北端は調査区外にのびる。西方2mにはSK40、SK39 がある。平面形態は隅丸方形で規模は長軸1.13m、短軸1.2m、深さ0.48mを測る。壁はほぼ垂直 に立ち上がる。埋土は4層に分かれる。遺物は主に3、4層から出土した。1層は焼土混入、 4層は炭混入。

#### SK 4 3 土坑 (Fig.18)

調査区の中央よりやや東に位置する。北方2mにはSK26が東方1.5mにはSK37がある。 平面形態は不整形で断面形は二段掘りになる。壁はやや緩やかに立ち上がる。規模は長軸1.66m、短軸1.23m、深さ0.7mを測る。埋土は上下の2層からなり上層は白色砂粒を含んだ茶褐色土で下層は褐色土である。

#### SK 4 5 土坑 (Fig.17)

調査区の南端に位置し、北方2mにはSK37がある。平面形態は端正な方形で規模は長軸 1.34m、短軸1.27m、深さ0.55mを測る。壁は垂直に立ち上がり、坑底は平坦である。

#### SK50土坑

調査区の中央に位置しSH13から切られる。調査時において本土坑が住居跡に伴うものか 判断に迷ったが完据状況や出土遺物などから土坑と住居跡の切り合いと判断した。平面形態は 長楕円形で規模は長軸1.91m、短軸1.2m、深さ0.5mを測る。壁はほぼ垂直にたちあがり坑底は 平坦である。遺物は壁ぎわで坑底から約20cmほど浮いて出土した。埋土は褐色土で炭、焼土を 混入する。

#### (3)円形周溝

#### S X 1 8 円形周溝 (Fig.19)

調査区の南端に位置し、遺構の南半分は調査区外にのび未調査である。東方1mにはSD2 9が北方2mにはSH08がある。遺構検出時には円形の住居跡かと思ったが調査を進めてい く段階で円形周溝であることが判った。平面形態は端正な円形である。周溝の幅は50~70cm、

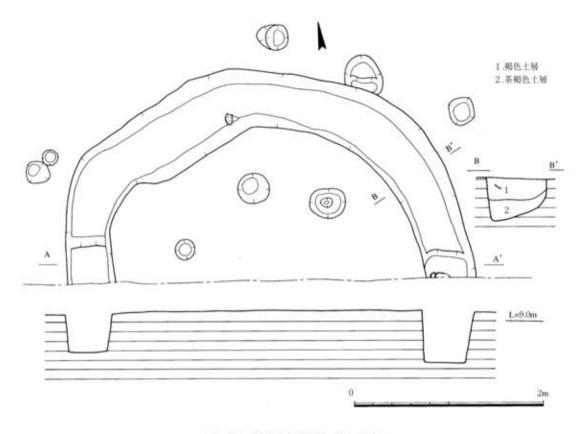


Fig.19 SX18円形周溝 (S=1/40)

深さ40~55cmを測り、溝断面形は逆台形である。周溝内径は3.3m、周溝外径は4.35mを測る。

周溝埋土は2層からなり1層は褐色土、2層は茶褐色土で地山の黄褐色土ブロックを混入する。溝断面の観察結果、板等を立てた痕跡は見あたらなかった。遺物は周溝内北側で溝底から数cm浮いて出土した。また、周溝の内外にある径30cm前後の小穴の埋土はSX18と似ており、関連ある可能性はある。本調査検出の円形周溝は1基のみである。

### (4)溝状遺構

# SD29溝状遺構 (Fig.20)

調査区の南端に位置する。本遺構の南側大半は調査区外にのびる。西方1mにはSX18が 北方2mにはSH08がある。幅は70cm、深さ20~25cmを測り、溝断面形は逆台形である。土 器は溝底から約20cm浮いて出土した。

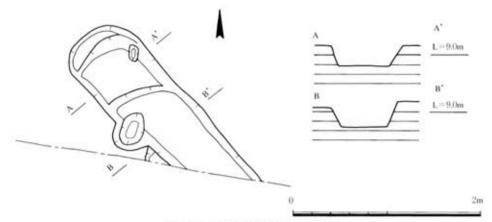


Fig.20 SD29溝状遺構(S=1/40)

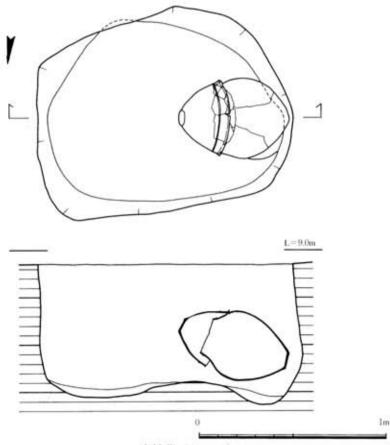


Fig.21 SJ41甕棺墓 (S=1/20)

### (5)甕棺墓

# S J 4 1 甕棺墓 (Fig.21)

調査区の北東に位置し、西方3mにはSH03がある。本調査にては1基のみの検出で単独の要棺墓である。口縁部打ち欠きの壺を身とし、鉢を蓋として使用する。完形である。主軸はN83.5°Eで埋置角度は18°を測る。墓壙は平面隅丸長方形で規模は長軸1.35m、短軸1m、深さ0.6mを測る。甕棺はこの墓壙の短壁西側よりに墓壙と主軸を同じくして埋置される。

# 3. 古墳時代後期~奈良時代の遺構

本遺跡は弥生時代と奈良時代の集落跡であるが、古墳時代後期~飛鳥時代の遺構も若干見られ、ここでは古墳時代後期から奈良時代の遺構について一括して扱う。古墳時代後期の遺構は

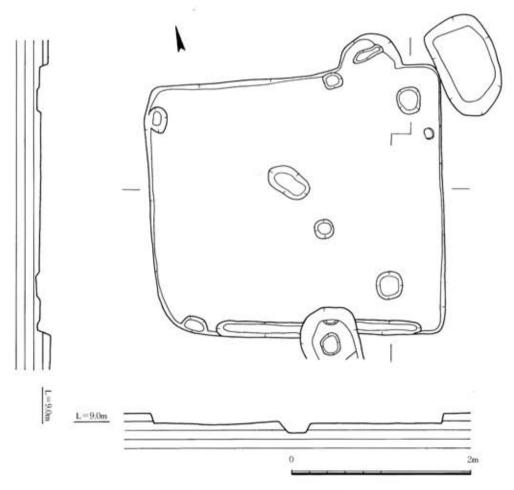


Fig.22 SH02竪穴住居跡 (S=1/40)

SH15のみで、飛鳥時代の土坑としてSK34が、他の遺構は奈良時代である。奈良時代の 竪穴住居跡は6軒、掘立柱建物跡は1棟を検出した。SK35、36、37は奈良時代の土坑 と考えられる。竪穴住居跡のうちSH02、14、16は竈をもつ。

# (1)竪穴住居跡

# SH02竪穴住居跡(Fig.22)

調査区のほぼ中央に位置し、東方6mにはSH12がある。平面形態は略正方形で、規模は 南北方向中央長2.9m、東西方向中央長3.3m、遺存高約10cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。 竈は北壁の東よりに壁から突出させて設ける。壁から40cm程突出した掘り方で袖部は遺存しな い。埋土は焼土からなる。南壁に沿って床面には幅20cm、深さ2cm程の壁溝を有する。床面に ある小穴は径30cm、深さ10cm内外でいずれもしっかりした柱穴にはならない。

### SH10竪穴住居跡(Fig.23)

調査区の北東隅に位置し、SH11を切る。住居跡の東側は調査区外にのびる。平面形態は 長方形で、南北方向の中央長は4m、東西方向中央長は4.8m+αである。遺存高は10cm内外で 壁面の立ち上がりは緩やかである。床面からは径30~50cmの焼土を検出した。床面が被熱し赤

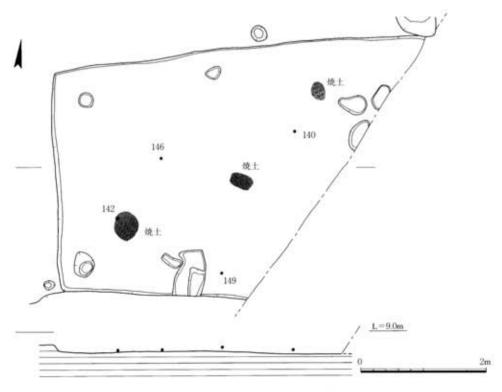


Fig.23 SH10竪穴住居跡 (S=1/60)

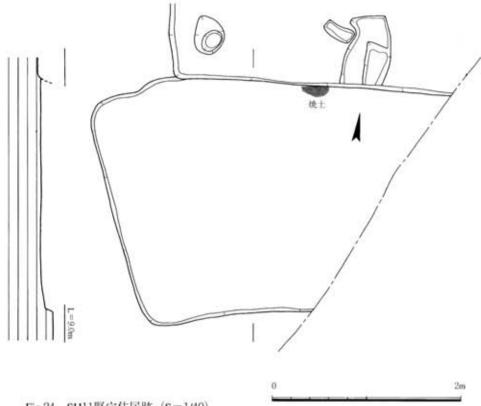


Fig.24 SH11竪穴住居跡 (S=1/40)

化している状態であった。柱穴としてはP1、P2が径25~30cm、深さ15cmを測りそれにふさ わしいものの、他の小穴はいずれも深さ5~7cmの浅いものである。埋土は地山の黄褐色土プロ ックを混入した褐色土である。遺物は床面から数cm浮いた状態で出土した。

#### SH11竪穴住居跡 (Fig.24)

調査区の北東隅に位置し、SH10から北壁側を切られる。住居跡の東側は調査区外にのびる。平面形態は長方形で規模は南北方向2.58m、東西方向3.75m+ $\alpha$ である。遺存高は10cm内外でSH10と同様、遺存状態は悪い。壁面の立ち上がりはやや急である。床面の北壁よりには被熱により赤化している径30cm程の箇所を検出した。床面の柱穴は確認できなかった。また、遺物も図化できるような土器は出土していない。

# SH12竪穴住居跡 (Fig.25)

調査区の東南部に位置し、東方2.5mには同じ主軸のSH16がある。平面形態は長方形で規模は東西方向2.55m、南北方向1.93m、遺存高は5~10cmでひときわ小形の竪穴住居跡である。 壁はやや急高配で西壁のほぼ中央に壁から突出した竈を設ける。竈の掘り方は壁から25cm突出し、幅60cmである。竈は検出面で精査していく段階で、袖部が馬蹄形状に検出できた。左袖部下半部は地山の削り出し、その上に地山土を盛り上げる。右袖部は明確ではなく、焼土塊から

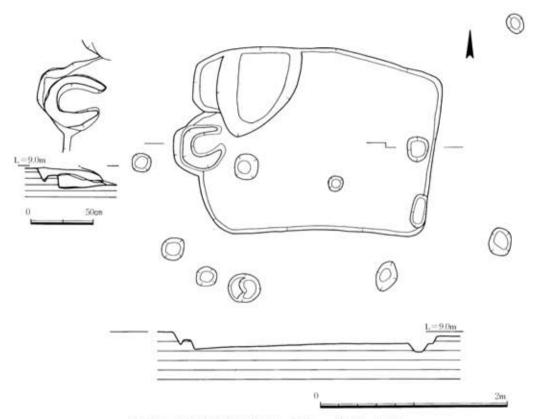


Fig.25 SH12竪穴住居跡 (S=1/40) · 竈 (S=1/30)

なる。火床は特に赤化していない。住居跡北西隅の床面にある窪みの埋土は茶褐色土で炭が出土した。床面には径30cm前後、深さ6~21cmの小穴が3つあり柱穴になると思われるがその配列は不明である。

### SH14竪穴住居跡 (Fig.26)

調査区の西端中央に位置し、住居跡の西側は調査区外にのびる。北方3mにはSH11が南方7mにはSH12がある。平面形態は正方形で規模は南北方向3.75m、東西方向約3.5m、遺存高は30~45cmを測る。壁面は垂直気味に立ち上がり、北壁のほぼ中央に壁から突出した竈を設ける。竈の掘り方は壁から40cm突出し、幅60cmである。両袖部は地山土を盛って造る。竈両側壁面は赤化し硬質化している。煙出し部にあたる奥部壁面は赤化せず地山の黄褐色土のままである。火床は灰、焼土を検出、焚き口部床面には厚さ2~3cmの灰層が広がる。埋土は2層に分かれ、土層断面の観察から住居跡は廃絶後、南側からの自然堆積により埋没したと思われる。上層は褐色土、下層は茶褐色土である。

# SH15竪穴住居跡 (Fig.27)

調査区の西端に位置し、住居跡の西半分は調査区外にのびる。本住居跡 1 軒のみ他の住居跡

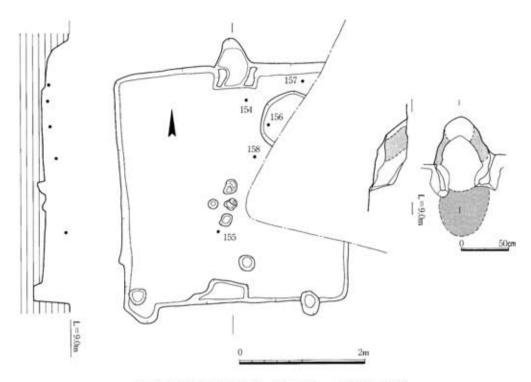
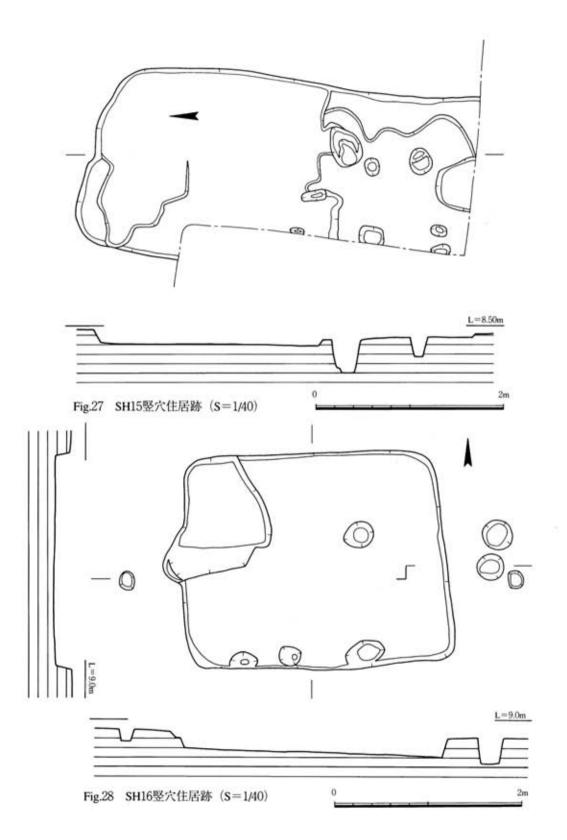


Fig.26 SH14竪穴住居跡 (S=1/60) · 竈 (S=1/40)

と分布を異にし、最も近い住居跡でも東方18m離れたSH01である。このように弥生、奈良時 代の住居跡と分布が異なること、須恵器坏蓋が出土していることなどから6世紀後半の住居跡 と判断した。平面形態は隅丸の長方形で規模は南北方向4m+α、東西方向2m、遺存高は13 cmで住居跡の南側は床面が一段高くなり遺存高は3cmを測る。床面には深さ8~34cmの小穴があ るものの柱穴の配列は明確でない。

# SH16竪穴住居跡 (Fig.28)

調査区の東側に位置し、西方2.5mには主軸を同じくしたSH12がある。平面形態は長方形で規模は東西方向2.83m、南北方向2.3m、遺存高は16~20cmを測る。西壁の中央に壁から突出する竈を設ける。竈の掘り方は壁から20cm突出し、幅60cmである。この突出した掘り方内から焼土を検出したものの袖部などは遺存していなかった。壁面は垂直気味に立ち上がる。住居床面北西隅で土坑と切り合う。床面には径約30cm、深さ18cmの小穴があるが、柱穴としては長軸上で壁の外にある小穴が考えられる。その小穴の深さはそれぞれ10cm、27cmを測る。



# (2)掘立柱建物跡

### SB09掘立柱建物跡

本調査にて検出した掘立柱建物跡は1棟のみである。SH05、SH08との切り合いや奈良時代住居跡配置などから奈良時代のものと考えた。調査区の南端中央に位置し、北方2mにはSH02がある。2間×2間の総柱建物跡で主軸はほぼ座標北を向く。規模は芯々で南北2.5m、東西2.4mで床面積は6㎡を測る。柱穴は径40cm前後の平面円形で深さは16~43cmでおおむね30cm前後である。

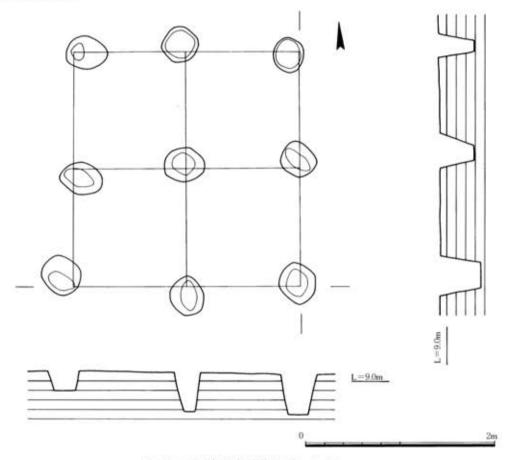


Fig.29 SB09掘立柱建物跡 (S=1/40)

# Ⅲ. 遺物

# 1. 弥生時代の土器

Tab.4が弥生土器一覧表であり、挿図番号順に記している。遺物について紙面の関係上、本報告書に掲載したのは特に遺存率がよく時期決定等に必要なものを選別し、その他小破片については割愛した。従って報告書に実測図として掲載していない遺物については本文中でできるだ

け記述するようにした。

鋤形口縁を特徴のひとつとする須玖式土器のうちでも甕形土器の口縁部、底部はその編年の指標になっている。そこで、甕の口縁部、底部の分類を行い、その記述については分類名を用いた。本報告書に掲載していない遺物のうち、甕の口縁、底部はその分類名で記述する。

# (1)竪穴住居跡出土土器 (Fig.30~33)

竪穴住居跡11軒のうちSH03、SH48からは図示できるような土器は出土しておらず、 特にSH05埋土中からまとまって土器が出土しているほかは、全体的に遺物量は乏しく、出 土遺物の遺存状態も良くない。また、住居跡の床面直上からはSH05の11、17、16などが出 土しているだけでまとまって出土した土器群はない。

SH01出土土器 1、2ともに甕の口縁部片である。ともに「く」の字形に口縁部を折り返す  $\blacksquare$  類で2の口唇部はやや肥厚する。図示していないが口縁部  $\blacksquare$  -1 類が1点、小破片の  $\blacksquare$  -2 類が1点出土している。

SH04出土土器 3は逆L字形口縁の甕口縁部片、 $\Pi$  — 3類。4、5は鉢、4の底部は欠損するが口縁部から体部にかけてほぼ遺存する。口縁部は平坦な逆L字形で内側にやや突出する。外面器表には化粧土を施す。5は口縁部を逆L字形に折りかえす。6、7、8は支脚。三個体セットになって住居跡柱穴から出土した。三個体とも成形は同じで、丸棒に粘土を巻き付け下半部は指押さえによりハの字形に開く。掌および指頭圧痕が器表面に残る。図示していないがこの他に逆L字形口縁部の小破片、I 類が2 点、 $\Pi$  — I 類が6 点ある。 $\Pi$  — I 類には口縁上端面が若干窪むものI 点がある。甕底部片I — I 気がそれぞれI 点づつ出土。底径はともにI 6 cm。器台裾部片I も出土。内外面指頭圧痕あり。

SH05出土土器 9は袋状口縁壺、10は広口壺口縁部片、11は広口壺口頸部、肩部に断面 M字形の突帯を巡らす。口縁部や突帯の位置などともに古い要素をもつ壺である。12は甕か壺。 いずれにしても形態的には珍しい。口縁部は約1/3残存、胴部が著しく張る。13は高坏口縁部片、 15は高坏脚部、短脚の小形の高坏。15は器台裾部。16、17は器台、16はほは完形、上下両方向 から棒状の工具をいれ中空にしたと思われ体部内面にわずかな稜ができる。17もほぼ完形、全 体的に粗雑なつくりである。砂粒を多く含む。18~21、25、26は鉢。鉢は口縁部形態により大 きく次ぎの2つに分類できる。18、19、25、26は口縁部を「く」の字、逆し字形に折り返す。 甕に比べ口縁部幅が短い。21は口縁の20、21は素口縁の鉢。18、21は口縁形態や体部内面の調 整こそ違うが、全体的な形態、成形は同じ。25は器壁も厚く粗雑なつくりで体部下半部内面に は指頭圧痕あり。

22、23、30は甕の底部。いずれも底径は8cm内外で23は底部の厚さが3mmと非常に薄い。22 は器壁も厚く色調も内外面黒褐色と一見弥生土器とは思えない。26は鉢あるいは甍。口縁部は 「く」の字形に折り返すのは甕と同じで成形であるが口縁部の長さが2 cmと短いため鉢と思われる。 $27 \sim 29$ は甕口縁部、III - 1類。SH05は本調査の中で最も遺物が出土した遺構であり、図示した以外で甕口縁部III - 1類2点は屈曲度が強く逆し字形に近い。また甕底部D-2、D-3類がみられともに体部外面の縦ハケは粗い。このほか、明らかに古い時期の土器も出土している。甕口縁III - 2類、III - 3類、底部C-2、C-3類でこれらはいずれも小破片であり、住居跡廃絶よりの前時期の土器の流れこみであろう。

SH06出土土器 31は甕口縁部Ⅱ-4類。口縁部内側に突出し口縁部上端面は若干内傾気 味。図化した遺物は1点のみ。

SH07出土土器 32は鉢、全体の約1/3残存。33、34、36は甕口縁部。Ⅲ-1類、Ⅱ-2類がある。36は甕棺口縁部。35、40は蓋。35の上端面は中央部がわずかに窪む。40の把手部は欠損するもの、約1/2残存。内面は黒く炭化する。37は広口壺口縁部、口縁部内側に断面三角形に突出し、外面丹塗り。38は高坏か。とすれば、坏底部に段をもち、径6cmの脚部がつく。39は高坏。41、42は袋状口縁壺の口縁部片、いずれも小片。43~45は壺、甕の底部。43、44の底部の厚さは5mmと薄い。46は器台裾部。図化したすべてを掲載する。

SH08出土土器 47は喪口縁部片、Ⅱ-1類。48は器台。全体の約1/2残存。図化したすべてを掲載する。

SH16出土土器 49、50は翌口縁部片。49はⅡ-1類、50はⅡ-2類。51は翌底部、C-2類。図化したすべてを掲載した。

SH13出土土器 52は広口壺口縁部片、10にくらべ頸部は直線的に立ちあがり、口縁部の外反も緩やか。53は甕口縁部片、II-2類。54は甕底部片、C-2類。55は器台裾部片。この他に甕口縁部II-2類1点が出土している。

SH46出土土器 56は鉢口縁部、口縁部は外上方に短く延び、口縁上端面は内傾する。57、59は甕口縁部、57はⅡ-2類、口縁部約1/3残存。体部の器壁は2mmと非常に薄い。59はⅡ-1類。小形の甕である。58は甕の底部から胴部にかけて約1/3残存。底部形態分類はC-1類である。しかし、製作方法が異なる。58は径6.4cmの円盤状の底部に胴部をつけているようであり、その粘土帯にそって土器も割れている。60は高坏脚部。図化したすべてを掲載している。

SH47出土土器 61は壺底部。62、63は鉢。63は口縁部から底部まで全体の約2/3残存。素口縁の鉢で、62、63とも底部径は同じで体部形態も類似する。64は鉢かあるいは甕の可能性あり。口縁部は水平に近く「く」の字形に折る。口縁直下外面はヨコナデによる窪みが回る。粗い縦ハケを施す。この他甕口縁Ⅲ-1類が出土。これは口縁部内面をヘラ状工具で削り、稜線をより明瞭にしている。

#### (2)土坑出土土器 (Fig.34~37)

SK17出土土器 65は甕、全体の約1/2残存。口縁部は「く」の字形に折り返すⅢ-1類。

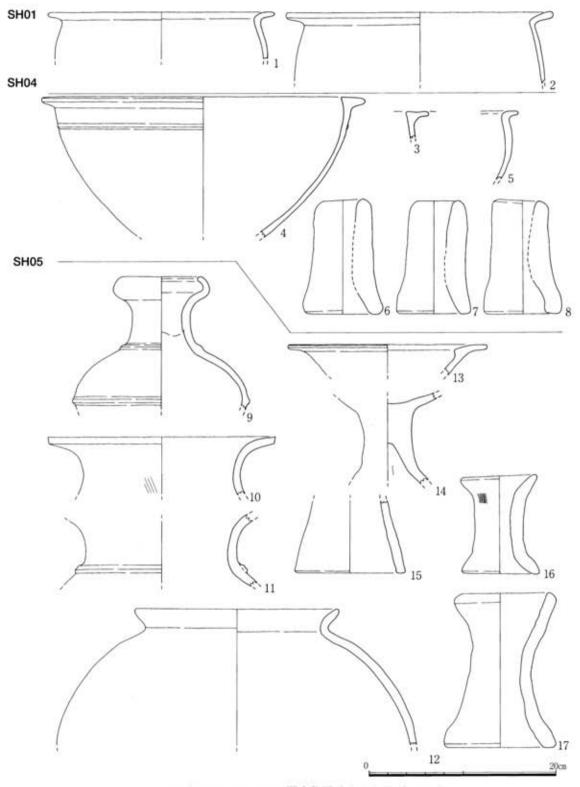


Fig.30 SH01·04·05竪穴住居跡出土土器 (S=1/4)

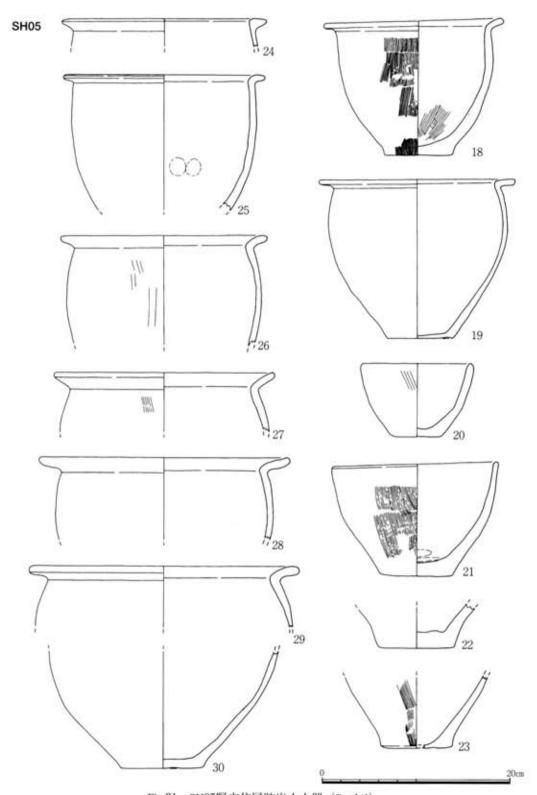


Fig.31 SH05竪穴住居跡出土土器(S=1/4)

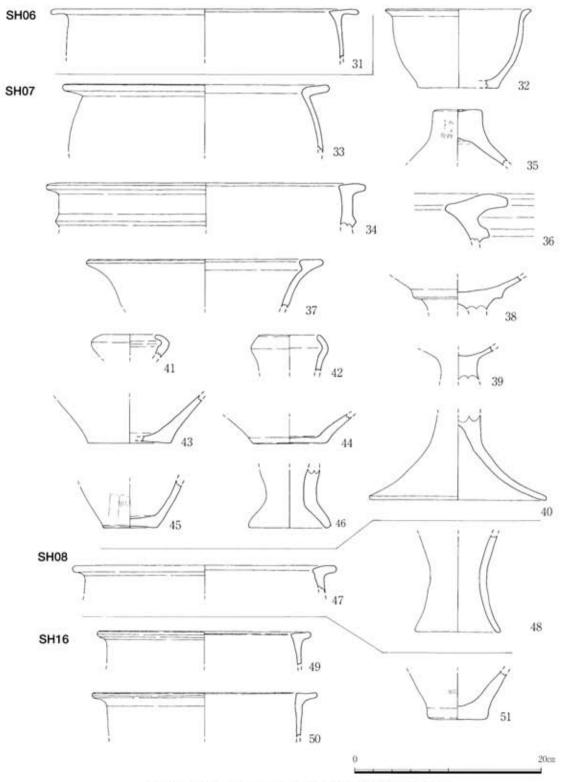


Fig.32 SH06·07·08·16竪穴住居跡出土土器(S=1/4)

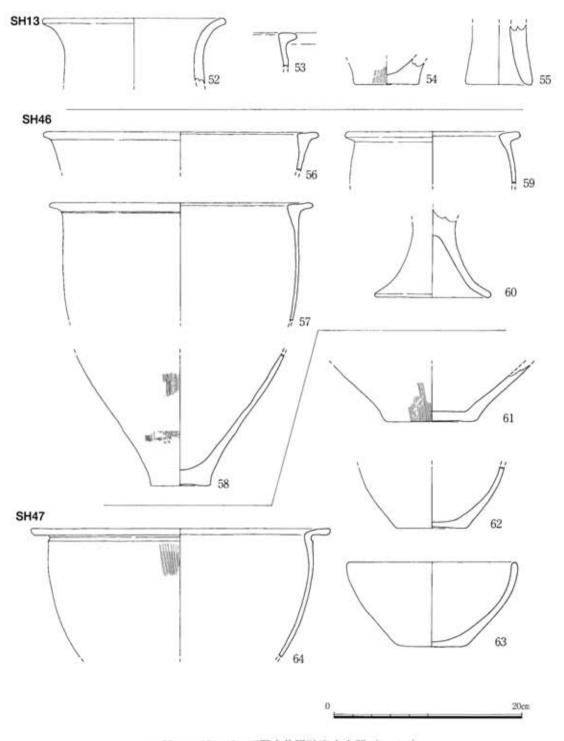


Fig.33 SH13·46·47竪穴住居跡出土土器 (S=1/4)

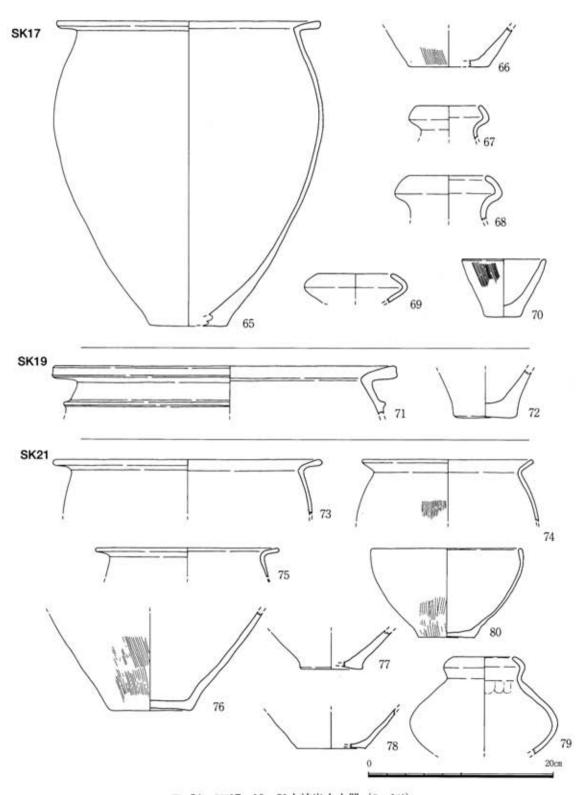


Fig.34 SH17·19·21土坑出土土器(S=1/4)

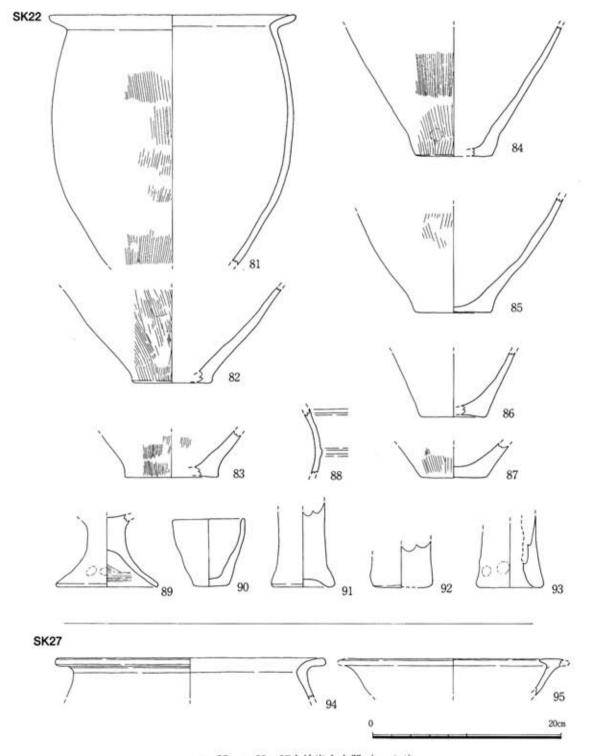


Fig.35 SK22·27土坑出土土器 (S=1/4)

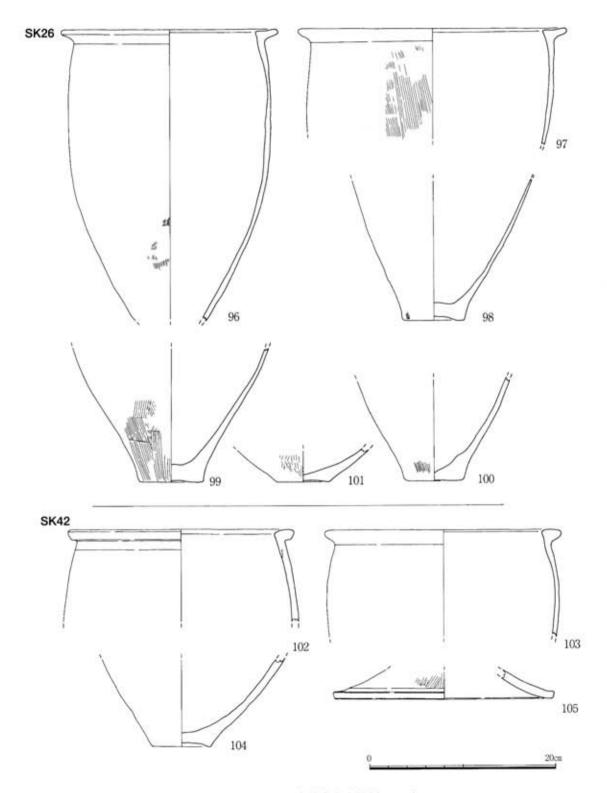


Fig.36 SK26·42土坑出土土器 (S=1/4)

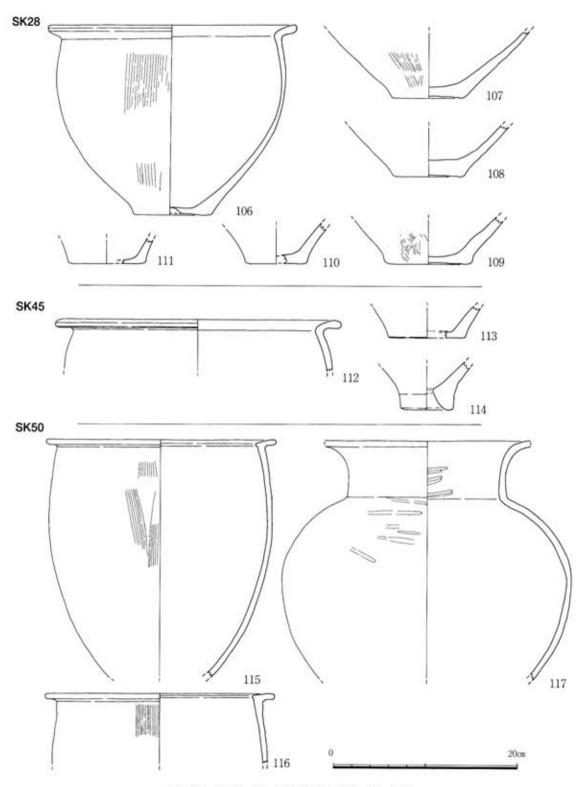


Fig.37 SK28·45·50土坑出土土器 (S=1/4)

口縁部内面の稜線は明瞭。胴部最大径は中位よりやや上にあり、口径よりわずかに上回る。調整は胴部外面に部分的に縦ハケが残る。煮沸に用いたためか胴部外面中位は幅約10cmの帯状に褐色化し、胴部内面も炭化物付着のためか同様に褐色を呈する。66は甕底部、D-3類。67~69は袋状口縁壺の口縁部片、69は胎土緻密で丹塗り。70は素口縁の鉢。この他掲載していない出土土器には甕口縁部II-2類2点、いずれも小破片で前時期の遺物の流れ込みであろう。また断面三角突帯を張り付ける壺の体部片や器台片も出土している。

SK19出土土器 71は甕口縁部、「く」の字形に折り返し、口唇部にかけて肥厚、端部は面とりされる。口縁下に断面三角突帯を張り付ける。72は甕底部、C類。約1/2残存。この他甕口縁部片Ⅲ-1類出土。

SK21出土土器 73~75は甕口縁部片。すべて「く」の字に折り返すⅢ-1類。73の色調は浅黄橙色。74、75は胎土緻密で器壁も薄い。76、77は甕底部、D-3類。76の底径は8.7cmであるが77は6.3cmと小さく、底部の厚さも3mmと薄い。78は鉢底部。79は袋状口縁壺、約2/3残存。最大径が中位にある算盤形の胴部に袋状の口縁部がつく。胎土は緻密。この他甕口縁部片Ⅲ-1類1点、鉢の口縁部1が出土。鉢の口縁部は逆L字形に折り返す。

SK22出土土器 81~87は甕。81は口縁部から体部下半にかけて約1/5残存。口縁部はⅢ-1類で内側の稜線は明瞭、口径と胴部最大径はほぼ同じ。体部外面縦ハケで、煤が付着しているためか茶褐色を呈する。82~87は甕底部。82、83、84、87はD-2類、82、83は底部側面と底部の接合部が擬口縁状に割れている。84は底部の内外から指押さえにより底部と体部の境を明瞭につくる。82、87の胎土は緻密で色調も似る。ともに粗い縦ハケを施す。85はD-1類、底径は84とほぼ同じ8㎝であるが底部内面のつくりが異なる。内面は明確な平坦な底部をつくらない。内面は炭化物付着のためか黒褐色を呈する。86はC-2類か。やや上げ底気味で底径もD類より小さい。底部内面は85に似る。内面炭化物付着。88は壺胴部、断面M字形の突帯を張り付ける。89は高坏脚部。90は素口縁の鉢、91~93は支脚。それぞれ形態が異なる。91の底部は上げ底で円柱状の体部である。92は円柱状で表面は縦方向に面とりされた痕跡がわずかに残る。93は中空の支脚である。この他に甕口縁部破片Ⅱ-2類が6点出土、いずれも小破片で流れ込みと思われる。Ⅲ-1類でもほぼ水平にのびる口縁片1点、逆L字形の口縁をもつ鉢1点、円柱状の支脚頭部片1、器台裾部片2が出土。この遺構は支脚の出土が目立つ。

SK27出土土器 94は甕口緑部片、Ⅲ-1類、内側の稜は不明瞭。95は高坏口緑部片、 内側は断面三角形に突出する。この他の図化遺物はない。

SK26出土土器 本遺構出土土器の遺存率は他の遺構の土器と比べて良好。96~100は甕。 96は口縁部から体部下半にかけ約1/2残存。口縁部は上端面がやや内傾するⅡ-1類。口縁部内側はヨコナデにより部分的につまみあげ突出させる。97は口縁部から体部上半にかけ遺存、口縁部は完全に遺存。口縁部形態はⅡ-2類で、上端面は中央部が若干窪む。98~100は甕底部、 98、99がC-1類で、100はC-2類。底径は6.5cm内外を測る。101は壺底部。

SK42出土土器 102、103は甕口縁部、102の口縁部は断面楕円形の粘土帯を張り付けており、口縁形態分類のどれにも属さない。色調は内外面黒褐色で、1m前後の砂粒を含む。無文土器の可能性あり。103は I 類、104は甕底部、C-2類、若干上げ底気味。105は高坏脚裾部。この他に広口壺口縁部小片が出土。口縁内側は断面三角形に突出する。

SK28出土土器 106は鉢、ほぼ完形。全体的な成形方法は甕と同じ。口縁部形態は「く」の字形に折り返す。口縁部内面は明確な稜をつくる。口径は胴部最大径をやや上回る。底部の厚さは6mm。107、108は壺の底部。109は甕あるいは壺の底部。110、111は甕の底部。111はD-3類、底部の厚さ4mmと非常に薄い。この他に甕口縁部Ⅲ-1類4点出土。また、小破片ではあるがⅡ-2類3点出土。

SK45出土土器 112は甕口縁部、Ⅲ-1類、113は甕底部、D-3類。内面に炭化物付着。 114は飯底部。径1.2cmの円形の孔を穿つ。図化したすべてを掲載。

SK50出土土器 出土土器はいずれも遺存率が高い。115、116は甕。115は口縁部から体部下半部にかけて遺存。口縁形態はⅡ-1類、口縁部はヨコナデを施し、口縁部直下はそのためにわずかに窪む。また、口縁部内面もヨコナデにより、わずかに突出する。116も115と同様の口縁部でⅡ-1類。口縁部内面の突出も同様である。117は広口壺、口縁部から体部下半にかけて約1/2残存。球形の胴部で直線的な立ちあがりをする口頸部がつく。口縁部は外反する。全面丹塗りでヘラ磨きを施す。形態的には古い要素をもつ。この他甕口縁部片、Ⅰ類1点が出土している。

### (3)円形周溝出土土器 (Fig.38)

S X 1 8 出土土器 118~120は甕底部、118、120は D − 2 類、119は D − 3 類。121は甕口 緑部片、Ⅲ − 1 類。122は鉢底部、底部の厚さは 3 ㎜と薄い。124は素口緑の鉢口緑部片。123 は鉢、あるいは125とおなじ無頸壺、口縁部を外反させる。125は無頸壺、口縁部は外反させ胴 部は張りその最大径は口径を上まわる。126は高坏脚部、脚部は短く裾部はハの字に外反気味に 開く。裾端部は面とりされる。この他に甕底部片、D − 2 類、3 点が出土。

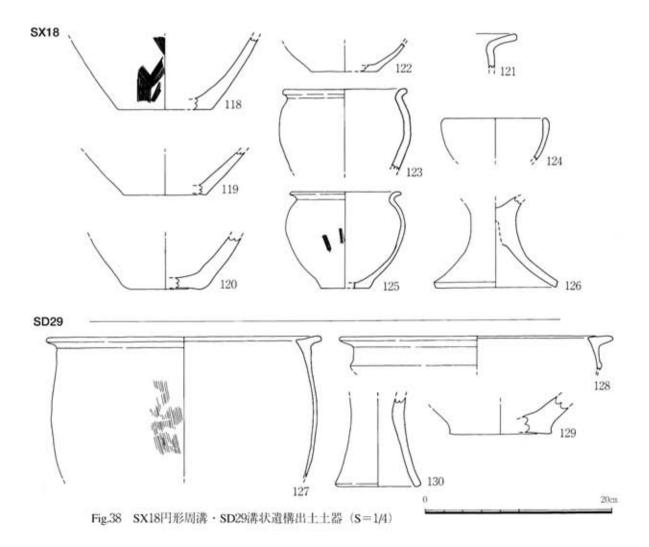
### (4)溝状遺構出土土器 (Fig.38)

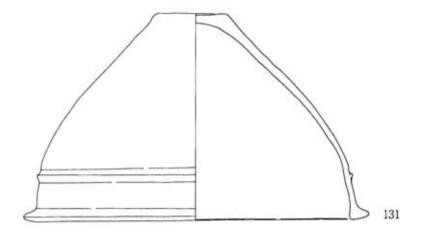
SD29出土土器 127、128は甕、127は口縁部から体部上半部にかけて約2/3遺存。口縁部 形態はⅡ-1類、口縁部内側に突出気味。128は甕口縁部片、Ⅱ-2類。口縁下に断面三角形の 突帯をつくりだす。129は甕底部片、D-2類。130は器台、下半部が約1/2残存。

# (5)**甕棺**(Fig.39)

SJ42 上部は鉢、下部は壺の合わせ口の甕棺である。131は上部の完形の鉢である。口縁 部は断面三角形で口縁上端面は外傾する。口縁形態は甕のそれと同じで、I類にあたる。口縁 下に断面三角形の突帯を張り付ける。底部は平坦で体部は内湾気味に立ちあがる。突帯下で粘 土帯を接合したためかわずかに屈曲し傾きを変える。また、体部中位にも屈曲部あり。体部か ら突帯にかけて外面ヨコナデ。内面調整不明瞭。砂粒を多く含む。

132は下部の壺。完形。口縁部は打ち欠く。体部は卵形をし、底部は平坦。胴部は張り、胴部 最大径は中位にある。口縁下に断面三角形の突帯を張り付ける。口縁部内外面ヨコナデ。体部 外面は化粧土を施した痕跡が残る。外面に縦方向の粗いハケ調整あり。体部外面黒斑あり。





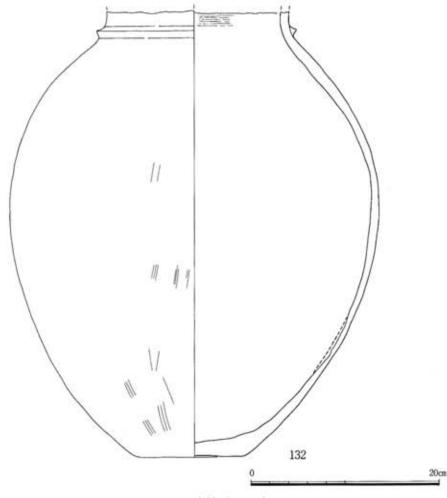


Fig.39 SJ41夔棺(S=1/4)

# Tab4. 弥生土器観察表

法量()は復元径

Fig図-番号 (登録番号)	出土地点	器種	法量 cm	形態、成形、調整の特徴	色調
30-1 (920004613)	SH01	更	口径(24.0)	緩やかに「く」の字形に折り返した口縁部。	内外面黄橙色
30-2 (920004610)	SH01	瓷	口径(28.4)	「く」の字形に折り返した口縁部。口唇部は やや肥厚する。調整不明瞭。	内外面黄橙色
30-3 (92000997)	SH04	瓷	5; <del>4</del> .	逆L字形の口縁部、上端面は平坦で、内側 に突出する。	内外面黄橙色
30-4 (92000996)	SH04	鉢	口径34.1	口縁部は平坦な逆し字形で内側にやや突出。 口縁下にヨコナデにより新面三角形の突帯を一条造る。	内外面黄橙色
30-5 (920001000)	SH04	鉢	_	口縁部は短い逆L字形。調整不明瞭。	内外面黄橙色
30-6 (92000985)	SH04	支脚	器高12.1	体部は直線的にたちあがり、裾部は八の字形 に開く。裾部内面に指頭圧痕あり。	内外面黄橙色
30-7 (92000983)	SH04	支脚	器高12.0	体部は直線的にたちあがり、裾部は八の字形 に開く。裾部内面に指頭圧痕あり。	内外面黄橙色
30-8 (92000982)	SH04	支脚	器高12.1	体部は直線的にたちあがり、裾部は八の字形 に開く。裾部内面に指頭圧痕あり。	内外面黄橙色
30-9 (92000886)	SH05	袋状口縁壺	口径(8.4)	袋状の口縁部で、肩部、および、胴部中位に 断面台形の突帯がつく。	内外面橙色
30-10 (92000891)	SH05	広口壺	口径(24.0)	顕部から口縁部にかけて外反する。口唇部は 面とりされる。	内面黑褐色 外面橙色
30-11 (92000920)	SH05 床面直上	広口壺	725 T	肩部に断面台形の一条突帯を貼り付ける。	内外面黄橙色
30-12 (92000898)	SH05	变	口径(21.2)	口縁部は「く」の字形に折り返し、体部は、著しく張る。 砂粒を多く含む。調整不明瞭。	内外面橙色
30-13 (920002681)	SH05	高坏	口径(21.2)	口縁部幅は3.5cmと広く、内側にわずかに突出する。 調整不明瞭。	内外面黄橙色
30-14 (92000935)	SH05	高坏	-	脚裾部にかけて八の字形に開く。坏部欠損調 整不明瞭。	内外面赤橙色
30-15 (92000934)	SH05	器台	底径(11.8)	裾端部は平坦に面とりする。	内外面黄橙色
30-16 (92000890)	SH05	器台	器高10.5	体部は直線的にたちあがり、上下端部は八の 字形に開く。外面タテハケ。裾部内面ヨコハケ。	内外面浅黄橙色
30-17 (92000885)	SH05 床面直上	器台	口径18.2 器高16.4	ほぼ完形。体部中位が最もくびれ、上下とも に八の字形に開く。全体的に粗雑なつくり。	内外面浅黄橙色
31-18 (92000889)	SH05	鉢	口径19.0 器高14.2	口縁部は、緩やかに「く」の字形に折り返す。 体部内外面タテハケ、口縁部ヨコナデ。胎土は微密。	内面黑褐色 内面浅黄橙色
31-19 (92000887)	SH05	鉢	口径20.7 器高16.8	口縁部は、逆L字形。体部最大径は、やや上位 にあり、口縁部にかけて内傾する。調整不明瞭。	内外面橙色
31-20 (92000899)	SH05	鉢	口径(11.5) 器高7.8	口縁部はやや内湾気味にたちあがる。体部外 面縦方向ハケ目。	内外面黄橙色
31-21 (92000888)	SH05	鉢	口径17.6 器高11.8	はは完形。口縁部はやや開き気味にたちあがる。 体部外面タテハケ、口唇部ヨコナデ。	内外面黄橙色
31-22 (92000933)	SH05	軣	底径8.0	平底で、底部側面に指頭圧痕あり。	内外面黑褐色
31-23 (92000881)	SH05	类	底径(7.6)	平底で厚さ6㎜を測る。外面タテハケ。	内外面橙色
31-24 (920004615)	SH05	类	口径(21.8)	逆L字形の口縁部で、口縁部幅は短い。 調整不明瞭。	内外面橙色
31-25 (92000878)	SH05	鉢	口径(21.4)	口縁部は逆L字形に折り返し、体部中位から内湾し 底部につづく。体部内面中位から下半に指頭圧痕。	内面黑褐色 外面 褐色

Fig図-番号 (登録番号)	出土地点	器種	法量 cm	形態、成形、調整の特徴	色調
31-26 (92000879)	SH05 床面直上	鉢?		口縁部は短く「く」の字形に折り返す。 外面タテハケ。	内外面浅黄橙色
31-27 (92000931)	SH05	売	口径(23.0)	「く」の字形に折り返す口縁部。体部外面タテハケ。	内外面黄橙色
31-28 (92000893)	SH05	爽	口径(26.3)	「く」の字形に折り返す口縁部。端部にかけて肥厚する。外面タテ方向 ハケ目。	内外面赤褐色
31-29 (920004616)	SH05	爽	口径(28.8)		内外面橙色
31-30 (92000883)	SH05	軣	底径8.8	底部から内湾気味に胴部へつづく。外面に 黒斑あり。調整不明瞭。	内外面橙色
32-31 (92004617)	SH06	拠	口径(32.6)	逆L字形の口縁部で、端部は丸くおさめ肥厚する。 内側に突出し、調整不明瞭。	内外面橙色
32-32 (92004620)	SH07	<b>3</b> *	口径(15.6) 器高8.2	口縁部は短く外反する。調整不明瞭。	内外面赤褐色
32-33 (97002685)	SH07	奥	口径(28.5)	「く」の字形に折り返す口縁部、口唇部は わずかに肥厚する。	内外面黄橙色
32-34 (97002684)	SH07	軣	口径(34.0)	逆L字形の口縁部で、その下に断面三角形の 突帯を貼り付ける。	内外面黄橙色
32-35 (97002690)	SH07	盖		上端面中央部は円形状にわずかに窪む。	内外面黄橙色
32-36 (97002683)	SH07	拠棺		口縁下に断面台形の突帯をめぐらす。	内外面黄橙色
32-37 (97002686)	SH07	広口壺	口径(25.2)	口縁部は内側に断面三角形に突出する。 杯部外面丹塗り。	内外面浅黄橙色
32-38 (97002688)	SH07	高坏?		杯底部に段をもつ、脚部は径 6 cm。 調整不明瞭。	内外面橙色
32-39 (97002689)	SH07	高坏		円柱状の脚部につけ根と杯底部。	内外面橙色
32-40 (92004618)	SH07	差	口径(19.0)	上端部から口縁端部にかけて外反しながら大 く開く。調整不明瞭。	内面黑褐色 外面赤褐色
32-41 (97002692)	SH07	袋状口縁壺	口径(5.7)	口縁部中位で強く屈曲し、袋状口縁をなす。 調整不明瞭。	内外面黄橙色
32-42 (97002691)	SH07	袋状口縁壺	口径(6.0)	口縁部中位で緩やかに屈曲し、袋状口縁をなす。 調整不明瞭。	内外面黄橙色
32-43 (97002698)	SH07	查?	底径(8.8)	底部は平坦で厚さ5mmを測る。調整不明瞭。	内面褐色 外面赤橙色
32-44 (97002697)	SH07	查?	底径(7.8)	平坦な底部で厚さ5mmを測る。内面外側に 指頭圧痕あり。	内面黑色 外面黄橙色
32-45 (97002696)	SH07	拠	底径 5.6	底部は、わずかに上げ底、外面、板状工具に よるナデのちタテハケ。	内外面黄橙色
32-46 (92004619)	SH07	器台	底径(8.8)	胴部は直線的にたちあがり、裾部は内湾気味 に八の字形に開く。調整不明瞭。	内外面黄橙色
32-47 (92004621)	SH08	斐	口径(28.0)		内外面橙色
32-48 (92004622)	SH08	器台	底径(9.1) 胴経 6.1	胴部中位が最もくびれ、上下方に八の字形に 外反する。脚整不明瞭。	内外面黄橙色
32-49 (97-2670)	SH16	类	10.0	逆し字形の口縁部、口縁部上端面は、わずか に内傾する。調整不明瞭。	内外面橙色
32-50 (97002701)	SH16	軣	口径(23.9)	逆L字形の口縁部、口縁部上端面は、水平に のび、中央部はわずかにくぼむ。	内面褐色 外面橙色
32-51 (97002702)	SH16	麂	底径(6.2)	平坦な底部で厚さ1.4 cmを測る。調整不明瞭。	内面黑色 外面黄橙色
33-52 (92000954)	SH13	広口壺	口径(19.6)	類部は直線的にたちあがり、口縁部にかけて外反する。 口唇部は丸くおさめる。 口縁部外面ヨコナデ	内外面橙色
33-53 (92000963)	SH13	变	7.00	逆し字形の口縁部で調整不明瞭。	内面褐色 外面橙色
33-54 (92000958)	SH13	拠	底径(6.8)	底部外面タテハケ。底部内面は深く内湾する。	内外面浅黄橙色
33-55 (92000957)	SH13	器台	底径(7.0)	砂粒を多く含む。調整不明瞭。	内面黄橙色 外面橙色

Fig図一番号 (登録番号)	出土地点	器種	法量 cm	形態、成形、調整の特徴	色調
33-56 (92004656)	SH46	鉢	口径(29.4)	口縁部上端面は平坦で、内傾し、短かく外方 にのびる。調整不明瞭。	内外面橙色
33-57 (92004658)	SH46	売	口径(28.0)	差L字形の口縁部で、關節から口縁部にかけて内様する。 器壁は2mmと薄い。砂粒を多く含み凋整不明瞭。	内面赤褐色 外面 橙色
33-58 (92004659)	SH46	奥	底経 6.4	底部はわずかに上げ底。内湾気味に胴部に つづく。調整不明瞭。	内面 褐色 外面赤褐色
33-59 (92004657)	SH46	克	口径(18.6)	面は内傾する。口縁部ヨコナデ。	内外面橙色
33-60 (92004660)	SH46	高坏	底経 12.4	脚裾部は外反しながらラッパ状に開く。 調整不明瞭。	内外面橙色
33-61 (92004601)	SH47	並	底径 9.7	底部から胴部にかけて大きく開く。 外面タテハケ。	内外面黄橙色
33-62 (92004602)	SH47	鉢	底径(7.4)	底部は平底で、体部は内湾気味にたちあがる。 調整不明瞭。	内外面黄橙色
33-63 (92004603)	SH47	鉢	口径 17.6	底部は平底で、体部上位から□縁部にかけて内消する。 調整不明瞭。砂粒を多く含む。	内外面浅黄橙色
33-64 (92004607)	SH47	鉢	口径(31.8)	口縁部は「く」の字形に強く折り返す。口縁部直下 外面にヨコナデによる窪みあり。体部外面タテハケ。	内外面赤褐色
34-65 (92000936)	SK17	売	40 Comp (4.4 - 1.5 - 1.5 - 1.5	口縁部は「く」の字形に折り返す。胴部最大 径は上位にあり、口縁部にかけて内傾する。	-95.0.0000000000000000000000000000000000
34-66 (92000938)	SK17	売	底径(8.4)	平坦な底部で、厚さ6mm。外面タテハケ。	内外面橙色
34-67 (92000944)	SK17	袋状口縁壺	口径(6.8)	胎土は微密で、調整不明瞭。	内外面橙色
34-68 (92000942)	SK17	袋状口縁壺	口径(8.4)	口縁部中位から口唇部にかけて内湾する。	内外面黄橙色
34-69 (92000943)	SK17	袋状口縁壺	口径(8.0)	胎土は微密で、外面丹塗り。	内外面黄橙色
34-70 (92000937)	SK17	鉢	口径(9.0)	平坦な底部から口縁部にかけて八の字形に開く。 胎土は微密。外面タテハケ。黒斑あり。	内外面褐色
34-71 (97002704)	SK19	売	口径(37,0)	「く」の字形に折れ返す口縁部、口唇部は面とり され、肥厚する。口縁下に断面三角の突帯あり。	内外面橙色
34-72 (97002705)	SK19	売	底径(6.7)	底部は僅かばかりであるが上げ底。 調整不明瞭。	内外面黄橙色
34-73 (92004650)	SK21	売	口径(28.7)	口縁部は「く」の字形に折り返す。口唇部は やや肥厚する。調整不明瞭。	内外面浅黄橙色
34-74 (92004647)	SK21	拠	口径(18.0)	口縁部は「く」の字形に折り返す。胎土は微 密で、体部外面タテハケ。	内面黄褐色 外面橙色
34-75 (92004652)	SK21	类	口径(19.5)	「く」の字形に折り返す口縁部。胎土は微密。	内外面黄橙色
34-76 (92004646)	SK21	瓷	底径 8.7	若干上げ底気味の底部。厚さ1cmで、 外面タテハケ。	内面黑褐色 外面黄橙色
34-77 (92004651)	SK21	売	底径(6.3)	若干上げ底気味の底部。調整不明瞭。	内面黑色 外面赤褐色
34-78 (92004655)	SK21	鉢	底径(7.3)	平坦な底部で厚さ3mmと非常に薄い。 調整不明瞭。	内面黄橙色 外面黄褐色
34-79 (92004648)	SK21	袋状口縁壺		胴部は算盤形で、顕部内面に指頭圧痕あり。 胎土は微密。黒斑あり。口縁部ヨコナデ。	内外面黄橙色
34-80 (92004645)	SK21	鉢	口径 16.0	平坦な底部で体部は内湾気味で、口縁部は 内質する。体部外面タテハケ。黒班あり。	内外面橙色
35-81 (92004630)	SK22	売		口縁部は「く」の字に折れ、胴部最大径は中 位にある。外面タテハケ。	内面黄橙色 外面茶褐色
35-82 (92004624)	SK22	光	底径(8.6)	底部外側面から体部にかけて粗いタテハケを 施す。	内面黑色 外面黄橙色
35-83 (92004627)	SK22	売	底径(9.8)	底部は平坦で、外面タテハケ。	内面茶褐色 外面赤橙色
35-84 (92004625)	SK22	瓷	底径(8,1)	平坦な底部で、底部外面には指頭圧痕あり、 外面粗いタテハケ。	内外面黄橙色
35-85 (92004633)	SK22	売	底径(8.0)	平坦な底部で厚さ5mを測る。 外面個粗いタテハケ。	内面黑褐色 外面黄橙色

Figl对一番号 (登録番号)	出土地点	器種	法量 cm	形態、成形、調整の特徴	色調
35-86 (92004626)	SK22	軣	底径(6.9)	上げ底気味の底部で厚さ9 転を測る。 調整不明瞭。	内面黄褐色 外面橙色
35-87 (92004629)	SK22	光	底径(7.0)	平坦な底部。外面粗いタテハケ。	内面褐色 外面黄橙色
35-88 (92004643)	SK22	Ť	_	胴部中位、および肩部に断面M字形突帯をま わす。外面丹塗り。	内面黄褐色 外面黄橙色
35-89 (92004635)	SK22	高坏	底径(10.7)	脚裾部はラッパ状に関く。裾部内面ヨコナデ。	内外面黄褐色
35-90 (92004634)	SK22	鉢	口径 7.5	体部から口縁部にかけて、指で整形。黒班あり。	内外面黄橙色
35-91 (92004632)	SK22	支脚	底径 6.2	上げ底で、裾部は八の字形に開く。 体部は円柱状。	内外面橙色
35-92 (92004631)	SK22	支脚	底径 6.2	円柱状の支脚、ひびが入る。	内外面橙色
35-93 (92004628)	SK22	支脚	底径 6.4	裾部外面に指頭圧痕あり。内面の器壁は剥離 する。	内外面橙色
35-94 (97002708)	SK27	壳	口径(28.8)	「く」の字形に折り返す口縁部。	内外面橙色
35-95 (97002709)	SK27	高坏	口径(22.6)	口縁部は内側に断面三角形に突出し、杯部に かけてわずかに内湾する。	内外面橙色
36-96 (92004665)	SK26	売	底径 6.5	口縁部は逆L字形で、上端面は内傾する。 胴部は包弾形。調整不明瞭。	内外面橙色
36-97 (92004661)	SK26	类	口径 28.6	口縁部は逆し字形で、上端面はほぼ水平。 体部外面タテハケ。	内外面赤橙色
36-98 (92004664)	SK26	売	底径 6.5	底部は上げ底で、厚さ1.5cmを測る。 調整不明瞭。	内外面橙色
36-99 (92004662)	SK26	拠	底径 6.8	底部は若干上げ底気味で厚さ1.6cmを測る。 体部外面タテハケ。	内外面浅黄橙色
36-100 (92004663)	SK26	类	底径 6.3	底部は若干上げ底気味で、外面タテハケ。	内外面橙色
36-101 (97002707)	SK26	壺	底径(5.5)	底部はわずかに上げ底で、胴部にかけて大き く開く。	内面黑褐色 外面橙色
36-102 (97002694)	SK42	类	口径(24.0)		内外面黑褐色
36-103 (97004713)	SK42	売	口径(25.2)	口縁部は断面三角形で、上端面は口唇部にか けて下がる。砂粒を多く含み調整不明瞭。	内外面橙色
36-104 (92004714)	SK42	拠	底径 6.2	上げ底気味の底部で厚さ1cmを測る。 外面タテハケ。	内面褐色 外面橙色
36-105 (97002693)	SK42	高坏	底径(23.7)		内外面橙色
37-106 (92004666)	SK28	鉢	口径 26.9	口縁部は「く」の字形に折れ、体部中位から 口縁部にかけ内傾する。体部外面粗いタテハケ。	内面褐色 外面橙色
37-107 (92004667)	SK28	壹?	底径 7.5	やや上げ底気味の底部で厚さ1cmを測る。 外面粗いタテハケ。黒班あり。	内外面橙色
37-108 (92004669)	SK28	章?	底径(7.8)	平坦で厚さ1.8 cmの底部。調整不明瞭。	内外面黄橙色
37-109 (92004668)	SK28	光?	底径(9.4)	平坦な底部で体部にかけてたちあがる。 外面タテハケ。	内外面黄橙色
37-110 (92004670)	SK28	类	底径(6.7)	平坦で厚さ1 cmの底部。調整不明瞭。	内外面黄橙色
37-111 (92004682)	SK28	売	底径(8.4)	平坦で厚さ 4 mmと非常に薄い底部。調整不明 瞭。	内面黑褐色 外面茶褐色
37-112 (97002714)	SK45	兜	口径(31.2)	「く」の字形に折れ返す口縁部。 調整不明瞭。	内外面黄橙色
37-113 (97002716)	SK45	拠	底径(8.4)	平坦で厚さ 6 mの底部。調整不明瞭。	内面褐色 外面茶褐色
37-114 (97002715)	SK45	鋲	底径(5.6)	底部は径1.2cmの孔があく。	内面茶褐色 外面橙色
37-115 (92000952)	SK50	瓷	口径(25.0)	口縁部は逆L字形。上端面はやや内傾し、 内側に若干突出する。体部外面タテハケ。	内外面橙色

Fig図-番号 (登録番号)	出土地点	器種	法量 cm	形態、成形、調整の特徴	色調
37-116 (92000955)	SK50	軣		口縁部は逆し字形で内側にやや突出する。 口縁部外面ヨコナデ。体部外面タテハケ。	内外面橙色
37-117 (92000956)	SK50	並	口径(22.2)	球形の胴部に外反する口縁部がつく。 胴部外面、頚部内面ヨコ方向ヘラミガキ。	内外面赤褐色
38-118 (92000969)	SX18	奥	底径(10.0)	体部下半部外面はタテ、ナナメ方向ハケ。 器壁は、1cmと厚い。	内外面褐色
38-119 (92000971)	SX18	軣	底径(8.7)	体部下半部外面はタテハケ。黒斑あり。	内外面橙色
38-120 (92000966)	SX18	变	底径(7.6)	底部は平坦で、体部下半の器壁は1.3cmと厚い。調整不明瞭。	内外面橙色
38-121 (92000976)	SX18	軣	===	「く」の字形に折り返した口縁部。 体部外面タテハケ。	内面黄褐色 外面茶褐色
38-122 (92000970)	SX18	鉢	底径(6.9)	平坦な薄い底部で胴部は内湾気味にたちあが る。	内外面橙色
38-123 (92000974)	SX18	鉢	口径(13.1)	口縁部は短く、外反する。調整不明瞭。	内外面橙色
38-124 (92000972)	SX18	鉢	口径(10.6)	胴部から口縁部にかけて内湾気味にたちあが り口唇部は、丸くおさめる。調整不明瞭。	内面褐色 外面黄橙色
38-125 (92000973)	SX18	無頭壺	口径(11.6)	短く外反する口縁部で、最大形が上位にくる 胴部。外面タテハケ。	内外面黄橙色
38-126 (92000965)	SX18	高坏	底径 12.6	脚裾部は外反気味に開く。裾端部は中央部が 窪む。調整不明瞭。	内外面橙色
38-127 (92004704)	SD29	拠	口径(28.8)	逆し字形の口縁部、上端面は内傾する。 体部外面タテハケ。	内外面黄橙色
38-128 (92004709)	SD29	売	口径(29.2)	逆L字形の口縁部、外方に水平にのびる。 口縁下に断面三角形の突帯あり、調整不明瞭。	内外面黄橙色
38-129 (92004707)	SD29	瓷	底径(10.8)	平坦な底部で、側面は垂直にたちあがる。	内面褐色 外面橙色
38-130 (92004705)	SD29	器台	底径(9.0)	体部中位でくびれ、裾部にかけて外反しなが ら開く。調整不明瞭。	内外面橙色
39-131 (92004712)	SJ41	甕棺(上)鉢	口径 36.7	口縁部は断面三角形で口縁下に断面三角形の 突帯を貼り付ける。	内外面橙色
39-132 (92004623)	SJ41	甕棺(下)壺	残存高47.0	口縁部は打ち欠き、口縁下に断面三角形の突 帯貼り付け。胴部は卵形。黒班2ケ所あり。	内外面橙色

# 2. 古墳時代後期~奈良時代の土器

古墳時代後期~奈良時代にかけての遺物が出土しているが、古墳時代後期の遺物は少なく、 奈良時代がほとんどである。奈良時代の竪穴住居跡であるSH10、12、14から須恵器、 土師器が出土している。しかし、遺物の量としては弥生時代のそれに比べて少ない。調査時に おいて古墳時代後期の遺物は見過ごしていたが、遺物整理の段階でこれらの遺物が抽出できた。 以下、時代、遺構ごとに記す。

### (1)古墳時代後期、飛鳥時代の土器 (Fig.40)

133はSH15埋土中出土。須恵器坏蓋片、復元口径14.5cm。天井部は比較的入念なヘラケズリ。

134はSK20埋土中出土。須恵器坏蓋片、口縁部は丸くおさめ内外ヨコナデ、体部中位にヘラケズリによる稜あり。

135、136はSK34埋土中出土。135は須恵器坏蓋、復元口径8.4cm、器高1.0cm。体部中位か

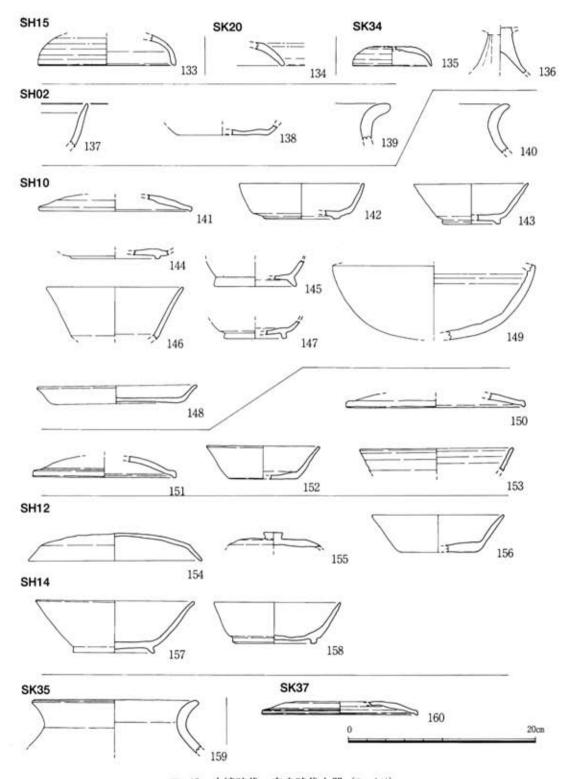


Fig.40 古墳時代~奈良時代土器(S=1/4)

ら天井部にかけてヘラケズリ痕あり。136は土師器高坏脚部、短脚で脚部にヘラ状工具により約 10面ほど面とりされる。

## (2)奈良時代の土器 (Fig.40)

## ①竪穴住居跡出土土器

奈良時代の竪穴住居跡6軒のうち4軒から図示可能な遺物が出土している。SH10、14 からは遺存状態の良好な遺物が出土している。以下遺構ごとに記す。

#### SHO2出土土器

137は須恵器坏身の口縁部。口唇部内側は面とりされる。口縁部内側に稜がつき、断面は三角 形に仕上げる。内外面ヨコナデ。138は須恵器坏身の底部。復元底径9.4cm。底部ヘラ切り痕が 残る。139は土師器甕の口縁部片。口縁部は緩やかにくの字形に曲げる。口唇部は丸くおさめる。 外面ヨコナデ。

## SHIO出土土器

遺物は床面から数cm浮いて出土している。140は土師器甕口縁部。口縁部は外反しながら外方にひろがる。口縁部は指押さえで成形したのち、外面ヨコナデ。外面黒斑あり。胎土緻密。141は須恵器坏蓋の口縁部。復元口径16.2cm。端部は下方につまむ。天井部は入念なヘラケズリ。142、143、144、147は須恵器高台付坏身、142は復元口径13.1cm。器高3.8cm。体部は内湾気味に立ち上がる。高台部は貼り付けており、その痕跡が明瞭に残る。143は復元口径12.0cm、器高4.3cm。体部は直線的にハの字形に広がる。144、147は高台付きの底部片、144は高台外径9.5cm、147は高台外径6.8cm。高台部をしっかりつくり、高台高も5mmと他に比べ高い。145は土師器高台付坏身の底部片。高台高は7mmと高く外方に向けハの字形に広がる。146は須恵器坏身、復元口径14.5cm、体部は直線的に外方にハの字形に開く。148は須恵器皿、復元口径16.8cm、器高1.9cm。底部には回転へラ切り離し痕あり。体部は外半気味に口縁部にいたる。149は須恵器の平瓶か。肩部にて欠損し、屈曲部がわずかに残る。体部下半部は静止ヘラケズリ。図示した以外の土器として土師器甕口縁部片、土師器甕把手。土師器高台付坏身底部片、須恵器坏蓋口縁部片などがある。

#### SH12出土土器

150、151は土師器坏蓋の口縁部片、150は復元口径18.6cm、151は復元口径15.0cm。ともに器 形は似ており口縁端部は下方につまむ。152は土師器坏身、復元口径11.6cm、器高3.5cm。平底で 体部は若干外反気味にハの字形に開く。153は須恵器坏身の口縁部片、復元口径16.0cm。内外面 ヨコナデ。

## SH14出土土器

154、155は須恵器坏蓋、154は復元口径18.3cm、器高2.8cm。天井部は若干丸味を帯び板目痕

がつく。口縁部はハの字形に開く。155は釦状のつまみがつく。天井部は回転へラケズリ。156~158は須恵器坏身。156は復元口径13.8cm、器高3.9cm。底部は平底で体部はハの字形に開く。 157、158は高台付坏身、157は復元口径16.8cm、器高5.5cm。高台部は底部と体部の屈曲部につき、外方にむかって開く。体部は大きくハの字形に開く。胎土は軟質。158は13.3cm、器高4.4cm、体部は若干内湾気味に外方に開く。

## ②土坑出土土器

#### SK35出土土器

159は土師器甕の口縁部片、復元口径17.0cm。口縁部は外反しながら外方にひらく。140と形態的には類似するものの胎土、色調が異なる。胎土は砂粒を含み、黄橙色。

#### SK37出土土器

160は須恵器坏蓋、復元口径16.2cm、器高1.4cm。口縁端部は下方につまむ。天井部はヘラ切り 痕が残る。

#### 3. 石器、石製品、土製品

本調査にて出土した石器、石製品、土製品をFig41に掲載する。171が奈良時代の竪穴住居跡 から出土しているがそれ以外はすべて弥生時代の遺構および包含層出土である。以下、番号順 に遺物の説明を記す。

161は土弾、SX18出土。ラクビーボール状の形態で全長4cm、径2.5cmを測る。162は石鏃、SH04出土、黒曜石製、剥片を素材としており、裏面は主要剥離面を残す。深い抉りをもち、周辺の細剥離により形態を整える。163は磨製石剣、SH06出土、先端のみで残存長5.4cm、幅2.5cm、厚さ4mmを測る。全体的に磨耗しており、石質は167、168と同じである。164は扁平片 刃石斧、SH08出土。刃部両端は欠損するものの基部は残る。全長5.2cm、幅2.1cm、厚さ9mmを測る。165は磨石、SD29出土、1/2残存。凝灰岩製、側面は丸みをもつ。166~168は石包丁、166はSH05出土。色調は小豆色で硬質、立岩産か。背部は幾分面とりされる。167は包含層、168はSH03出土、ともに約1/2残存、石質や全体的な形態は類似する。ただ、168の背部は面とりされるのに対して167のそれはされない。169、170は砥石、169はSK17、170は包含層出土。ともに砂岩製。169は表裏、側面が170は両側面、表面が利用される。171は円盤状石製品、SH02出土。用途不明、長径9.5cm、短径8.1cmで、表面の中央に、径2mmの孔を窪ませる。側面は滑らかに調整される。172は扁平棒状の石製品、P10出土、用途は不明、先端部が刷れて面とりされた状態である。171、160は花崗岩製か。

石器としてこの他に図示していないがSK50からサヌカイト製の剥片と残核がSK22からもサヌカイト製の剥片が出土している。

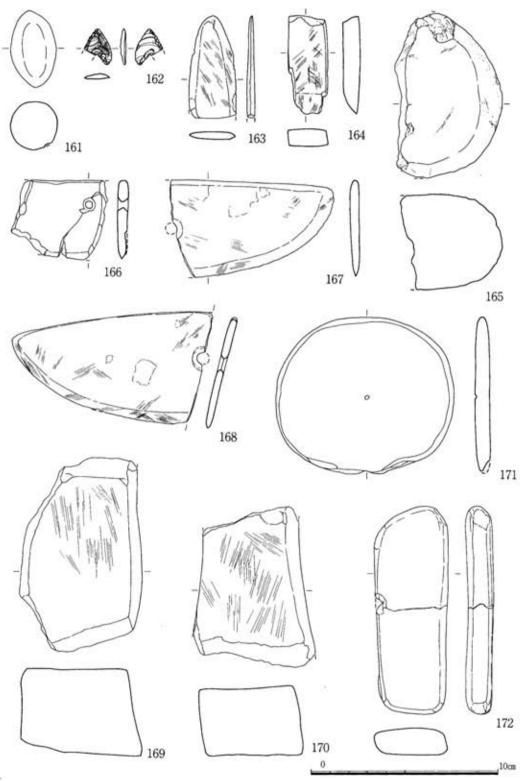


Fig.41 土製品、石製品 (S=1/2)

## N. まとめ

## 1. 佐賀平野の弥生中期後半~後期初頭の土器群

#### (1)はじめに

本調査出土の土器には甕の口縁、底部が目立って出土しており、本報告書の挿図に掲載して いる土器以外にも多くの破片が出土している。それらについては本文中で土器分類をもとに記述している。

中期土器について調査担当者は経験的に中期前半、中頃、後半、末などといった時期区分を使っている。弥生中期土器編年は研究史的にも集落内出土の日常生活土器の編年と埋葬に用いられた甕棺や祭祀土器の編年があり、それゆえに微妙な箇所で調査担当者間での編年観の違いがみられる。中期土器の編年には甕の口縁部、底部の形態変化をその指標にすることが多い。 集落内の竪穴住居跡などからは完形の土器が出土することがまれであり、むしろ口縁部、底部片といった土器破片が多く出土している。この中でも甕の口縁部、底部は土器編年の指標になっていることからもその土器分類を行い、遺構の時期を決定していく作業は重要な意味をもつ。ここでは、先学の編年をもとにした甕の口縁部、底部分類を行い、佐賀平野における中期と後期の時期区分となる土器群の指標を明確にし、坊所三本松遺跡の集落時期を考えたい。

#### (2)研究小史

北部九州の中期土器の型式として現在、著名なのが城ノ越式と須玖式であるが、研究史上最も早く知られたのは須玖式土器である。その多くは甕棺として知られており古くは森本六爾、杉原荘介、小林行雄氏らは中期土器型式として須玖式を設定している。1958年に杉原荘介氏による城ノ越貝塚の調査が実施され城ノ越式の設定がなされたが、杉原氏の城ノ越式はa、b両式を設定し中期初頭から中頃までを一括する編年観を提唱した。森貞次郎(1966)は城ノ越式、須玖式、御床式の3期区分をそれぞれ初頭、中頃、後半とし、城ノ越式を中期初頭に限定し今日多く指示されている。

小田富士雄(1973)は中期初頭を城ノ越式、中期中頃を須玖式とし前半から中頃を須玖Ⅰ式、 後半を須玖Ⅱとし、森編年を基調とした編年を組み立てた。その後橋口達也(1979)は成人用 大形甕棺を編年しそれに併行する日常用土器の編年を試みている。

片岡宏二 (1982) は福岡県小郡市周辺の資料を用いて中期土器の編年を行った。それは土器 各器種の型式学的操作を得て中期を I 期 (城ノ越式)、Ⅱ 期、Ⅲ 期、Ⅳ期 (須玖 I 式)、Ⅴ期、 Ⅵ期 (須玖 Ⅱ式) に編年した。

田崎博之(1985)は北部九州の須玖式土器は遠賀川以東と以西では地域性がみられ、それぞれの両地域で編年を組み立てた。また、従来の城ノ越式は須玖 I 式古段階に対応するとし須玖

Ⅰ式を古段階、中段階、新段階、須玖Ⅱ式を古段階、新段階に分けている。その基本操作は要の口縁部、底部の形態分類をもとに、広口壺の形態変化などと併せてその編年操作の指標にしている。

武末純一(1987)は中期土器を城ノ越式、須玖式Ⅰ、Ⅱ式に分け、田崎と同様遠賀川以西と 以東に分け編年を組み立てている。

これら先学の研究をふまえるならば、須玖 I 式と II 式の区分の指標について小田富士雄氏は 須玖 I 式の壺は平坦な鋤形口縁で肩が張り突帯を有し、甕は逆 L 字形口縁で高坏は鋤形口縁で 脚が高くのび、壺とともに丹塗りのものがある。須玖 II 式の壺は肩が中位に下がり突帯を多く 重ねるものが見られる。平坦な口縁は T 字形断面に発達したものが壺、甕、高坏などにみられ 須玖 II 式の特徴となる。高坏の脚部は棒状に延びきって極限まで発達し、新たに出現する器種 として薄肉の鼓形器台、丹塗細頸の袋状口縁壺があり、甕には口縁が匙状にふくらむものが登 場するとしている。

片岡宏二氏は須玖 II 式に相当する V 期の指標として口縁の内側に稜がなく、折り返しただけの口縁をなす甕 E や丹塗り磨研で発達した鋤先状口縁をあげ、口唇に刻みをつける甕 F の出現とし、さらに須玖 II 式新段階にあたる VI 期には袋状口縁壺や極端に長脚の高坏が出現し、甕は鋤先状のものがなくなり折り曲げただけの口縁に統一されるとする。片岡編年は取り扱った資料が小郡市周辺という地域が限定されたものであるが須玖 I 式を 3 段階に須玖 II 式を 2 段階に細分している。

田崎博之氏は土器の地域性に論究し前期末では玄海灘沿岸と有明海沿岸での様相が異なっており中期段階では遠賀川以東と以西という地域性がみられることを考察している。遠賀川以西地域ではB、C、D系譜の甕があり、それぞれの系譜の甕は底部成形手法や諸特徴からさらに数型式に分かれ、それをもとに須玖Ⅰ式を古、中、新の3段階に須玖Ⅱ式を古、新の2段階に編年している。須玖Ⅱ式から口縁部を折り返すC系譜の甕と袋状口縁の長顎壺が出現するとしている。

武末純一氏は須玖式と後期前半の高三瀦式区分の指標を学史を踏まえて「く」字口縁甕の成立にもとめたものの「く」字形口縁に近い中期の屈折口縁はその弁別が人によって異なることもあり(武末1982)、袋状口縁壺の複合口縁化にもとめた。また、高坏の成形技法が須玖Ⅰ式では組み合わせ坏部うわのせ技法のAⅡ aが主で組み合わせ脚部つけたし技法のAⅠもみられるが須玖Ⅱ式になると連続成形技法のB技法や組み合わせ坏部うわのせ充填技法であるAⅡ bが出現するとし、A技法は前期からの系譜でB技法は瀬戸内地方のⅡ様式の影響の可能性を示唆している。

先学の研究をふまえるならば、須玖 I 式と II 式、そして後期土器の時期区分の指標は須玖 I 式の甕は逆 L 字形口縁で須玖 II 式は発達したT字形口縁の甕、そして折り返し口縁の甕が新た

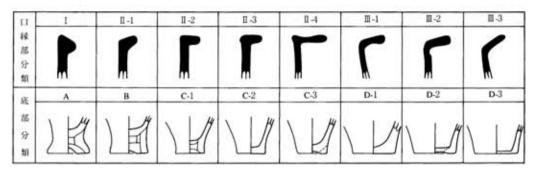


Fig.42 甕口綠部、底部分類

に出現し、甕以外の器種として袋状口縁壺や長脚高坏が出現する。後期の区分は「く」字形甕 の成立であろうがその弁別は困難で複合口縁壺の成立とするという考え方がある。

## (3)口縁部分類と底部分類

本遺跡出土土器の甕の口縁部、及び底部分類をFig.42と以下に示す。本報告書掲載の各遺構出 土の土器のうち甕の口縁部、底部片についてはこの分類で記述している。

#### ①口縁部分類

- I類 口縁部断面形が三角形に肥厚する。
- Ⅱ-1類 内側に低く内傾する逆L字形口縁。
- Ⅱ-2類 口縁部上端面は平坦な逆上字形の口縁。口縁幅は約2.5cm。
- Ⅱ-3類 口縁部上端面はやや平坦な逆L字形で口縁部内側に突出する。口縁上端面中央部が やや窪むものもある。口縁幅はⅡ-2類より長く約3cm前後である。
- Ⅱ-4類 T字形に発達した口縁。上端面中央部がやや窪むものもある。口縁幅は約4cm前後である。
- Ⅲ-1類 水平に近く折り返した口縁。口唇部がやや肥厚するものもある。
- □ 2類 水平に近く折り返した口縁で、口唇部は肥厚する。口縁直下外面にヨコナデによる 窪みが回る。口唇部は面取りされる。
- Ⅲ-3類 くの字形に近く折り返した口縁。

#### ②底部分類

A類 底部外面は上げ底、断面は台形で厚い。

B類 底部外面は上げ底で厚く、細くしまる。

C-1類 底部外面は平坦で厚さは2cm前後である。

C-2類 底部外面は平坦で厚さは1cm前後である。

- C-3類 底部外面の周縁に粘土帯を接合することによって上げ底にする。
- D-1類 底部外面は平坦で、内面はスリ鉢状である。
- D-2類 底部外面は平坦で、内面は側面との接合部で屈曲する。底部の厚さは約1cm以上である。
- D-3類 底部外面は平坦で、内面は側面との接合部で屈曲する。底部の厚さは約1cm以下である。

#### ③口縁部と底部の型式変化

口縁部形態は断面三角形から内側に内傾する逆L字形、そして逆L字形が発達し、折り返し口縁が出現するという変化がみられる。逆L字形口縁でも口縁部粘土帯の接合の違いによりいくつかの成形手法が看取できる。とくに $\Pi-3$ 、 $\Pi-4$ 類では側面粘土の上に口縁部粘土をT字形に接合する方法と、逆L字形に折り曲げた口縁の内側にさらに粘土帯を接合させる方法があり、その結果後者は $\Pi-4$ 類で口縁上端面が窪む口縁形態を生み出す。

底部分類は田崎(1985)の底部成形手法の分類をもとにしており、それとの対比はA類は a 手法、B類はb 手法、C -1 類はc手法、D類はd、e手法となる。この底部形態は田崎の論ずるとおりその成形過程の粘土接合により決定される。A、B、C類の粘土帯は3段に重ねるため底部も厚い。また、C類、D類で底面が窪むのもこの成形手法の違いである。C -3 類は底部面周縁に粘土帯を接合することによって上げ底になる。D類でも底部にあたる粘土円盤と側面の粘土との接合法により上げ底になるものもみられ、D -3 類のように極端に薄い底部もつくられる。甍底部の型式変化は、この底部の厚さと底径の変化で捉えられる。この底部分類のうちC類は底径  $6 \sim 6.5$  cm  $\rightarrow 8$  cm 前後  $\rightarrow 9 \sim 10$  cm 前後 c  $\rightarrow 9 \sim 10$  cm 前後と大きくなる傾向が見られる。

この口縁部、底部分類の型式組列は前述した型式変化や橋口 (1979)、田崎 (1985) らの先学 研究を参考にするならば口縁部は I 類  $\rightarrow II - 1$  類  $\rightarrow II - 2$  類  $\rightarrow II - 3$  類  $\rightarrow II - 4$  類  $\rightarrow (II - 1)$  類、II - 2 類)  $\rightarrow III - 3$  類である。また、底部分類のそれは A 類  $\rightarrow B$  類  $\rightarrow C$  類  $\rightarrow C$  2 数  $\rightarrow C$  2 3  $\rightarrow C$  3  $\rightarrow C$  2 3  $\rightarrow C$  2 3  $\rightarrow C$  4  $\rightarrow$ 

## (4)坊所三本松遺跡の甕分類と問題点

本遺跡の各遺構出土の甕の口縁部、底部を上記分類で表記したのが、Tab.5である。この表中には報告書掲載以外の出土土器も含めている。この表から甕口縁部と底部のⅡ類とC類そしてⅢ類とD類の組み合わせがわかる。また、口縁部Ⅱ類の計34点、Ⅲ類の計27点、底部C類の計21点、D類の計22点であり、このことから坊所三本松遺跡の集落の発達した時期を推察することもできる。ところで、先学の研究によれば須玖Ⅱ式の特徴はT字形に発達した口縁部にある。

廖底部分類 甕口緑部分類 その他の器種 遺 構 名 I II -1 II -2 II -3 II -4 III -1 III -2 III -3 A B C-1 C-2 C-3 D-1 D-2 D-3 SH01 3 SH04 2 5 1 1 1 1 7 1 2 1 短颚袋状口绿壺 SH05 5 SH06 袋状口綠壺 SH07 1 1 1 SH08 1 2 1 SH13 SH16 1 -1 1 SH46 1 1 SH47 1 1 1 1 袋状口縁壺 SK17 2 1 SK19 2 1 2 袋状口縁壺 SK21 4 SK22 2 6 1 1 4 SK26 1 1 2 SK27 1 SK28 3 4 1 | 1 SK42 1 1 1 SK45 1 SK50 1 2 S X 1 8 1 5 1 SD29 小 計 4 11 16 6 1 26 1 0 0 0 5 15 1 1 14 7

Tab.5 坊所三本松遺跡遺構別甕口縁·底部分類表

本分類ではⅡ-4類がそれにあたるのであろうが、1点のみの出土である。また、須玖Ⅱ式の 甕として折り返し口縁であるⅢ-1類が出現することもいわれているがその比率が極端に多く、 Ⅲ類に伴って須玖Ⅲ式の特徴のひとつでもある袋状口縁壺が出土している。この土器群の時期 を遠賀川以西の北部九州編年観に従い須玖Ⅲ式相当と単純に捉えられるのか次ぎに佐賀平野内 の他の遺跡出土の土器群を参考にしてみたい。

0 0

21

## (5)佐賀平野の中期後半~後期初頭の土器群

#### ①遺跡、遺構の抽出と器種分類と器種構成

4

34

81

土器群の地域性を明確にするためにも佐賀平野という地域を限定する必要がある。これまで、 佐賀平野の古墳時代初頭前後の集落動向を論じた蒲原 (1994) や弥生~古墳時代前期の集落立 地と動向を考察している徳富 (1994,1995a,1995b,1997) を参考にしてここでは嘉瀬川以西から寒 水川流域の遺跡を対象にした。その遺跡の遺構出土の土器の器種分類とその組合わせを一覧に したのがTab.6である。対象にした遺跡は佐賀市6遺跡、千代田町2遺跡、三根町1遺跡で計88 遺構の土器群を抽出したがこれらはすべて集落出土土器である。 北部九州の弥生中期後半の土器型式である領玖Ⅱ式の指標として袋状口縁壺や長脚高坏の出現があり、広口壺の型式変化も比較的明瞭にわかることから、袋状口縁壺、高坏、広口壺の器種分類とその型式変化を考えてみる。Fig.43に器種分類図を掲載する。この分類図中の土器は抽出した遺構出土中の土器である。

袋状口縁壺は口縁直下に三角突帯を回すA類、肩部や胴部に三角突帯をめぐらす後期に特徴的なB類、突帯のないC類、D類がある。C類は大きさにより器高20cm前後のC-1,C-2類と器高15cm前後のC-3類がある。袋状口縁壺の型式変化は頸部が細→太であるからA-1類→A-2類、C-1類→C-2類である。

高坏は鋤先口縁をもつA類と素口縁のB類、坏部外面中位に三角突帯をめぐらすC類がある。 A類の型式変化は口縁部形態の変化は甕と同様で坏部の深さが深い→浅いで、脚部も短い→長 いへと変化する。A-5類は鋤先口縁が外傾するもので、水平な鋤先口縁より後出である。

広口壺は素口縁のA類、鋤先口縁のB類、口頸部が短く肩部、胴部に三角突帯を回すC類がある。A類、B類の型式変化は口頸が短い→長いであり、G-1,2類は胴部突帯の有無により分類した。C類は砲弾形あるいは球形の胴部に短く外反する口縁部がつくもので、三角突帯をめぐらす。

Tab.5は抽出した遺構出土土器群の各器種組み合わせ表である。甕は上述した口縁部、底部分類を用い各器種構成をみてみた。その結果4時期の器種の組み合わせが看取できた。

まず、売口縁部Ⅱ-3類、広口壺A-1、B-1類、高坏A-1類の器種構成である。これらすべてを出土した遺構はないが瓦町遺跡SK13、SK81、天建寺南島遺跡SE101、SK103、SK118、SK121、SK139で出土している。

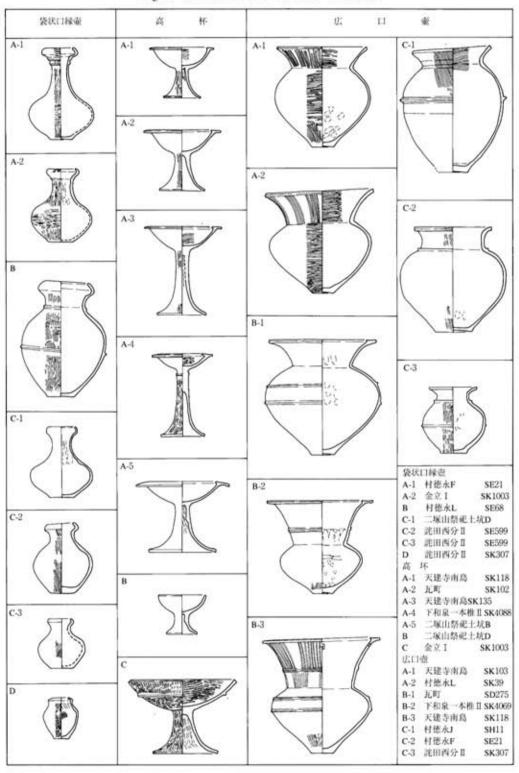
次ぎに悪口縁部Ⅱ4類、広口壺A-2、B-2、B-3類、高坏A-3、A-4類の器種構成である。これらのうち3器種以上を出土した遺構として瓦町遺跡SK212、SK220、SK231、SD275、村徳永遺跡L地区SK39、貴別当神社遺跡ⅡSK113、天建寺南島遺跡SK135がある。とくに瓦町遺跡ではこの器種の組み合わせが多い。

さらに、甕口縁部Ⅲ類、広口壺C類、高坏A-5、C類、袋状口縁壺A、C類の器種構成である。これらのうち3器種以上を出土した遺構として村徳永遺跡F地区SE21、SE23、SR47、村徳永遺跡K地区SK419、SH431、村徳永遺跡J地区SH11、村徳永遺跡L地区SK05、SB103、SB109、南宿遺跡4区SE402、詫田西分遺跡Ⅱ区SK307、SK599がある。この器種構成は村徳永遺跡各地区において顕著にみられる。

最後に甕口縁部Ⅲ類と広口壺C類、袋状口縁壺B類を出土した遺構として村徳永遺跡L地区 SE60、SE68、増田遺跡1区SK03がある。

以上の器種の組み合わせは各器種の型式変化とも相関しており、遺構出土の土器群をみても 安定した器種構成がみられる。このことはこれらそれぞれの器種構成をもつ土器群は各時期と

Fig.43 弥生土器(中期~後期初)器種分類



# してとらえられ、ここに4つの時期を想定できる。

Tab.6 遺構別器種分類表

遺跡名	遺構名	类		dream	2011年至	高坏	その他の基種	3896-Ar	海狮女	类		derestate.	MARTHE S	ww	これ終れなる
		口縁部	底 部	0.1.19	891182	mg +1	CORONETT.	遺跡名	遺構名	口絲部	底部	17.1.18E	製料は報告	高坏	その他の影響
正明1区	SK01	14.13,14	D-1	A-I			開形器台,器台	村徳水F	SR47	<b>Ⅲ</b> −3		C-1	A-l		
	SK02	11-3, 11-4		B-2				村徳水K	SK419	<b>Ⅲ</b> −1			A-1.C		
	SK08	11-3, 11-4	C-2,D-2,D-3	B-2		A-2	器台		SH431	□-1, □-3	D-2, D-3		A-2		
	SKII	II-3, II-4	D-1, D-3	B-2				村徳水J	SE104	<b>□</b> -1, <b>□</b> -3				A-5	
	SK13	II-3	D-1			A-1			SE105	II −1			C-2		
	SK14	Ⅱ-3, Ⅱ-4	D-1				有有基金。基金基		SE108	III -1	D-2		D		
	SK17	11-4		B-3		A-l	無類查、蓋		SK33	II -4	D-2,D-3				
	SK18	11-3, 11-4					台付鉢、百台		SH11	E-1.E-3		C-1	A-I	A-5	
	SK19	Ⅱ-3, Ⅱ-4		B-2					SH109						
	SK29	11-3	D-1, D-2	B-2				村徳水L	SE08	<b>□</b> -1, <b>□</b> -3					
	SK32	II-3, II-4				A-3			SE60	<b>Ⅲ</b> −3		C-3	В		器台
	SK34	11-4	D-2	B-3					SE68	11 −3			В		
	SK52								SK05	<b>I</b> II −3		C-3	C-2	A2.A5.C	
	SK56	11-3, 11-4		A-1,A-2			菱、器台		SK06	II -4	D-2.D-3			A-3	
	SK61	11-4				A-3		9	SK39	II -4		A-2,B-2		A-3	器台
	SK64	11-3	D-1	A-1			器台		SB101	<b>Ⅲ</b> −1			A-2	A-3	
	SK68	Ⅱ-3, Ⅱ-4					広口壺		SB103	<b>□</b> -1, <b>□</b> -3			C		
	SK70	11-4					<b>点口表,基</b> 位	1 1	SB109	Ⅲ -3			C	A-5	
	SK80	II-3, II-4	D-2	B-2		В		T独林仪	SK405	11-4	D-3			A-1,C	器台
	SK81	11-3				A-1.A-2	器台		SK469	1-3,1-4		B-2			
	SK95	11-4	C-3			В		( )	SK488	1-3,1-4	D-2,D-3		-	A-4	器台
	SK102	Ⅱ-3, Ⅱ-4	D-1	A-1		A2.A5	器台	南宿4区	SE402	0-1.0-3			A-2		
	SK142	Ⅱ-3, Ⅱ-4	D-2, D-3			A-2	器台		SE421	E-1.E-3					
	SK161	11-3	D-3			A-4	器台		SE423	III -3			C		
	SK166	II -3	D-2				简彩器台		SK403	II −4. II −3			A-1		
	SK167	11-3, 11-4	D-2, D-3	B-3				金立1区	SK103				A-2	A-5,C	
瓦町日区	SK210	11-3	D-1			A-2	筒形器台	増田1区	SK03				В	A-5	
	SK211	Ⅱ-3. Ⅱ-4				A-2	器台	<b>美田教介耳区</b>	SK307	<b>Ⅲ</b> −3		C-3	C2,C3		
	SK212	Ⅱ-4	D-2	B-2		A-3	器台		SK334	Ⅲ -3			C		AUG. Si
	SK213	11-3, 11-4	D-2				CD卷,都台		SE599	Ⅲ -3			ALC2CI		
	SK214	II -4	D-2					黄铜鸟神社亚	SK113	1-3,1-4		B-2		A-4	黄毛基位,基位
	SK219	II-3, II-4	D-2	B-2			器台	天建寺南島	SE101	II -3		B-1			器台
	SK220	Ⅱ-3, Ⅱ-4	D-2	A-2		A-3			SK101	1-3,1-4	D-2				剪形等的,影合
瓦町目区	SK211	II-4	D-2				器台、菱		SK102	1-1,1-4					
	SK224	II-4	D-2	A-2			器台		SK103	II -1	C-2	A-1			器台
	SK227	Ⅱ-3, Ⅱ-4		A-l		A-5			SK115	111 −3	D-3			A-3	器台
	SK231	Ⅱ-3. Ⅱ-4	D-2	B-1,B-2		A-3	首形器台	0	SKI18	II -3		B-3		A-1	器台
	SK238	II-4	D-2				立口表,各位		SK119	Ⅱ -3					器台
	SK239	II -4		B-2			器台		SK121	П −3	C-3,D-3	B-1			器台
	SD275	II -4		ALAZBI		RANG	簡形器台		SK123	II -4	D-2		3	A-3	所提高的,最份
村徳永F	SE21	Ш-1, Ш-3		C-2	A-I,C-I	A-5			SK127	3-4.E-1	D-2				
	SE23	Ш-3			B, D		支脚		SK135	1 -3, 1 -4	D-2	A-2		A-3	器台
	SK94	Ⅲ-1,Ⅲ-2				A-5			SK137	11-1, 11-2	C-2				
	SK356	II -4	D-2				器台		SK139	1 - 1, 1 - 2		B-1			器台

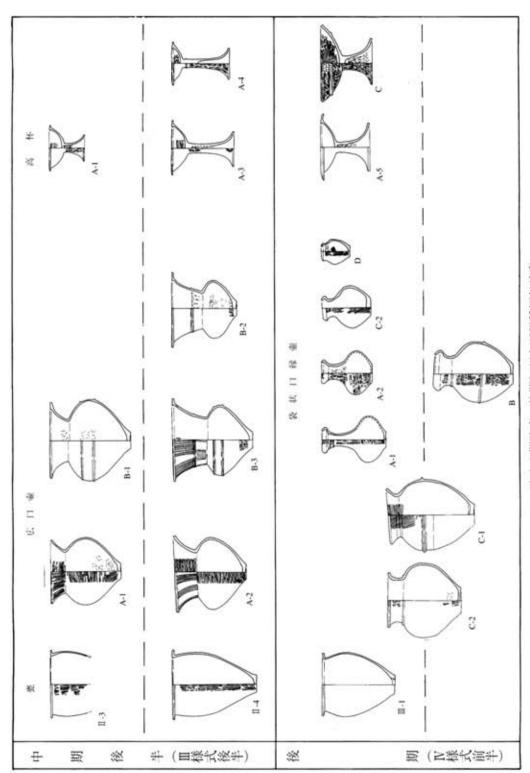
## ②時期の設定

前述にて想定した4時期は弥生土器編年上のどの時期に相当するのかを周辺地域の土器群を参照しながら考えてみたい。まず、北部九州の弥生中期後半を示す土器型式である須玖 II 式の土器群の器種構成について小田、片岡、田崎、武末氏らすべて甕の丁字形の口縁と折り曲げた口縁の出現、長脚の高坏と袋状口縁壺の出現をあげている。また、橋口は中期後半とした K II b 式、 K II c 式には袋状口縁壺が出現するとし、その変化について K II b 式では頸部が長く細いものであるが、 K II c 式では短く大きくなり、頸部中位・肩部に凸帯が付されないとしている。さらに K II c 式の土器群として板付 J・K-25トレンチ・旧河川層出土土器、板付 F-6 b 井戸出土土器をあげている。このうち F-6 b 井戸出土の袋状口縁壺は A-2 類であり、上記した各氏の編年観では中期後半の須玖 II 式には袋状口縁壺が出現するという統一見解がみられる。ただし、これらはすべて福岡県内の中期後半の土器群を対象にした編年観であることに注意しなければならない。もし、これらの編年観に従うならば佐賀平野の村徳永遺跡でみられる袋状口縁壺を器種構成にいれる土器群は中期後半となる。村徳永遺跡下地区 S E 2 1、S E 2 3、S R 4 7 ほかなどの遺構出土の土器群がそれにあたり、器種分類でいえば甕口縁部II 類、広口壺 C 類、高坏 A-5 類、C 類、袋状口縁壺 A 類、C 類の器種構成になる。

ところで想定した4時期のうち器種構成でもっとも画期がみられるのは袋状口縁壺や広口壺 C類が出現する3段階目の時期である。この時期の甕口縁部は折り曲げた口縁であるⅢ類が主 体であり、中期を特徴づける逆L字形口縁やT字形口縁とは大きく異なる。佐賀平野において いえば鋤形口縁をもつ広口壺B類の消失や袋状口縁壺A、C類、広口壺C類の出現は土器群の 様相としても画期としてとらえられる。須玖Ⅱ式の指標である高坏A-3類、A-4類(長脚高 坏)、袋状口縁壺A類、C類の組み合わせは佐賀平野においてはみられず、福岡平野の土器群と の様相の違いを看取できる。長脚高坏やT字形口縁は中期土器の特徴であることからも、佐賀 平野の袋状口縁壺A、C類、広口壺C類をもつ土器群の時期を後期と考えたい。

時期を設定するならば中期後半の前業は甕口縁部Ⅱ-3類、広口壺A-1類、B-1類、高坏A-1類を主要な器種とする土器群で中期後半の後葉は甕口縁部Ⅱ-4類、広口壺A-2類、B-2類、B-3類、高坏A-3類、A-4類の土器群であり、この時期で鋤先形口縁の広口壺は消失する。すなはち中期後半においては高坏の長脚化や広口壺口頸部の変化で時期を二分できる。後期初頭には甕口縁部Ⅲ類が主体となり、袋状口縁壺A類、C類や肩部・胴部に凸帯をもつ広口壺C類が新たに出現する。高坏は鋤形口縁をそのままひきづるものの、口縁部が外傾するという型式変化がみられ、高坏C類も出現する。

袋状口縁壺B類はA、C、D類と比べ明らかに大型であり、肩部や胴部に凸帯をもつなど特徴 的な型式ではあり、次段階の土器群の指標ともなりそうであるが器種構成や出土遺構において 確実な資料を見いだしていない限り時期としてはとらえられないであろうが後期初頭の次段階



g.44 弥生中期後半~後期初頭主要器種編年試案

の土器群であることを提示したい。

以上、佐賀平野における中期後半~後期初頭の土器群について、福岡平野のそれとの違いを 見出し器種構成からみた土器群の時期設定をしてみた。

#### (6)おわりに

坊所三本松遺跡出土土器群の時期について最後にふれたい。遺構出土土器の大半は破片であり、このことから甕の口縁部、底部分類をおこなった。Tab.5にはその遺構別一覧表を示す。甕口縁部ではⅡ-2類とⅢ-1類が最も多い。また、Ⅲ-1類を出土しているSH05、SH07、SK17、SK21で袋状口縁壺が出土している。佐賀平野における袋状口縁壺の出現は後期の指標になることは前述したとおりである。SH17の67、68は袋状口縁壺C類であり、SH05の9、11は肩部の凸帯からB類である。坊所三本松遺跡においても甕口縁部Ⅲ-1類と袋状口縁壺の組み合わせが確認できた。また、中期後半の指標ともなるⅡ-4類が1点であり、同時期の高坏、広口壺なども出土していない。

これらのことから佐賀平野における II-1 類、II-2 類の製の位置づけを未だ検証していないため積極的には論じられないものの中期前半と考えるならば、坊所三本松遺跡の土器群は中期前半と後期初頭~前半にそれぞれピークがみられる。このことは集落の変遷をある程度示していると考えて良いだろう。

## 参考文献

- 森 貞次郎 1966「1、九州」『日本の考古学3』
- 小田富士雄 1973「入門講座 弥生土器 九州」『考古学ジャーナル79』
- 橋口 達也 1979「悪棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告31』福岡県教育委員会
- 片岡 宏二 1982「弥生時代中期の土器編年について」『大板井遺跡Ⅱ』小郡市教育委員会
- 田崎 博之 1985「須玖式土器の再検討」「史淵122]
- 武末 純一 1987 「九州地方の弥生土器 1、須玖式土器」 『弥生文化の研究 4 』 雄山閣
- 蒲原 宏行 1994 『古墳時代初頭前後の佐賀平野』『日本と世界の考古学-現代考古学の展開』岩崎卓也先 生退官記念論文集 雄山閣
- 徳富 則久 1994「平坦低地における弥生~古墳時代集落の立地と動向(佐賀平野の集落1)」佐賀考古1
- 徳富 則久 1995「脊振山系南麓洪積台地及びその周辺における弥生~古墳時代前期集落の立地と動向(1) (佐賀平野の集落Ⅱ)」佐賀考古2
- 徳富 則久 1995「目達原段丘群及びその周辺における弥生~古墳時代前期集落の立地と動向(佐賀平野の 集落田)」佐賀考古3
- 徳富 則久 1997「志波屋段丘(吉野ヶ里丘陵)及びその周辺における弥生~古墳時代前期集落の立地と動向(N)|佐賀考古4

## 報告書

- 天本 洋一 1989 「天建寺南島遺跡」 三根町教育委員会 町文報第6集
- 木鳥 慎治 1990「村徳永遺跡E・F・G・H地区」佐賀市教育委員会 市文報第32集
- 前田 達男 1990「南宿、本村、阿高、车田寄、村德永、古村遺跡」佐賀市教育委員会 市文報第28集
- 前田 達男 1991「村徳永遺跡」地区」佐賀市教育委員会 市文報第34集
- 堤 安信 1991「貴別当神社遺跡Ⅱ」千代田町教育委員会 町文報第14集
- 前田 達男 1992「瓦町遺跡」佐賀市教育委員会 市文報第41集
- 西田 巌 1992「村徳水遺跡し地区」佐賀市教育委員会 市文報第42集
- 前田 達男 1992「村徳永遺跡K地区、篠木野遺跡1区」佐賀市教育委員会 市文報第37号
- 徳富 則久 1996「詫田西分遺跡」千代田町教育委員会 町文報第20集
- 古賀 章彦 1997「下和泉一本椎遺跡Ⅱ」佐賀市教育委員会 市文報第81集
- 山口 一郎 1997「金立遺跡1」佐賀市教育委員会 市文報第79集

## 2. 遺跡の立地と弥生時代集落の変遷

本遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代後期~飛鳥時代、奈良時代の集落跡である。とくに、 弥生時代と奈良時代に集落は発達しており、弥生時代集落の変遷についてふれる。検出遺構は 堅穴住居跡12軒、土坑約20基、円形周溝1基、甕棺墓1基である。その時期は前頁で述べたように出土土器の検討と遺構の切り合いなどから考えた。集落は須玖式1期から形成が始まり、 IV期において衰退し、再び後期初頭において活発化するという特徴をもつ。この集落変遷は徳 富(1994)が述べる佐賀平野平坦集落の動向と同じであり興味深い。

本集落はその継続性や規模から考えても中期を中心とする子村的性格をもつものであろう。 遺跡の立地する目達原段丘は佐賀平野東部地域では最も広い段丘であり、その北方には前漢鏡 を出土した二塚山遺跡があり、拠点集落として東脊振村松原遺跡がある。段丘面の中心部は飛 行場として削平されており、詳細は不明である。古墳時代には目達原古墳群が形成され、辛上

廃寺もつくられるなど、安定した遺跡分布を示す。 本遺跡周辺の遺跡群としては筑後川、寒水川、切 通川下流域の低地部に本分、本分三本柳、西島二 本杉、天健寺南島遺跡など中期に発達した集落が ある。本集落と低地部や段丘上の集落の関係、ま た本集落の依存した拠点集落やその変遷の要因な どについては今後の研究の進展の中で機会をつく り考えてみたい。

土器型式	期	検 出 遺 構
城ノ越		
M	I	SH03, 04, SK26, 50, SJ41
玖	Π	SH13, 46, SX18
	Ш	SH01,06,08
大	IV	
		SH05, 07, SK17, 21, 22



# 下中杖遺跡

所在地:佐賀県神埼郡三田川町大字立野・豆田

# 下中杖遺跡

## I 遺跡の概要

下中枝遺跡は、佐賀県神埼郡三田川町大字立野・豆田に所在する遺跡である。遺跡は、脊振山系から伸びる目達原丘陵の南西部、西に井柳川が存在する標高7~9mの水田部に立地している。遺跡の規模は、東西約600m・南北約600mで主に弥生時代~平安時代にかけて営まれた遺跡である。下中枝遺跡は導水路による調査以外に、昭和52・53年に農業基盤整備事業(A区~日区)、昭和60年には佐賀エレクトロニクス㈱工場建設(I区・J区)に伴う調査及び平成9年度はJA建設(K区)・宅地造成(L区~N区)に伴う調査が行なわれている。その結果、弥生時代の甕棺墓を含む墓域や、弥生時代~鎌倉時代にかけての集落跡が発見されている。昭和52・53年の農業基盤整備事業に係る調査では奈良・平安時代を中心とした建物群や井戸跡等や、遺物としては須恵器・土師器と共に多くの輸入陶磁器が発見されている。特殊なものとしては、井戸中より黒漆塗りの鞍の一部(前輪)や、青銅製箸が出土している。このほか井戸中からは、土器類と共に輸入陶磁器や木製品が出土している。また、昭和60年の調査においても平安時代を中心とした建物跡や井戸跡等が検出されており、須恵器・土師器・木製品等が出土している。平成9年度の調査においても弥生時代~中世の集落が確認されている。

今回の報告は、平成4・7年度に調査を行なった9地点(O区~W区)約1,400㎡についてである。検出した遺構は、弥生時代~平安時代にかけてのもので、主な遺構は、井戸・土坑・溝・円形周溝・掘立柱建物跡である。これらの遺構の中には出土遺物からみて、前回までの調査で確認された遺構との関連を考えられるものもある。

## Ⅱ 遺構・遺物

今回の調査は導水路本線工事及び工事伴う仮設道路・仮設排水路設置のための切り下げ工事のための調査である。今回の調査では調査地点が遺跡内の各所に点在するため、各調査区毎に地区番号を振り充てた。調査地点は9カ所で、地区番号はO区~W区とする。() 内は旧地区番号である。調査面積は、平成4年度・平成7年度調査を合わせ1.393㎡である。

## 1. 0区 (1-1区)

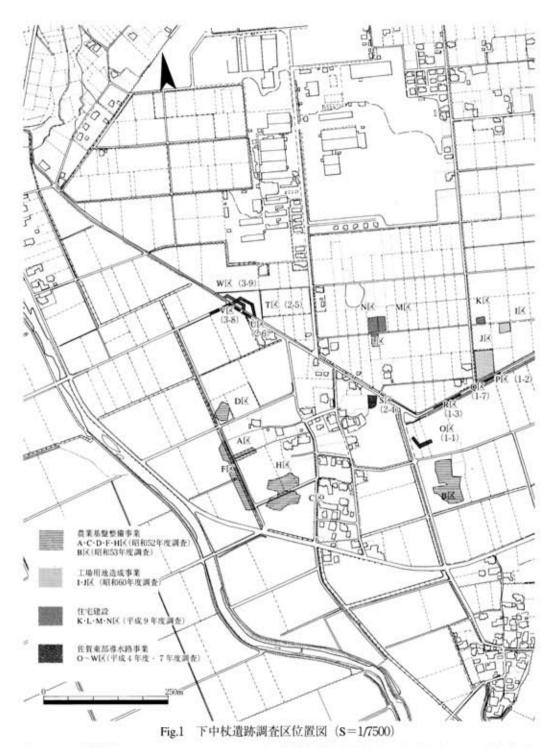
この調査区は、排水路切換に伴う掘削のため調査を行った箇所である。調査区内では土坑・ 井戸・竪穴住居跡・溝状遺構・不明遺構・小穴が検出されている。調査面積は60㎡である。

## (1) 遺構

①土坑 (Fig.2)

SK001土坑 平面形態は円形で、長径0.78m・短径0.7m・深さ0.16mである。遺物は出土していない。

SK003土坑 面形態は円形で、径0.95m・深さ0.26mである。弥生土器片・須恵器片が出土



している。遺物は、SK002・SK003とも黒褐色埋土中からの出土である。いずれも残存状況は悪い。

SK005土坑 面形態は楕円形と考えられるが、調査区境のため南半分は未掘である。径 1.61m・深さ0.88mの土坑であり、5層では焼土が一部出土している。3・4・5層からは土器 片が出土している。3層に最も多く、下層に行くに従い減少する。出土遺物としては、土師器 の坏・壺・衝等が出土している。

#### ②満状遺構 (Fig.4)

SD006溝状遺構 調査区内を南北方向にのびている。幅0.28m・深さ0.07mの断面台字形である。溝埋土中より弥生土器片及び須恵器片が出土している。残存状況は悪い。

## ③井戸 (Fig.4)

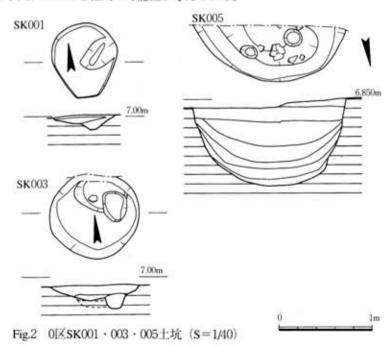
**SE007井戸** 平面形態は円形で一段掘りの井戸である。素掘りで井戸枠はない。全体の約1/3が調査区外のため未掘である。径1.67m・深さ0.46mである。また、西側上面の約1/4を後世の掘削により削られている。遺物は、弥生土器片が出土しているが、ほとんどが小破片である。

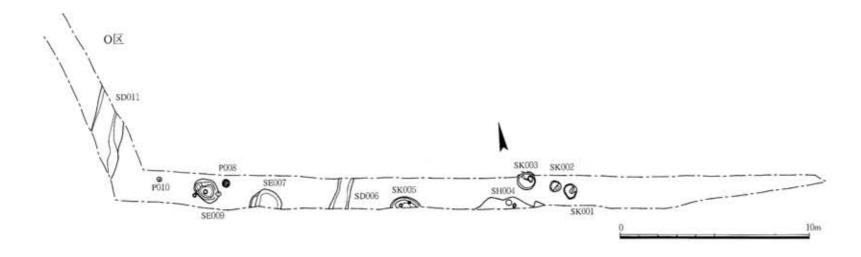
SE009井戸 素掘りの二段掘り井戸である。平面形態は楕円形で、長径1.40m・短径1.20 m・深さ1.49mである。遺物は、上層からは甑の把手・ふいごの羽口等が出土しており、下層から土師器の坏・甕の底部・壺・木製品(杵?)等が出土している。坏と甕はセットになっており、甕の中に坏が入るという「入籠」状態で出土している。

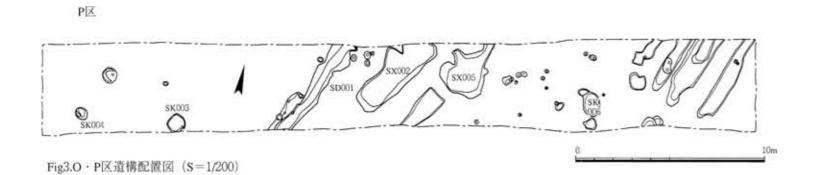
## ④小穴 (Fig.3)

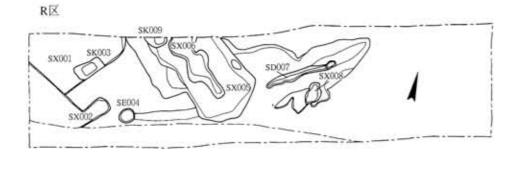
P008小穴 径0.405m・深さ0.53mである。掘立柱建物跡の一部と考えられるが、調査区内に おいて他に検出していないため断言はできない。遺物は出土していない。

P010小穴 P010小穴についても柱穴の可能性が考えられる。









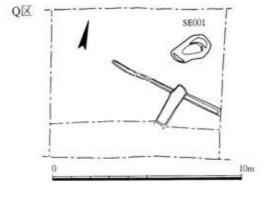


Fig.3 O·P·Q·R区遺構配置図(S=1/200)

#### (2) 遺物

## ①土坑出土遺物

#### SK005出土遺物 (Fig.5)

坏 (1·2·3) 1 は口縁部から体部にかけての一部が残存している。体部はほぼ真直ぐに立上り、口縁部は薄く、端部は丸く収まる。2 は体部から口縁部の一部が残存している。体部は内傾気味に上方へ延び、口縁部は肥厚しながら外反する。3 は体部から口縁部にかけて約1/5が残存する。体部は上方に向かって立上り、口縁部はほぼ垂直に上方へ延びる。端部は丸く収まる。

- 壺(4·5) 4は胴部から口縁部にかけての約1/5が残存する。胴部は半球形で、胴部と口縁部の境で内傾し、口縁部は外反する。端部は丸く収まる。5は胴部上半部から口縁部にかけて 1/5が残存する。胴部は砲弾型で、口縁部は外傾しながら上方へ延び、端部は肥厚しながら外反する。
- 飯(6) 約2/3が残存する。底部から胴部にかけて外傾しながら上方へ延びる。口縁部は真っ直ぐに立上り、端部は肥厚しながら外反し丸く収まる。底部の穿孔は焼成後に行なわれている。

## ②井戸出土遺物

#### SE009出土遺物 (Fig.5)

- 壺 (7) 球形の胴部を持つ壺で口縁部及び底部を欠損している。内面には炭化物が付着、外面には煤の付着が見られる。
- 要(8) 口縁部から肩部にかけて欠損するが、これは出土状況から見て人為的な打ち欠きと 考えられる。底部はほぼ平らで、胴部は外反気味に上方へ延び、肩部と胴部の境で内傾する。
- 坏 (9) 口縁部約3/4を欠損する。底部から体部にかけて内傾気味に立上り、口縁部は内傾 気味に立上り、端部は丸く収まる。
- 支脚(10) 下方上方に向かって広がる円筒形で、体部から底部にかけての1/2が残存している。内面及び残存部分の外面の状態から、受熱方向は欠損部分の方向と推測される。

#### 2. P区 (1-2区)

この調査区は導水路本線工事に伴い調査を行った箇所である。ここでは溝状遺構・小穴(ビット)を検出した。調査面積は240㎡である。

## (1) 遺構

## ①溝状遺構 (Fig.6)

SD001溝状遺構 調査区の中央よりやや西に位置しており、北〜南方向に伸びている。検 出したのは残存長さ5.9m・幅0.86m・深さ0.15mの断面台形である。遺物としては土師器等が出 土しているが、小破片であるため器種・時期は不明である。

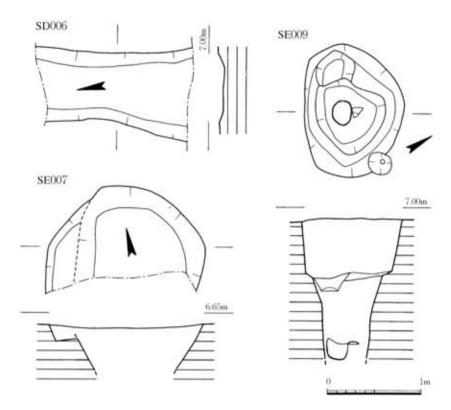


Fig.4 O区SD006溝状遺構, SE007 · 009井戸 (S=1/40)

## (2) 遺物

ここでは小破片のみの出土のため遺物は掲載していない。

## 3. Q区(1-7区)

この調査区もP区に同じく導水路本線工事に伴い調査を行った箇所である。ここでは井戸・ 溝状遺構を検出している。調査面積は60mである。

## (1) 遺構

## ①井戸 (Fig.7)

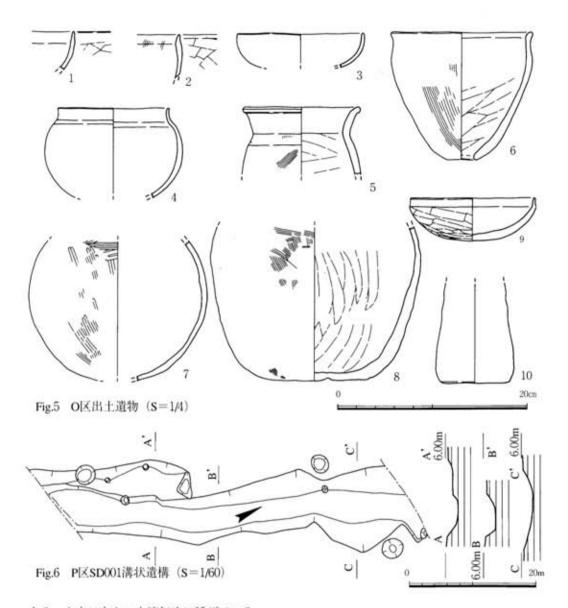
SE001井戸 二段掘りの素掘り井戸である。平面形態は楕円形で、長軸1.96cm・短軸 1.26cm・深さ1.24cmである。遺物は埋土中から弥生土器及び須恵器が出土している。

## (2) 遺物

## ①井戸出土遺物

## SE001出土遺物 (Fig.8)

深鉢(11·12) 突帯文期の深鉢で11は口縁部、12は胴部である刻み目の突帯が付く。11の 口縁部は外傾気味に延び、端部は折れており直接刻み目が付く。12は二重刻み目突帯の胴部で



ある。上方に向かい内湾気味に延びている。

要(13~17·19) 13は上字口縁の口縁部である。14·15は逆上字口縁の要で、ともに内面をつまみ出している。口縁部から胴部上半部にかけての一部が残存している。16は「く」の字口縁の要で、口縁部と胴部の境に断面台形の突帯を持つ。17は胴下半部から底部にかけての約2/3が残存する。底部は平らで、胴部は上方に向かい開きながら延びる。19は口縁部から肩部にかけて一部が残存している。頸部から口縁部のかけて外傾しながら上方へ延び、端部は断面台形である。

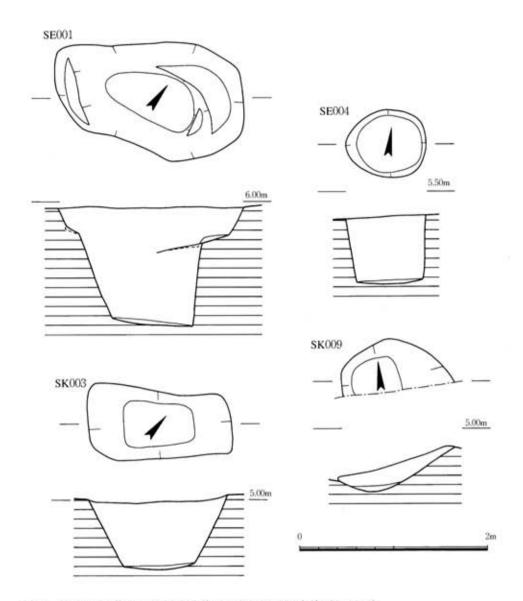


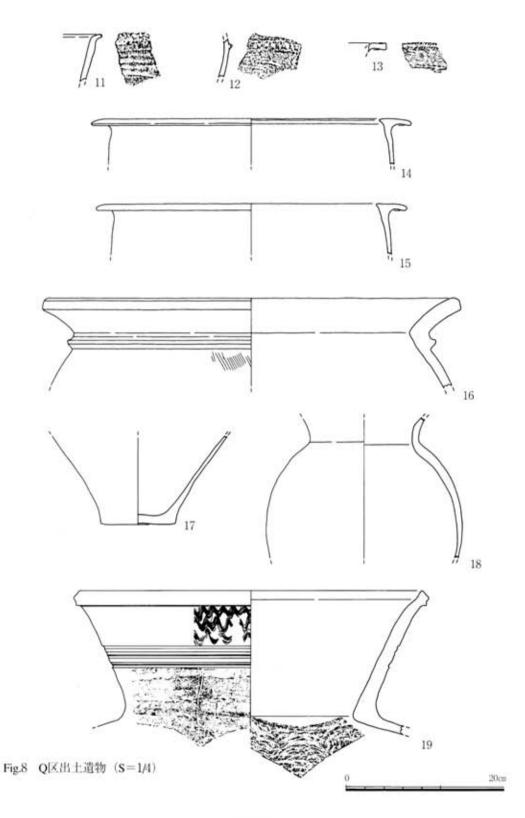
Fig.7 Q区SE001井戸, R区SE004井戸·SK003·009土坑 (S=1/40)

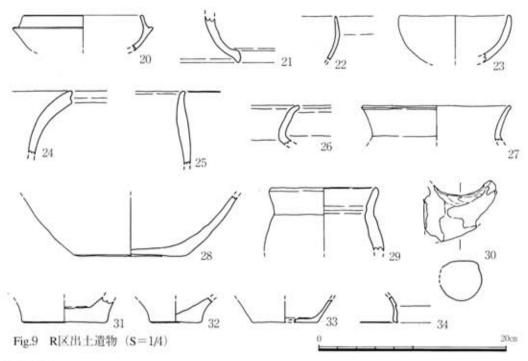
壺 (18) 頸部から胴部上半部にかけて約14が残存する。胴部は球形で、頸部は外反する。

11~18は弥生土器であり、前期~中期末までに含まれる。19は須恵器である。いずれも埋土 中からの出土であるため正確な時期は明示できないが、遺物の中で最も新しい時期をとると須 恵器の甕から6世紀末~7世紀初頭と考えられる。

## 4. R区 (1-3区)

ここもP区・Q区に同じく導水路本線工事に伴い調査を行った箇所である。ここでは井戸・ 土坑・溝条遺構・竪穴住居跡・不明遺構である。調査面積は220mである。





## (1) 遺構

### ①井戸 (Fig.7)

SE004 調査区の南西に位置している素掘りの井戸である。平面形態は円形で、径0.86 m・深さ0.72mである。遺物は石製品1点のみの出土であるため時期は不明である。

## ②土坑 (Fig.7)

SK003・SK008土坑 SE004の北側に位置し、SH001と切り合っている。平面形態は長方形で、長軸1.52m・短軸081m・深さ0.72mである。遺物は埋土中より弥生土器が出土している。遺物はほとんどが小破片のため時期の限定は難しいが、SH001との切合い関係から見るとSK003が新しいことがわかる。SK008はSD007の南に位置し、平面形態は不定形である。長軸1.12m・短軸0.76m・深さ0.23mである。遺物は埋土中より弥生土器・須恵器・土師器等の小破片が出土している。

SK009土坑 平面形態は円形と考えられるが、調査区境のため北半分は未掘である。現況では径1.16m・深さ0.25mである。SX005と切り合うが遺物が出土していないため、切り合い及び時期は不明である。

## (2) 遺物

## ①竪穴住居跡出土遺物

#### SH001出土遺物 (Fig.9·26)

坏(22.23) 土師器である。22は口縁部から体部にかけての一部が残存する。底部から体

部に向かい内湾気味に広がり口縁部は内傾する。23は底部を欠損し、口縁部から体部にかけて 1/8が残存する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はほぼ垂直に立ち上がり丸く収まる。焼 成はいずれも良好であるが、表面剥離のため内外面とも器面調整は不明である。また、22の器 僚の厚さは23の約1/2と薄い。

壺(24・25・26・27) 24・25・26は弥生土器である。24は広口口緑壺で口緑部から頸部にかけての一部が残存している。頸部は真っ直ぐに立上り、口縁部は大きく外反する。25は直口壺で口縁部及び胴部の一部が残存する。胴部は内傾気味に立上り口緑端部が外反する。26は短頸壺で、口縁部から頸部にかけての一部が残存する。頸部は外反しながら上方へ伸び、口縁部は外湾する。27は土師器の短頸壺で、口縁部から頸部にかけての1/5が残存している。頸部は外反気味に立ち上がる。

煎(30) 把手部分である。胴部から剥離しており、一部を欠損するが接合部分が明瞭である。指ナデによる調整が見られる。

翌 (31・32) 弥生土器の甕の底部である。31は3/4が残存している。底部は平らで、胴部は 上方に向い外傾しながら延びる。32は1/2が残存している。底部は平らで、胴部との境でやや締 り上方に向い外傾しながら延びる。

石製品 (111) 流紋岩系の石材を使ったものである。用途は不明であるが、表と思われる片面に円形の打ち欠いた様な窪みが見られる。最大長6.65cm・最大幅4.8cm・最大厚1.7cm・重量80gである。

#### ②井戸出土遺物

#### SE004出土遺物 (Fig.26)

石製品 (113) 安山岩系の石材を使用した蔵石で一部を欠損する。残存長15.7cm・残存幅 8.7cm・最大厚6.5cm・重量1,150gである。

#### ③土坑出土潰物

#### SK008出土遺物 (Fig.9)

・・・ 変 (28) 底部から体部にかけて1/3が残存する。底部は浅いレンズ状を呈し、胴部は丸みを帯びて広がりながら上方へ延びる。

壺 (29) 球形の体部を持つ短顎壺であると考えられるが体部下半部から底部にかけてを欠 損する。口縁部から体部上半部にかけての約1/4が残存する。

28・29とも土師器である。

## 4 不明遺構出土遺物

#### SX006出土遺物 (Fig.9)

-92-

坏 (20) 坏身で、口縁部から体部にかけて1/8が残存する。体部は内湾気味に立上り、立上 り部は内傾し端部は丸く収まる。受け部には沈線が廻る。

高坏(21) 裾部の一部が残存する。下方に向かって広がり、端部は屈曲し尖り気味である。 20·21とも須恵器である。

#### 5 満状遺構出土遺物

## SD007出土遺物 (Fig.9)

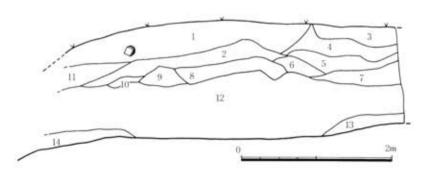
坏(33·34)33は土師器の坏身で、底部から体部にかけての約3/1が残存する。底部は糸切り 後ナデ調整を行っており、体部は外側に開きながら上方へ伸びる。34は須恵器の坏蓋で、天井 部を欠損する。口縁部と天井部の境に明瞭な稜を持ち、口縁端部に段を持つ。

#### 5. S区 (2-4区)

この調査区は、仮設道路切換に伴いに調査を行った箇所である。ここでは土塁状遺構・溝状 遺構・土坑・不明遺構・ピット(小穴)等を検出した。調査面積は100mである。

## (1)遺構

①土塁状遺構 (Fig.11) ほぼ南北方向に伸びており、現況は竹藪として約50m程度が残存している。古墳の墳丘のような細かい版築ではないが、12層をベースとして層上の積み上げが見られる。積み上げられた土壌はそれぞれに土質及び土色に違いが見られる。周辺が水田や畑地として工作されており、橿塀を受けているため旧地表面の確認は難しいが、12層が土塁構築以前の旧地表面と考えられる。1層・3層は上面が植物の根による土壌化が進んでおり、全体あまり良く締まっていないが、2層・4層以下11層までは根の影響が比較的少ないため締まっている。遺物は1層~12層で出土し、弥生土器から石塔まで出土する。



1.明維色土 2.明黄褐色土 3.1'(やや黒褐色土が混る) 4.暗黄褐色土 5.暗褐色土に黒褐色土が混じる 6 成拠色士 7.明黄褐色土に黒褐色土が混る 8.黄褐色土+暗褐色土 9.灰褐色土 10.濃褐色土 11.暗褐色土にやや黄褐色土が混じる 12.暗褐色土 13.暗褐色土に暗黄褐色土が遂状に混じる 14.黄褐色土

Fig.11 S区土塁土層図 (S=1/50)

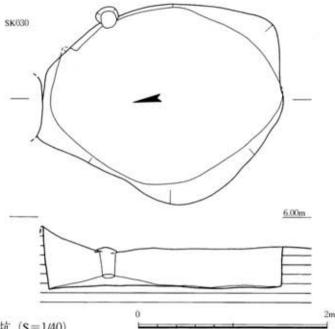


Fig.12 S区SK030土坑(S=1/40)

## ②溝状遺構 (Fig.10)

SD001溝状遺構 上面幅2.0m・下面幅0.95m・深さ1.22mの断面逆台形である。SD002 と平行するが調査区内でSD002とぶつかっており、それ以上土塁に沿って北に延びること はない。埋土中から土師器等が出土する。

SD002溝状遺構 上面幅3.9m・下面幅1.43m・深さ1.04mの断面逆台形である。埋土中より 弥生土器・須恵器・土師器等のほか石塔類が出土している。

#### ③土坑 (Fig.12)

SK030土坑 平面形態楕円形で、長軸2.56m・短軸2.12m・深さ0.62mである。ここからは 弥生土器・須恵器・土師器片のほか黒燿石片が出土する。

## (2) 遺物

## ①土塁状遺構出土遺物 (Fig.13 · 24)

・・ 査(46) 土師器の要の口縁部で、外傾しながら上方に向かって延びる。外面に煤の付着が 見られる。

石塔類 (88・92・93) 88は宝篋印塔の相輪部である。宝珠の一部等に部分的な欠損が見られ、 造り出しは浅いが臍の部分までしっかりと残っている。残存長32.95cm・最大幅11.3cmである。 相輪部以外の部分は出土していない。石材は凝灰岩である。92・93は五輪塔の一部である。

92は水輪、93は火輪にあたる部分が出土している。92は3/4が残存しており、最大径29.1cm・

最大高20.6cmである。93は約1/2が残存しており残存幅28.6cm・最大高14.7cmである。ともに砂 岩製であるため非常に脆く風化が激しい。

#### ②溝状潰構出土潰物

#### SD001出土遺物 (Fig.13)

碗(40) 土師器の碗で、口縁部から体部にかけて約1/6を欠損する手捏土器である。底部は 丸く、体部は外に開き気味に立上り、口縁部は外反する。

## SD002出土遺物 (Fig.13·24·25·26)

甕(43) 須恵器の甕で、口縁部の一部が残る。外側に開きながら延び端部は屈曲する。

碗(41・42) 龍泉窯系青磁碗である。41は口縁部の一部が残存している。口縁部は外側に向かい開きながら上方へ延び、端部は外反気味である。器壁は薄手で、内面に沈線文が見られる。表面に細かい貫入が見られるが、全体に風化が進んでおり、特に外面は磁器特有の光沢は見られない。42は底部のみで、残存高2.2cm・底径5.9cmである。底部は厚く、高台は逆台形である。釉は薄いが、細かい貫入が全体に入る。

火鉢(44·45) 土師質の火鉢である。44は口縁部の一部のみの残存であるため全体の大きさは不明である。口縁部には格子目文様が施されており、端部は内側に向かい屈曲する。45は 瓦質の火鉢で復元口径40.2cm・残存高4.5cmである。口縁部外面には雷文が施されており、端部 は内側に向かい屈曲する。

支脚 (98) 支脚の底部である。底面は方形で、底面から約3.5cmの部分に孔が見られる。残 存高は7.8cmである。

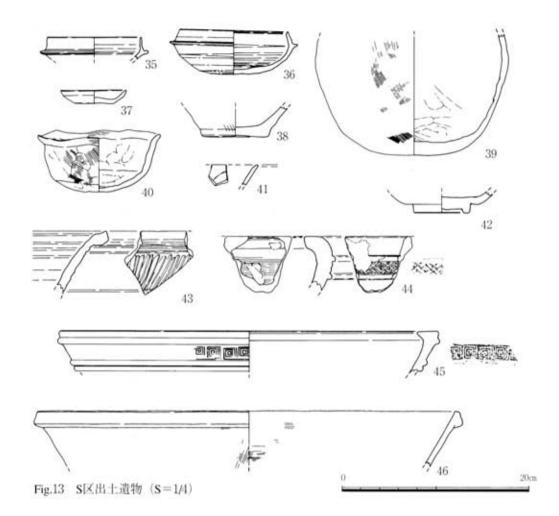
石製品 (96·97) 96は磨製石斧の一部である。流紋岩系の石材で、残存長5.7cm・最大幅 7.1cm・最大厚4.9cm・重量332gである。97は砥石である。残存長8.15cm・最大幅5.57cm・最大高 3.9cmである。表面には使用痕が認められる。

石塔類 (89・90・91・94・95) 89は彫像板碑である。一部のみで全体は不明であるが地蔵菩薩の彫刻が施されている。長方形の石材の頂部を三角形に造り出し、その下に二条の横線を引き、碑面に地蔵菩薩を彫り込んでいる。残存高29.15cm・最大幅20.9cm・最大厚14.75cmである。石材は凝灰岩である。90・91は一石五輪塔である。各部分に欠損は見られるが、空・風・火・水・土は揃っている。94は火輪・水輪のみ、95は土輪のみである。いずれも梵字等は見られない。91は最大高51.2cm・最大幅16.35cmである。91は最大高55.5cm・最大幅18.95cmである。95は残存高18.85cm・最大幅17.6cmである。95は残存高11.85cm・最大幅14.85cmである。いずれも石材は凝灰岩である。

#### ③小穴(ビット)出土遺物

#### P006出土遺物 (Fig.13)

小皿(37) 底部は回転糸切りで、口縁部は上方へ開き、端部は尖る。



# P 0 2 5 出土遺物 (Fig.13)

要(38) 弥生土器の底部で約1/2が残存している。底部は平らで、胴部は開きながら上方へ 延びる。

## ④検出面出土遺物 (Fig.13)

坏 (36) 須恵器の坏身で約2/3が残存する。底部は回転へラ削りで、立上り部は内傾し口唇 部に段を持つ。

## 6. T区 (2-5区)

この調査区は、排水路の切替えに伴い調査を行なった箇所である。ここでは土坑・溝状遺構・不明遺構および小穴(ピット)を検出した。調査面積は100mである。

## (1) 遺構

## ①溝条遺構 (Fig.15)

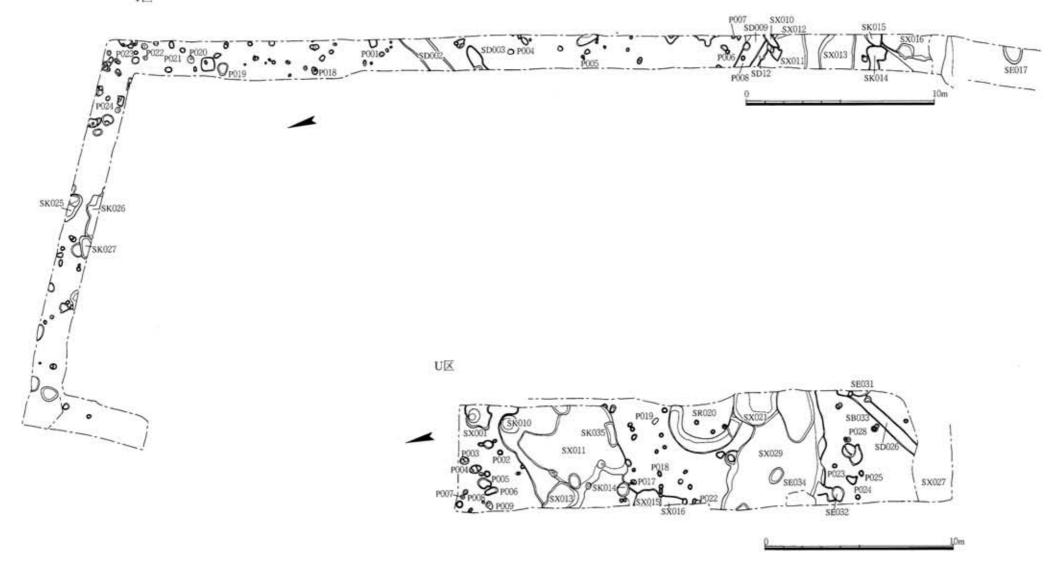


Fig.14 T·U区遺構配置図 (S=1/200)

- SD002溝状遺構 調査区のほぼ中央に位置している。東西方向に延びる溝と考えられるが、 調査区内にはその一部が見られるのみであり全体は不明である。また、残存状況も悪く幅 2.14m・深さ0.22mが残るのみである。埋土中からは弥生土器片が出土している。
- **SD003** SD002のすぐ南側に位置している。西側は調査区外のため未掘であるが、SD002と同じく東西方向に延びる溝と考えられる。残存状況は悪く、幅1.41m・深さ0.1mが残るのみである。埋土中から弥生土器片が出土している。
- **SD009・012満状遺構** 切合っており、東西方向に延びると考えられる溝である。SD009は幅0.85m・深さ0.1mである。埋土中より弥生土器・黒燿石片が出土している。SD012の幅は不明であるが、深さ0.1mである。埋土中より弥生土器片が出土している。方向を見るとSD009・012(北東~南東)はSD002・003(南西~北西)にほぼ直交すると考えられる。

#### (2) 遺物

#### 1 不明遺構出土遺物

#### S X 0 1 3 出土遺物 (Fig.16)

- 坏蓋 (50) ほぼ完形の須恵器である。天井部に宝珠つまみを持ち、体部は広がりながら下 方へ延び、口縁部端部は丸く収まりかえりは短い。
- 翌 (47) 口縁部から胴部にかけて1/5が残存する土師器である。胴部は内傾しながら立上り、 口縁部は肥厚する。

#### SX016出土遺物 (Fig.16)

- 坏 (48) 口縁部から底部にかけての1/2が残存する。底部はほぼ平坦で、体部は広がりなが ら上方へ延び、口縁部との境で内傾する。口縁部は外傾し、端部は尖り気味である。
- 高坏(49) 坏底部から脚裾部にかけて約1/5が残存する。脚部は広がりながら下方は延び、 脚裾部は外反する。
- 翌(51・54) 51は底部のみが残存する。底部は四レンズ型に窪み、胴部は内湾気味に上方へ広がる。54は口縁部から頸部にかけての約1/4が残存する。口縁部は外傾しながら立上り、口縁端部は垂直に延び丸く収まる。
- 壺 (55) 短頸壺で、口縁部から頸部にかけて一部残存している。頸部は内傾気味に上方へ 延び、口縁部は外反する。
  - 甑(52) 把手部分のみの出土である。先端部に向かいきつい弧状を描く。

55は須恵器、48・49・51・52・55は土師器である。

## 2 井戸出土遺物

#### SE017出土遺物 (Fig.16)

甍(58) 土師器で口縁部から胴部上半部にかけて一部が残存している。胴部はほぼ垂直に

上方へ延び、口縁部は肥厚しながら外反する。

高坏 (57) 土師器で坏底部から脚部上半部にかけて残存している。坏部は広がりながら上 方へ延び、脚部は外反気味に下方へ延びる。

#### ③土坑出土遺物

## SK025出土遺物 ((Fig.16)

支牌 (53) 脚部の約1/2が残存している。脚部はやや窄まりながら下方へ延び、裾部は外湾 気味に開き、端部は丸く収まる弥生土器である。

## 小穴 (ピット) 出土遺物 ((Fig.16)

壺(56) 土師器の無頸壺で、口縁部から胴部にかけての一部が残存している。胴部から口 縁部にかけて内傾し、口縁部はほぼ垂直に延びている。

## ⑤埋土出土遺物 (Fig.16)

坏(59) 須恵器の坏蓋でほぼ完形である。宝珠摘みを持ち、天井部から体部にかけて開き ながら下方へ延び、口縁部はやや外傾し、端部は丸く収まる。かえりは口縁部に対して短く、 端部は尖る。

要(60) 弥生土器で底部のみの出土である。底部はレンズ状に窪み、胴部に向かって外傾 しながら立ち上る。

手捏ね土器 (61) ほぼ完形である。底部は丸く、胴部から口縁部にかけては内傾気味に立 ち上り、端部は尖り気味である。

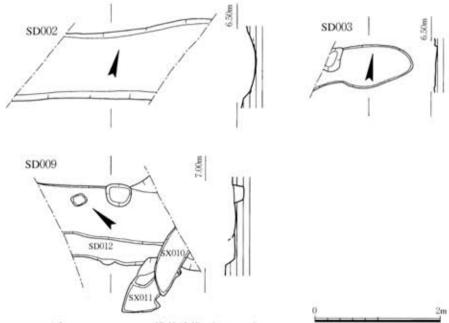


Fig15.T区SD002 · 003 · 009溝状遺構 (S=1/60)

# 7. U区 (2-6区)

この調査区は導水路本線工事に伴い調査を行った箇所である。遺構は、土坑・井戸・円形周 溝・掘立柱建物跡・溝状遺構・不明遺構及び小穴(ピット)である。調査面積は である。 (1)遺構

# ①土坑

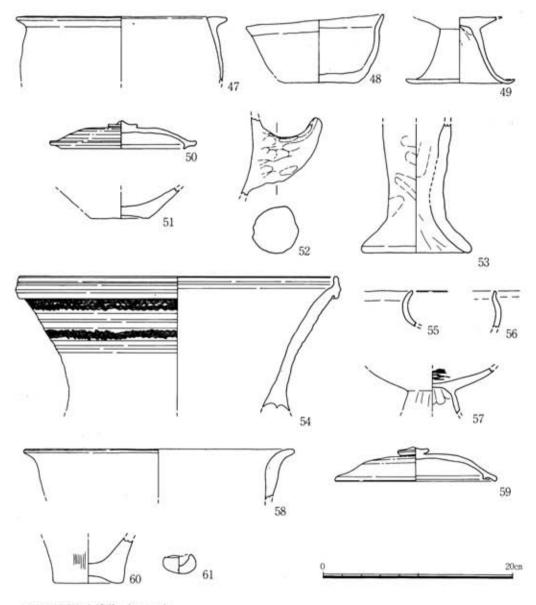


Fig16.T区出土遺物 (S=1/4)

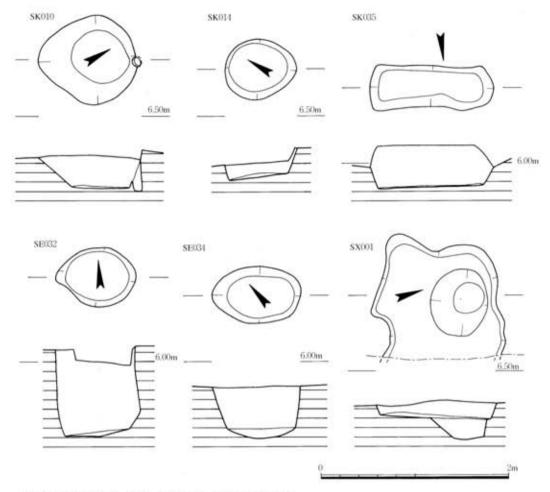


Fig.17 U区SK010 · 014 · 015土坑, SE032 · 034井戸 SX001不明遺構 (S=1/40)

SK010土坑 調査区の北端にある。平面形態は方形で、東西1.80m・南北0.95m・深さ0.46mである。埋土中より弥生土器・須恵器片が出土している。

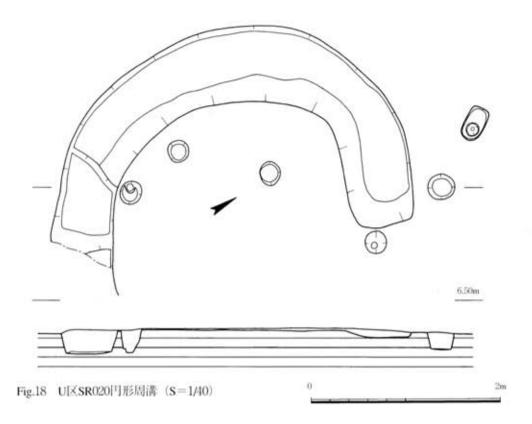
SK014土坑 調査区の西端に位置する。平面形態は円形で、径0.76m・深さ0.16mである。 埋土中からは弥生土器・須恵器片等が出土している

## ②井戸

**SE032井戸**(Fig.17) SX029の南に位置する。平面形態は楕円形で、長軸0.83m・短軸0.63m・深さ0.92mである。井戸中から木片はが出土している。

SE034井戸 (Fig.17) SX029と切合う。平面形態は楕円形で、長軸0.94m・短軸 0.6m・深さ0.55mである。ここからの遺物の出土はない。

SE031・032・034ともにかなりの削平を受けており残存状況は悪い。



# ③円形周溝 (Fig.17)

SR020円形周溝 調査区内のほぼ中央の東端に位置し、半円を描く。約1/2が調査区外にあり未掘であるため全容は不明である。南側の一部をSX021に切られる。周溝径3.72m・ 周溝幅0.35m・深さ0.13mである。埋土中より弥生土器片および黒曜石が出土している。

#### 4 不明遺構 (Fig.17)

SX001不明遺構 調査区の北東端に位置する。平面形態は不定形で、一部が調査区外に延 びているため未掘である。幅1.38m・深さ0.4mである。埋土中からは弥生土器・須恵器・土師 器片が出土している。

# (2) 遺物

## ①井戸出土遺物

# SE031出土遺物 (Fig.26)

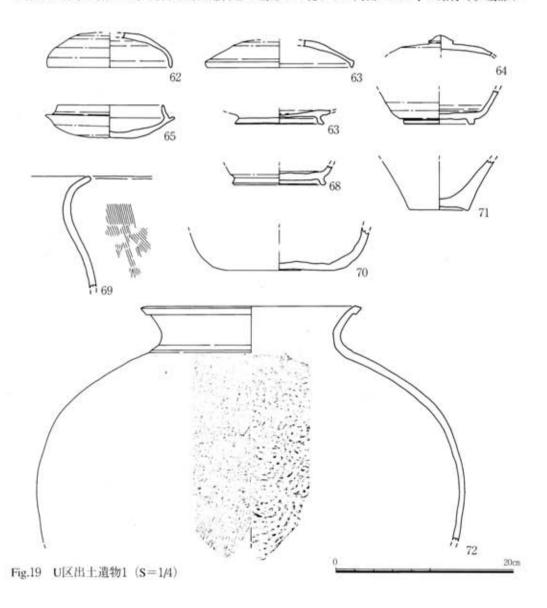
石製品 (102) 流紋岩系の石材である。残存長6.5cm・残存幅4.85cm・最大厚2.0cm・重量 102gである。

## ②不明遺構出土遺物

## SX011出土遺物 (Fig.19·26)

坏蓋 (62·63·64) 62は天井頂部及び口縁部の大部分を欠損する。天井部から体部にかけて 緩やかに広がり、口縁部はやや内傾する。端部は尖り気味である。63は天井頂部を欠損し、1/5 が残存する。天井部から体部にかけて広がりながら下方へ延び、口縁部は屈曲し端部は尖る。 64は宝珠摘みを持ち天井部のみが残存する。いずれも須恵器である。

坏身 (65~68) 65はほぼ完形である。底部から体部にかけて広がりながら上方へ延びる。 立上り部は内傾気味に上方へ延び、端部は尖り気味である。66·67·68は高台付坏である。66は 底部のみが残存している。高台は底部との境より内側に八の字に貼付き、断面台形である。67 は体部が約1/2残存する。高台の断面逆台形で底部との境よりの内側に八の字に貼付く。底部か



ら体部にかけて外傾しながら上方へ延びる。68は底部を約3/4残存する。高台は底部との境に外側に斜め方向に付く。断面長方形で端部は丸く収まる。65・67・68は須恵器、66は土師器である。

壺 (69) 口縁部から胴部上半部にかけての一部が残存する土師器である。胴部は内傾しな がら上方へ延び、頸部は外反気味に延び、口縁部は外傾する。

甕(70·71·72) 70は胴部下半部から底部にかけて1/3が残存する瓦質土器である。底部はほぼ平らで、胴部は外傾気味に延びる。71は底部から胴部下半部が残存する弥生土器である。底部はレンズ状の浅い上底で、胴部は外傾しながら上方へ延びる。72は須恵器で口縁部から胴部にかけて残存している。胴部から肩部にかけて内傾気味に延び、肩部は丸い。頸部から口縁部にかけて外傾しながら肥厚し、端部は尖る。

石製品 (99·101) 99は石製穂摘み具で約1/2が残存している。石材は流紋岩系と考えられる。 残存長5.5cm・残存幅4.5cm・最大厚0.65cm・重量20gである。101は石鑿の未製品である。石材は 流紋岩系と考えられる。残存長6.8cm・最大幅1.8cm・最大厚1.5cm・重量34gである。

土製品 (100·103) 100は土製の紡錘車である。面の一部を欠損している。径4.4cm・内径 0.45cm・厚さ1.2cm・重量27gである。103は土錘である。残存長6.9cm・最大幅2.2cm・孔径0.55cmで両端部を欠損する。SK010出土のものと接合する。

# SX029出土遺物 (Fig.20·26)

壺 (73) 口縁部から胴部にかけて1/5が残存している。胴部は球形で、口縁部は肥厚しながら外傾し、端部は丸く収まる。

蓋 (74) 天井部から体部上半部が残存する。天井部径5.75cm・残存高7.2cmである。天井部 はレンズ上に浅く窪む。

高坏 (75・77) 75は脚部のみ残存する。脚体部はほぼ真っ直ぐに延び、裾部は下方にむかい広がりながら延びる。77は坏底部及び脚部の2/3が残存している。坏部は、底部から体部にかけて緩やかに外傾し、脚体部はほぼ真っ直ぐに延び、脚裾部は外反気味に広がる。端部は丸く収まる。

支脚(76) 口縁部の一部及び裾部を欠損する。体部は外湾気味に上方へ延び、口縁部は屈 曲し、端部は尖り気味である。

飯(78) 取手部分のみで、端部は屈曲し丸く収まる。胴部から剥離しており、貼付けたものであることがわかる。

要(79) 口縁部のみが一部残存している。口縁部は外傾しながら上方に延び、端部及び頸部との境に刻み目を持つ。

- 趣(80) 口縁部及び頸部の一部を欠損する。胴部最大径はほぼ中央にあり、やや上方に穿孔している。頸部は細く閉まり、口縁部にむかいラッパ状に開く。

土製品 (104~110) 土鍾である。104は最大長6.8cm・最大幅2.6cm・孔径0.8cmでほぼ完形

である。105は最大長7.35cm・最大幅2.4cm・孔径0.45cmで先端部の一部を欠損している。106は 最大長7.3cm・最大幅2.2cm・孔径0.45cmで完形である。107は最大長6.7cm・最大幅2.3cm・孔径 0.65cmで両先端部の一部を欠損している。108は最大長5.2cm・最大幅2.1cm・孔径0.45cmで先端 部の一部を欠損している。109は最大長6.2cm・最大幅2.0cm・孔径0.6cmで先端部に一部を欠損 する。110は最大長5.1cm・最大幅1.9cm・孔径0.55cmで先端部の一部を欠損している。

# ③小穴(ピット) 出土遺物 (Fig.20)

壺 (81) P 0 1 9 からの出土の弥生土器である。口縁部を打ち欠いている。底部は浅いレンズ状に窪む。胴部最大径を中央部よりやや上方に持ち、肩部は丸い。

# ④検出面出土遺物 (Fig.20)

坏 (82) 瓦質土器で口縁部から体部にかけて約2/3残存している。体部は内湾気味に上方へ 延び口縁部は外反する。底部は欠損する。

# 8. V区 (3-8区)

この調査区は、導水路本線工事に伴い調査を行った箇所である。ここでは土坑・井戸・掘立 柱建物跡・不明遺構及び小穴(ビット)群を検出した。調査面積は230㎡である。

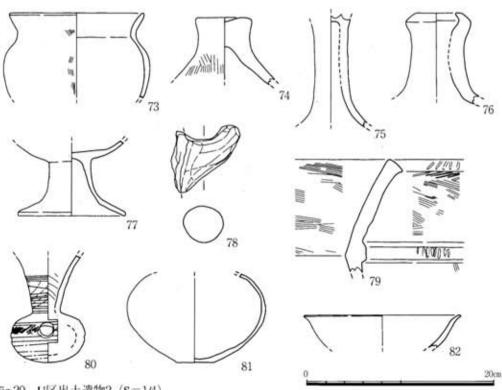
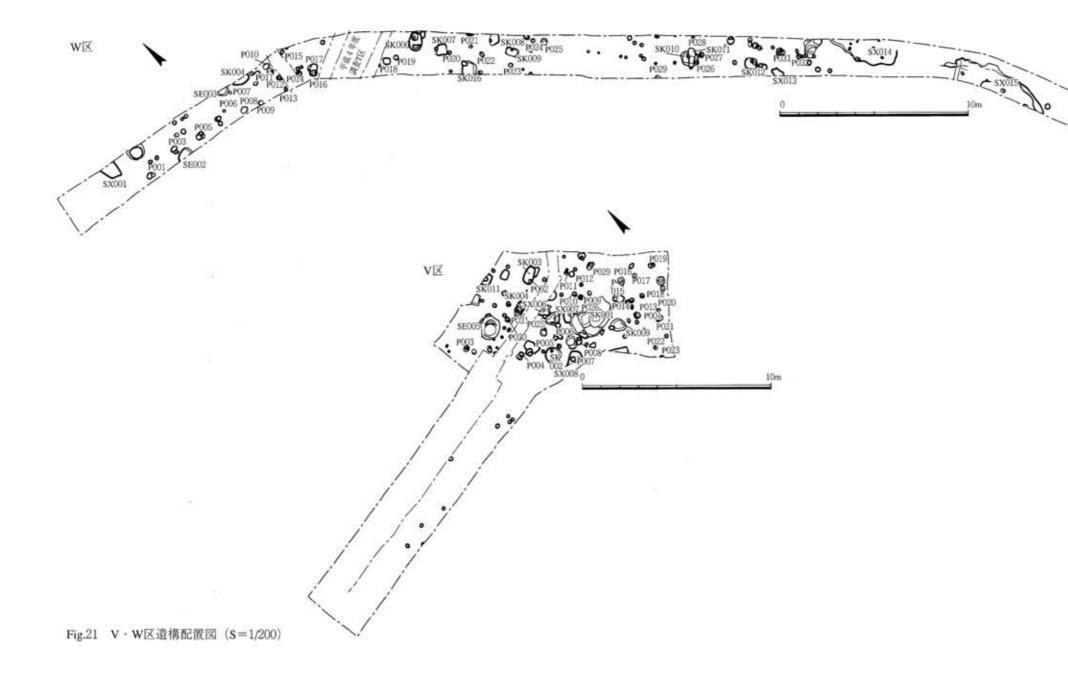


Fig.20 U区出土遺物2(S=1/4)



# (1) 遺構

# ①土坑 (Fig.22)

SK001±坑 調査区の南西よりに位置する。平面形態は不定形で、最大幅2.6m・深さ0.4mである。埋土中からは弥生土器・須恵器・土師器片が出土している。

SK002土坑 調査区の西側に位置する。平面形態は円形で、径0.85m・深さ0.15mである。

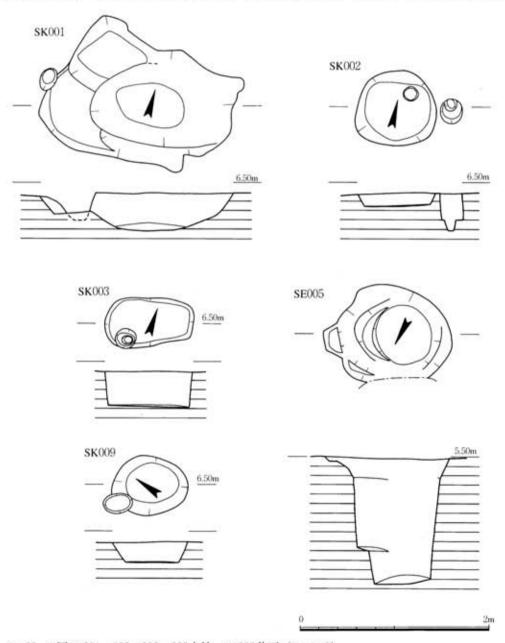


Fig.22 V区SK001 · 002 · 003 · 009土坑, SE005井戸 (S=1/40)

埋土中からは土師器片が出土している。

SK009 ±坑 SK001の南に位置している。平面形態は楕円形で、長軸0.82m・短軸 0.64m・深さ0.22mである。ここからは弥生土器が出土している。

## ②井戸 (Fig.22)

SE005井戸 調査区の北西に位置する。二段掘りの素掘の井戸で、上面の平面形態は楕円形で、長軸1.35m・短軸1.1m・深さ1.23m、底面の形態は円形で径0.64mである。遺物のほとんどは小破片で、暗茶褐色結質層からの出土である。井戸に伴う遺物としては、下層の暗灰褐色砂質層から瓦器碗が1点出土している。

## (2) 遺物

## ①土坑出土遺物

## SK001出土遺物 (Fig.23)

坏蓋 (83) 天井部から口縁部にかけての一部が残存している。天井部から体部にかけて内 傾気味に延び、口縁部は内湾気味に下方へ延びる。端部は丸く収まる。

高台付坏(84) 体部下半部から底部にかけて1/4が残存する。高台の断面は、背の高い台形で、底部のやや内側に「八」の字形に貼付く。

## SK009出土遺物 (Fig.23)

井戸出土遺物

#### SE005出土遺物 (Fig.23·26)

碗(86) 口縁部から体部にかけての1/3を欠損する。体部から口縁部にかけて緩やかに内湾 し、端部は丸く収まる。高台は断面逆台形で、「八」の字に貼付けている。

石製品(114) 砥石である。石材は流紋岩で約1/3程度欠損していると考えられる。砥石と しての使用面は2面である。

# 9. W区 (3-1区)

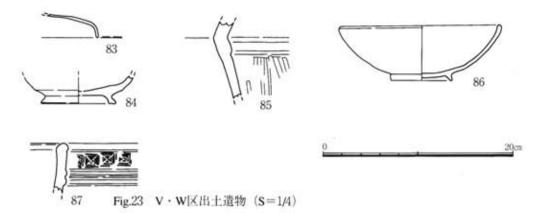
今回の調査は、排水路の切替えに伴い調査を行なった箇所である。ここでは土坑・井戸・不 明遺構及び小穴(ビット)群を検出した。調査面積は180㎡である。

#### (1) 遺構

#### ①井戸

SE003井戸 SK004の北側に位置する。平面形態は円形であるが、1/2が調査区外の ため未掘である。SE002に同じく素掘り井戸の下方のみが残存しているものと考えられる。 ここからの遺物の出土はない。

# (2) 遺物



## ①不明遺構出土遺物

## S X 0 1 5 出土遺物 (Fig.23)

火鉢 (87) 口縁部から胴部上半部の一部が出土している。二条の突帯が廻り、口縁部には 雷文が印刻されている。

## ③小穴(ピット) 出土遺物

# P 0 1 1 出土遺物 (Fig.26)

石製品 (112) 石材は流紋岩で、残存長5.9cm・残存幅5.3cm・最大厚1.0cmの一部のみが残存している。自然面と思われる部分に縦方向の刳込みが見られる。中心方向に向かい薄くなっている。砥石の可能性はあるが用途は不明である。

## Ⅲ まとめ

今回の調査は、狭い水路予定地であったため、遺跡の性格についてははっきりしないが、 東部導水路事業に伴う調査区 (O~W区) と、農業基盤整備事業 (A~G区)、工場関連に伴う 調査地区 (I~J区) 及び三田川町教育委員会による住宅関連に伴う調査地区 (K~N区) の成 果を併せて関係をみてみたい。

下中杖集落の東側にあり、昭和53年度に行なったB区の北側に位置するO区は、標高6~6.3mの水田部である。P・Q・R区は、いずれも現在の下中杖集落の東側にあり、昭和60年度に調査を行なった1~J区の南側に位置しており現況は町道である。S区は下中杖集落の東側にあり、平成9年度に調査されたL・M・N区の南に位置する。調査時は竹薮であり、土塁状の高まりが見られた。T・U・V・W区については昭和52年度調査地区であるD区の北側に位置する。

## $(O \cdot P \cdot Q \cdot R \times)$

水田部であるO区に検出した主な遺構は、土坑・井戸・溝状遺構等である。ほとんどが調査地区の中央に集中している。SK005土坑は、調査区のほぼ中央に位置するが、南半分

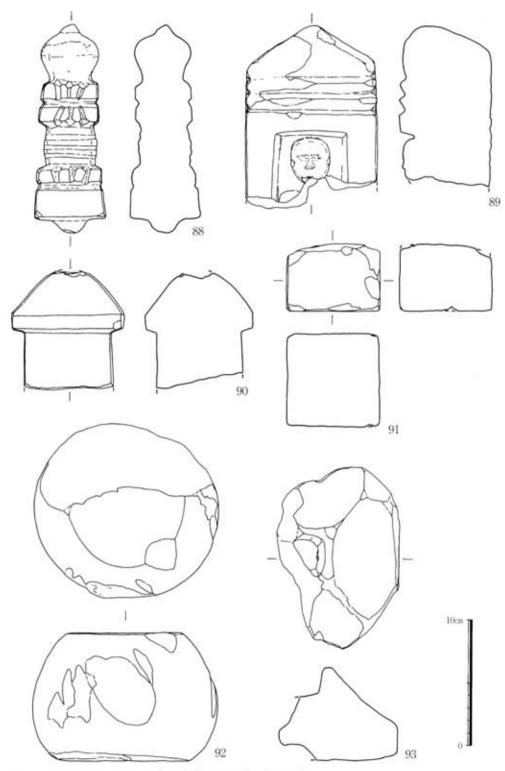


Fig.24 S区土塁およびSD002溝状遺構出土石塔1 (S=1/6)

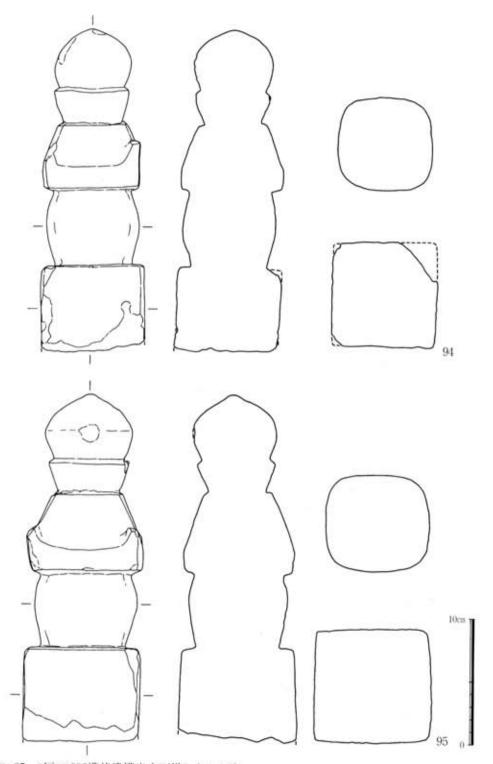


Fig.25 S区SD002清状遺構出土石塔2 (S=1/6)

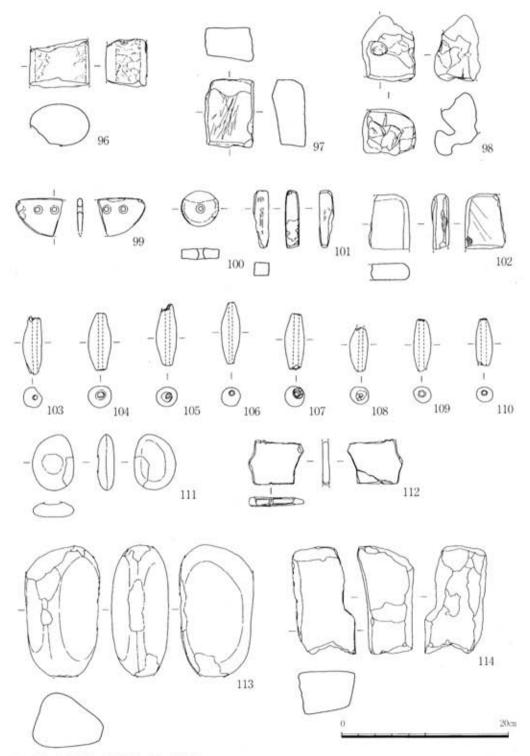


Fig.26 土製品·石製品 (S=1/4.5)

が調査区外のため全体の状況は不明である。理土の状況及び遺物から古墳時代前期のものと 考えられる。SE009井戸跡は、下層に近い位置から土師器の坏・甕・壺のしている3点 がセットで出土している。これらのことから祭祀的遺構の可能性が考えられる。SD006 溝状遺構は調査区のほぼ中央を、同じくSD011溝状遺構は調査区の西端を南北方向に伸 びている。また、どちらも遺物の出土がほとんどないため時期は明確にできないが、古墳時 代の集落であるB区の北側に位置することから、区画溝の一部であることが考えられる。こ れはB区の調査の際に建物跡や土坑のほか、南北方向に走る区画溝が検出されていることによ るものである。

P・Q・R区についてであるが、P区の主な遺構は溝状遺構、O区は井戸跡、R区は井戸跡、土坑、不明遺構である。SD001溝状遺構は、調査区の中央よりやや西寄りに存在し、南北方向に伸びている。ここからは糸切底の土師器小皿が出土していることから中世の遺構の可能性が考えられる。Q区のSE001井戸跡は、上層から弥生時代前期~古墳時代の小破片のみの出土であるため、時期は明確にできない。R区のSE004井戸跡は調査区は位置する。遺物は小破片のみの出土であるため、時期は明確ではない。SD007溝状遺構は残存状況が悪く、遺物についても弥生土器と須恵器が混在して出土している。SH001住居跡は調査区の西端に位置するが、切り合いや削平により残存状況が非常に悪い。また、遺物については弥生土器の底部及び口縁部が出土している。小穴については、掘立柱建物跡の可能性のあるものが数カ所考えられる。この3地区については、昭和55年度調査地区であるJ区の南側に近接しており、中でもP区のSD001溝状遺構は、J区の溝とほぼ同一の主軸方向であることから、同一溝の延長部分である可能性が考えられる。またJ区では方形区画溝等が検出されていることから集落と考えられる。出土遺物こそ少ないものの古墳時代~鎌倉時代の掘立柱建物跡、井戸跡、土坑等も検出されていることから、P・Q・R区は南端に位置するJ区の集落の一部と考えられる。

## (SIX)

S区は、土塁、溝状遺構、土坑、小穴が検出された。土塁は、調査前の階段では約30m程度が確認できている。盛土中からは石塔類や弥生土器・土師器・須恵器の小破片が出土している。SD001・SD002溝状遺構は土塁の裾に沿っており、SD001の理土中からは板碑や一石五輪塔等の供養塔が比較的まとまった状態で出土している。近隣のB区、L区の調査結果と考え合わせると、S区はB区L区に含まれる中世集落の一部と考えられる。板碑や一石五輪塔等の石等類については、石塔の持つ性格や聞き取り調査の結果から墓碑としてよりも供養塔として用いられたものと考えられる。また、土塁については集落を廻るものと考えられる。

# $\langle T \cdot U \cdot V \cdot W | X \rangle$

T区は、井戸跡、土坑、溝状遺構、小穴が検出された。SE017は調査区の南端に位置している。削平が大きく遺構の残存状態は悪いが、理土中から土師器の高坏及び甕の破片が出土している。SD002溝状遺構は、調査区のほぼ中央にあり北東から南西方向に伸びている。ここでは遺物の出土がないため時期は不明である。小穴は多数検出されているが、調査区が狭いため並びは不明である。

U区は、円形周溝、井戸跡、溝状遺構、不明遺構、小穴を検出している。SR020円形 周滯は調査区の中央東端に位置しており、東半分は調査区外である。遺物は、弥生土器の小 破片が出土している。また、P019から口縁部を打ち欠いたと思われる壺が1点理納した と思われる状態で出土しており、SR020と関連して祭祀的な意味合いが考えられる。S D026溝状遺構は調査区の南側を北東から南西方向に伸びている。残存状態が悪いが、溝 の形状および残存状態からT区のSD002溝状遺構と同一溝である可能性があるが、どちら も遺物の出土がないため時期は不明である。SE032、SE034井戸跡は残存状況もあ まり良くなく、遺物の出土もないため時期は不明であるが、SE032の底部から植物遺体 が出土している。そのほかSX011・SX029不明遺構があるが残存状態はいずれもあ まり良くない。SX011は調査区の北側に位置する。遺構の底面は中心に向かって次第に 深くなるレンズ状をしており、遺物は奈良時代の須恵器を主として出土している。遺構の形 状から住居跡の可能性は低いと思われるが、炭化物の出土が見られることから祭祀的な性格 を持つ土坑の可能性も考えられる。SX029については、形状はSX011に似るが、遺 物については弥生土器、須恵器、土師器が混在して出土している。また、遺構内の西端から 完形を含め約20点ほどの土錘がまとまって出土しており、魚網錘と考えられる。SD026 満状潰構の南側には現況 1 間×2 間のSB034 掘立柱建物跡を確認しており、溝との関連 が考えられる。

V区は井戸跡、土坑、小穴を検出している。SE005井戸跡は調査区の北側に位置している。最下層に近い位置から平安時代のものと考えられる瓦器碗が1点出土している。土坑については土器の出土がないため時期ははっきりとしない。小穴については調査区の東側に集中しており、柱痕を確認できたものもあったが建物は確認できなかった。

W区は土坑、井戸跡、不明遺構、小穴を検出している。中でも小穴が大半を占めているが、 調査範囲が狭いため建物跡は確認できていない。また全体に遺物もほとんど検出されておらず、 時期の決定は難しい。

U・T・W・V区と北に行くに従い遺構密度が低くなっている。特にV区では顕著であり西側に向かっても遺構密度が低くなっている。確認調査でもV区より西側では遺構遺物ともにない。また、調査区西側のトレンチでは落ちを確認しており、ここでは木片や植物遺体を確認している。従って遺跡としてはV区で終了しており、D区とV区を結ぶラインで遺跡の西限

と考えることができる。

遺構の範囲については、これまでの調査と今回の調査である程度の範囲は明確になりつつ ある。性格については、これまでの調査では主に弥生時代の甕棺墓地と平安時代から鎌倉時代 にかけての官衙的な遺構が確認されていることから考えると、下中杖遺跡は弥生時代の墓地と 中世集落かせ考えられるが、今回の調査では不明な点も多かったので今後の調査に期待する。

# 参考文献

佐賀県教育委員会

1976 「佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告」上·下卷

佐賀県教育委員会

1980 「下中杖遺跡」佐賀県文化財調査報告書第54集

三田川町史町編さん委員会

1980 「三田川町史」

三田川町教育委員会 1986

「下中杖遺跡」三田川町文化調査報告書第1集

Tab.1 下中杖遺跡調査地区一覧表

調查年度	K	遺跡の性格	主な遺構	主な遺物
S. 52	A·FIZ	弥生時代墓域·古墳時代集落 古代一中世集落	賽棺墓·土壙墓·土坑·竪穴住居 掘立柱建物·井戸·溝	養棺·弥生土器·土師器 瓦器·輸入陶磁器等
	C·HK	弥生時代集落 古代~中世·近世集落	竪穴住居・土坑・貯蔵穴 井戸・溝・横列・池	弥生土器·土師器 瓦器·輸入陶磁器等
	DIX	弥生時代墳墓・古墳時代集落 中世集落	売棺墓・竪穴住居・井戸 掘立柱建物・井戸・溝	土師器
S. 53	BK	弥生時代墓域·古墳時代集落 古代ー中世集落	売棺幕・土壤幕・木棺幕・祭祀土坑 竪穴住居・井戸・土坑 掘立柱建物・井戸・溝	甍棺・弥生土器・土師器 須恵器・越州窯陶磁器・白磁 緑釉陶器黒色土器・木製品 ・青銅製著等
S. 59	IX	古代一中世集落	井戸・土坑・溝	土師器
000/200	lK	古代~中世集落	据立柱建物·井戸·溝·土坑	土師器·須惠器·緑釉陶器 土製品·弥生土器·石器·木製品
H. 4	OK	古代一中世集落	井戸・土坑・溝	須恵器·土師器·木製品
	P·Q·R区	古代一中世集落	井戸·土坑·溝	須惠器·土師器
	SIX	弥生時代~中世集落	土塁状遺構·土坑·溝	須惠器·土師器·瓦質土器 石塔·輸入陶磁器
	TIX	古墳時代~古代集落	井戸·土坑	須恵器・土師器
	UK	弥生時代~古代集落	円形居溝・井戸・土坑掘立柱建物・溝	弥生土器・須恵器・土師器 土製品・石製品
H. 7	VX	古代一中世集落	井戸·土坑·掘立柱建物	須恵器·土飾器·瓦器
	WIX	古代一中世集落	井戸・土坑	須恵器・土師器・瓦質土器
H. 9	K·L·M·N区	弥生時代一中世集落	井戸·溝·据立柱建物	弥生土器・輸入陶磁器・批骨・木製品

Tab.2 下中杖遺跡調査地区一覧表

地区名	遺構番号	極別	形態 (特徵)	規模(長さ×幅×深さ:m)	主軸方向
OK	SK001	土坑	円形	$0.78 \times 0.7 \times 0.16$	NE - 2° -SV
	SK002	土坑	円形	1.9 × 1.7 × 0.42	NW-13* -SE
	SK003	土坑	円形	0.95 × 0.9 × 0.26	NE - 5° -SV
1	SH004	竪穴住居?	方形?		_
	SK005	土坑	楕円形又は円形	$1.61 \times (0.6) \times 0.88$	NE - 7° -SV
	SD006	溝状遺構	断面: 台形	$0.73 \times 0.28 \times 0.07$	NE -10° -SV
	SE007	井戸	円形	$1.67 \times (0.87) \times 0.46$	NE -13° -SY
	SE009	井戸	円形	1.4 × 1.2 × 1.49	NE -30° -SV
	SD011	溝状遺構	斯面: 台形	(2.1) × 1.59 × 0.63	NE -14" -SV
PIX	SD001	溝状遺構	断面: 台形	(5.6) × 0.86 × 0.15	NE -20° -SV
	SX002	不明 (溝か?)	_	$(4.51) \times 1.46 \times 0.1$	NE -28° -S
	SK003	土坑	円形	$0.91 \times 0.96 \times 0.13$	NE -22° -S
- [	SK004	土坑	円形	$0.66 \times 0.57 \times 0.26$	NE -43° -SV
	SX005	不明 (土坑か?)	不定形	$2.98 \times 2.4 \times 0.2$	NE - 3° -S1
	SK006	土坑	楕円形	$1.27 \times 0.88 \times 0.32$	NW-23* -SI
QIX	SE001	井戸	楕円形	1.96 × 1.26 × 1.24	EN -40° -W
RIX	SX001	不明(住居か?)	方形?	$(2.82) \times (2.58) \times 0.13$	NW-32* -SI
	SX002	不明 (土坑か?)	長方形	$(1.91) \times 0.8 \times 0.15$	EN -30° -W
	SK003	土坑	長方形	$1.52 \times 0.081 \times 0.72$	EN -30° -W
	SE004	井戸	円形	$0.86 \times 0.72 \times 0.72$	NW-13° -SI
	SX005	溝か?	断而:台形	$(5.22) \times 3.32 \times 0.8$	NW-42° -SI
1	SX006	満か?	断面:台形	$(3.78) \times 1.29 \times 0.28$	NW-37* -SI
- [	SD007	溝状遺構	断而:台彩	$(3.32) \times 0.43 \times 0.14$	NE -26" -W
1	SK008	土坑	楕円形?	$1.12 \times 0.76 \times 0.23$	NE - 2" -S'
	SK009	土坑		$(1.16) \times (0.56) \times 0.25$	EN - 7° -W
SE	SD001	溝状遺構	円形又は楕円形	(8.9) × 3.9 × 1.04	NW- 9" -SI
	SD002	溝状遺構	断而:台形	$(10.4) \times 2.0 \times 1.221$	NW- 9" -SI
	SH010	竪穴住居	不定形	4.9 × 2.75 × 0.05	NW-26° -SI
	SK012	土坑	円形	$1.02 \times 0.9 \times 0.44$	NE -15" -S
	SX024	不明(土坑か?)	円形?	$(1.5) \times (0.64) \times 0.21$	ES - 3° -S
	SK027	土坑	円形	$0.9 \times 0.85 \times 0.26$	NE - 5° -S
	SK028	土坑	円形	$0.61 \times 0.74 \times 0.27$	NE - 2° -S
	SK029	土坑	円形	$0.65 \times 0.54 \times 0.22$	NW-17" -SI
	SK030	土坑	楕円形	$2.56 \times 2.12 \times 0.62$	NW- 6° -S
	SK031	土坑	不定形	1.1 × 0.79 × 0.25	EN -42° - W
	SK032	土坑	楕円形?	1.05 × (1.12) × 0.19	NE - 7° -S'
	SK033	土坑	楕円形	1.12 × 0.84 × 0.15	NE -16" -S'
	SX038	不明 (土坑か?)	不定形	$0.88 \times 0.64 \times 0.07$	ES -17" -W
	SK041	土坑	長方形	$0.23 \times 0.83 \times 0.16$	ES -23° -W
	土県	土型	台形	(14.8) × 8.15 × 1.57	NW-13" -SI
TIX	SD002	溝状遺構	断面:U字型?	1.14 × 2.14 × 0.22	EN -16° -W
	SD003	溝状遺構	断面:U字型?	$0.69 \times 1.41 \times 0.1$	EN - 3° -W
	SD009	溝状遺構	断而:台形	(1.8) × 0.85 × 0.1	NW-46° -S
	SX010	不明 (溝か?)		$(0.92) \times 0.41 \times 0.12$	EN -17° -W
	SX011	不明 (土坑か?)	方形?	$(0.38) \times 0.49 \times 0.08$	EN -37° -W
- [	SD012	溝状遺構	断而: 台形?	$(1.38) \times (0.24) \times 0.1$	NW-55* -SI
	SD013	溝状遺構	断面:台形	$(1.8) \times 1.9 \times 0.37$	ES -20° -W

地区名	遺構番号	種 別	形態 (特徴)	規模(長さ×幅×深さ:m)	主轄方向
ΤK	SK014	土坑	楕円形	1.8 × 0.76 × 0.19	NE -29° -SM
Michigan I	SX015	不明 (土坑か?)	不定形	(0,65) × 0,84 × 0,38	ES - 7° -W
	SX016	不明 (土坑か?)	楕円形	(2.5) × (1.32) × 0.17	NE -27" -SW
	SE017	井戸	精円形 (底部)	(0.89) × 0.98 × (0.32)	ES -27° -W
	SK026	土坑	長方形	$(0.7) \times (0.48) \times 0.08$	ES -27° -W
	SK027	土坑	長方形	1.18 × (0.64) × 0.42	ES -13" -W
	SK025	土坑	楕円形	$(1.57) \times (0.56) \times 0.13$	ES -47" -W
UK	SX001	不明 (土坑か?)	不定形	1.38 × (1.32) × 0.4	NE -15° -SW
	SK010	土坑	円形	1.8 × 0.95 × 0.46	ES -57° -W
1	SX011	不明 (土坑か?)	不定形	4.44 × 3.44 × 0.2	EN -11" -W
	SK013	不明 (土坑か?)	方形?	1.7 × 1.48 × 0.32	ES -45° - W
1	SK014	土坑	円形	$0.76 \times 0.64 \times 0.16$	ES -33° -W
1	SX015	不明(土坑か?)	方形?	$(0.82) \times 1.37 \times 0.1$	ES -14° -W
- 1	SX016	不明(土坑か?)	方形	(1.17) × (0.48) × 0.15	NE -15" -SW
	SR020	円形周溝	円形	3.72 × (2.5) × 0.13	NE -16° -SW
1	SX021	不明 (土坑か?)	不定形	$(2.15) \times (0.85) \times 0.17$	ES -12° -W
- 1	SD026	溝状遺構	断面:台形	(5.05) × 0.63 × 0.18	ES -38" -WS
	SX027	不明	不定形	(2.4) × (1.35) × 0.2	ES - 6° - W
1	SX029	不明 (土坑か?)	不定形	(6.15) × 4.74 × 0.44	ES -22° -W
- 1	SE031	井戸	円形	$(0.45) \times (0.28) \times 0.49$	NE - 9° -SW
	SE032	井戸	円形	$0.83 \times 0.63 \times 0.92$	EN -10° -W
- 1	SB033	掘立柱建物跡	(1間×2間)	(1.8 × 3.35)	NW- 3° -SE
	SE034	井戸	楕円形	0.94 × 0.6 × 0.55	ES -51* -W
	SK035	土坑	長方形	$1.33 \times 0.48 \times 0.46$	EN - 2° -W
VIK	SK001	土坑	不定形	2.6 × 1.48 × 0.4	EN -12° -W
	SK002	土坑	円形	$0.85 \times 0.84 \times 0.15$	EN -37° -W
	SK003	土坑	長方形	$0.94 \times 0.54 \times 0.38$	EN -26* -W
	SK004	土坑	長方形	$0.57 \times 0.42 \times 0.26$	EN -18° -W
	SE005	井戸	円形	1.35 × 0.11 × 1.23	EN -23° -W
	SX006	不明 (土坑か?)	方形?	$(0.39) \times 0.64 \times 0.13$	NW-32° -SE
	SX007	不明 (土坑か?)	不定形	0.8 × 0.56 × 0.12	NW-51* -SE
1	SX008	不明 (土坑か?)	不定形	(0.61) × 0.81 × 0.13	EN -47° -WS
1	SK009	土坑	円形	$0.82 \times 0.64 \times 0.22$	NW-29° -SE
	SK011	土坑	方形	(0.37) × 0.6 × 0.12	NW-25° -SE
W区	SX001	不明(土坑か?)	方形?	$(0.78) \times (0.87) \times 0.17$	NE - 9° -SV
	SE002	井戸	円形	$(0.45) \times 0.85 \times 0.4$	ES - 3° -W
1	SE003	井戸	円形	$0.55 \times (0.38) \times 0.41$	NE -14° -SW
1	SK004	土坑	楕円形	0.96 × (0.33) × 0.14	ES -23° -W
Ī	SK005	土坑	方形	$(0.7) \times 0.77 \times 0.61$	NE -45° -SW
1	SK006	土坑	楕円形	0.98 × 0.71 × 0.25	NE -57° -SW
1	SK007	土坑	方形	$0.56 \times 0.57 \times 0.23$	NE -40° -SV
1	SK008	土坑	楕円形	$0.57 \times 0.52 \times 0.13$	NE -53° -SW
Ī	SK009	土坑	長方形	$0.68 \times 0.42 \times 0.23$	NW-29" -SE
1	SK010	土坑	隅丸方形?	$0.87 \times 0.75 \times 0.15$	NW-33° -SE
	SK011	土坑	長方形?	0.34 × 1.08 × 0.35	EN -30° -W
1	SK012	土坑	方形	$0.67 \times 0.58 \times 0.22$	EN -33° -WS
1	SX013	不明(土坑か?)	不定形	$(0.46) \times 0.44 \times 0.05$	NE -22° -SW

地区名	遺構番号	種 別	形態 (特徴)	規模(長さ×幅×深さ:m)	主軸方向
WIX	SX014	不明	不定形	(3.64) × (1.35) × 0.1	NW- 9° -SE
	SX015	不明	不定形	(5.8) × (1.1) × 0.15	NW- 2° -SE

Tab3 遺物観察表 ※口径・器高・底径の( )は復元径を、器高の( )は残存値を示す。

Fig.	PL	gli	1.16-16	66 66	ne er	法	景 (cn	0)	100 Y	色調	ia.t	M	整	県 遺 物
对番番号	写真番号	dis:	土地点	種別	器種	口径	器高	底径	胎士	内面/外面	姓成	外器面	内器面	登録番号
5-1		08	SX005	土師器	坏		(4.1)		微砂粒~1 m の砂粒を含む	におっを/におっを	Ŗ	ナナメ方向の ヘラケズリ	ナデ	97000520
-2				土師器	坏		(4,3)		1 -2mの 砂粒を含む	にお後/死亡にお者	良	ナナメガ向の ヘラケズリ	タテ方向の ハケ目後、ナデ	97000519
-3			No2	土師器	坏		(3.6)		最級共一1mm発 の御税を含む	死白、死/浅黄檀~によい樹	Ą	ナデ、口縁部 付近はヨコナデ	ナデ	97000518
-4			No3	土師器	遊	(13.4)	(9.55)	最大興思経 (14.6)	数が収を含む	粉山植粉山植	Ą	不明瞭 (摩耗) 口頭部、ヨコナデ	不明瞭(摩耗)	97000517
-5				土飾器	療	(11.9)	(7.2)		2 ~3mmの 砂粒を含む	验-四種/趙-四種	良	タテ方向のハナ目後。 ナデロ雑草、ヨコナデ	ヘラケズリ (黒斑あり)	97000516
-6	6-6	-	No1	土飾器	慨	(12.4)	13.6	3.1	1~3mの後度 を多く含む	によい黄橙/明拠灰	Ŗ	ハケ目をナデ、別変制す。 日曜部付近はヨコナデ	ヘラケズリ	9700052
-7		083	8009下程	土飾器	嵌	(14.9)	(14.9)		1m前後の 砂粒を含む	浅黄橙/褐灰	良	ヘラミガキ後。 ナデ煤付着	不明瞭、煤付着	97000523
5-8	6-8		下層	土飾器	瓷		(16.45)	胴部径 (22.2)	1〜2mの背包 を多く含む	議院・Cの/議院・Cの 競 競 (名) 巻	Ŗ	タテ方向の ハケ目黒斑あり	タテ方向の ヘラケズリ	9700115
-9	6-9		下層	土師器	坏		4.6	0.017400	1〜2m前後の 砂粒を含む	にあい程/にあい程	良	ヘラナデ口縁器 付近はヨコナデ	不明瞭(壽縣)、	97000522
-10			2階	土飾器	支脚	(13.2)	(10.7)		1m前後の 砂粒を含む	におり他・豊/におり他・君	Ą	ナデ	-	9700052
8-11		(	QΙΧ	弥生土器	深鉢		(4.9)		微砂粒を 多く含む	灰白/褐灰	良	条痕、口縁部に 刻目実帯あり	不明瞭(摩耗)	97001183
-12		QIX	SX001	弥生土器	瓷		(4.1)		指示社へ2mの 非和を多く含む	浅黄橙/浅黄橙	Ą	条痕、胴部に 刻目突帯あり	ヨコナデ	9700118
-13		(	)区	弥生土器	瓷		(1.0)		徴砂粒を 多く含む	橙/橙	Ų	ヨコナデ、口福部に 刻目突帯あり	ヨコナデ	9700118
-14				弥生土器	亮	(内:27.0) 外:33.8)	(5.5)		養物能~2mの 新収を多く含む	浅黄橙/浅黄橙	良	不明瞭(摩耗)、 新加丁字型平均口候	ヨコナデ	97001179
-15				弥生土器	瓷	(内: 35.4) 外: 32.8)	(5.5)		長が花~2mの 存収を多く含む	灰白~浅黄橙/灰白	良	不明瞭(摩耗)、 新面T字型平均口程	不明瞭(摩耗)	97001178
-16				弥生土器	軣	(44.0)	(9.7)		機砂粒を 多く含む	浅黄橙/浅黄橙	良	タテ方向のハケ目	ヨコナデ	9700117
-17		Ξ		弥生土器	瓷		(9.45)	(7.9)	要訴訟へ2mの 非校を多く含む	灰白/灰白~浅黄橙	良	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	9700118
-18				弥生土器	瓷		(15.0)	最大頻繁性 (20.8)	養養を与く知の 非常を多く含む	浅黄橙/浅黄橙~橙	Ŗ	不明瞭(摩耗) 煤付着	不明瞭(摩耗)	97001182
-19				須惠器	瓷	(37.3)	(15.3)		微砂粒を 多く含む	灰黄~灰/灰黄~灰	良	ヨコナデ	【1最盛、ヨコナデ、 個盛、同心行文タタキ	9700118
9-20		RIX	SX006	須恵器	坏	(12.6)	(3.8)	受部径 (14.8)	機能能を含む	灰/灰	Ą	ヨコナデ とは中ではつ	ヨコナデ	9700115
-21			\$3006	須恵器	高坏				lm前後の 砂粒を含む	明赤灰~/明赤灰~ 淡赤橙 淡赤橙	不良	ヨコナデ	ヨコナデ	9700115
-22			20001	土師器	坏		(4.65)		1〜2m両後の 砂粒を含む		良	不明瞭(剥離)	不明瞭(剥離)	97001163
-23				土師器	坏	(11.8)	(5.0)		微砂粒を含む	灰黄/灰黄	良	不明瞭(剥離)	不明瞭(剥離)	9700116
9-24			Nol	弥生土器	簽		(6.8)		1~2m前後の 砂粒を含む		良	不明瞭(摩耗) 口様(口族)ま、外異き	不明瞭(摩擦)	97001159
-25			ji j	殊生土器	蒙		(7.8)		1〜2mの参覧 を多く含む	灰~浅黄檀/灰~浅黄檀	良	不開瞭(摩耗) 黒斑あり	不明瞭(摩耗)	9700116
-26				弥生土器	ĕ		(4.2)		1m前後の 砂粒を含む	にお者・皇/にお者・者	Ą	200000000000000000000000000000000000000	不明瞭(摩耗)	9700116
-27		10		土飾器	ě	(16.0)	(3.75)		1m前後の 砂粒を含む	浅黄橙~/浅黄橙~ にぶい橙 鈍い橙	A	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	9700116

Fig.	PL	ul-	7 M F	ee	nn ce	法	版 (cr	n)	at.	色 調		724	整	県遺物
	写真香号	itt.	土地点	種別	器桶	口径	25.25	底径	胎土	内面/外面	逆或	外器面	内器面	登録番号
9-28			SX006 008 Vol		売		(6.4)	(12.0)	1~2mの修治 を多く含む	班-正在/班-正在	A	不明瞭(剥離)	不明瞭(摩耗)	97001165
-29			No2	上前器	30)	(11.6)	(6.7)		1~3mの存在 を多く含む	改美数~/浅黄粒~ にぶい税 じぶい税	Ą	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	97001166
-30		SD	001 No1	土師器	6.25				1~2mの発流 を多く含む	におい他~/におい他~ 明本処 明本処	A	指頭調整	=	97001167
-31			No4	弥生土器	光		(2.7)	(4.85)	1~2mの修定 を含む	灰白~带黄冕/灰白	Ą	ナ デ 低部は平低	ナデ	97001153
-32			No.2	弥生土器	瓷		(2.65)	(5.4)	1~2回の修定を含む	明赤褐/明赤	良	ナデ	ハケ目後、ナデ	97001153
-33			SD007	土師器	坏		(2.4)	(6.8)	1〜2m前後の 砂粒を含む	灰白、浅黄檀/灰白、浅黄檀	Ŗ	ヨコナデ	底部、ナデ、 体部、ヨコナデ	9700115
-34		,	, ↓	須惠器	坏鲞		(2,8)		微砂粒を含む	灰/灰	Ą	ヨコナデ	ヨコナデ	9700115
13-35		SIX	SK028	須恵器	坏	(9,9)	(2.4)		3m以下の 砂粒を含む	灰/灰	Ų	ヨコナデ 251が15年6つ	ヨコナデ	97001737
-36			可認調在	須恵器	坏	11.4	4.8		3m以下の 砂粒を含む	揭灰/揭灰	A	ヘラケズリ さばに気折り	ヨコナデ	97001738
-37	6-37		P-6	土師器	小皿	(6.9)	1.5	4.2	重新粒を含む	明掲・橙/浅黄橙	Ą	不明瞭(摩擦)	不明瞭(摩耗)	9700173
-38			P-25	<b>弥生土器</b>	瓷		(3.2)	7.1	微砂粒を 多く含む	1-12-11/11-12-11	Ą	不明瞭(ハケ目)	不明瞭(摩耗)	97001733
-39			SXVIEW No.	土師器	?		(12.9)	最大頻繁性 (20,5)	3m以下の 砂粒を含む	浅黄橙/浅黄橙・里	Ą	タテ方向のハケ目 (摩託)	ナデ(摩耗)	97001730
13-40	6-40		SD001	土師器	碗	12.95	6.65		3m以下の 砂粒を含む	におい役装/におい役・里	Ŗ	タテ方向のハケ目後、 指押さえ	指ナデ	97001729
-41			SD002	陶磁器	碗		(2.2)		微砂粒を含む	灰オリーブ/灰オリーブ	良	詞転ナデ・施稿	回転ナデ、施稿	97001739
-42				陶磁器	碗		(2.25)	5.9	重要収を含む	ナリープ賞/オリープ賞 福和広流開程:	良	回転ナテ・雑粒	回転ナデ、施釉	97001740
-43				須惠器	壳		(6.7)		養券担を含む	灰/灰	Ą	ヘラ描き紋	ヨコナデ	97001736
-44				土師器	火鉢		(5,8)	,	量券収を含む	におい責程/におい責程	良	サフナデ、日道部に2 ヤ 所のを登ると、その前に 毎日収あり、日曜部は四 毎に記意	ヨコ方向のハケ目	9700172
-45			<b>↓</b>	瓦質土器	火鉢	外任:402		(4.5)	養粉粒を含む	黄灰/灰	Ą	コステナ。打造なに3下 )水の発音あり、その定義 のよのもの割に期印載あ り	ヨコナデ	9700172
-46		3	土塁	土師器	壳	外径:44.7		(5.95)	養非税を含む	にお祖/養色生にお祖	良	テナカ内のハヤ11株。 ナテ、11株ALI大型 あり保証者	ヨコ方向のハケ目後、 ヨコナデ	97001726
-47		TES	0013 %1	土師器	売	(内: 18.2) 外: 22.4)	(7.0)		要作的で Jan C 非和を多く含む	检/检	良	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	97001195
-48	6-48		SW/6 3/6	土師器	坏	14.6	7.3	7.4	lm前後の 砂粒を含む	になる。最大はな一個、自	ß	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	97001174
-49	6-49		3.5	土飾器	高坏		(7.15)	概部径 (11.5)	1-3mの時代 を含む	浅黄橙~/浅黄橙~ にぶい橙 にぶい橙	Ą	ナ デ 舞展部に里度あり	ナデ	97001173
-50			SX013	須恵器	坏鲞	(15,7)	2.95		は血圧性の研究 をわずかに含む	灰/灰	良	天井部、ヘラケズリ 日検部にかけヨコナデ	天井宮:不定方向ナデ 口蔵器にかけヨコテデ	97001189
-51			SXI167x1	弥生土器	売		(3,2)	5.9	1~2m前後の 毎校を多く含む	灰白~型灰/灰白~型灰	Ü	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩託)	97001172
-52			32	土飾器	ME EF				1〜2mの移転 を多く含む	浅黄橙/浅黄橙	良	指頭調整		97001953
-53	6-53		SX025 %:1	弥生土器	支脚		(13.8)	(11.5)	要様校へ2mの 毎担そ多く含む	にぶい整/によい巻	Ŗ	指押さえ後、ナデ 弊紙部、ナデ	指揮され、複雑国にかけ、 ヘラ技工具によるナデ	97001192
-54			\$300.65%4	須惠器	瓷	(33.9)	(14.3)		1-2mのお礼 を含む	揭灰/褐灰	良	ヨコナデ、口辺茎の 2ケ所に後状紋	ヨコナデ	97001171
-55			Į.	土師器	臺		(3.8)		亜砂粒を含む	极/检	Ų	不明瞭(摩耗)	ヨコ方向ヘテミガキ	97001175
16-56			P-018	土師器	也		(3,9)		養務税を含む	揭灰/揭灰	Ą	ヨコナデ	ヨコナデ	97001191
-57			SE017	瓦質土器	高坏		(4.9)	基部径 5.1	御棺をほとんど 含まない	黒/灰白	良	ヨコナデ 機能に板状圧痕	不定方向ナデ	97001197

Fig.	PL	ştr	L M. Jr	Mr. De	90.66	法	量 (cn	1)	100	色 調	Mide	湖	整	県遺物
对新香号	写真番号	itti	土地点	種別	器種	口径	器高	底径	胎士	内面/外面	姓成	外器面	内器面	登録番号
-58		TK.	SX13 %1 SE017	土師器	瓷	(28.8)	(5.4)		養物流・2mの 物流を多く含む	检/检	良	ヨコナデ 黒斑あり	ヨコナデ	97001196
-59	7-59		想色士	須惠器	杯蓋	17.1	3.65		lmの砂波 を多く含む	褐灰/褐灰	Ą	近岸部、ヘラケズリ 日韓国にかけ、ヨコナデ	不定方向ナデ	97001188
-60			褐色土	弥生土器	売		(4.85)	7.1	提修整~2mの 音楽を多く含む	检/检	Ą	タテ方向の ハケ目(摩耗)	ナデ	97001193
-61	7-61		Ų	弥生土器	標計畫		2.05		提供能へ3mの 再収を多く含む	极/极	良	ナデ	ナデ	97001194
19-62		UK!	SWILL FIE	須恵器	坏嵛	(13.0)	(3.7)		微砂粒~1mm の砂粒を含む	灰/灰	良	ヘラケズリ	天井高、不定方向ナデ 日曜第二がけるコナデ	97001959
-63			$\prod$	須恵器	坏蓋	(15.3)	(2.9)		微砂粒~1m の砂粒を含む	灰/灰	良	天井第、ヘラケズリ 13時間にかけ、ヨコナデ	天井部、ナデ	97001957
-64			T '	須恵器	坏蓋		(2.2)		Im前後の移動 を多く含む	灰/明褐灰/褐灰	Ŕ	天井部、ヘラケズリ つまみがつく	天井部 不定方向ナデ	97001956
-65	7-65		Nol	須恵器	坏	11.1	3.5	文上り器 1.1	微砂粒~1mm の砂粒を含む	灰/灰	Ŗ	発格器ヘラケズリ 口臓器にかり、ヨコナデ	能量中央、不定方向ナデ 日報部におけまコナデ	97001958
-66				土師器	坏		(1.5)	9.4	0.5~1mの存在 をわてかに含む	浅黄橙/浅黄橙	Ą	ナーデー 変革に外界され合かる。	ナデ	97001961
-67			上級	須恵器	坏		(3.6)	(7.5)	微砂粒を含む	灰/灰	Ą	ヘラケズリ 底部に高台がつく	体認、ヨコナデ 成器、ナデ	97001954
-68				須惠器	坏		(2.05)	(9,8)	luni後の母校 を多く含む	灰/灰	良	ヘラケズリ 底部に高台がつく	底 部 不定方向ナデ	97001955
-69			No2	土師器	类(?)		(11.8)		2m前後の 砂粒を含む	紙白〜製紙/にあい後〜程	Q	タテ方向のハケ目 1歳11近点、3コナド	不明瞭(剥離)	97001963
-70			I	瓦賈士器	坏		(4.69)	11.6	様ははなど 含まない	灰/灰	Ą	不定方向ナデ	体部、ヨコナデ 底部、不定が向ナデ	97001198
-71			No9	弥生土器	也(1)		(5.3)	6.2	Tm前後の存収 を多く含む	灰白/灰赤~灰白	ß	不明瞭(洞難)	不明瞭(剥離)	97001962
19-72	7-72		No.1	須恵器	売	最大解基性 (45.4)	(23.25)	(25.1)	数件収を含む	灰/灰	ß	タタキ DRT語道232+7	同心円文タタキ	97001176
20-73			SX029	弥生土器	遊	(14.25)	(9.1)	能大規則性 (15,4)	1m~3mの 前収を多く含む	灰黄褐/灰黄褐	Ą	タテ方向のハケ目 日曜日担富,32サデ	不明瞭(摩耗)	97001203
-74			NoH	弥生土器	Ži.	つまみ径 5.75	(7.2)		最非従っ2mの 非収を多くなも		Ą	つまみ返はナデ 器はタテララカハナリ	ナデ	97001206
-75			7612	弥生土器	高坏		(12.6)		微辞記~1mの 音記を多く含む	橙/橙	Ŗ	不明瞭(摩耗) 脚内部、ナデ	欠 損	97001205
-76	7-76		306	弥生土器	支脚	上前径 (7.0)	(9.7)		提供収~3mの お記を多く含む	淡黄、灰黄/淡黄、灰青	Ą	不明瞭(摩擦)	不明瞭(摩耗)	97001207
-77			Not	弥生土器	高坏		(8.0)	11.25	機砂粒~1mの 砂板を多く含む	E. D. 唯一是/E. D. 唯一自	Ř	ナデ	ナデ	9700120
-78			169	弥生土器	版記字				吸砂粒を 多く含む	[2] (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1)	A	指頭調整	-	97001210
-79			No13	弥生土器	光		(12.1)			におい税/におい税~程	Ų	ナナメ方向のハケ目 11経営から選挙に利日	ナナメ方向のハケ目	97001202
-80	7-80		Nol	須恵器	Εĝ		(11.4)		微砂粒を 多く含む	灰/灰	Ŗ	発体部へラケズリ おっとまた。当話、こりロッチ	別高にしばり有有	97001209
-81	7-81		P-19	弥生土器	锁	最大製品班 14.7	(9,5)	3.9		灰黄褐/灰白~浅黄橙	良	不明瞭(摩托)剥離	不明瞭(摩耗)	97001200
-82			検出面	瓦賀土器	坏		(3.45)			灰黄樹/灰黄樹	Ą	ヨコナデ 黒斑あり	ヨコナデ	97001199
23-83		V.	SOU AL	土師器	蓋		(1.7)			没黄橙/浅黄橙	良	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	97001220
-84		T	$\prod$	須恵器	Attix		(3.0)	(7.9)		灰白~灰/灰白灰	不良	不明瞭(摩耗)	不明瞭(摩耗)	97001221
-85		T	SK009	弥生土器	売		(8.1)			灰黄褐/灰黄褐	Ą	現上中高にサテ方向ハナ目 選集に後い交替あり	須添、ヨコナデ 製添、ナデ	97001218
-86	7-86		SENSÆ FH	托 器	鹼	17.1	5.95	6.4		におい青橙/におい青檀	Ú	ヨコナデ 戦略に高台がつく	ナデ	9700122
-87		W	KSX015	土師賞土器	火鉢		(5.35)			灰白~灰/灰白~灰	Ú	日曜番本で下に掘り支 と2つの表い交替がある	ヨコナデ	9700122

# 田手二本松遺跡

所在地: 佐賀県神埼郡三田川町大字田手字二本松

# 田手二本松遺跡

## I 遺跡の概要

田手二本松遺跡は、佐賀県神埼郡三田川町大字田手字二本松に所在する。遺跡は吉野ケ里丘陵の東側、田手川の東岸約500mに位置し、標高約8~9mの沖積平野に立地する。また遺跡内には、田手川の旧河道もしくは氾濫原と考えられる砂層の堆積が見られる。今回検出したのは縄文時代晩期の遺物包含層である。本遺跡は、田手川を挟んで吉野ケ遺跡の対岸に位置しており、何らかの関係が考えられる。遺跡の南側の水田部は、昭和50年代に農業基盤整備事業の対象地であったが、当該地は対象外であり今回の調査により初めて発見された遺跡である。遺跡の範囲については、周辺の調査が行なわれていないため明確ではないが、南側については以前の調査結果では遺跡の存在は確認されておらず、このことから北側に遺跡の本体が広がる可能性が高いと考えられる。

# Ⅱ 潰構

平成5年度の調査では全体を包含層一括とし、平成6年度の調査についてはA-1-C-15のグリットを設定した。平成5年度調査区をI区、平成6年度調査区をI区とする。I区・II区とも包含層が主体であり、明瞭な遺構としては溝状遺構及び畦畔と考えられる帯状の遺構が確認されている。また、出土遺物については、縄文時代晩期末もしくは弥生時代早期と考えられる土器を主体としている。

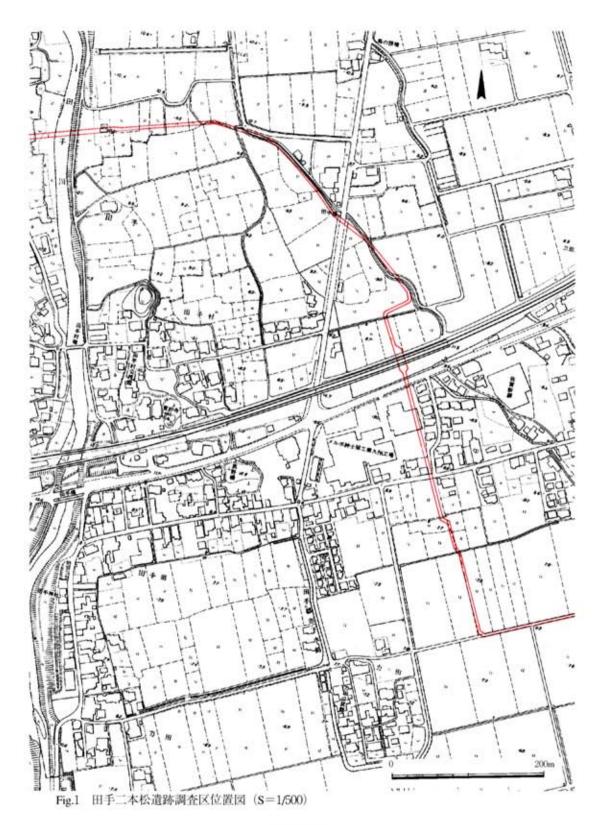
層序については、検出面までは1層を除き砂質土もしくは粘質土である。遺構検出面は13層、 包含層は12層の下部・5層・13層の上部にかけてであり、包含層の主体は5層である。また8 層は畦畔の可能性がある土層である。層位については、 区に続く地区であることから基本的 には 区・ 区は共通しており、出土する遺物についても同じく縄文時代晩期末もしくは弥生 時代早期の突帯文土器を主体とする土器・石器類である。調査面積はI区・Ⅱ区で394mである。 また、土器類に就いては特徴のみを述べるに留め、法量等に就いては一覧表を参考とされたい。

## 1. I区 (平成5年度調査区) (Fig.2)

包含層及び溝状遺構(畦畔?)を検出している。また包含層中に炭化物の集中域が見られる。 (1) **満状遺構(畦畔か?**)

調査地区のほぼ中央を南北方向に伸びており、幅40~70cm・深さ(残存高?)5~10cmである。また、調査区南東角に幅約20cm・深さ(残存高?)約10cmの遺構を検出している。確認調査時にも幅約20cm・深さ(残存高?)約10cmの同様な遺構を検出しており、深鉢の口縁部・底部が出土している。この遺構は、上面は包含層である暗灰褐色シルト質砂層の面で検出できるが、下面は黒色粘土層に数cm沈み込んでいる。

# (2) 遺物包含層



-125-

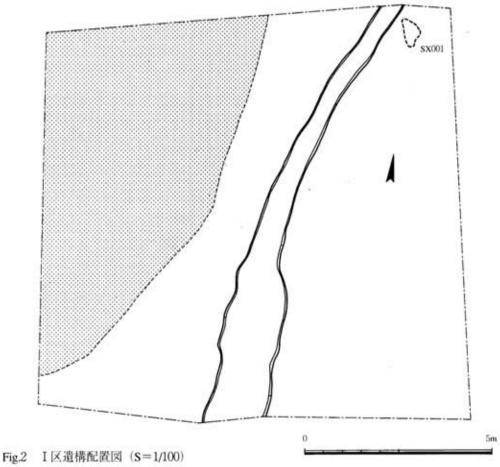
黒色粘土層直上の暗灰色砂質土層が遺物包含層である。これは調査区内のほぼ全面に広がっ ているが、ほとんどの遺物は溝(畦畔?)より東側で出土している。調査区北東端では炭化物 の集中する箇所が見られたが、遺構として検出はできていない。また、包含層上面には河川の 堆積作用によると考えられる砂の堆積が見られる。この包含層中から出土する遺物は、深鉢・ 浅鉢・壺といった土器類や土製品・石器である。

## 2. II 区 (平成6年度調査区) (Fig.3)

調査区内にA-1-C-15グリット(45区画)を設定した。その結果、 区に同じく包含層 及び溝状遺構・畦畔と考えられる帯状の遺構を検出し、そのほかの遺構として不明遺構・ピッ ト(小穴)等を検出している。また遺物は、溝状遺構から数点の小破片が出土した以外は、包 含層からの出土である。

## (1) 溝状遺構

SD004満状遺構 調査区の南側C-11~A-15グリットに位置し、北西~南西方向で調査区外 に延びる。埋土は I 区の包含層に同じく灰褐色シルト質砂土である。断面は逆台形で、調査区



の南側でSX001·003·005と切合う。埋土中から弥生時代早期の土器の小破片が出土している。

SD006溝状遺跡 調査区の北側、C-1から西側調査区外へ向かい延びている。深さ約0.10m と残存状況が悪いため、調査区北端及び西端の壁際に於て断面で確認した結果、掘り込まれた溝ではなくカマボコ状または台形状の盛上がりであることが確認できた。上面は削平を受けていると考えられる。これらのことから、SD006は畦畔である可能性が高い。埋土は暗灰色シルト質土で、数点の土器片が出土している。

SD007満状遺跡 調査区のほぼ中央部を東西方向に横切り調査区外に延びていいる。ただ しA-9, B-8が未掘のため途中のラインは推定である。深さ0.2m・幅0.3~0.45mである。埋 土は灰黒色砂土である。遺構上面では遺物を検出するが、埋土中からの遺物の出土はない。

## (2) 遺物包含層

遺物包含層は12層〈暗褐色砂質土層下層〉・5層〈灰色粘質土層〉及び13層〈褐色粘質土層上層〉である。ほとんどの遺物は5層からの出土である。また、全面から遺物が出土するわけでなく、A-6-C-6グリットからA-14-C-14グリットの範囲で出土している。出土遺物は深鉢・浅鉢・壺・石器類である。また、 $A-8\cdotB-9\cdotB-13$ の各グリットからは線刻土器の一部と考えられる土器片が出土している。

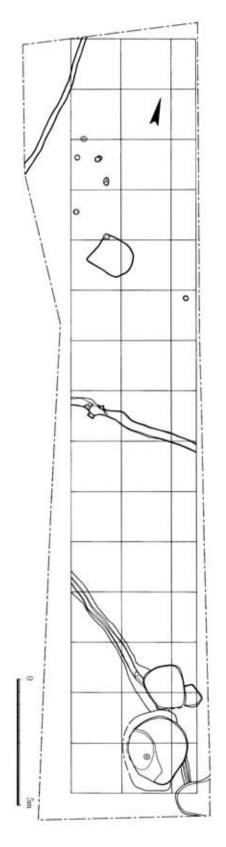
## Ⅲ 遺物

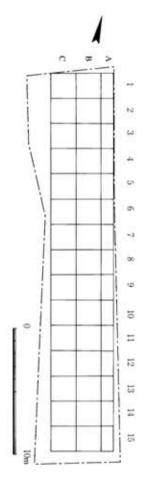
1区・Ⅱ区ともほとんどが包含層からの出土である。

## 1. I 区出土遺物 (Fig.5 · 9)

深鉢 (1~18) 1·2は一条突帯の深鉢で口縁部から胴部にかけての一部が残存している。1は広がりながら口縁部に向かって伸びており、内外面ともナデ調整が行われている。また突帯付近に炭化物の付着が見られる。2は口縁部と胴部の境で外反気味に立ち上がっている。調整は内面はナデ、外面はハケメである。3~12は口縁部の一部である。3~5·7~10·12は、二条突帯をもつ深鉢で、口縁部が内傾し胴部との境に屈曲が見られるものである。6·11は一条突帯の深鉢で、口縁部に向かって外傾するものである。3は口縁端部が外反気味で、調整は内面ナデ、外面貝殻条痕文である。8は口縁端部が外反気味で、調整は内面ナデ、外面ハケメである。12は口縁端部が外反気味で、調整は内面ナデ、外面ハケメである。12は口縁端部が外反気味で、調整は内面ナデ、外面ハケメである。12は口縁端部が外反気味で、調整は内面ナデ、外面にハケメ後ナデである。18は口縁部が内湾気味で、突帯に刻み目を持たないものである。内外面ともにナデ調整を行っている。13~16は胴部である。13·16は口縁部にかけて屈曲するもの、14·15はほとんど屈曲しないタものの2種類が考えられる。17は底部で、浅いレンズ状の窪みを持つ。粘土接合痕が残っており、オサエによる整形後ナデ調整が行われている。口縁部および胴部における突帯部の刻目は、指もしくはヘラ状工具によるものと考えられる。また、口縁部の突帯の位置についてであるが、端部より下がるもの2·4~6·9·10·18、端部につくもの1·3·7·8·11、端部に直接刻み目を施すもの12の3種類に

Fig.3 Ⅱ区 (平成6年度調査地区) 遺構配置図 (S=1/150) およびグリット図 (S=1/300)





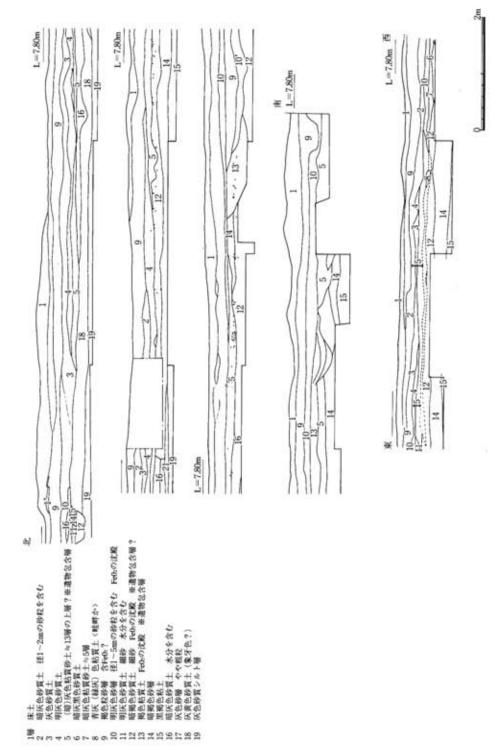


Fig.4 II 区土層図・ドットマップ (S=1/40)

分けられる。

壺(19~24)19~21·23は口縁部、22·24は底部である。19は口縁部が内傾し、端部が外反する。20は内傾しながら外湾する。21は内傾気味に上方へ伸び、口縁端部は外反し肥厚気味である。23は口縁部は内傾し、端部は折曲げて肥厚させている。22は底部から胴部にかけて広がりながら上方へ伸びる。24は平底の底部で、底部と胴部の境及び底部に沈線が廻る。20·21は丹途磨研土器で、外面及び内面口縁部が丹途されている。

浅鉢(25・26)25は体部と口縁部の境で「く」の字に折れ曲がり、口縁部は外反し、端部は 肥厚気味である。26は体部と口縁部の境で「く」の字に折れ曲がり、口縁端部が外反する。25・ 26は共に黒色磨研の精製土器である。

鉢型土器 (27・28) 体部は広がり気味に伸びており、口縁部は内傾気味である。28は体部から口縁部にかけて広がりながら上方へ伸びる。また、28は丹塗磨研土器で外面から口縁部内面にかけて丹塗されている。

土製品 (92) 表面に一部剥離が見られるが完形品で、最大長2.55cm・最大幅1.8cm・最大厚 0.9cm・重量2.7gである。左右非対象であり、頭の部分に穿孔が施されている。これは焼成前に 行われたものである。また、胎土中には砂粒を多く含んでいる。

石器 (93・94) 93・94は黒燿石製の打製石鏃である。93は完形で、最大長2.15cm・最大幅 1.45cm・最大厚0.25cm・重量0.6gである。基部に抉込みのない二等辺三角形である。94は先端部の約1/3および基部先端を欠損している。残存長1.35cm・最大幅1.8cm・最大厚0.25cm・重量0.5gで、基部には半円形の抉込みが見られる。

#### 2. II 区出土遺物 (Fig.6~9)

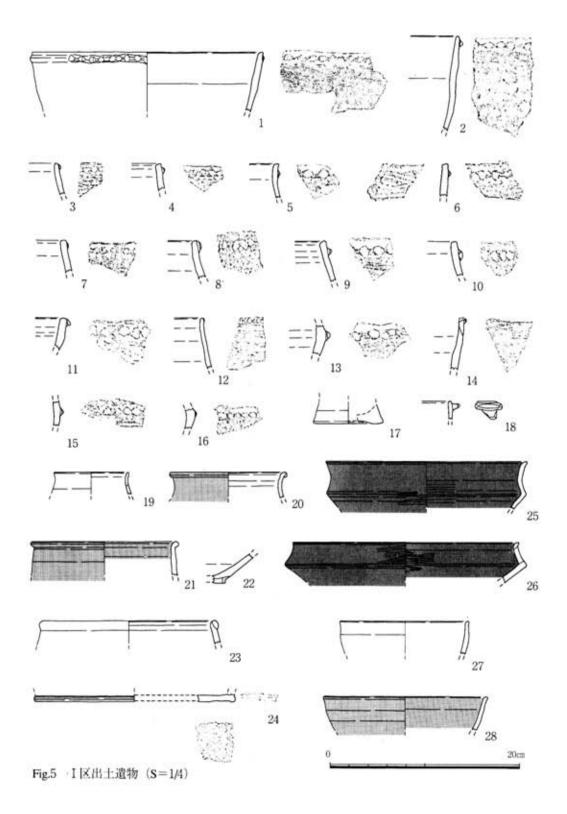
# (1) 不明遺構出土遺物

# SX005出土遺物

石器 (97) 安山岩製の石匙である。刃部の一部を欠損するがほぼ完形で、最大高3.7cm・最大幅7.2cm・最大厚0.7cm・重量11.9gである。つまみ部分に抉込みが見られる。

## (2) 包含層出土遺物

深鉢 (29~73) 29~47·66·67は口縁部である。29~31·33·35~37·40·41·44~46は、口縁部が内傾し、胴部の境で屈曲する二条突帯をもつ深鉢である。29は口縁部に粘土帯の接合痕が残る。30·31·33·40·41の口縁部は、内傾後端部が外反する。32·34·38·39·42·43は、口縁部に向かって外反気味に伸びる一条突帯の深鉢である。39·42については口縁端部に直接刻み目を入れている。47は胴部で屈曲する二条突帯の深鉢であるが刻み目はない。口縁部はほぼまっすぐに伸びており端部は尖り気味で外反する。66·67は突帯のない深鉢である。66は口縁部に補修孔が見られる。48~65は二条突帯をもつ深鉢の胴部である。48~53·56·62·65は胴部が屈曲しないもの、54·55·57~59·60·61·63·64は胴部が屈曲するものである。68~73は底部である。68·



69・70は凸レンズ状の底部になっており、71・73はほとんどレンズ化しておらず、72に至っては 平である。69は最も凸レンズ化している底部である。上方へ向かって開きながら伸びている。 69・70・73は粘土の接合痕が残る。69・70は内湾気味に上部へ向かって伸びている。71・72は開き ながら上方へ伸びる。また73は多少のレンズ化は認められるが、最も平底化している。口縁部 および胴部における突帯部の刻み目は、 区出土のものと同じく指もしくはヘラ状の工具によ

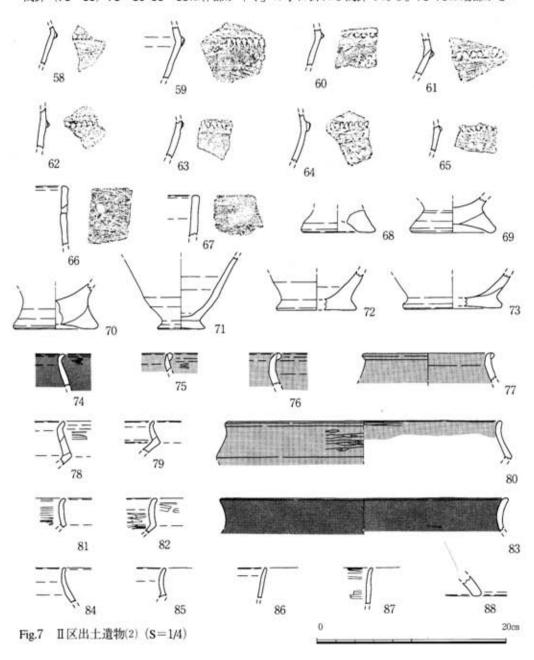


Fig.6 II区出土遺物(1) (S=1/4)

って施されていると考えられる。また、口縁部における突帯の位置についても I 区に同じである。端部より下がるもの29~31·34·38·47、端部につくもの32·33·35~37·40·41·43~46、端部に直接刻み目を施すもの39·42の3種類である。

壺 (74~77) 74の口縁部は内傾しながら伸び、端部の外反する黒色磨研土器である。75·76· 77は口縁端部が外反し、端部を折曲げ肥厚した口縁部を持つ丹塗磨研土器である。

浅鉢 (78~85) 78~80.83~85は体部が「く」の字に折れる浅鉢である。78.79は端部がきつ



く外反し、80·83·84の端部は緩やかに外反する。81·82·85は体部が屈曲し、口縁部は内傾気味 に伸び口縁端部が外反する。80は丹塗磨研土器、83は黒色磨研土器である。

鉢型土器 (86·87) 86·87は口縁部が外傾気味に上方へ伸び、端部は丸く収まる薄手の精製土器である。86の方がより薄手で、87は内面に磨きが入る。

高杯(88) 脚裾部の一部が残存しているのみである。内外面ともにナデ調整である。

線刻土器 (89~91) いずれも深鉢で、胴部の一部と考えられるが、実際は不明である。指かれている文様については、89の一部について鳥であることが考えられる。90・91については不明である。また、89・90は胎土や線刻のラインから同一個体の可能性が高い。91は先の2点と胎土・焼成が全く違い、線刻のラインも違うので別個体であると考えられる。このことから少なくとも2個体分の線刻土器が存在すると考えられる。

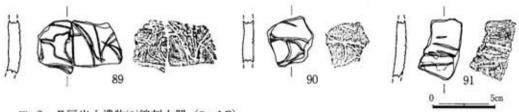


Fig.8 II 区出土遺物(3)線刻土器 (S=1/3)

石器 (95・96・98・99) 95は黒燿石製の打製石鏃で、基部が欠損している。残存長1.45cm・残存幅1.95cm・最大厚0.275cm・重量0.7gである。96は安山岩製の打製石器である。半円形で一部を欠損するが、全体に細かい調整が行われ刃部が形成されている。最大長1.35cm・残存2.4cm・最大厚0.3cm・重量1.1gである。98は玄武岩製の柱状片刃石斧で刃部が欠損する。残存長5.9cm・最大厚2.5cm・重量54.5gである。99は粘板岩製の石製円盤であるが1/3~1/4を欠損する。また粘板岩製であるため剥離が激しい。最大長5.2cm・残存幅4.0cm・最大厚0.65cm・重量16.3gである。

## N まとめ

今回の調査では明瞭な遺構はほとんど検出できず、包含層を主体とした調査であったため遺跡全体の性格を把握することは難しかったが、包含層中より山ノ寺期・夜白 I 期および夜白 II a 期と考えられる土器片が出土している。これらの包含層及び土器片が今回の調査で出土し、本遺跡が確認されたことにより、縄文時代晩期末もしくは弥生時代早期といわれる遺跡が、有明海沿岸部で初めて確認されたと考えられる。これまで佐賀県内において、いわゆる農耕開始期と考えられる遺跡の多くは、唐津市を中心とした玄界灘周辺が主体であった。しかし、近年の調査により有明海周辺部でも徐々に確認されてきつつあるものの、玄界灘周辺部と同時期と考えられる遺跡の大半は、山麓部を中心に存在しており平野部ではほとんど確認されていなかっ

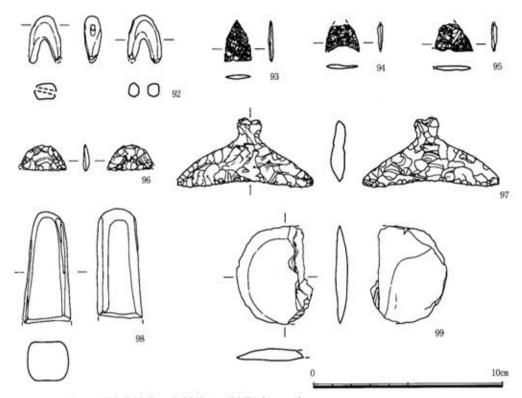


Fig.9 I区·Ⅱ区出土遺物 土製品·石製品 (S=1/2)

た。この遺跡が発見されたことにより、県東部域における農耕開始期の遺跡が、有明海沿岸の 平野部にも存在する可能性があることを示唆するものといえよう。遺物の中には、玄界灘周辺 の代表的遺跡の一つである菜畑遺跡とほぼ平行する時期の土器片も出土している。このことか ら併せて、吉野ケ里遺跡周辺における農耕開始時期が明らかになるきっかけの遺跡と考えるこ とができる。

土器の編年については本遺跡では、土器の出土点数が少ないことや破片がほとんどで全体の器形がわかるものが少ないため明確な分類はしにくい。そのため、ここでは遺跡内における一応の目安として深鉢のみ分類を行った。浅鉢・壺等他の土器については、出土個体数が少ないため今回は分類を行なっていない。

◎田手二本松遺跡内における深鉢の分類

(形態) I類=二重突帯を持つ甕で、口縁部が内傾し胴部が屈曲するもの
 □類=二重突帯の甕で口縁部がほぼまっすぐに立ち上がり胴部が屈曲しないもの
 □類=一条突帯の甕で胴部が屈曲しないもの
 Ⅳ類=突帯を持たないもの

(突 帯) A類=口縁部の突帯が端部より下がるもの

B類=口縁端部に斜めに突帯がつくもの

C類=口縁端部に水平につくカマボコ形のもの

D類=口縁端部に直接刻みを入れるもの

(刻み目) a類=指(爪)による刻み目

b類=半円形の工具による刻み目

c類=ヘラ状の工具による刻み目

d類=刻み目なし

	IΑ	IΒ	IC	D I	ΠA	ШΒ	IС	ΙD	ША	Шв	ШС	ШD	ĪVΑ	IVВ	IVC	ND
a	4·5·9 10·13 29·30 31		8·36 37·41						6·34 38	11						39-42
b		3														
c		45	44-46	12		35			1 -2	32-43						
d					47				18							

Tab.1 田手二本松遺跡深鉢分類表

# 参考文献

佐賀県教育委員会	1980	「大門西遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
佐賀県教育委員会	1981	「香田遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
佐賀県教育委員会	1984	「金立開拓遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第77集
佐賀県教育委員会	1986	「久保和泉丸山遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第84集
佐賀県教育委員会	1989	「礫石遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第91集
佐賀県教育委員会	1989	「老松山遺跡」	佐賀県埋藏文化財発掘調査報告書第92集
神埼町教育委員会	1983	「志波屋六本松遺跡」	神埼町埋藏文化財発掘調查報告書第9集
唐津市教育委員会	1982	「菜畑遺跡」	唐津市文化財調查研究報告書第5集
佐賀県教育委員会	1996	「東名遺跡」	佐賀市文化財調查報告書第77集
佐賀県教育委員会	1997	「徳永遺跡Ⅰ」	佐賀市文化財調查報告書第86集
福岡県教育委員会	1984	「石崎曲り田遺跡」上・中	・下巻 今宿バイバス関係調査報告書第9集
福岡市教育委員会	1976	「板付遺跡」	福岡市埋藏文化財調查報告書第35集
福岡市教育委員会	1993	「雀居遺跡I」	福岡市埋藏文化財調查報告書第232集
福岡市教育委員会	1995	「雀居遺跡Ⅱ」	福岡市埋藏文化財調查報告書第406集
福岡市教育委員会	1995	「雀居遺跡Ⅲ」	福岡市埋藏文化財調查報告書第407集
長崎県教育委員会	1997	「黒丸遺跡遺跡Ⅱ」	長崎県文化財調査報告書第132集
佐世保市教育委員会	1980	「宮の本遺跡 昭和55年」	度」 佐世保市埋藏文化財調査報告書
百人委員会	1973	「山ノ寺梶木遺跡」	百人委員会埋藏文化財報告書第1集
山崎純男	1980	「弥生文化成立期におけ	る土器の編年的研究」
			鏡山猛先生古希記念古文化論攷
山崎純男	1987	「北部九州における初期	水田」 九州文化史研究紀要32号
藤尾慎一郎編	1987	「唐津字木汲田遺跡における1984年度の	测查(二) 九州文化史研究紀要32号
藤尾慎一郎編	1987	「福岡市早良区有田七前田遺跡1985年	段經濟於 九州文化史研究紀要32号
藤尾慎一郎	1990	「西部九州の刻み目突帯	文」 国立歷史民俗博物館研究報告書26集
帝塚山大学	1993	「水田を考える」	

Tab.2 遺物観察表

口径・底径()は復元径、器高の()は残存値を示す。

Fig.	PL 写真番号	県 遺物 登録番号	出土地点	種 別	器種	口径	景(cm 器高	底径	胎土	色調	外器面	整内器面
5-1		97000960	Ι区	柯文土器	売	24.5	(6.4)	MALE	1~3mの細粒を 多く含む	黑褐	口縁部に刻目突帯、ナデ	+ 7
-2	-2	97000959	ΙK	縄文土器	拠		(10,2)		1~3mの細粒を 含み、砂まじり	外: 別規に、にお い視まじり 内: 別格	口縁部に刻目突着 接/接	ナデ
-3	-3	97000927	IK	縄文土器	変		(3.3)		1~2回の細粒を含む	明黄褐	口縁部に刻 目突帯条痕	ヨコナ
-4	-4	97000930	1 🗵	縄文土器	売		(2.6)		1〜2mの細粒を 少量含む	黑椒	口縁部に刻目突要 木による擁痕	ヨコナ
-5	-5	97000943	ΙK	縄文土器	甕		(3.6)		1~3mの細粒を 少量含む	黑褐	口縁部に刻目突帯 木による機痕の 上をヨコナデ	ヨコナ・
-6	-6	97000936	118	縄文土器	瓷		(3.4)		細粒をあまり含まない	作:黑龍,內:電灰	口縁部に劉目突帯 横方向の木の接痕	貝殻条4
-7	-7	97000929	ΙK	縄文土器	亮		(3.3)		1〜2mの細粒を 多く含む	外:集内:にお・橙	口縁部に刻目突着 木による推復	ナデ
-8	-8	97000955	ΙK	縄文土器	瓷		(3.9)		1~3mの細粒を含む	外: 其集内: 甲酸灰	口縁部に刻目突帯 横方向の本の擦痕	ヨコナヤ
-9	-9	97000951	ΙK	構文土器	瓷		(4.2)		1〜4mの細粒を 多く含む	外:黑風舟:橫灰	口縁部に刺目突着 木による排痕	木による握
-10	-10	97000926	1 🗵	縄文土器	瓷		(3.6)		1〜2mの細粒を 多く含む	川 報	口縁部に到目突帯 横方向の木の接痕	ヨコナ・
-11	-11	97000928	Ι区	純文土器	遊		(3.5)		1m位の細粒をわずか に含む、精製土器	無粉	口縁部に刻目突寄 ヨコナデ	ョコナ・
-12	-12	97000952	Ι区	縄文土器	瓷		(5.3)		ほとんど細粒を 含まない精製土器	外:蜀灰、内:灰斑	口縁部に割目突寄 水の種類の上をヨコナア	ヨコナ
-13	-13	97000931	ΙX	模文土器	瓷		(3.2)		1〜2mの細粒を 多く含む	外;赤蝎、内;围蜒	口縁器に頻目突着 木による擦痕	ヨコナ・
-14	-14	97000942	ΙX	縄文土器	売		(5.5)		1~2mの細粒を含む	所:母孙戴内:赏墓	口縁部に割目突帯 木の擦痕の上を ヨコナデ	木の擦痕の をヨコナナ
-15	-15	97000932	ΙX	縄文土器	軣		(2.6)		1〜3mの細粒を 多く含む	外:金屬、内:溫屬	制部に刺目突否 横方向の木の指痕	木による指
-16	-16	97000944	1 🗵	縄文土器	拠		(2,2)		1~3mの細粒を含む	M 16	制部に刺目交情 木の擦痕の上を ヨコナデ	ヨコナ
-17		97000940	1区	縄文土器	蹇		(2.6)	7.4	1〜5mの細粒を 多く含む	外:赤褐	ナデ	不明(欠損の)
-18	4-18	97000956	ΙK	縄文土器	拠		(1.9)		細粒をほとんど 含まない。単数±高か?	件:京島内:明朝	磨滅して不明	ヨコナ
-19	-19	97000939	ΙX	縄文土器	壷	(10.7)	(2.3)		lm以下の細粒を夕量 含む、精製土器か?	赤褐	ヨコナデ	ヨコナ
-20	-20	97000953	ΙK	縄文土器	壷	(12.0)	(2.7)		細粒をほとんど 含まない、特製土器		丹塗磨研 (ヘラミガキ)磨滅	ナデ? (丹途?
-21	-21	97000957	ΙK	縄文土器	壷	(13.4)	(4.3)		細粒をほとんど 含まない、特製土器	外・方ともに水 内の円面分のよけた所 用規模	横方向のヘラミガキ 丹が残る	ナデ
-22		97000947	ΙK	縄文上器	浅鉢		(2.7)		細粒をほとんど 含まない、精製土器	M. 385	横方向の木 による擦痕	木の複痕後、ナ

Fig.	PL	県遺物	10 1 16 Ar	ee mi	nn 26	法	量 (cm		46 4	Zr. 1987	調	歌
香香号	写真番号	登録番号	出土地点	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外器面	内器值
5-23	4-23	97000937	Ι区	縄文土器	壺	(19.0)	(2.3)		1~3mの細粒を 多く含む	明赤褐	ヨコ方向の ヘラミガキ (磨滅)	ヨコナテ
-24		97000948	ΙK	総文土器	查?		(0.8)	(21.4)	1~30mの細粒を含む	外:にぶい報 内: 灰褐	ヘラミガキ	ナデ
-25	4-25	97000954	ΙK	縄文土器	浅鉢	(21.2)	(5.0)		細粒をほとんど 含まない、精製土器	黒 褐	□重基、ヘラミガキ 製基、権力向のヘラナデ	横方向の ヘラナラ
-26	-26	97000938	118	縄文土器	浅鉢	(23.8)	(4.3)		1~2mの細粒を 少量含む、精製土器	黑褐	口類部、ヘラミガキ 横方向の木の推復	横方向の ヘラミガ
-27	-27	97000933	ΙK	純文土器	碗	(13.5)	(3.5)		精製土器	赤褐	ヨコナデ	ヨコナラ
-28	-28	97000949	ΙK	縄文土器	碗	(17.4)	(3.6)		1〜2mの細粒を 多く含む	外:非 方:[[]表:[]]图模	横方向のヘラミ ガキ後、丹塗り	ヨコナデを 丹塗り
6-29	-29	97000992	Ⅱ [KA-14	縄文土器	軣	(22.2)	(5.4)		1〜3mの細粒を 多く含む	外:黑褐 内:明褐灰	口縁部と馴然 に刻目突帯、 揮痕の上をナデ	ナデ
-30	-30	97000989	II [≾A-10	縄文土器	軣		(2.5)		1〜5mの細粒を 多く含む	外:黒褐 内:にぶい橙	口縁部に刻目突帯 ナーデ	ナデ
-31	-31	97000976	11 KC-9	縄文土器	売		(3.1)		1〜3mの細粒を 多く含む	外:明黑褐 内:橙	口縁部に刻目炎帝 横方向の擦痕	ナデ
-32	-32	97000961	Ⅱ区B-5	縄文土器	軣	(15.4)	(3.5)		1~3mの複粒を 少量含む	明褐灰	口縁部に刻目突帯 ナ デ	ナデ
-33	-33	97000964	II [≮B-10	縄文土器	拠		(3.5)		1〜2mの総粒を 少量含む	外:灰黄褐 内:黑褐	口縁部に刻目 突帯ヨコナデ	横方向の 木の擦
-34	-34	97001008	II (ZNo19	縄文土器	瓷		(5.1)		1〜3皿の細粒を 多く含む	外:赤灰 内:黑褐	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-35	-35	97001027	II IXNo77	縄文土器	拠	(22.4)	(4.0)		1~3mの細粒を含む	灰褐	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-36	-36	97000981	Ⅱ 区C-11	縄文土器	斃		(2.4)		1〜5mの細粒を 多く含む	黑椒	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-37	-37	97000987	Ⅱ [KA-8	縄文土器	光		(2,2)		1~3世の運転を含む	無褐	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-38	-38	97000996	ПK	縄文土器	瓷		(2.8)		1〜5㎜の細粒を 多く含む	外:灰褐 内:灰白	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-39	-39	97000994	пк	縄文土器	拠		(6.0)		1~4mの細粒を 多く含む	外:にぶい赤斑 内:灰斑	口縁部に刻目突着 撤棄の上をナデ	ナデ
-40	4-40	97000966	Ⅱ⊠B-10	縄文土器	喪		(3.7)		1~3mの概粒を 多く含む	外:黑褐 内;明褐灰	口様部に刻目突帯 貝殻条痕	ナテ
-41	-41	97001019	II KNo19	縄文土器	奥		(2.6)		1~3mの細粒を 少量含む	外:明褐灰 内:黑褐	口縁部に第日突帯 ナデ	ナテ
-42	-42	97000962	II⊠B-7	縄文土器	喪		(2.2)		1〜2mの雑粒を 多く含む	無掲	口縁部に 刻目ナデ	ナデ
-43	-43	97000995	IIK	縄文土器	蹇		(3.2)		細粒をあまり含まない	外:黑褐 内:明褐灰	□縁怒に刻目交帯 ナデ	ナデ
-44	-44	97000993	Ⅱ 区A-14	縄文土器	瓷		(5.4)		最終をほとんど含まない	外:にぶい赤褐 内:明灰褐	口縁部に割目交帯 ナ・デ	ナデ

Fig.	PL	県遺物	出土地点	種別	器種	法	量 (cm)		粉土	色調	淵	整
可香香号	写真番号	登録番号	加工地总	tm 50	na 190	口径	器高	底径	60 T.	巴爾	外器面	内器
6-45	4-45	97000991	Ⅱ 区A-14	縄文土器	瓷		(4.8)		1~2mの細粒を 多く含む	外:にぶい掲 内: 程	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-46	-46	97000982	II ⊠C-10	縄文土器	拠		(2.7)		細胞をあまり含まない	外:明赤褐 内:灰白	口縁部に刻目 突帯 ナデ	ナデ
-47	-47	97000967	II ⊠B-10	弥生土器	亮		(4.8)		細粒をほとんど 含まない精製土器		口縁部と朝部 に突帯 ナデ	+ 7
-48	-48	97001021	II  KNo46	縄文土器	軣		(7.0)		1~2回の複粒を含む	外:黑褐 内:灰黄褐	側部に刻目突帯 擦痕の上をナデ	+ 7
-49	-48	97001028	II (XNo60	縄文土器	売		(4.0)		1~2回の悪粒を含む	無極	胴部に刻目突管 ナデ	+ 9
-50	-50	97000969	∏⊠B-11	縄文士器	軣		(2.6)		lm校の細粒を含む	外:赤褐 内:黑褐	刷部に刻目突着 ナデ	ナラ
-51	-51	97001013	II [X]No25	縄文土器	売		(3.0)		1~2mの細粒を 多く含む	外:黒褐 内:褐灰	胴部に刻目突帶 ナデ・擦痕	+ 7
-52	-52	97000983	II 🗷 C-10	縄文土器	軣		(3,3)		細胞をあまり含まない	外:褐灰 内:黑褐	刷部に刻目突帯 条 痕	+ 7
-53	-53	97001018	II [8]No40	縄文土器	売		(4.0)		細粒を多く含む	外:黒褐 内:灰	制部に刻目炎帝  擦痕	+ 7
-54	-54	97000970	Ⅱ 区B-13	縄文土器	斃		(2.0)		職権をほとんど含まない	黑褐	開部に刻目突帯 ナデ	ナラ
-55	-55	97000977	I⊠C-9	縄文土器	瓷		(3.7)			外:黒褐 内:淡橙	胴部に刻目突帯 ナデ	+ 9
-56	-56	97001000	ПХ	縄文土器	軣		(2.6)		細粒をあまり含まない	外:淡橙 内:明褐灰	制部に刺目突帯 ナデ	ナラ
-57	-57	97001007	II €No8	縄文土器	变		(5.5)		1~2mの細粒を 多く含む	淡黄橙	網部に刻目突帶 ナ・デ	+ 9
7-58	-58	97000997	IIK	縄文土器	瓷		(4.2)		1~2mの細粒を 多く含む	外:灰蜀 内:にぶい橙	刷部に刻目突帯  搾痕	ナデ
-59	-59	97000971	II ⊠B-13	縄文土器	类		(5.7)		lm以下の細粒	外:にぶい掲 内:液復	刷部に刻目突帯  擦-痕	ヨコナ
-60	-60	97000965	II ⊠B-10	縄文土器	拠		(4.0)		Im以下の細粒 を少量含む	灰白	開部に刻目炎帝 木による排痕	ナラ
-61	-61	97001011	II [XNo23	縄文土器	拠		(4.0)		細粒をあまり含まない	外:視灰 内:淡黄橙	副部に刻目突帝 ナデ	ナラ
-62	-62	97000998	IIX	縄文土器	軣		(4,4)		細胞をあまり含まない	外:橙 内:淡橙	制部に刻目突帯 ナデ	+ 9
-63		97000984	Ⅱ 区C-10	縄文土器	拠		(4.0)		細胞をあまり含まない		耕部に刻日交帯 ナデ	+ 7
-64	4-64	97000978	II ⊠C-9	縄文土器	类		(5.1)		1~5mの細粒を 多く含む	外:黑褐 内:灰白	胴部に刻目突帯 ナデ	ナラ
-65	-65	97000999	ПК	縄文土器	軣		(2.8)		1〜2mの細粒を 多く含む	外:にぶい赤褐 内:淡橙	制部に刻目突帯 擦痕の上をナデ	ナテ
-66	-66	97001032	II (KNo31	縄文土器	拠		(6.1)		1~3mの細粒を 多く含む 砂まじり	外: 黒髪 内: にぶい黄橙	ナデ(穿孔有)	ナテ

Fig.	PL.	県遺物	424.00	46 01	no se	法	量 (cm	)	87. 1.	h. su	34	整
省香香号		登録番号	出土地点	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	外器面	内器面
7-67	4-67	97001024	II [XNo56	純文土器	瓷		(4.2)		1~4mの細粒を 多く含む	淡黄橙	ナデ	ナデ
-68	4-68	97001022	II KNo47	縄文土器	売		(2.4)	(7.8)	1〜2mの細粒を 多く含む	外:明赤冕 〈12み部:黒褐	ナデ	不明(欠損の為
-69	-69	97001002	пк	縄文土器	变		(3.4)	(9.0)	1〜3mの細粒を 多く含む	外:程、内:灰白 底部:開視灰	ナデ	ナデ
-70	-70	97001026	II IXNo57	縄文土器	瓷		(4.1)	(9.1)	1〜5mの細粒を 多く含む	外:明赤褐 内:黑褐	ナデ	ナデ
-71	-71	97000980	Ⅱ 区C-9	縄文土器	类		(7.5)	5.0	lm位の観粒を含む	外:灰褐 内:褐灰	ナデ	ナデ
-72	-72	97001012	II [XNo24	縄文土器	瓷		(3.8)	(8.5)	1~2mの細粒を 多く含む	外:にぶい程 内:液程	ナデ	ナデ
-73	-73	97001010	II (≤ №22	縄文土器	瓷	*	(3.4)	(10.4)	1~2回の報覧を含む	外:にぶい程 内:浅黄橙	粗い擦痕ナデ	ナデ
-74	-74	97001003	II ⊠SX-05	縄文土器	鼓		(3.4)		1~3mの細粒を 多く含む	Ж	ヘラミガキナデ	ナデ
-75	-75	97000973	II ⊠B-13	縄文土器	螫		(1.6)		機能を耐ど含まない 機能士器	外:浅黄橙 内:灰白	ヘラミガキ 丹が残る	ヘラミガキ (磨滅) 丹が残る
-76	-76	97001005	IIK	縄文土器	遊		(3,3)		1~3mの細粒を 少量含む	外: 丹部分一非 包は外,内: 灰白	ナ デ (丹が残る)	ナデ
-77	-77	97000979	Ⅱ 区C-9	縄文土器	遊	(13.4)	(2.6)		細粒をあまり含まない 機製土器	赤	ナデ後 丹逾り	ナデ後 丹塗り
-78	-78	97001029	II [KNo68	縄文土器	浅鉢		(4.6)		1~2mの細粒を 含む砂まじり	M #8	ヘラミガキ (磨滅)	ヘラミガ <sup>は</sup> (磨滅)
-79	-79	97000941	Ⅱ区表採	縄文土器	浅鉢		(3.3)		1m以下の細粒 少量含む (精製土器)	無褐	横方向のヘラミガキ + の木による接痕	横方向への
-80	-80	97001015	II (KNo36	縄文土器	浅鉢	(29.2)	(4.1)		規程をほと人ど含まない 精製土器	外:円部分-非 その他内・外:別義	ヘラミガキ (丹が残る)	ヘラミガキ
-81	-81	97001017	II ⊠№39	縄文土器	浅鉢		(3.1)		1~3mの複粒少量含	外:矩灰表 内:におい責程	ヘラミガキ (磨滅)	ヘラミガ: (磨滅)
-82	-82	97001031	II ⊠No74	縄文土器	浅鉢		(3.7)		機能をほとんど含まない 精製土器	にぶい褐	横方向の ヘラミガキ	横方向の
-83	-83	97000968	II ⊠B-10	縄文土器	浅鉢	(30.4)	(3.4)		細粒をほとんど含まない 相似土谷	M. 148	横方向の ヘラミガキ	横方向の ヘラミガキ
-84	-84	97000986	Ⅱ 区C-10	縄文土券	浅鉢		(3.5)		概粒をわずかに含む	M #6	ヘラミガキ	ナデ
-85	-85	97001030	II ENo69	縄文土器	浅鉢		(2.9)		細粒があまりない 精製土器	にぶい掲	ヘラミガキ	ナデ
-86	-86	97000972	II ⊠B-13	縄文土器	驗		(3,2)		細粒をほとんど含まない 特別土益	橙	ナデ	ナデ
-87	-87	97001009	II [KNo21	縄文土器	额		(3.8)		1〜4軍の細粒を 多く含む	外:赤褐 内:黒褐	ナデ	横方向の
-88		97001004	IK	縄文土器	高坏		(2.1)		1-4mの細粒を 多く合む	にぶい黄橙	ナデ	ナデ

# 薬師森遺跡

所在地:佐賀県佐賀市久保泉町大字薬師丸字薬師森

# 薬師森遺跡

# I. 歴史的環境と遺跡の概要

## 1. 歷史的環境

薬師森遺跡の所在する佐賀市や、その周辺に所在する神崎町・千代田町・久保田町・三日月 町では近年大規模開発や宅地開発が進んでいる。そのため、これまで開発の対象外であった抵 地にも開発の手が及んでおり、以前から存在が確認されていた遺跡のほかに新たに多くの遺跡 が発見されている。このことを踏まえつつ周辺の遺跡に見にいきたい。

旧石器時代の遺跡は、三日月町の老松山遺跡、神埼町の船塚遺跡があげられる。老松山遺跡は、後期のサヌカイト製の尖頭器を主体とした遺物をもつ遺跡である。遺構は明瞭なものはないが、大量の石核や剥片が出土していることから、石器工房の可能性が考えられる遺跡である。船塚遺跡は、集石遺構や包含層が検出されており、包含層からはサヌカイト製ナイフ形石器を主体として200点を超える石器が出土している。

縄文時代の遺跡は、ほとんどの遺跡が山麓部に集中して存在が確認されているが、近年の調査により平野部においてもその遺跡の存在が確認されている。まず、早期の遺跡として佐賀市の東名遺跡があげられ、ここでは集石遺構が検出されている。遺物は塞ノ神式土器が出土しており、これに伴い人骨が出土している。後期〜晩期の遺跡としては、佐賀市では大門遺跡・金立開拓遺跡・鈴熊遺跡・丸山遺跡・礫石遺跡・西原遺跡、三日月町では石木中高遺跡があげられる。大門遺跡は後期末〜晩期末の遺跡で、主な遺構として配石遺構が検出されている。金立開拓遺跡は後期末〜晩期初頭の遺跡で、ここでは集落と共に喪棺墓群が検出されている。鈴熊遺跡は晩期前半、丸山遺跡・礫石遺跡は晩期末の支石墓を主体とする墓地群である。また、礫石遺跡では支石墓のほか壺棺墓・甕棺墓が出土している。西原遺跡は甕棺墓を主体とした遺跡である。これらの遺跡は山麓部に立地する遺跡である。石木中高遺跡は、平野部に立地する晩期末の遺跡で、遺物包含層及び自然流路が検出され、多くの突帯文土器が出土しており良好な資料となっている。また、流路中から土偶の一部が出土している。早期〜中期にかけての遺跡については調査例は少ないが、後期〜晩期にかけては平野部の開発の増加とともに調査例は増加している。

弥生時代になると丘陵部から平野部にかけて広範囲に亘り遺跡の分布が見られ、遺跡も増加 し、集落及び墓域の発達が見られる。佐賀市の鍋島本村南遺跡・津留遺跡では、墓域の発達・ 変遷を見ることができる。鍋島本村南遺跡は、甕棺墓・土壙墓を主体とした遺跡であり、副葬 品として細形銅剣・多紐細文鏡等の青銅製品の出土が見られる。このほか細形銅剣鋳型や石製 把頭飾が出土している。墓地群以外には土坑・井戸等の遺構が検出されている。津留遺跡は前 期~中期の甕棺墓を主体とした墓域で、無文土器と木棺の併用型、多連棺(三連棺・四連棺・ 五連棺)等の特異で多様な埋葬形態を見ることのできる遺跡である。

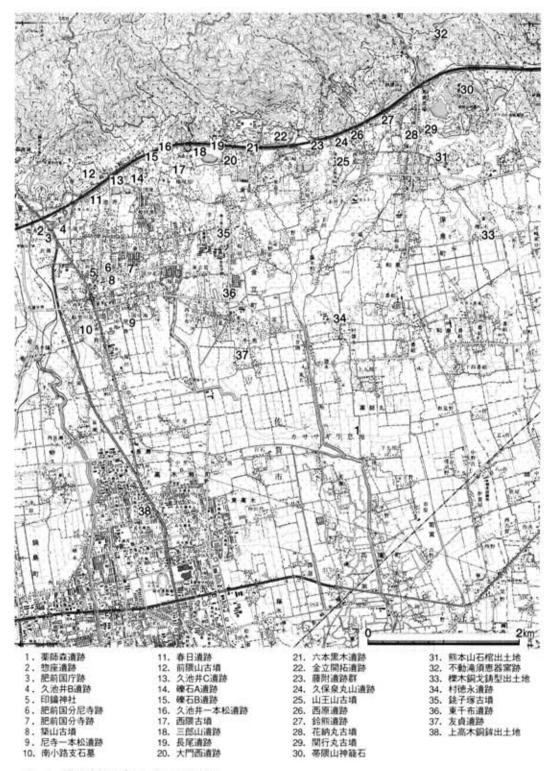


Fig.1 周辺遺跡分布図 (S=1/50000)

古墳時代は県内でも各地に古墳が築かれている。4世紀の古墳は、佐賀市の銚子塚・関行丸 古墳等の前方後円墳に始まり、同じく佐賀市の丸山古墳や周辺山麓部の群集墳へと続いていく。 装飾古墳としては佐賀市の西隈古墳があげられる。丸山古墳からは琴柱形石製品が出土してい る。また、集落遺跡は佐賀市の琵琶原遺跡等があげられる。琵琶原遺跡では弥生時代末~古墳 時代初頭の方形住居が検出されている。

古代・中世は肥前西海道の発達とともに肥前国府・郡衙といった役所や駅等の施設が見られるようになる。これに付随して佐賀市の徳永遺跡、神埼町の枝ヶ里一本松遺跡、大和町の肥前国府跡の様な官衙や集落が見られるようになる。大和町では国分寺や国分尼寺のような寺院の存在も確認されている。徳永遺跡は11~12世紀にかけての集落遺跡で、方形区画溝によって区切られた屋敷地や、畝状の畑や、土坑・井戸等の生活に関連した遺構が検出されている。土坑中からは須恵器・土師器にまじり中国からの輸入陶磁器が出土している枝ヶ里一本松遺跡は、東側にある櫛田神社に関連する遺跡と考えられており、ここからは多量の貿易陶磁器が出土している。肥前国府については、これまで県によって三度の調査が行なわれ多くの建物群を検出している。その後も大和町によって補足調査が行なわれている。これらの遺跡は、平野部もしくは河岸段丘上に存在する遺跡である。山麓部には帯隈山神籬石や山城といった軍事施設が見られる。

#### 2. 遺跡の概要

薬師森遺跡は、佐賀市久保泉町大字薬師丸字薬師森に所在する。遺跡周辺は、巨勢川によって形成された標高約3.0mの沖積平野であり、近年まではこの付近一帯は遊水地であったことから、周辺で最も低い位置に立地していることがわかる。また、調査地区周辺にはクリークが縦横に走り、そのためか湧水点も高く水捌けも悪い。確認調査・本調査いずれも水量の一番少ない冬期に行っているが、現状水田面から50~60cm程度で水が滲み出し、70cmを越えると水量が増加する。

今回の調査では、縄文時代晩期末もしくは弥生時代早期と考えられる溝状遺構1条・遺物包含層及び近世以降と考えられる不明遺構を検出している。また、遺物は深鉢を中心として浅鉢・壺等の土器類及び石製品が出土している。遺跡の範囲は、確認調査の結果と考え合わせると今回の調査区は遺跡の南端である可能性が高く、遺跡は北側に展開しているものと考えられる。

# Ⅱ 遺 構

今回の調査ではA-1~M-3までの39グリットを設定し、必要に応じて拡張区を設定した。

## 1. SXOO1不明遺構

この遺構は、ほぼクリークと平行しており、その一部が調査区の北側に掛かっている。残存幅約1m・深さ約0.6~0.9mである。出土した遺物は、縄文晩期末~弥生時代初頭の土器片・石器類及び陶磁器片が混在して出土している。これらのことから、この遺構は近世遺構の掘削に



Fig.2 薬師森遺跡調査区位置図 (S=1/1000)

よるものと考えられる。遺構の性格は不明であるが、クリークの可能性も考えられる。

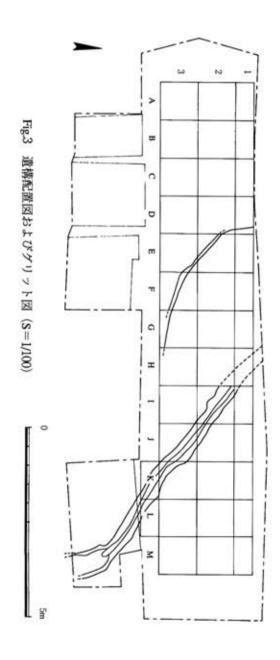
## 2. SD002溝状遺構

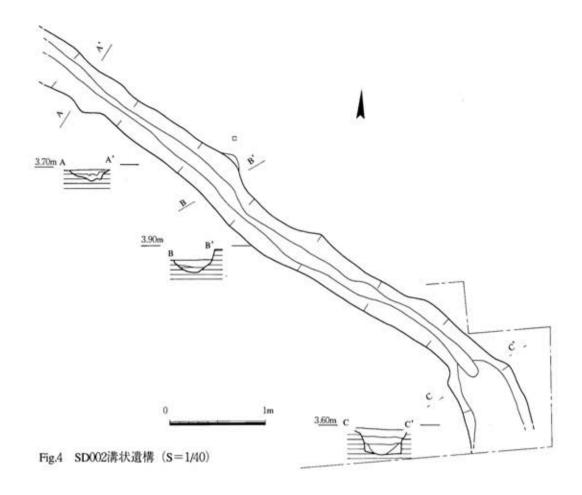
この遺構は、調査区内を北西~南東方向に伸びており、幅約0.4~0.6m・深さ約0.2~0.6m程度 が残存し、断面はU字形である。また、溝内から土器片及び黒耀石・サヌカイトが出土してい る。これらの遺物から溝の埋没時期は、縄文時代晩期末~弥生時代初頭と考えられる。

## 3. 遺物包含層

遺物包含層の範囲は、 $A-1-E-1\cdot A-2-F-2\cdot B-3-G-3$ 及びC-Fグリットの拡張部分にかけて拡がっている。また、D-1-G-3にかけて投落ちが存在し、ここから多くの土器片及び石器類が出土している。

遺物包含層は、第2層の黒褐色粘質土層、第3層の黄灰色粘質土層下層、第4~5層青灰色 粘質土~青灰色砂層の3面を確認している。





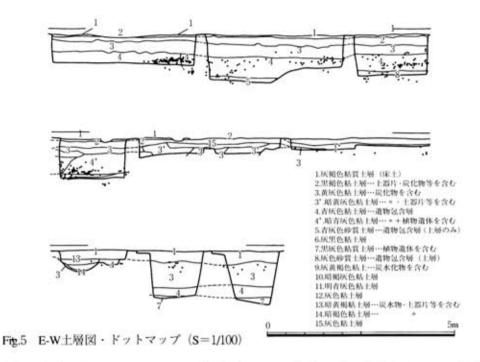
第2層…やや摩耗した突帯文土器・石器類のほか弥生土器・土師器・陶磁器片が出土している。ここでは径 $1\sim3$  mm程度の粗砂が混じる。また、この面でSD001溝状遺構を検出している。

第3層・3'層…突帯文土器類及び石器類が出土する。また、この面でSD002溝状遺構 を検出している。

第4~5層…突帯文土器類・石器類・木製品及び植物質が出土する。

第4層については調査区全体に見られるが、第5層は径0.5~3.0m程度の砂粒で構成されており、D-1~G-3グリットの段落ち部のみに見られるものである。それ以外のグリットの4層以下は、灰黒色砂層の分布が見られる。この砂層には遺物は含まれないが、K-1・L-2グリットで植物質(木片)を確認している。

C-3 グリットでアシ類と思われるものが $1\sim1.5$ cmの厚さで堆積している。ただしこれは、狭い範囲に限られていることから人為的に投棄された可能性も考えられる。



また、包含層中の $D-2 \cdot E-2$ の境界部分において杭列の一部が検出されている。杭列は、  $3 \, \text{層} \sim 4 \, \text{層}$  不変換する位置から段落ちに向かって伸びており、径約 $10 \, \text{cm} \cdot \text{長さ約} 90 \sim 100 \, \text{cm}$ 、径  $3.0 \, \text{cm} \cdot \text{長さ60} \, \text{cm}$  の  $2 \, \text{種類の杭と}$  、それに厚さ約 $1.5 \, \text{cm}$  の横板を組み合せて作られている。杭および板の一部に加工痕が見られる。

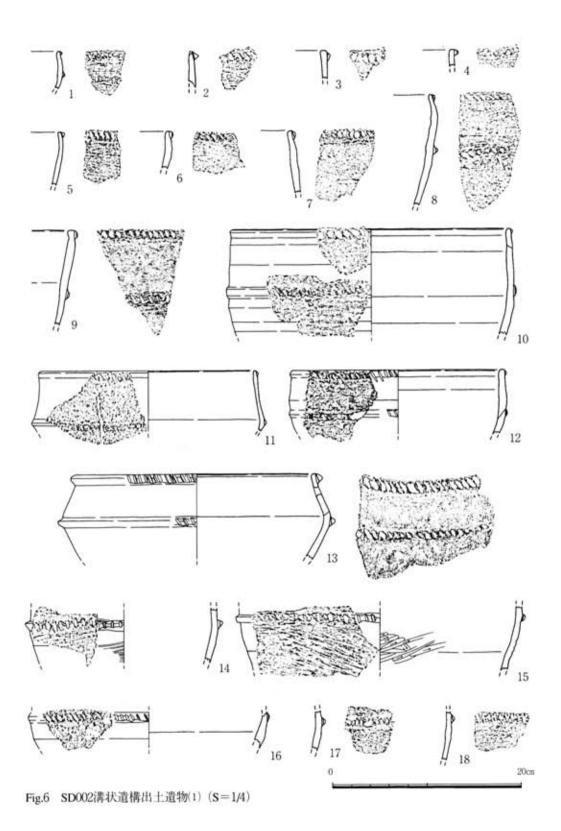
#### Ⅲ 遺物

遺物の大半は包含層よりの出土であるが、SD002溝状遺構からも刻み目突帯文を持つ深 鉢を主体として浅鉢・壺が出土している。また包含層については、同じく刻み目突帯文の深鉢 を主体として、浅鉢・壺等の土器類や土製品・石製品等が出土している。

## 1. SD002溝状遺構出土遺物 (Fig6·7·13)

ここからは深鉢・壺・浅鉢・碗・管玉が出土している。

深鉢 (1~26) 1~13は口縁部である。1は小型の深鉢である。全体にナデ成形がされており、器壁も薄く丁寧なつくりの黒色土器である。2~7は口縁部のみであるが二重突帯の深鉢と考えられるものである。2・4は肩部から口縁部にかけて直線的に伸び、3・7は内傾、5・6は内湾気味である。8は口縁部が内傾し、9は肩部から口縁部にかけて外傾するものである。10・12は肩部から口縁部にかけて直線的に伸び、肩部の屈曲は緩い。11・13は肩部から口縁部にかけて内傾し、肩部の屈曲はきつい。14~18は胴部で口縁部を欠くが、いずれも肩部の屈曲は緩い。15は外面に条痕文、内面にはミガキ成形されている。19~26は底部である。19・22は裾広がりで、レン



-151-

ズ状の上げ底である。20・23・25・26は同じく裾広がりではあるが平底である。20・22・26については粘土の接合痕が明瞭に残る。21・24は底部から胴部にかけて直線的に開く平底である。24 は外面は底部付近までミガキが施され、内面は丁寧なナデ成形がなされている。また回転台の木の葉痕が残る。

壺 (27~29・35) 27・28は口縁部が未発達で端部は貼付けである。29は口縁部が発達しており端部は面取りされている。35は口縁部の内傾する無頸壺である。つくりは比較的丁寧で器壁も薄く、内外面ともにミガキが施される黒色磨研系の土器である。

浅鉢(30~33)30·31は肩部が屈曲し、31は端部が外反する。32は端部及び屈曲部に刻み目 のない突帯を持つものである。33は肩部に稜を持ち、口縁部はやや内傾する。底部は上げ底であ る。

碗(34) 口縁端部は尖り気味で体部はやや厚手である。つくりはやや荒い。

管王 (128) 長さ1.7cm・幅0.6cm・孔径0.2cm・重さ0.8gである。碧玉製で、ほぼ完形であるが表面 を一部欠損する。

# 2. SX001不明遺構出土遺物 (Fig.13)

石製品 (146·147) 146は小形柱状片刃石斧 (石鑿) の刃部である。基部を欠くため全体は不明であるが、残存長3.2cm・最大幅2.6cm・最大厚0.85cm・重さ140gで石材は流紋岩製である。147は欠損が大きいため器種は不明である。石材は緑泥片岩である。残存長5.5cm・最大幅3.3cm・重量21.6で片面が剥離しているため厚みは不明である。

## 3. 包含層出土遺物 (Fig.8~14)

ここからは深鉢・浅鉢・鉢・壺・管玉・石製品・土製品・木製品が出土している。

深鉢(36~96)36~43·45~71は口縁部である。口縁部から胴部にかけて外面のほぼ全体に 条痕文を持つもの36~38·40~43、屈曲部の突帯以下で同じく条痕文が見られるもの39、また 突帯の刻み目はヘラ状の工具により強く押し引きしたものである。45·46については外面の成形 はナデであり、突帯も貼付けた部分がやや長くなり、刻み目は小口もしくは工具によりD字状 に押し引きしたものである。47~71は口縁部から肩部にかけて残存するものである。刻み目に ついては5種類に分けられる。口縁部及び胴部に直接刻み目をつけるもの47、大きい円形62、 小さい円形50·67、D字49·54、細い刻み48·51~53·55~61·63~66·68~71である。調整につ いては、内外面ともに条痕文を持つもの51·52·70、外面にのみ条痕文を持つもの49·55·56·58· 59·63~65·71、ナデ調整のみのもの47·48·50·53·54·57·60~62·66~69に大別される。この中 に内面にミガキが入るもの62·69、指押えするもの66がある。44·72~74は胴部である。44は細 い刻み目で外面は条痕文を持ち、外面のほぼ全体に渡り炭化物の付着が見られ、内面はナデ成 形を行なっている。72·73は外面の剥離が酷く調整不明、72は内面は指押え・73はヘラ削りを 行なっている。74は内外面ともにナデ成形を行なっている。75~96は底部である。ここでは大

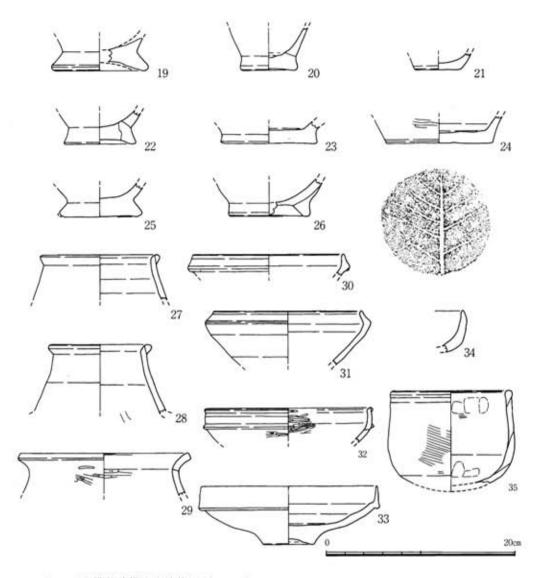


Fig.7 SD002溝状遺構出土遺物(2) (S=1/4)

きく裾広がりで上底75·79·87、裾広がりで平底76~78·80~86·88~92、平底93~96の3種類に大別できる。75は外面指押え痕が見られ、内面には炭化物が付着している。底部内面はヘラミガキされている。76~78·80~82·84は回転台の跡(木の葉痕)が残るが、77·78はナデ消されている。79·85の底部内面についてはヘラ状工具によるナデが見られる。83は外面には指押え痕が見られ底部穿孔がされている。79·92は外面にハケメ調整が行なわれており、内面は炭化物が付着しているため調整は不明である。

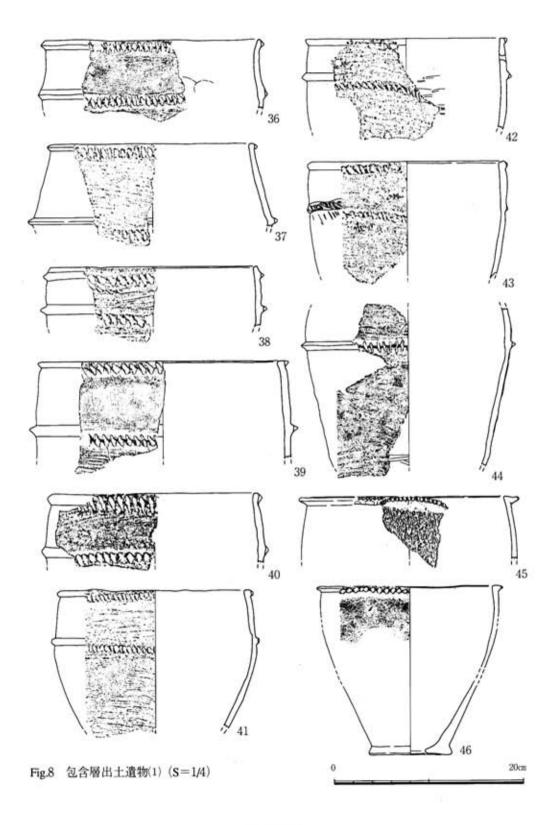
浅鉢 (97~106·108·109) 97~103は口縁部である。口縁部が強く外反する古いタイプのもの

は見られないが、大きく2種類に分類できる。口縁部が内傾するもの97・98・101・102・103、口縁部が「く」の字に折れるもの99・100である。97には刻みのない突帯を持ち、口縁端部は如意状である。98は刻み目突帯を持ち、102は端部が尖り気味である。103は内傾気味に立ち上がっている。99は端部が外反気味である。104・109は脚部である。104は一部に赤色顔料と思われるものの付着が見られた。105・106・108は底部である。105の調整は内外面ともにヘラ磨きされている。106は黒色磨研系である。上げ底気味の底部で、調整は外面はヘラ磨き後ナデ消し、内面はヘラ磨きである。108の調整は外面へラ磨き、内面ナデである。

鉢(110)口縁部から体部にかけて1/4程度が残存している。外面全体及び口縁部の内面に炭化物が付着しているため明確ではないが、全体に磨きを行なった精製土器である可能性がある。壺(107・111~127)114はほぼ完形(黒色磨研系土器か?)である。つくりは粗いが調整は比較的丁寧で、外面全体にヘラ磨きが入りその後ナデ消している。また、口縁部に吊り下げ用と考えられる2カ所の穿孔が見られるが、これは焼成前に穿孔されている。頸部に一部赤色顔料が見られた。107・111・112・116・117・123・125は口縁部から頸部にかけて残存するものである。ここでは口縁部の形態によって3種類に大別できる。口縁部が大きく外反するもの111・112・125、口縁端部が玉縁状になるもの117・123、外反気味に立ち上がるもの116である。いずれもつくりは比較的丁寧でほとんどのものが口縁部内面もしくは外面全体、または内外面ともにヘラ磨き調整が行なわれている。116については肩部の沈線部分に赤色顔料と考えられるものが一部に見られた。113・115・124・126は頸部から肩部にかけて残存しており、器壁はほとんどのものが比較的薄く丁寧なつくりとなっている。118・119・120・127、平底のもの121・122である。119は底部が非常に薄く他のものと比較すると1/2程度の厚みである。120は上げ底気味である。

管玉 (129) 表面は一部剥離し変色しているが、碧玉製である。長さ1.7cm・幅0.6cm・孔径 0.18cm・重さ0.8gである。

石製品 (130~145·148·149) 130~145は打製石鏃である。ここでは基部によって凹基130~142・平基143・突基144·145の3種類に分けられる。また、石材は黒瑋石製130·137·139·141、安山岩製131~136·138·140·142~145である。130は最大長1.85cm・最大幅1.35cm・最大0.25cm・重量0.4gである。131は最大長4.5cm・最大幅2.0cm・最大厚0.4cm・重量2.6gである。132は基部を片側欠損しており、最大長2.3cm・残存幅1.7cm・最大厚0.4cm・重量0.9gである。133は最大長2.5cm・最大幅2.2cm・最大厚0.4cm・重量1.3gである。134は先端部を一部欠損している。残存長2.8cm・最大幅2.0cm・最大厚0.4cm・重量1.5gである。135は最大長3.0cm・最大幅2.2cm・最大厚0.45cm・重量3.0gである。136は先端部を欠損している。残存長2.8cm・最大幅2.0cm・最大厚0.4cm・重量1.1gである。137は最大長2.05cm・最大幅1.6cm・最大厚0.45cm・重量0.9gである。138は最大長2.1cm・最大幅1.8cm・最大厚0.35cm・重量1.0gである。139は先端部及び基部に一部を欠損している。残存長2.0cm・残存幅



1.4cm・最大厚0.4cm・重量1.2gである。140は基部の片側を一部欠損する。最大長1.7cm・残存幅1.4cm・最大厚0.4cm・重量0.5gである。141は基部を一部欠損する。残存長2.1cm・残存幅1.1cm・最大厚0.275cm・重量0.5gである。142は先端を一部欠損する。残存長3.1cm・最大幅2.0cm・最大厚0.5cm・重量2.6gである。143は最大長3.2cm・最大幅2.0cm・最大厚0.4cm・重量1.7gである。144は残存長4.9cm・最大幅1.6cm・最大厚0.6cm・重量3.8gである。145は残存長4.5cm・最大幅1.7cm・最大厚0.8cm・重量6.0gである。144・145とも先端部を一部欠損する。

148は柱状片刃石斧(石鑿)の一部と考えられる。刃部を欠損しており、残存長57cm・最大幅 3.5cm・最大厚0.9cm・重量58.2gである。表面に白色の付着物(石灰分か?)があるため石材は不明 である。149は砥石で、残存長12.575cm・残存幅14.0cm・残存厚9.5cm・重量1900gである。一面のみ 使用面が確認できており、ほかは欠損もしくは未使用面である。石材は花崗岩である。

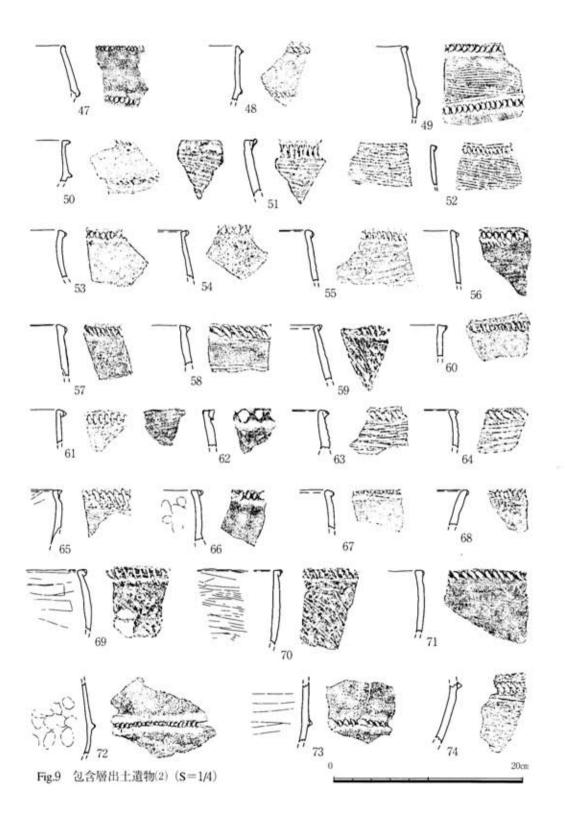
土製品 (150·151) 150は楕円形の土台に更に粘土を貼付けて作られている。下方に貼付け痕が残る。表面の欠損は大きいものの、残存部分については前面には丁寧なナデ調整、背面にはハケメ調整がされており表情等は描かれていないが土偶の可能性が考えられる。長径6.3cm・短径5.3cm・最大厚1.55cmである。151は土製紡錘車である。二次加工品ではなく専用に作られたものである。最大径6.1cm・孔径0.75cm・最大厚1.85cm・重量54.5gである。

木製品 (152) 上下を欠損しているため明確ではないが、竪杵の一部と考えられる。残存長 7.05cm・最大幅5.45cm・最大厚5.05cmであり、面取りされており加工痕が明瞭に残る。

# № まとめ

調査地区内は遺構密度が非常に薄く、遺構と確実に認定できるのは、SD002溝状遺構のみである。溝自体の残りはあまり良くないが、埋土中のほか溝底より深鉢・浅鉢・壺等が出土している。この他には遺構ではないが、D・E・F・G各グリットにおいて段状の落ちが見られることである。これは、自然な段落ちとは考えにくく、少なくとも一部については人工的な手が加えられているようである。それはFig.5の土層図に見られるように階段状の落ちであり、D・Eグリットのセクション付近に杭と板を組み合わせた杭列が存在することある。また、この周辺では遺物が多く出土しており、包含層はこの階段部分から南の落ち部へ向かい遺物が集中する。グリット内の遺物の出土状況は、C-2・3~F-3グリットにかけて集中が見られる。これは段落ちにほぼ対応している。遺物は破片が大半を占めており、土器全体がわかるものはほとんど出土しておらず、これらのことから今回の調査において出土した土器は投棄されたものと考えられる。拡張区内の遺物出土状況については、出土範囲が限定されており、C→Fグリットに向かい増加する傾向にある。これも段落ちにほぼ対応するものである。Bグリットの拡張区では全く出土していない。

遺物については、土器類は深鉢が主体であり全体の約8割を占めている。次いで浅鉢・壺の順



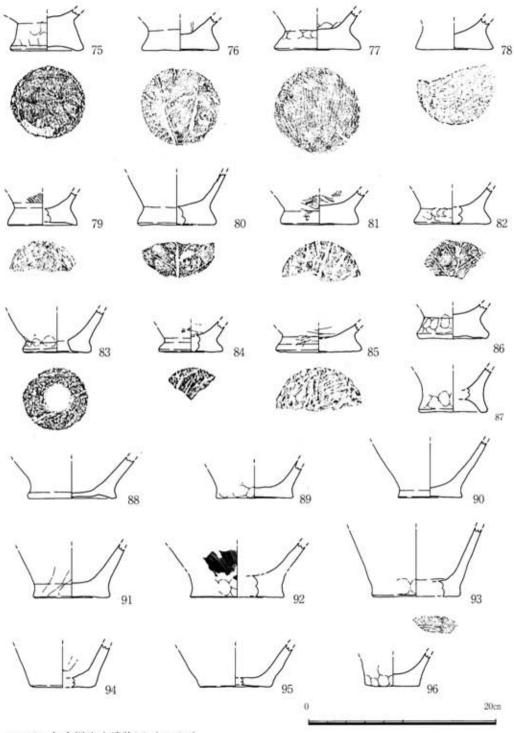
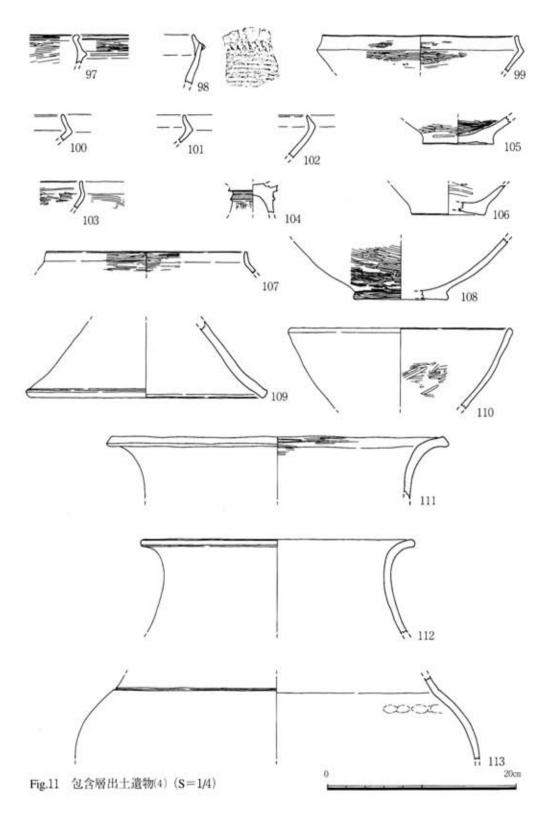


Fig.10 包含層出土遺物(3) (S=1/4)



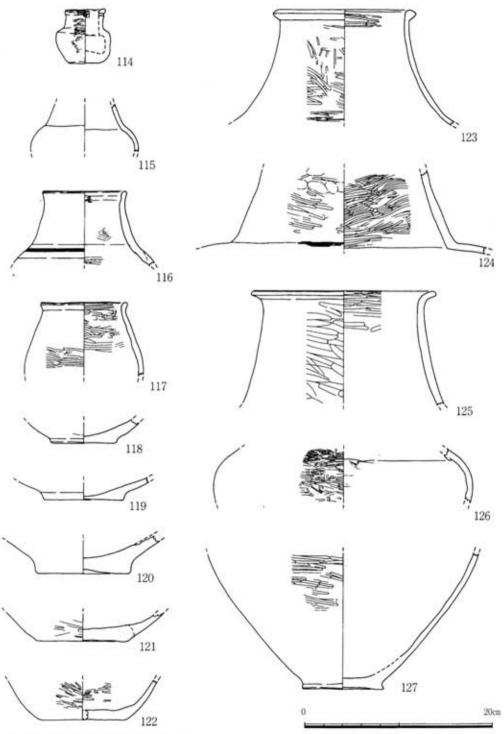


Fig.12 包含層出土遺物(5) (S=1/4)

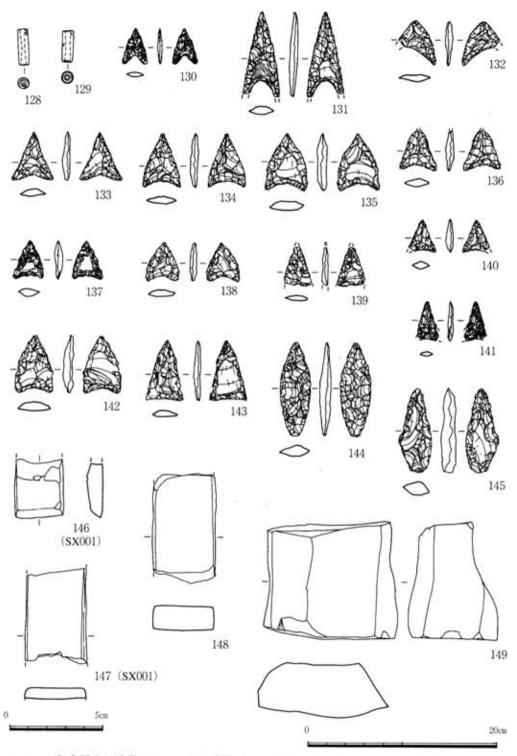


Fig.13 包含層出土遺物(6),SX001出土遺物 (石製品) (128~148はS=1/2・149はS=1/4)

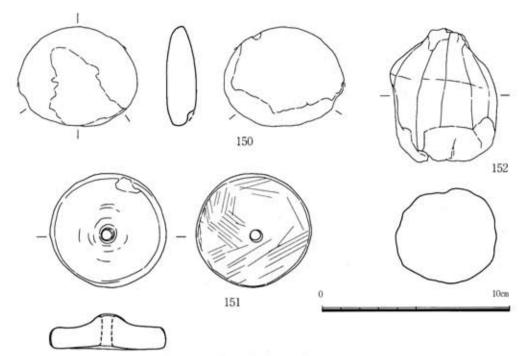


Fig.14 包含層出土遺物(7) (土製品・木製品) (S=1/2)

に続くが、大半が破片であるため細かい分類は難しい。石器は製品は少ないものの黒耀石・安山岩の小片が比較的多く出土している。その他の遺物については「Ⅲ・遺物」の項でも概説したように、土製品2点・木製品は1点(杭・板は除く)である。ここでは深鉢について薬師森遺跡内の分類を行なってみた。

深鉢の分類は、形態・突帯の位置、突帯の種類、刻目の種類の3項目について行なった。

# ・形態及び突帯の位置

A類=肩部の屈曲が強く、口縁部は外反する。突帯は口縁部よりやや下がった位置と肩部 に付く。

B類=肩部の屈曲は緩く、口縁部は直線的に内傾する。突帯は口縁部よりやや下がり気味 の位地と肩部に付く。

C類=肩部の屈曲はほとんどなく、口縁部は内湾する。突帯は口縁端部及び肩部に付く。

D類=肩部に屈曲はなく、□縁部は外傾気味に直線的に開く。突帯は□縁端部及び肩部に 付く。

E類=肩部に屈曲はなく、口縁端部は内傾気味である。突帯は口縁端部のみに付く。

#### ・突帯の断面形態

Ⅰ類=断面三角形 Ⅱ類=断面カマボコ型

1類=断面長いカマボコ型 2類=断面つまみ出し型(指頭痕有)

## 刻み目

a 1 類=大形・円~楕円形 a 2 類=小形・円形

b類=大形・菱形 c類=細い刻み

上記の分類をもとに、下記の表を作成した。

浅鉢・壺に就いては個体数が少ないため、分類には至っていないが、これらの土器は作りが 比較的丁寧であり、ほとんどのものにミガキもしくは丁寧なナデにより整形されている。

薬師森遺跡出土土器の特徴として、深鉢・浅鉢・壺のいずれの土器も胎土はほぼ同じで、砂粒のほかに角閃石・白雲母・黒雲母等の鉱物を含んでいる。この他、多くの深鉢・浅鉢の内外面に炭化物(煤?)の付着が見られる。

これらの検出遺構及び出土遺物から、薬師森遺跡は縄文晩期末からは弥生時代初頭の遺跡であると考えられ。現在のところ有明海沿岸におけるこの時期の遺跡としては、標高約2.5mで最も低地の遺跡である。

	ΑI	AIV	ВΙ	ВⅡ	B III :	CI	CII	DΙ	DΠ	D III ₂	ΕII
aı			62								
<b>a</b> 2							67	46		45	
b	36.37		38·39 56	54			49				
c	51.53		48·58 60·61	52·55 57·59	50	40·44 63·65	41 ·42 43 ·64 66 ·69 71		70		48

Tab.1 薬師森遺跡深鉢分類表

※72~74については胴部のみである。

# 参考文献

佐賀県教育委員会	1980	「大門西遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第51集
佐賀県教育委員会	1981	「香田遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第66集
佐賀県教育委員会	1984	「金立開拓遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第77集
佐賀県教育委員会	1986	「久保和泉丸山遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第84集
佐賀県教育委員会	1989	「碟石遺跡」	佐賀県埋蔵文化財発掘調査報告書第91集
佐賀県教育委員会	1989	「老松山遺跡」	佐賀県埋藏文化財発掘調査報告書第92集
神埼町教育委員会	1983	「志波屋六本松遺跡」	神埼町埋蔵文化財発掘調查報告書第9集
唐津市教育委員会	1982	「菜畑遺跡」	唐津市文化財調查研究報告書第5集
佐賀県教育委員会	1996	「東名遺跡」	佐賀市文化財調查報告書第77集
佐賀県教育委員会	1997	「徳水遺跡Ⅰ」	佐賀市文化財調查報告書第86集
福岡県教育委員会	1984	「石崎曲り田遺跡」上・中	・下巻 今宿バイバス関係調査報告書第9集
福岡市教育委員会	1976	「板付遺跡」	福岡市埋蔵文化財調查報告書第35集
福岡市教育委員会	1993	「雀居遺跡 I」	福岡市埋藏文化財調查報告書第232集
福岡市教育委員会	1995	「雀居遺跡Ⅱ」	福岡市埋藏文化財調查報告書第406集
福岡市教育委員会	1995	「雀居遺跡Ⅲ」	福岡市埋藏文化財調查報告書第407集
長崎県教育委員会	1997	「黒丸遺跡遺跡Ⅱ」	長崎県文化財調査報告書第132集
佐世保市教育委員会	1980	「宮の本遺跡 昭和55年月	度」 佐世保市埋藏文化財調查報告書
百人委員会	1973	「山ノ寺梶木遺跡」	百人委員会埋藏文化財報告書第1集
山崎純男	1980	「弥生文化成立期における	る土器の編年的研究」
			鏡山猛先生古希記念古文化論攷
山崎純男	1987	「北部九州における初期」	水田」 九州文化史研究紀要32号
藤尾慎一郎編	1987	「唐津宇木汲田遺跡における1984年度の	ற்று 九州文化史研究紀要32号
藤尾慎一郎編	1987	「福岡市早良区有田七前田遺跡1985年8	<sup>接発测查</sup> 九州文化史研究紀要32号
藤尾慎一郎	1990	「西部九州の刻み目突帯」	文」 国立歷史民俗博物館研究報告書26集
帝塚山大学	1993	「水田を考える」	

Tab.2 遺物観察表 ※口径・底径・胴部最大径の( )は復元径を、器高の( )は残存値を示す。

Fig No.	7927472242	Feb. 501		法量	(cm)		WE GOT THE REAL PROPERTY.	4	545 - F-	<b>日本版的公子</b> (
PL No	出土地点	器種	口径	器 高	底 径	朝部最大往	形態・調整の特徴	色 調	烷版	机道物亞針香
6-1 7-1	I-2 SD02 暗黄灰粘土層	親文土器 深鉢	-	(4.0)	-	-	内・外面、ヨコナデ 口様部と綱屈曲部に刻目交帯 用色上器	黑褐色	Ą	9700307
6-2 7-2	1751	深鉢		(3,8)			内能、ナデ(かなり岩底)消離している 外間、条痕、灰化物付着 原居曲部に朝日安衛	内:灰褐 外:黒褐	A	97003093
6-3 7-3	SD02内暗黄灰 (2層)出土:	深鉢		(3.0)	77	-	内外面ナデ 口縁部に刻目突帯	内:明褐灰 外:明褐灰に 黒傷まじり	Ą	9700306
6-4	SD02内暗黄灰 (2層)出土	深鉢	_	(1.8)	-		内外面ナデ (磨滅) 口縁部に刻目突帯(磨滅)	淡橙色	良	97003066
6-5 7-5	SD02上 K-3.4 境界ベルト 里発色~黄田暦	深鉢	-	(5.7)	==	-	内閣、ヨコナデ 外面、ナデ (野城・剥離) 口縁部に朝日突帯、精製土器	内:黒褐に 場まじり 外:黒褐	Д	9700305
$6-6 \\ 7-6$	SD02内(J-3) 層位不明	深鉢	-	(3.9)	-	-	内外面ナデ (磨減) 口縁部に刻目突帯(磨減)	内:灰白 外:灰白に樹 灰まじり	不良	9700306
6-7 7-7	SDOZ上出土 KL-4とK〜M 境界ベルト	深鉢	-	(6.5)		-55	内外面ナデ(磨減がはげしい) 口縁部に刻目突帯	灰 白	不良	9700306
6-8 7-8	SD02J-2 賠責医粘土層	深鉢	(	(11.7)	-		内外面ヨコナデ (磨減・減難) 口縁部と制慰曲部に刺目突帯	内:赤灰 外:黒·明褐 灰	Ą.	97003073
6-9 7-9	1773	· 深鉢	-	(10.1)		-	内外面、ナデ 口縁部と胴屈曲部に刻目突帯	内:灰白 外:灰白に黒 掘まじり	Ŗ	97003050
6-10	SD02 HI-1 境界ベルト	深鉢	(29.3)	(11.3)	=	(30.1)	内外面、ナデ(増減) 口縁部と胴屈曲部に関目突帯	内:明褐灰 外:灰白	良	9700308
6-11 7-11	SD02 上 K-3.4 境界ベルト 男書伝名〜里報色展	深鉢	(22.6)	(6.4)		(24.6)	内面、調整不明(指減・剥離) 外面、ナデ(指減・剥離) 口縁部と制配曲部に割目突帯	内に灰白に開発まじり 外に明を灰に黒板まじり	不良	9700306
6-12	SD02上 K-3.4 境界ベルト 明書医療・開発色療	深鉢	(22.4)	(6.7)	-	(22.8)	内外面。ヨコナデ(内面、少し寄蔵) 口縁部と制足由部に超目突帯(密域)	内: 灰白 外: 褐灰に灰 白まじり	良	9700306
6-13 7-13	1781	深鉢	(25.8)	(9.1)	-	(28.6)	門外閣、カコナディ門家、タリ教成 口機性と開発者に別別交号(単成) 関加で記者するテイブ、口縁起交音下に補得孔系列	作:これで 作:これでは実施またり (以降なり実施実施)	不良	97003050
6-14	SD021内 K-M 拉張美医上層	深鉢	-	(5.9)	-	(20,0)	内面ナデ、外面木による荒い接痕 興曜曲部に超目突着	内: 灰白 外: 褐灰に 黒まじり	良	9700308
6-15	1780	深鉢	-	(6.6)	-	(30.0)	内面、ナデ核ヘラナデ 外面、荒い条痕(貝殻条痕か?) 制制曲部に刺目交帯	内:灰白 外:灰白に黒 傷まじり	A	9700305
6-16	SD021内 K-M並振用真医療	深鉢	-	(3.8)	77	(25.1)	内外面ナデ (外部磨滅) 腸屈曲部に刻目突帯	内:灰白 外:灰白に黒 掲まじり	良	9700307
6-11	SD02 1-2 略黄灰粘土層	深鉢		(4.3)	-	-	内外面、ナデ(内面、相当摩滅) 胴屈曲部に刻目突帯	内:にぶい黄橙 外:赤灰	不良	9700307
6-18	1768	深鉢	-	(5.1)	-	=	内面、ヨコナデ 外面、条痕 (磨滅) 脚屈曲部に刻目突帯	内:没黄根 外:にふい黄根に 用拠まじり	不良	9700305
7-19	SD02上 J-K 境界ペルト (JK-2部分)	深鉢	-	(3.4)	(10.4)	i <del></del> .	内外面、ナデ	内: 黒褐 外: にふい黄橙に 黒褐まじり	Ŗ	9700307
7-20	SD02 T-2 暗黄灰粘土粉	深鉢		(4.5)	(6.0)	-	内外面、ナデ (磨滅) 底部は上げ底	内:灰白 外:黒傷に灰白 まじり	良	9700307
7-21	SD02 担-1 堤界ベルト	深鉢	-	(1.7)	4.9	-	内外面ナデ(外面磨滅)	内:にぶい責難 外:底部(黒梯) その他。にぶい責期	A	9700308
7-22	SDO2上 K-3.4 境界ペルト 暗貫灰着・黒褐色	· 深鉢	-	(3.3)	7.6	-	内面、ナデ (剥離している) 外面、ナデ底部にくびれた指揮さえ 底部は上げ底になっている	内:淡黄橙 外:淡橙に明褐 灰まじり	良	9700306
7-23		深鉢	-	(1.8)	10.2	=	内面、ナデ・指摘収あり 外面、・ 同社会展をナデ商し(不定方向)。円盤原付?	内:明褐色 外:灰白色	A	9700306
7-24 7-24	1778	深鉢	-	(2.8)	11.1	5 <del>-</del> -5	円面。ユビナデ 外面、ヘラミガキ、底部、円盤振行 底部に木の葉存痕跡、精製土器か?	内:黒褐 外:黄灰に灰白 まじり	R	9700305
7-25			-	(3,1)	(9.0)	-	内面、ナデ(開減)炭化物付着(?) 外面、ナデ	内:用提供に思想まじゃ 外: ・	良	9700306
7-26		深鉢	1-1	(3.6)	(8.7)	-	内外面ナデ(外面磨滅)	内:灰白 外:灰白に褐灰 まじり	良	9700308
7-27			(12.2)	(5.8)	-	-	内、外面、ヨコナデ 口域があまり外反しないが誤話と 耐部の域が不明瞭になるタイプ	灰白	R	9700307

Fig No	40 L M A	種別			法量	(cm	)		彩館、開教の他製	tr.	-044	Marin	II 3500E
PL No	出土地点	器種	П	径	23 25	底	径	制部最大径	形態・調整の特徴	色	M	136.10%	思達物及鍵香
7-28	1767	縄文土器 遊	(10.0	0)	(7.0)	-	- 3	2-0	内・外面ヨコナ 口縁が弱く外反指し、口預器が 内類し、類話と剔話の境が明瞭		い資程 い資程にに 責施まじり	良	97003051
7-29	1774	並	(18.0	0)	(4.3)	-	-	-	内前、ヘラミガキ(療薬) 外前、1985年テ-東Eペテミガキ(-左, ナデ 13株が住く外反する	厌	白	Ŗ	9700305
7-30	1779	<b>没</b> 鉢	(16,0	0)	(2,3)	-	-		内外面、ナデ □縁下の組曲部に貼付交音(?)あり □類部が短く直立する	外:統由	三里掲まじり 三期灰まじり	良	97003056
7-31	SD02 1 -2 暗黄灰粘土層	浅鉢	(15.6	6)	(5.7)	2	-1	(17.6)	所正,33+71周載・所正+71億載が建しい 口類原は短いが内間している 口質原に外反の収跡が残る		白に掲 まじり	Ą	97003078
7-32	J-M 拡張 SD02内 青灰粘土層	浅鉢	(17.4	4)	(3.7)	-		(17.7)	内、外面へラミガキ(外面:磨減) 口縁部と組曲部に貼付突帯	200 200 200	(国色教徒) (国産まじり	良	9700308
7-33	1744	浅鉢	(18.6	6)	6.2	5.	.5	-	内、外面ヨコナデ (明蔵・湖) 口類部が直立する新しいタイプ、 底部は上げ底	界:施的:	(現現後まじり -信別長まじり	Ř	97003089
7-34	SD02 KK-4と K-M拡張境界ペ ルト黒褐色層	碗	-	-	(4.4)	-	-	_	内外面、荒いナデ	H.3	) Eい真拠に 有拠まじる	Ą	97003081
7 - 35 $7 - 35$	1745	遊	(12.6	6)	(9.8)	-	-0	(13.3)	内,ナデ(治球あり)製と手基にヘラミガキ県 外面,ヘウミガキ社ナデ(密減・調耀) 黒色樹研土器		/多いが明報  複雑でも	Ą	97003090
8-36 8-36	1490	深鉢	(22.7	7)	(7,4)	-	-	(23.8)	内层、調整不能、解胚曲底に接合性 あり、「指罪さえ」 料金、天化物性者、口味医と解脳曲底に利用交替	外:黑	-	A	97002826
8-37 8-37	B-2	深鉢	(21.2	2)	(8.9)	-	->	(25.6)	内面、ナデ 外面、月数条板、口等器と関係曲部に相目支援	外:報		R	97002077
8 - 38 8 - 38	CD拡張 青灰粘土~修士	深鉢	(22.0	0)	(6.3)	-	-	(22.9)	内面、ヨコナデ 外面、貝殻条痕、口縁部と馴 組曲部に刻目突帯あり	外:灰酮	・にぶい書程 号〜異里	Ř	9700209
8-39	1519	深鉢	(26.0	0)	(10.2)	1	-	(27.4)	内は、十才、口線第二条件さえ、機能量単二級計画 外高、機と手間に共復支援量ナデ、機中央に日復 支援、口線塔と組集部に割目突後	13 - 041	1 有提·黑褐	Ř	97002833
8-40	1506	深鉢	(21.8	8)	(7.4)	-	÷ĵ	(23.6)	内面、ナデ 外面、貝殻条痕、口縁部と制団 歯部に刺目突管、泉化物付着	灰褐~	黑褐色	Ř	97002106
8-41 8-41	1492	深鉢	(20.2	2)	(14.6)	-	-	(21.6)	内面、ナデ 外面、貝殻条痕、口種部と開始 曲部に刻目突着あり、灰化物計畫		福色	良	9700210
8-42	1487	深鉢	(20.5	5)	(9,7)	-	-	(21.1)	内面。 貝殻条板後ナデ 料面、貝殻条板、13米器上開始商品に割目 央市、体部上部に早五1つあり、単化物目着		機一	A	97002107
8-43	1236	深鉢	(20.4	4)	(11.9)	-	- 0	(21.1)	内面、ナデ 外面、貝殻条痕、口縁部と 胴層曲部に刻目突帯	外:视形		R	97002098
8-44	1502 · 1513 1516 · 1517	深鉢		-	(16.8)	-	-	(21.6)	内面、ナデ (?) 外面、貝殻条痕、炭化物付 着、刷屋由部に刻目突荷		( )	A	97002829
	1583一括 (うちより)	深鉢	(外20.		(6.7)	-		-	内面: ナデ  外面: 13縁尾刺目交寄うらに指押さえ  塩 (?) 付着のため、調整不明	外:!		Ą	97002653
8-46 8-46	1588+1593+1594 1727+1728 EF-芒張	深鉢	(18.8	8)	17.9	8	.8	(19.0)	「内面」、ナデ 外面、ヘラミガキ(物利、消薬)、安化物甘和 成用中央に穿孔あり、口縁部に利用突着		BK Bあたり。 Sい赤根)	普	97002146
9-47 8-47	1433	深鉢	-		(5,4)	-			内面、器道異難のため調整不明 外面、ナデ、口縁部剔屈血部 に浅い新日突帶	外:梅!	3~灰黄翘 天~黑褐	If	97002131
$9-48 \\ 8-48$	1628	深鉢	-	- 1	(5.8)	-	-	-	内面、ナデ 外面、ヨコナデ、口縁部と制信 曲部に刺目交音	外:梅		良	9700207
	1469 CD-23 青灰色粘土層	深鉢	-		(7.7)	-		-	内面、ナデ 外面、貝数条仮、口縁部と制屋 曲部に刻目吹帯	一灰		14	97002143
9-50 8-50	1690	深鉢	-	-	(4.4)	-			内面、ナデ 外面、ヨコナデ、口縁部と制紹 曲部に刻目突帯	91 : 15	天黄色 天黄色 - 思稿	Ŗ	97002079
9-51 8-51	1541 F-3	深鉢	-		(5.5)	-		-	内面,且数条模。口禄思、翅目突带 外面。   (维付着)	200	一黑色	普	97002666
9-52 8-52	1471	深鉢	-	-	(4.3)	-	-		内外面、贝数条痕(外面、保付着?) □禄部に到目突管	356	51+黄檀色 5		9700284
9-53 8-53	CD-2 · 3 青灰粘土 ~ 砂土	深鉢	-	0	(5,0)	-	-	-	内面、ナデ 外面、ヨコナデ、口縁部に 刺目交帯	内:灰外:褐	白~灰黄 灰	Ŋ	97002096
9-54 8-54	CD-2·3 青灰粘土~砂土	深鉢	-	-	(5,1)	-	-	-	内面、ナデ 外面、ヨコナデ、炭化物付着、 口縁部に副目奏音		島色〜黒視 モ〜黒裾	良	97002097

Fig No	10.1.11.1.	極別			ü	: 量	(cm	).		ECON . HE AV ALAS DE	ds an	34.15	E 350014
PL No	出土地点	器種	П	径	25	高	底	往	關部最大往	形態・調整の特徴	色 調	郑阳	职道物登録香
9-55 8-55	F3落ち込み 青灰粘土〜砂土	縄文土器 深鉢	-	+22	(5	.4)	9	=	-	内面、ナデ 外面、貝数条痕、口縁部に 飼目突帯、煤 (?) 付着	内:灰質褐色 外:にぶい黄相 〜黒	普	9700266
9-56 8-56	E-2.3 落ち込み 青灰粘土層〜上層	深鉢	-	=/	(5	.7)	-		_	内面。ナデ (?) 外面、貝数条痕、炭化物付着、 口縁器に刻目突帯	内:にぶい黄橙 外: 褐灰~黒褐	ß	9700282
9-57 8-57	1783	深鉢	-	-	(5	.5)	-	-	==	内面。ナデ (?) 外面。調整不明、炭化物付着、 口縁器に刻目交荷	内:灰白~视灰 外:视灰~黑褐	良	9700283
9-58 8-58	1528	深鉢	-	-	(4	.0)	-	-	-	内面、ナデ 外面、川数条板、口縁部に新目突衛	内: 灰白~灰 外: 灰黄褐~ 黒褐	良	9700283
9-59 8-59	1567	深鉢	-		(5	.8)	-	-	_=	内面、ナデ、口縁部に製目突帯 外面、貝殻条痕、煤付着	内:灰白 外:黒色・ 脳灰色	普	9700265
9-60 8-60	1655	深鉢	-	-31	(3	.3)	-	<b>-</b> , :		内外面、ヨコナデ 口縁部に刻目突帯	灰白 (美容里: 灰黄樹)	良	9700208
9-61 8-61	1556 E-F拡張	深鉢	-	-	(3	.3)	-	-	-	内外面、ナデ、口縁部 に刻目突帯	内: 灰白色 外: 灰白色、 褐灰色	普	9700266
9-62 8-62	-	深鉢	-	-	(3	,8)	2	-	:	内面、ヘラミガキ 外面、ナデ、口縁部に刻目突帯	黒褐~黒	良	9700214
9-63 8-63	1515 F-2 · 3	深鉢	-	7	(4	.1)	1	-	-	内面、ナデ 外面、貝数条痕、口縁部に知目突着	内:灰白色 外:灰白色、褐灰 色、黑色	普	9700284
9-64 8-64	EF拡張 青灰粘土~砂土	深鉢	-	-	(4	.0)	-	- 1	1	内面、ナデ 外面、貝殻条痕、口縁部に対目突帯	灰白色	普	9700266
9-65 8-65	1521 F-2-3落ち込み	深鉢	1=	-1	(4	.0)		-7		内面、ナデ、口様部に関目支帯 外面、ヘラミガキ (貝殻条痕?) 集付着	内:灰白色 外:黒色	普	9700268
9-66 8-66	1724	深鉢	-	-	(5	.1)	-	-		内面、指揮さえ 外面、サデ、炭化物付着、 口縁部に刻目突衛	内:灰白 外:褐灰~黑	良	9700212
9-67 8-67	1471	深鉢			(4	.1)	-	-	-	内外面、ナデ (外面に垢付着?) 口縁部に刻目突帯 (摩耗している)	内:灰白色 外:黒色	普	970028
9-68 8-68	1552 E-F拡張	深鉢	-	-	(3	.6)	-	-		内外面、ナデ、口縁部 に刻目突帯	灰白色	普	9700266
9-69	F3落ち込み 青灰粘土〜砂土	深鉢	-	-3	(6	.5)	-	-11		円面。ヘラ状工具よるナデ。 口縁部に制日炎管 外面、貝殻条痕(外面、保付着?)	内:灰白色~褐灰色 外:褐灰色~黑色	音	9700266
9 - 70	EF拡張 青灰粘土~砂土	深鉢		- [	(7	.9)	-	-7,	-	内外面、貝殻条痕、 (外面、煤付着?) 口縁部に刻目突帯	内:灰白~褐灰 外:褐灰·黑色	普	9700266
9-71 8-71	1370	深鉢	-	-	(6	(6.	1	-1)	-	内面、ナデ (?) 外面、貝殻条痕 (?)、 口縁部に刻目突帯	内:灰白~灰黄 外: • 灰黄褐	R	9700215
	1465C · D2.3 青灰色粘土層	深鉢	-		(7	.5)	-	-1	-	内涵、蓝色专花、胡薯、钢丝虫蓝上下二条杯之土 外面、蓝色胡薯のため調整不可 製料商品に製料を含	内:灰白 外:褐灰	良	9700214
9-73 8-73	1952 1723	深鉢	-	-	(6	(2)	-	<b>→</b> ?		内面、ヘラテズリ (*) 外面、器質調整のため、調整不明 (原発あり) 機区金属に製目交換	内:灰白·黑褐 外:灰白	良	9700197
9-74 8-74	1743	深鉢	-		(6	.6)	12			内、外面、ナデ (外面に炭化物付着?) 胴屈曲部に刻目突帯	内:灰白~灰黄 外:黑褐	良	9700209
10-75	1542	深鉢	-	-	(3	.9)	7	.8	3-0	内面、煤 (?) 付着 外面、指押さえ、底部に ヘラミガキ	内:黑褐色~黑 外:灰白色	普	970026
10-76 8-76	1525	深鉢	-	-	(3	(,1)	8	.2	-	内面、ヘラケスリ (炭化物付着 外面、ナデ 底部に木の集合痕跡あり	内:黄灰色 外:灰白色	Ą	9700283
10-77 8-77	1518	深鉢	-	- 1	(3	.6)	9	.2		内面、指ナデ (灰化物付着) 外面、ナデ、指押さえ 底部に木の業 (?) 台痕跡あり	内:揭灰色 外:灰白色	Ą	9700283
10-78 8-78	1638	深鉢			(2	(8.	8	4	1,000	内、外面、ナデ 回転台裏 (?) 後、ナデ消し	内: 灰黄褐色 外: 灰白~ 灰黄色	fit.	9700208
10-79	EF拡張 青灰粘土~砂土	*	-	-	(3	(3)	(7	.3)	-	作品、サデ、電(下)日本 作品、自己製作、在名(ではナデ 出品、自己製作、たち(ではナデ	展養色 内:里色、現状色 外:にぶい最色~ にぶい現色	普	970026
10-80	E-2.3落ち込み 青灰粘土 - 砂土		Ş.	-	(5	(4)	(8	4)	-	内面、器面剥離のため調整不明 (変化物分割) 外面:ナデ 底部に水の量力収跡あり	内:黑獨~黑色 外:灰白色	R	970021
10-81 8-81	1529	深鉢	1 -		(3	(1)	(8	.2)	-	内由、ヘラ状工具によるナデ 外由、ヘラナデ後、ナデ 回転台(業)の痕跡あり	灰白色	告	9700265

Fig No	10 A 46 D	種別			法 量	(cm	)		EC69 . 100 46 cm 45 94	D. 100	100.00	STAR WAY
PL No	出土地点	器種	П	径	器高	廐	径	则部最大径	形態・調整の特徴	色 調	郑城	机通物登録香
10-82 8-82	No 10T 青灰色粘土	縄文土器 深鉢	-	-	(3.5)	(8.	3)	( <del>-</del>	門前。器能剥離(灰化物付着?) 外面。 - 底部(びれに指押さえ 底部に木の着台板移あり	におい役色	Ħ	97002132
10-83 9-83	1=200	深鉢			(4.2)	7.	1	7=2	内面、ナデ(灰化物仕者) 外面、ナデ、底部くびれに指押さえ 底部中央に穿孔あり	内: にぶい黄檀~ 製灰~黒 外: にぶい黄檀色	Ř	97002138
10-84	1531 F-2-3	深鉢	-	-	(2.7)	(6.	8)	( <del>1 )</del>	内面、指ナデ、煤付着 外面、ヘラナデ後ナデ 回転台 (葉) の痕跡あり	内:無褐色 外:灰黄色-黄灰色 没黄色	普	97002659
10-85	F-3高ち込み 青灰粘土〜砂土	深鉢		-	(2,4)	(9.	1)	-	内面、ナデ 外面、ヘラ状工具によるナデ 底部、ヘラ状工具によるナデ	内: 灰白色 外: 灰黄色	普	97002663
10-86	1738	深鉢	-		(3.2)	7.	7	1 m	内面、ナデ 外面、調整不明、底部くびれ 指押さえ	内:暗灰黄 外:灰白~褐灰	R	97001972
10-87	1441	深鉢		-	(4.3)	(7.	4)	-	内面、器能剥離のため、調整不明 外面、調整不明、底部くびれに指揮さえ 底部は報点が3つセンス状の上げ底	内面、灰白(き) 外面、灰白〜にぶい橙	Ą	97002129
10-88	C · D-2.3 青灰粘土層	深鉢	===		(4.0)	9.	3	-	内外面ナデ	灰白~灰黄	Ą	97002100
10-89	1735	深鉢	-		(3.1)	(8.	2)	<del></del>	内面、ナデ (炭化物付着) 外面、調整不明、底部くびれ に指揮さえ	内: 褐灰一黑褐 外: 灰白~褐灰	Ą	97001973
10-90	1437	深鉢	-		(5.7)	(6.	8)	=	内外面、ナデ (内面、炭化物付着)	内:灰黄褐 外:灰白~灰黄褐	良	97002087
10-91	1557 E-F拡張	深鉢	_		(5.1)	(8.	1)	<u></u>	内外面、ナデ	内:灰白色~里褐 外:灰黄色	普	97002672
10-92	1725,1543	深鉢	-	-	(5.3)	(10	.0)	-	内面、調整不明(各面高離) 東北特付着 外面、タテ方向のハケ目。 底基くびれに指揮さえ	内:灰白~黑 外:灰白~灰	良	97001974
10-93	1534	深鉢	-	-	(7.1)	(9.	4)	-	内外面、調整不明 (内面に炭化物付着) 底部に回転台痕跡あり	内:黑褐 外:灰白~灰黄褐	良	97002832
10-94	E-F拡張 青灰粘土~砂土	深体	-		(4.1)	(6.	9)	15-15	内面、ヘラ工具による ナデ後ナデ (?) 外面、ナデ	内: 無拠色 外: にぶい美程 〜関灰色	格	97002669
10-95	1479C·D-2.3 青灰色粘土層	深鉢	=		(4.0)	(7.	5)	-	内面、器面製薬のため調整不明 外面、ナア、一部器面剥離(別度あり)	内:灰褐 外:灰白~浅黄橙	良	97002139
10-96	1632	深鉢	-		(3.2)	5.	7	-	内面、ナデ 外面、ナデ、底部に指押さえ、 黒斑あり	灰白~灰黄褐	1ß	97002128
11-97 8-97	1533	浅鉢	-	-	(3.0)	-	-2	-	内外面、ヘラミガキ 胴屈曲部に突帯あり	灰白~灰黄	Д	97002838
11-98 8-98	C·D拡張 青灰粘土~砂土	深鉢	( <del></del>		(5.3)	E+	9	( <del></del> )	内面、ヨコナデ 外面、具数条痕、口縁部に 刻目突帯、炭化物付着	灰黄褐	Ą	97002096
11 - 99 $8 - 99$	1523 No10トレンチ	浅鉢	(20.8	3)	(3.9)	-		(21.9)	内外面、ヘラミガキ (外面に炭化物付着)	黑褐色	良	97002836
1-100 8-100	1639	浅鉢	-	-	(2.7)	<u> </u>	-	-	内面、ナデ (炭化物付着?) 外面、器面剥離のため凋整不明	内: 親灰、黒葛、里 外: 灰褐、黒葛	Ą	97002133
1 - 101 $8 - 101$	1629	浅鉢	7-		(2.9)	1		-	内外面、ヨコナデ	浅黄橙~にぶい橙	A	97002082
1-102 8-102	1689	<b>没</b> 鉢	-		(4.5)	1	- 1	-	内外面、ヨコナデ	黄灰~揭灰	Ř	97002081
1 - 103 8 - 103	1613	浅鉢	-		(3.0)	-	-		内面、ヘラミガキ 外面、ヘラミガキ後ナデ	内:黒 外:灰~黒	A	97002837
1-104 9-104	1565 E手花張デリット 青渓色修覧上等上面	浅鉢 (彩文土器)	-		(3.0)	-	-		内底部、ヘラミガキ後ナデ 舞台内部、ナデ、舞台部。タテ方向 のヘラミガキ杯部に赤連(?)残る	內:(內定部·原報告) 解內部·所白 外:居色-灰白色	告	97002846
1-105		浅鉢	<u></u>	4	(2.4)	7.5	5	-	内向、ヘラミガキ 外曲、ヘラミガキ、底居(びれナデ (気度あり)	内:褐灰 外:灰白	良	97001970
1-106	1590	· 浅鉢			(3.1)	(7.2	8)	-	内面。ヘラミガキ 外面、ヘラミガキ (*) 底部にかけ、ナデ	黑 色	良	97002093
1-107	1522	es.	(21.4	1)	(2,0)	-	-	-	内外面、ヘラミガキ (外面に、黒斑あり)	灰色	庄	97002839
1-108	1730	浅鉢	-		(6.2)	(10.	(0)	-	内面、ナデ 外面、ヘラミガキ	内:灰白~褐灰 外:黑褐~黑	良	97001969

Fig No	100 F 140 Ac	極 80		法量	(cm)		100 000 - 100 000 on 40 000	45 300	18.45	O THANKS
PL No	出土地点	25 種	口径	器高	底 径	胼胝最大径	形態・調整の特徴	色 調	熄战	根連物交録者
11-109 9-109	1	縄文士器 浅鉢	700	(8.1)	(24.8)		内、外面、ヨコナデ 内面から外面底部に煤(?)付着	内:黑褐色-黑色 外:灰褐色-黑色	普	97002654
11-110	1439,1617	鉢	(23.0)	(8.6)	-	-	内面、脳中交易にヘウミガキ。 一部に反化物分者 外面、口縁起にヘウミガキ、近化物分者	黑色	良	97002076
11-111	1607、C、D拡張 青灰粘土~砂土	495	(35.1)	(6.6)	0.000	-	内面、ナデ、口縁部内側にヘラミガキ 外面、ヨコナデ、口縁部に屈鹿あり	灰白~灰黄	Ą	97002145
11-112	1436	est.	(28.4)	(9.8)	_	( <u></u>	内面。ヘラミガキ後ナデ (?) 外面、口縁部ヨコナデ、頭部ナデ	浅黄ーにぶい黄橙	良	97002090
11-113	1434	·		(8,9)	-	(43.0)	内面、ナデ、一部指揮さえあり 外面、ヘラミガキ後ナデ	灰 白	ß	97002135
12-114	C·D 拡張or1608 青灰粘土~砂土	小型産 (彩文上器)	内、2.9 外、4.2	5.8	3.5	5.8	可認に多達(?)がわずかに残る。口障と 無限の境に向かいあった形で2つの変孔あり 外面はヘラミガキ後十字	内:黄灰色。黑色 外:灰白色。 灰黄色、黑色	告	97002845
12-115 9-115	_	÷	類部径 (8.4)	(5.1)		(11.4)	内面、ヘラミガキ(?) 外面、調整不明	黒褐一黒	Ŗ	97002140
12-116 9-116	C-3GR 青灰色砂質層	金倉大士芸	(8.9)	(7.6)	·	E	内部、ナデ、口線区あたり、ハラミガキモナデ 有知、ハラミガキモナデ、一部二水連行 引出に2本の才能を有する	黄灰色	普	97002844
12-117 9-117	1435、1611 A-B-2.3 青灰粘土~砂土	遊	(9.2)	(7.6)	-	(12.6)	内面、胴上平部へラミガキ。 脚中央部ナデ 外面、 ゥ へラミガキ	内:黑 外:灰~黑	Д	97002134
12-118	E-F拡張 青灰粘土~砂土	遊		(2.2)	(7.0)	-	内面、ナデ 外面、器面摩耗剥離 のため調整不明	内:灰白色 外:梶灰色。 にぶい首般色	普	97002670
12-119	1440 ①	鉢	_	(1.9)	(8.3)	-	内面、ナデ 外面、ヨコナデ、液基、ナデ	灰黄褐色~褐灰色	良	97002084
12-120	1444	vitit	-	(3.5)	(9.9)		内、外面、ナデ (内面、一部剥離)	浅黄橙	良	97002083
12-121	1488	被		(3.1)	9.8	-	内面、器面剥離のため。 調整不明 外面、ヘラミガキ後ナデ	内: 不明 外: 浅黄橙~ にぶい黄橙	Ħ	97002108
12-122	C·D·2.3 青灰粘土~鈴土	- WE	_	(4.1)	(8.8)		内面、ヘラミガキ、底部はナデ 外面、 ・ 底部に向かって 単純のたの調整不明	灰白~暗灰色	良	97002101
12-123 9-123	1485、1494 A-B-2.3落ち込み 青灰粘土・砂土	遊	(13.89)	(11.8)	-	-	内面、ナデ、口縁部に ヘラミガキ 外面、ヘラミガキ	灰白~灰黄	Ŗ	97002103
12-124	1719	遊	類部径 (24.0)	(8,3)	-	-	内側、推定にヘラミガキ   指尾の 上尾分に本色細科付着   耐燃はナデ 外側、指尾ヘラミガキ、上部分に 指押さえ、本色顔料が施されている	内:灰白~にお・香 外:にお・嘘~ にお・水塩	Д	97002127
12-125	1489、1494 E-23落ち込み 青灰粘土・砂土	被	(19.1)	(11.9)	(a-e)		内面、摩託のため調整不明 口縁部あたりにヘラミガキ	内:灰白~烟灰 (日報第:浅青龍) 芳:浅青龍~祝青	ß	97002104
12-126 9-126	1785F-2.3	stit.	V-1	(5.8)	-	(27.6)	内面、ヘラ状工具による ナデ (摩耗している) 外面、ヘラミガキ、煤付着	内:灰白色~ 黄灰色 外:灰色~黑	普	97002658
12-127 9-127	1495、1508、1504 1506、E-23落ち込み 青灰粘土~修士	100	<u></u>	(14.4)	8.6	-	内面、器面器離のため調整不明 外面、ヘクミガキ (摩託) 一部里提あり	浅黄橙~にぶい橙	良	97002144

# 第3章自然科学分析

一佐賀県、薬師森遺跡一

株式会社 古環境研究所

# 佐賀県、薬師森遺跡における植物珪酸体分析

株式会社 古環境研究所

#### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO<sub>2</sub>)が蓄積したものであり、植物がかれたあとも微化石 (プラントオパール) となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌や土器胎土などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている (杉山、1987)。

#### 2. 試料

調査地点は、A地点(C-2グリッド)、B地点(E・F-2・3グリッド)、C地点(G-2グリッド)、D地 点(I-1グリッド)、E地点(SD002)、F地点(C・D拡張区)、の5地点である。分析試料は、縄文 時代晩期末~弥生時代前期の遺物包含層を中心に計20点が採取された。また、これらの層準み から出土した21点の土器片(胎土)についても分析を行った。試料採取箇所を分析結果図に示 す。

#### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラントオパール定量分析法(藤原、1976)をもとに、次の手順で行った。なお、土器についてはコア(中心部分)を抽出して超音波で洗浄し、24時間水浸の後にメノウ乳鉢を用いて細粒化したものを試料として用いた。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- 試料約1gに対して直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6 時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm以下の微粒子除去
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡·計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡 下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート 1 枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラ スピーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。 また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体 1個あたりの植物体乾重、単位: $10^{-6}g$ )をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量 を算出した。イネ(赤米)の換算係数は2.94、ヒエ属(ヒエ)は8.40、ヨシ属(ヨシ)は6.31、 ススキ属(ススキ)は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属(チシマザサ節・チ マキザサ節)は0.75である。

## 4. 分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1、2および図1、2に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

#### [イネ科]

機動細胞由来:イネ、ヒエ属型、キビ族型、モロコシ属型、ヨシ属、ススキ属型 (ススキ属 など)、ウシクサ族型、ウシクサ族型 (大型)、シバ属、マコモ属

額の表皮細胞由来:イネ

#### [イネ科ータケ亜科]

機動細胞由来:メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、クマザサ属型(チシマザサ節やチマキザサ節など)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

#### [イネ科ーその他]

表皮毛起源、棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

クスノキ科、マンサク科 (イスノキ属)、その他

## 5. 考察

[樹木]

#### (1)稲作跡の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ 5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断し ている。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した 危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上 の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

A地点~F地点では、縄文時代晩期末~弥生時代前期の遺物包含層を中心に採取された20試 について分析を行った。その結果、A地点の6層(試料5)、B地点の3層(試料6)、4層 (試料10)、4'層(試料12)、9層(試料14)、10層(試料15)、E地点の2層(試料3、4)、F地点の2層(試料25)、3層(試料27、28)、4層(試料29)からイネが検出された。このうち、F地点の2層(試料25、縄文時代晩期末~)では密度が7,400個/g、B地点の9層(試料14、炭化物混)でも6,500個/gと高い値である。したがって、これらの層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

A地点の6層(試料5)、B地点の3層(試料6、弥生時代前期~)、4'層(試料12、縄文時 代晩期末~弥生時代初頭)、10層(試料15)では、密度が3,000個/g前後と比較的低い値である。 また、その他の層準では密度が1,000個/g前後と低い値である。イネの密度が低い原因としては、

- 1) 稲作が行われていた期間が短かったこと、2) 洪水などによって耕作土が流出したこと、
- 3) 土層の堆積速度が速かったこと、4) 稲藁が耕作地以外に持ち出されていたこと、5) 採取地点が畦畔など耕作面以外であったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

本遺跡から出土した土器(胎土)では、縄文時代晩期末~弥生時代前期とされる21試料について分析を行った。その結果、イネはいずれの試料からも検出されなかった。

## (2)稲籾の生産総量の推定

稲作が行われていた可能性が高いと判断された下地点の2層について、そこで生産された稲 初の総量を算出した(層厚を10cmと仮定)。その結果、面積10a(1,000㎡)あたり7,600kgと算出 された。当時の稲材の年間生産量を面積10aあたり100kgとすると、同層ではおよそ76年間にわ たって稲作が営まれていたことになる。ただし、これらの値は収穫が穂刈りで行われ、稲わら すがすべて水田内に還元されたと仮定して算出しているため、収穫が株刈りで行われて稲わら が屋根材や家畜の飼料などとして水田から持ち出された場合、あるいは堆肥などとして水田内 に還元されていた場合は、その割合に応じて修正を行う必要がある。

#### (3)イネ科栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族(ムギ類が含まれる)、ヒエ属型(ヒエが含まれる)、エノコログサ属型(アワが含まれる)、ジュズダマ属(ハトムギが含まれる)、オセシバ属(シコクビエが含まれる)、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からは、ヒエ属型、モロコシ属型、ジュズダマ属型が検出された。以下に各分類群ごとに栽培の可能性について考察する。

#### 1) ヒエ属型

ヒエ属型は、B地点の4'層(試料12、縄文時代晩期末~弥生時代初頭)から検出された。ヒ

エ属型には栽培種のヒエの他にイヌビエなどの野生種が含まれるが、現時点ではこれらを明確 に識別するには至っていない(杉山ほか、1988)。また、密度も800個/gと低い値であることか ら、ここでヒエが栽培されていた可能性は考えにくい。

#### 2) モロコシ属型

モロコシ属型は、E地点(SD002)の1層(試料2、縄文時代晩期末)と2層(試料3、縄文時代 晩期末)から検出された。モロコシ属型にはモロコシガヤなどの野生種のほかにモロコシなど の栽培種が含まれるが、現時点では植物珪酸体の形態からこれらを識別するには至っていない。 また、密度も700~1,500個/gと低いことから、ここでモロコシなどが栽培されていた可能性は 考えにくい。

## 3) ジュズダマ屋型

ジュズダマ属型は、A・B-2・3グリッドの4~5層から出土した土器の胎土(試料2)から 検出された。ジュズダマ属型には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種 と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も800個/gと低い値で あることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えにくい。

#### 4) その他

イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。キビ族型にはヒエ属やエノコログサ属に近似したものが含まれており、ウシクサ族型 (大型) の中にはサトウキビ属に近似したものが含まれている。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

#### (4)植生・環境の推定

#### 1)A~F地点

上記以外の分類群では、ほとんどの試料で棒状珪酸体や海綿骨針が多量に検出され、ヨシ属、 ススキ属型、ウシクサ族型、ネザサ節型なども検出された。おもな分類群の推定生産量による と、多くの試料でヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、縄文時代晩期末~弥生時代前期とされる遺物包含層の堆積当時は、おもに ヨシ属などが成育する湿地的な環境であったと考えられ、周辺などではススキ属やチガヤ属、 ネザサ節なども見られたものと推定される。また、海綿動物に由来する海綿骨針が多量に検出 されることから、何らかの形で海の影響を受けていた可能性が考えられる。

# 2) 土器 (胎土)

分析を行った試料1~試料22の土器のうち、試料14と試料15ではイネ科Bタイプや棒状珪酸体、イネ科(未分類等)が比較的に多く検出され、ヨシ属やウシクサ族型なども検出された。イネ科Bタイプの給源植物は不明であるが、泥炭層などの湿地性堆積物から一般的に検出されている。試料4、試料5、試料16でもおおむね同様の結果であるが、イネ科Bタイプは比較的少量である。その他の土器では、植物珪酸体はあまり検出されなかった。おもな分類群の推定生産量によると、試料4、5、10、14、15ではヨシ属が優勢となっていることが分かる。

以上のことから、 $C \cdot D \cdot 2 \cdot 3$ グリッドの4層~5層から出土した土器 (試料4、5)、 $F \cdot 3$ グリッドの4層下部~5層から出土した土器 (試料14、15)、 $E \cdot 2 \cdot 3$ グリッドの4層~5層から出土した土器 (試料10) は、ヨシ属やイネ科Bタイプなどが生育する湿地の土壌が主な素材となっているものと推定される。その他の土器では、植物珪酸体があまり検出されないことから、有機物をあまり含まない地山層などが主な素材となっている可能性が考えられる。

#### 6. まとめ

分析の結果、縄文時代晩期末~弥生時代前期とされる遺物包含層からは、部分的にイネの植物珪酸体が多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。当時の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、そこを利用して調査区の一部で水田稲作が行われていたものと推定される。

#### 参考文献

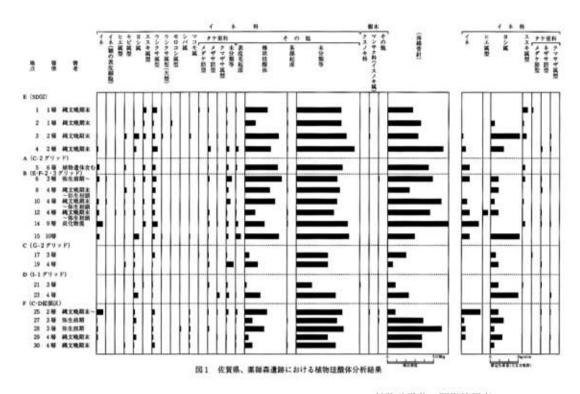
杉山真二 (1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点。植生史研究、第 2号、p.27~37.

杉山真二 (1987) タケ亜科植物の機動細胞珪酸体。富士竹類植物園報告、第31号、p.70-83.

杉山真二・松田隆二・藤原宏志 (1988) 機動細胞珪酸体の形態によるキビ族植物の同定とその 応用-古代農耕追及のための基礎資料として-。考古学と自然科学、20、p.81-92.

藤原宏志 (1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究=-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-。考古学と自然科学、9、p.15-29.

藤原宏志 (1982) プラント・オパール分析法の基礎的研究=-熊本地方における縄文土器胎土 に含まれるプラント・オパールの検出-。考古学と自然科学、14、p.55-65.



## 植物珪酸体の顕微鏡写真

試料名

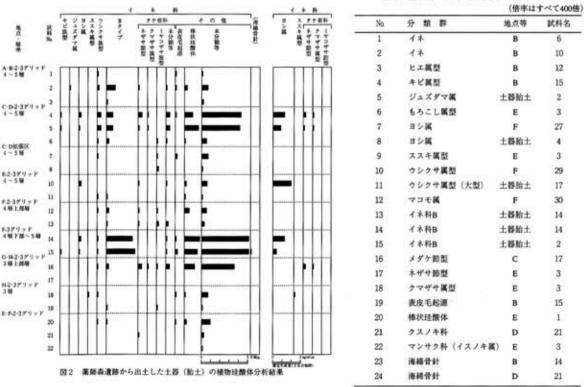


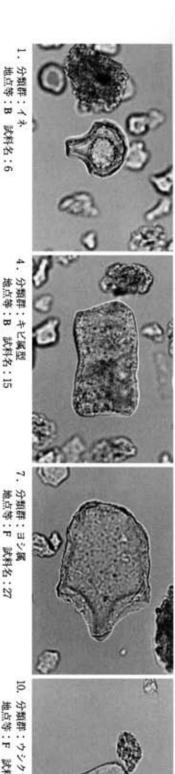
表 1 佐賀県、栗師森遺跡における植物珪酸体分析結果 検出密度 (単位:×100個/g)

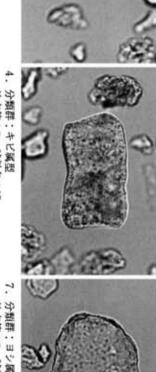
W. market 17 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	E(SD02)			- 1	A(C-2)					C(G-2)		D(1-2)		F(C·D拡張)			RES.)	()		
分類群 \ 試料	1	2	3	- 4	5	- 6	- 8	10	12	14	15	17	19	21	23	25	27	28	23	- 2
(水料						1							- 1		111111					
1*	1		7	15	31	29	31	22	29	65	29					74	- 8	14	15	
イネ財数(額の表皮細胞)	1					7		7												
ヒエ属型					24950				7		0.00									
キビ族型	1		22	3000	12	100	22	7	7		7	2	15	100		900				
ヨシ属	500	7	- 52	23	100	14	15	7	14		51	8	15	15	30	15	23	7	22	
ススキ属型	37	15	30		18	21		15	7					- 8						
ウシクサ級型	52	15	37	53	43	50	44	30	29	58	29	30	- 7	- 8	8	37	- 8	14	15	1
ウシクサ族型(大型)			15	- 1							7									
モロコシ減型	1	15	7	- 1																
シバ属											252					9.25	- 69	14	11122	
マコモ属	-		15.								7		_	_		7.	8	14	7	_
タケ亜科												1 2								
メダケ節型 ネザサ節型	7					l					_	8								
クマザサ属型	7		7	23	6	14	36		14	15	7	8	15	15	Committee	7		14	-	
未分類等	2.0	174	7	8	6		0.00	17240		. 7	in the second	100	- 24	1.0	23	7	100		7	
その他のイネ科	. 7	- 7	- 7	30	25	64	29	45	7	22	22	- 8	81	15	30	22	- 8		- 1	
表皮毛軽源	7		7	30	12			7	7	36	58				8	22	8		7	
棒狀目酸体	247	117	371	257	368		284	335	114	225	386	53	154	23	182	252	98	227	44	
<b>车部起源</b>	7	711	7	8	6	400	204	335	7	7	300	503	134	23	106	side.	- 8	261	**	
未分類等	501	499	557	650	509	451	480	447	414	567	590	350	353	181	439	511	450	525	348	- 4
木起源	501	400	301	900	303	401	400	441	47.4	501	200	300	333	101	400	544	400	060	2,465	-
クスノキ科														8						
マンサク料(イスノキ属)	7		7	4										°		7				
その他						.7										7	8			
(海綿骨針)	277	367	342	620	454	494	240	596	472	683	306	205	66	83	235	81	398	589	363	3
植物且酸体经数	882				1037		917	924		1025			640	271	719		719	830	474	6
おもな分類群の推定生産			(g/m·		1001					1000		101	-040	4				-		_
11			0.22	0.04	0.90	0.84		0.66	0.84	1.92	0.86					2.18	0.22	0.42	0.44	$\overline{}$
ヒエ展型			-	200	-	-	0.92		0.60		-					7.30				
B > 96		0.46	3.28	1.43		0.90	7117	0.47	0.90		3.22	0.48	0.93	0.95	1.91	0.93	1.42	0.45	1.40	0.
ススキ属型	0.46		0.37	27,990	0.23	0.27		0.18	0.09	0.27	1			0.09	2.00			7.590		
メダケ節型	0.09									-		0.09								
ネザサ節型	0.04		0.04	0.11	0.03	0.07	0.17		0.07	0.07	0.03	0.04	0.07	0.07		0.04		0.07		
クマサザ属型	100		0.04	0.04	0.03	100				0.03		Sale.		200	0.11	0.04			0.04	

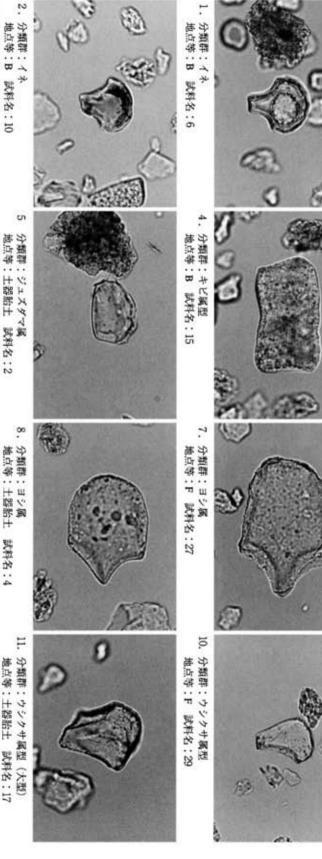
#### 表2 薬師森遺跡から出土した土器(胎土)の植物珪酸体分析結果 絵単字線(開放:×100間(a)

分類群 🔪 試料	A	A · B - 2 · 3		C·D-2-3			C·D拡張区 4~5層		E-2·3 4~5等		F-2·3 4層上部層		F-3 4層下部-5層		G-H-2-3 3層上部層		H-3 3₩		E-F-2-3		
		4~5₩			4~5%																
	1	2	3	4	5	6	7	.8	10	- 11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	18	18
<ul><li>(本料 キビ族型 ジェズダマ属 ヨシ属</li></ul>		8		15 22	7 15				30				22	8 8							
ススキ属型 ウシクサ族型 Bタイプ タケ亜科	8	15 99	8	45 75	45 75	8 30	8			8	8 23	8	15 288	15 316	15 30		8 15	8	8 15		
ネザサ節型 タマサザ属型 ミヤコサザ節型		8		45 7	7	8			8		8	15			38 15 15			8		8	
未分類等 その他のイネ料		8		45	37	8	8	15	8			31	7	- 8	38			. 0			
表皮 毛起源 棒状蛙酸体 未分類等	8 15	8 38 69	23	7 90 426	150 419	8 53	15 69	7	15 60	8 15	30 53	31	7 170 531	30 143 534	113 370	8	8 8 69	15	8 23 107	31	15
(海綿骨針)	100	- 44		1.00%		- 500	-					- Mills	1000	8	HAW.		H-Miller	······NE	200	-coffin-	
植物注酸体総数	31	252	31	777	763	113	99	22	120	38	128	92	1040	1060	634	.8	108	31	161	38	- 15

ヨシ属 ススキ属型		1.41 0.94	1.90		1.40 0.47			
スペイ偏似 ネザサ節型 クマザサ属型	0.04	0.22 0.04 0.06 0.06	0.04	0.04 0.04		0.18 0.11	0.10	0.04
ミヤコザサ節型		0.02		0.02 0.05		0.05	0.02	







ω 分類群: 七工属型 地点等: B 試料名:12

6. 分類群:もろこし属型 地点等:E 試料名:3

**建** 

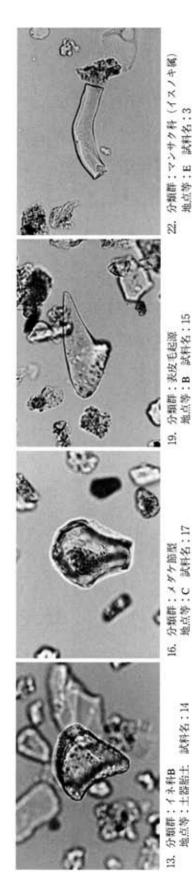
9 分類群:ススキ属型 地点等:E 試料名:3

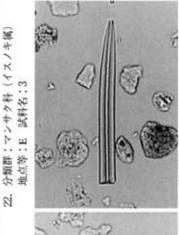
12. 分類群:マコモ属 地点等:F 試料名:30

學

地点等:土器胎土 試料名:17

植物珪酸体の顕微鏡写真1 (倍率はすべて400倍)

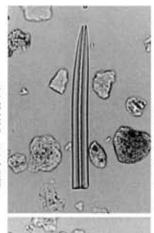




1/3

武科名:14

地点等: 土器胎土





17 分類群: 木ザサ節型 地点等: E 試料名:3

**試料名:14** 

14. 分類群:イネ科B 地点等:土器胎土

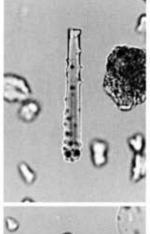
0



24. 分類群:海綿骨針

分類群:クスノキ科 地点等:D 試料名:21



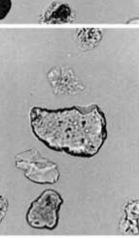


地点等: E 試料名:3 18. 分類群:クマザサ属型

试料名:2

分類群: イネ科B 地点等: 土器胎土

15.



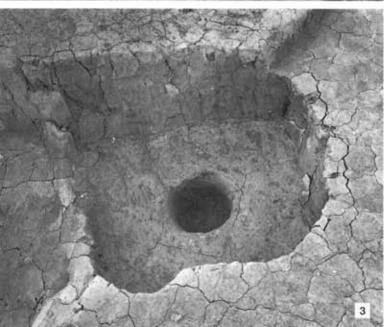
21,

地点等:D 試料名:21

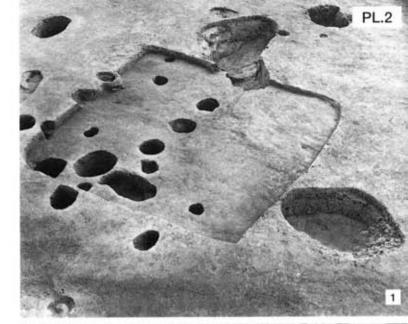
# 図 版







- 1. 調査区全景 (東から)
- 2. 調査区西側 (西から)
- 3. SK49土坑 (東から)







- 1. SH01竪穴住居跡(北から)
- 2. SH02.04.05.08竪穴住居跡 (北東から)
- 3. SH03竪穴式住居跡 (西から)

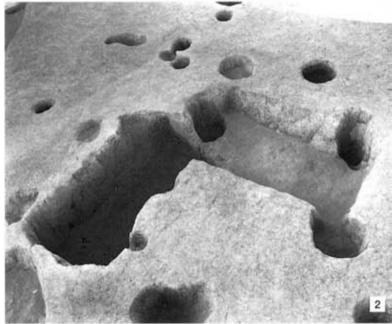






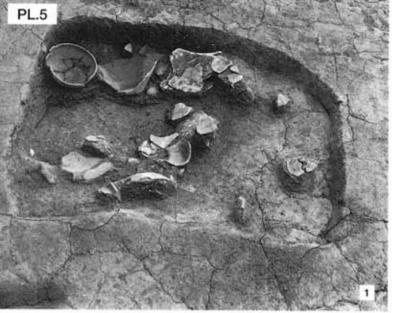
- 1. SH07竪穴住居跡(北西から)
- 2. SH08竪穴住居跡 (北東から)
- 3. SH13竪穴住居跡(北から)



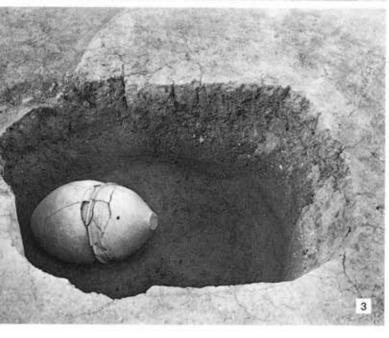




- 1. SH48竪穴住居跡SK28.33土坑 (南から)
- 2. SK26.27土坑 (東から)
- 3. SK28土坑 (北西から)







- 1. SK21土坑 (北から) 2. SX18円形周溝 (北から)
- 3. SJ41甕棺墓(南から)

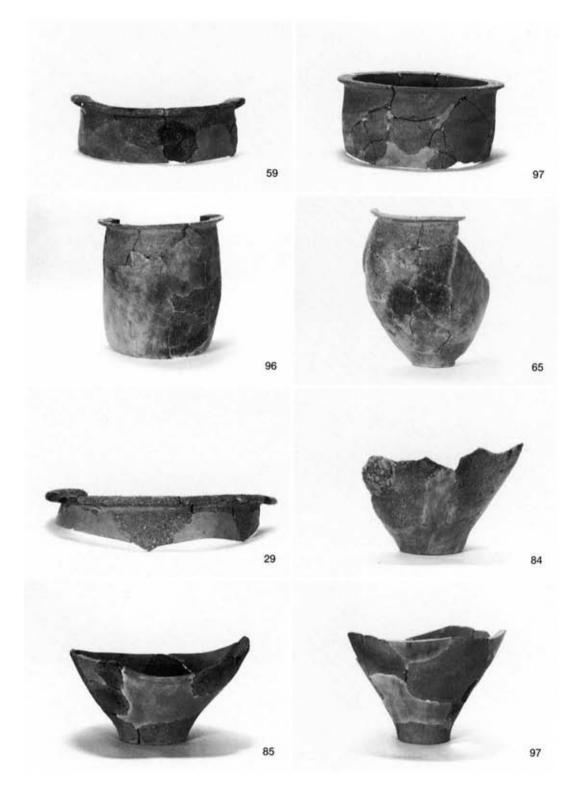




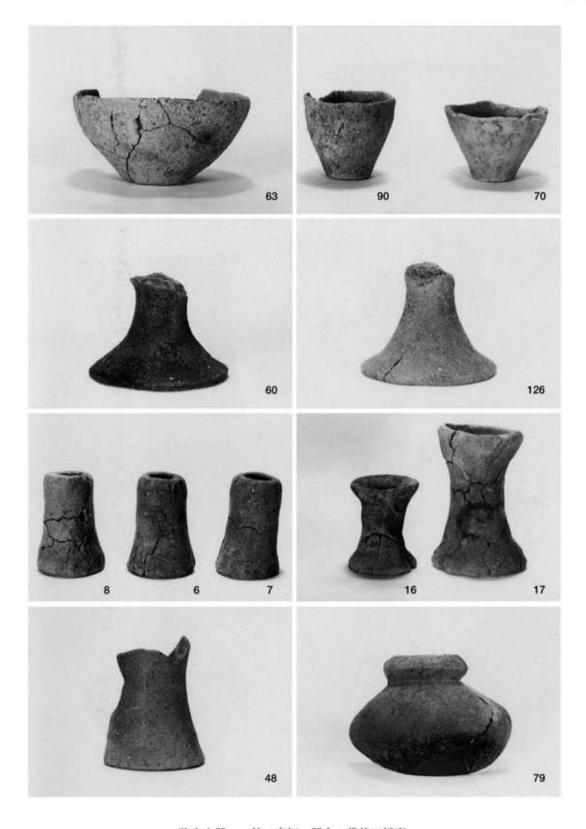




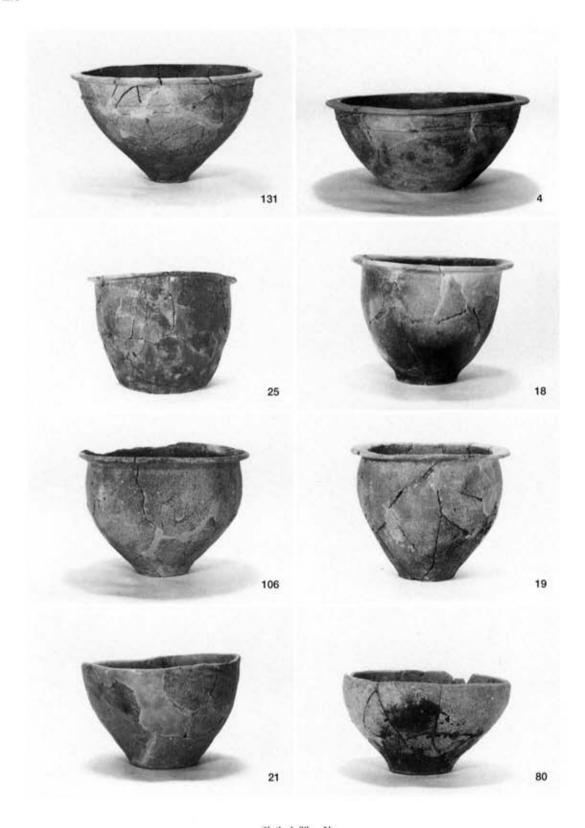
- 1. SH10.11竪穴住居跡 (西から)
- 2. SH14竪穴住居跡(南西から)
- 3. SH14竪穴住居跡竈(南から)
- 4. SB09掘立柱建物跡(東から)



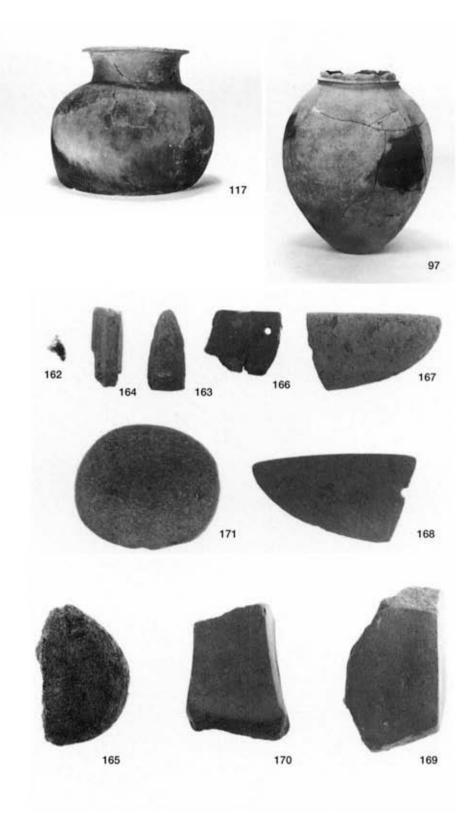
弥生土器 甕



弥生土器 鉢 高杯 器台 袋状口縁壺



弥生土器 鉢



弥生土器 壺、石器、石製品





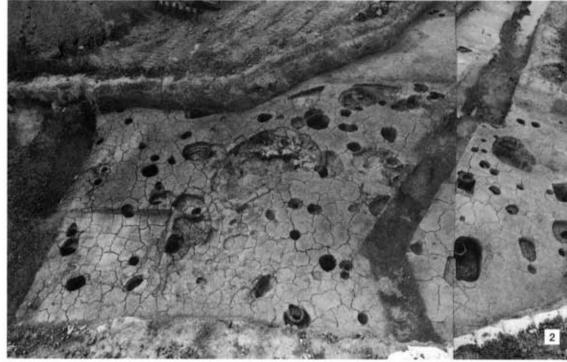


- 1. R区全景 (西から)
- 2. S区土塁部分

(調査前全景:南東から)

3. S区土塁部分(南東から)





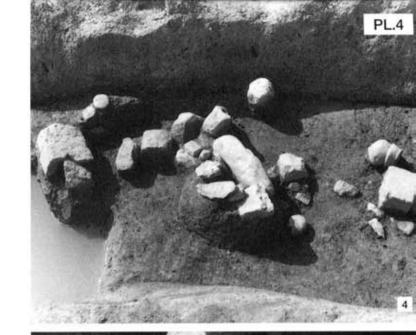
- 1. U区全景 (南から) 2. V区全景 (東から)

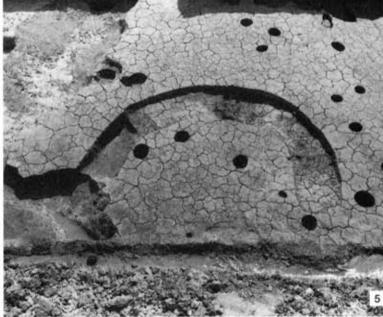






- 1. W区全景(北から)
- 2. Q区SE001井戸 (北から) 3. S区土塁土層 (南東から)







- 1. S区 SD002 溝状遺構内 石塔出土状況 (東から)
- 2. U区 SR020 円形周溝 (東から)
- 3. U区SB033 据立柱建物 (東から)

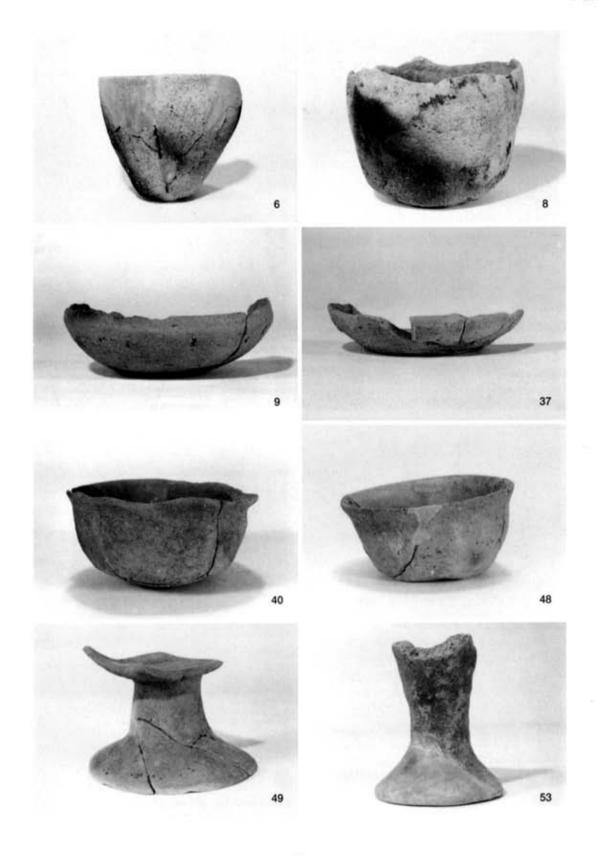




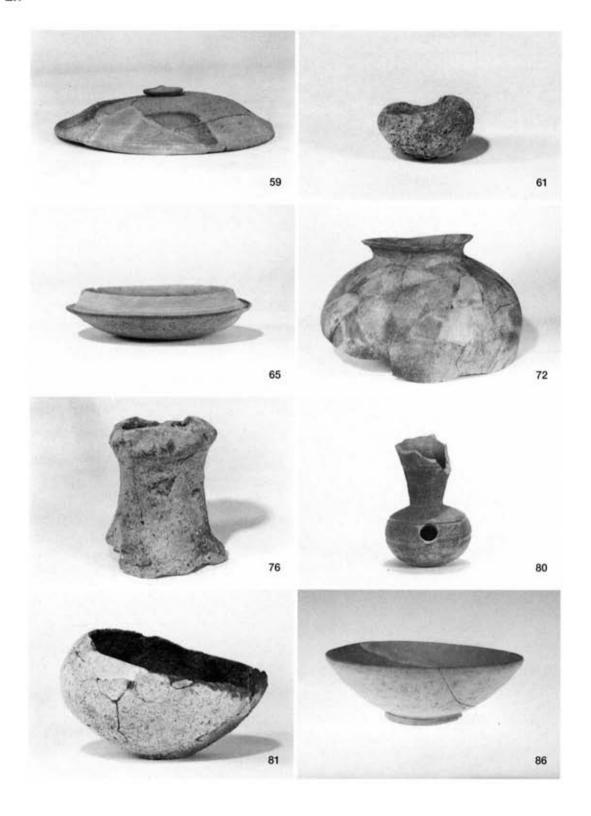




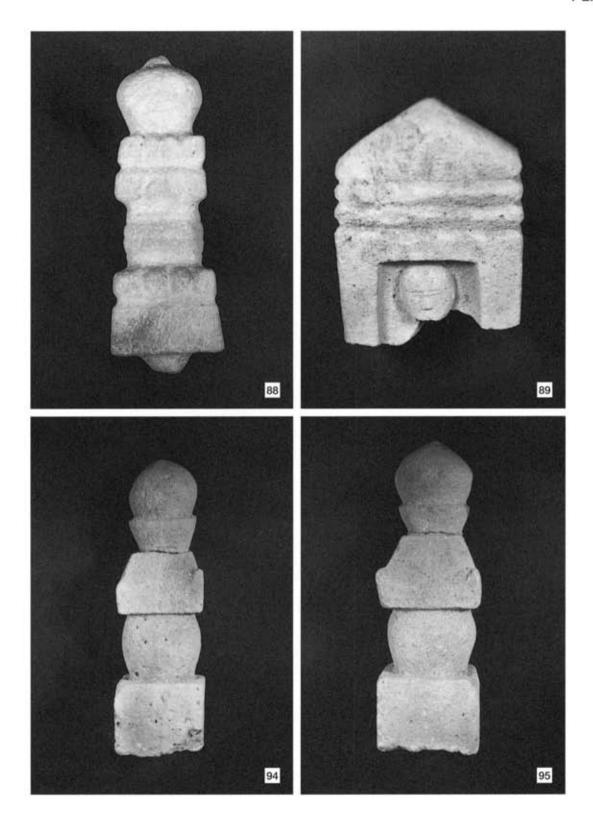
- 下中杖遺跡 1. U区 土錘出土状況
  - (北から)
- 2. U⊠ P019
- (西から)
- 3. V区 SE005井戸
  - (北から)
- 4. 作業風景



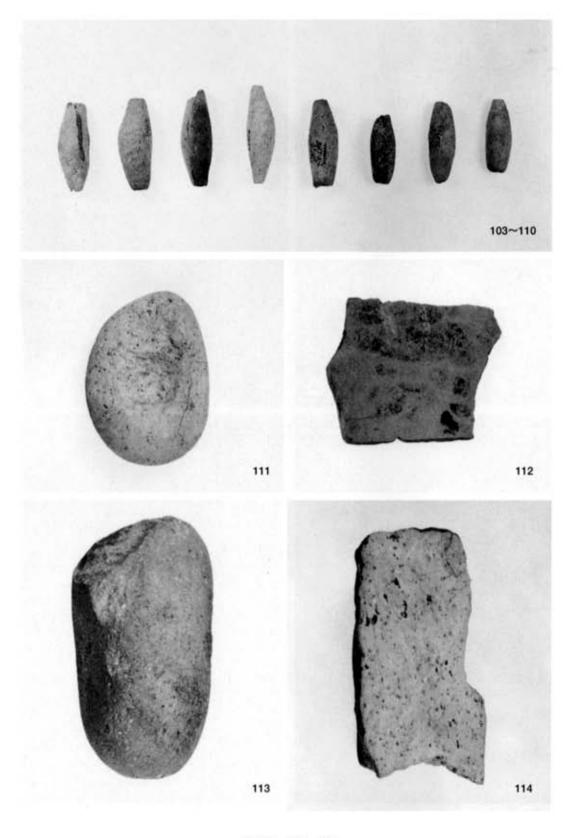
O区出土遺物 6.8.9 S区出土遺物 37.40 T区出土遺物 48.49.53



T区出土遺物 59.61 U区出土遺物 65.72.76.80.81 T区出土遺物 86



S区出土石塔類



土製品 103~110 石製品 111~114

田手二本松遺跡



田手二本松遺跡 Ⅱ区全景(北から)







#### 田手二本松遺跡

- 1. I区全景 (北から)
- 2. 遺物出土状況1
- 3. 遺物出土状況2

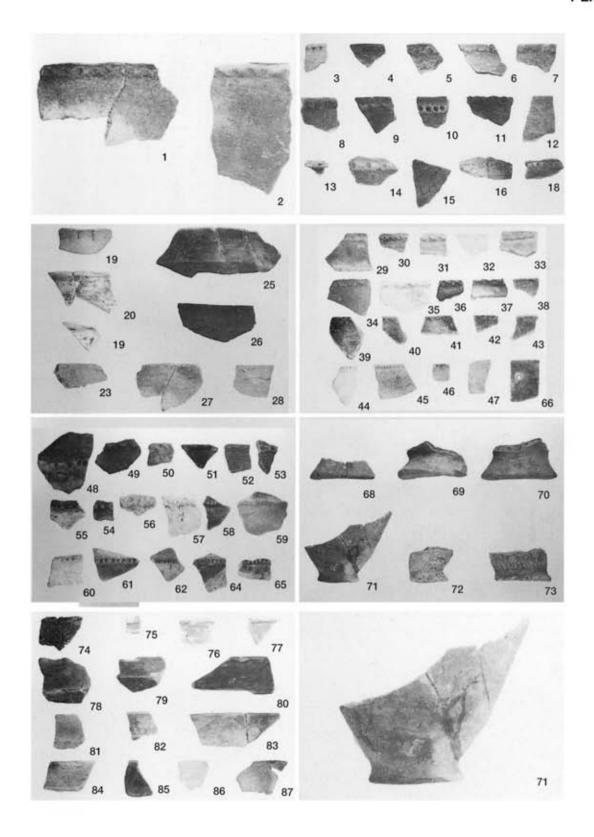




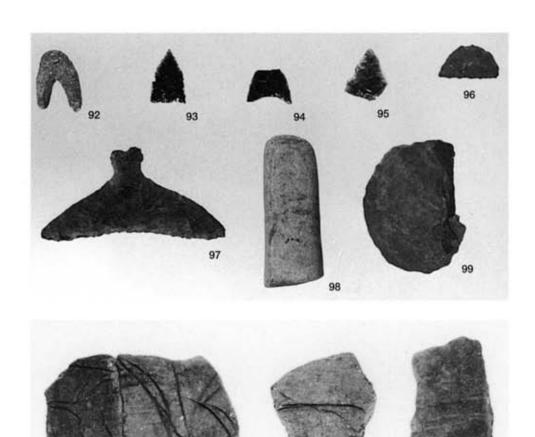


#### 田手二本松遺跡

- 1. SD002溝状遺構 (西から)
- 2. SD003溝状遺構 (畦畔:西から
- 3. A-15グリッド土層 (西から



I区出土遺物 1~28 II区出土遺物 29~71







薬師森遺跡 1. 遺跡遠景 (南から) 2. 調査区全景 (西から)







- 1. 遺跡全景 (西から)
- 2. SD002 溝状遺構 (南東から)
- 3. **D·E·F·G**グリッド段落ち部 (南から)



- 1. Eグリッド西壁土層
- 2. C · D拡張区
- 3. Fグリッド西壁土層
- 4. SD002溝状遺構土層







- 1. 杭出土状况
- 2. A·Bグリッド遺物出土状況
- 3. C・Dグリッド遺物出土状況 (南から)





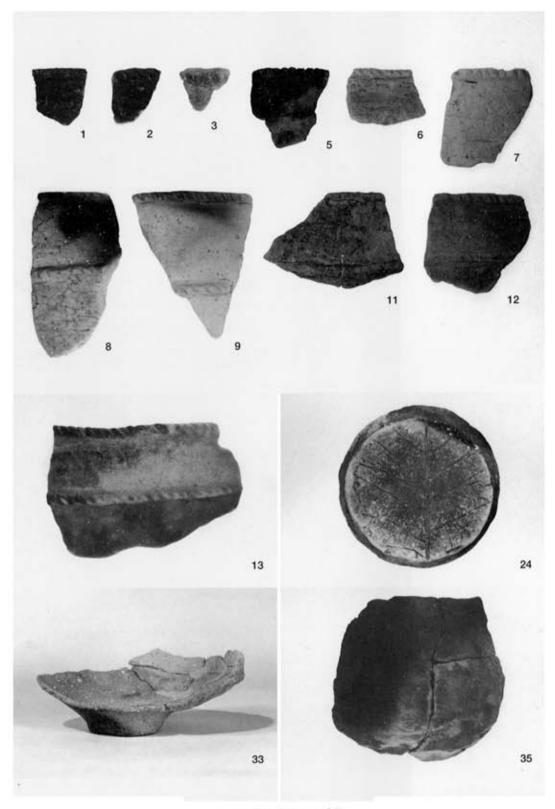
- 1. Eグリッド遺物出土状況(南から) 2. Fグリッド遺物出土状況(南から)



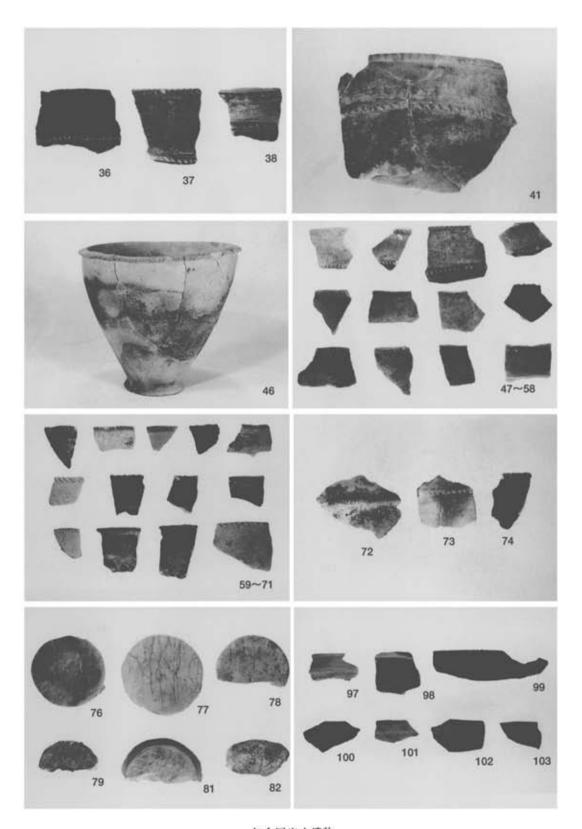


- 1. C・D拡張区小壺出土状況 (西から)
- 2. C・D拡張区 遺物出土状況 (南から)
- 3. 作業風景

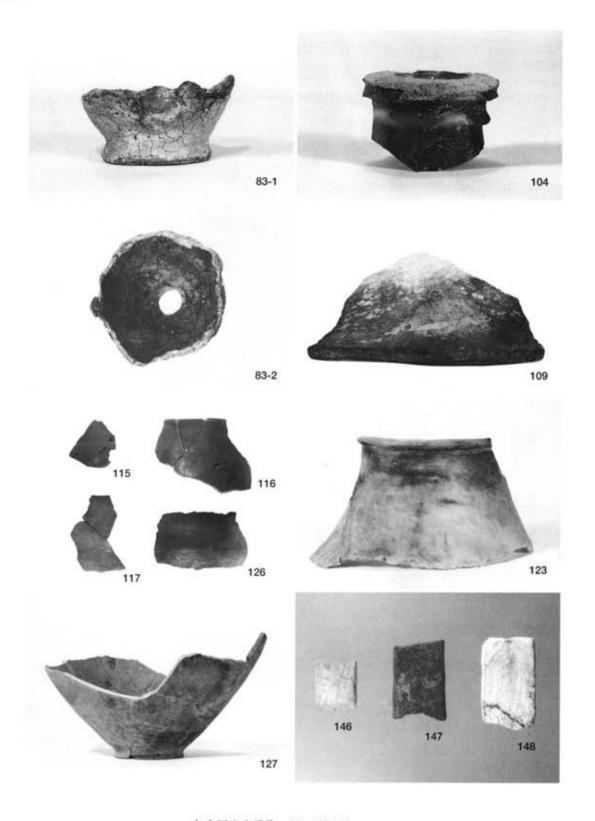




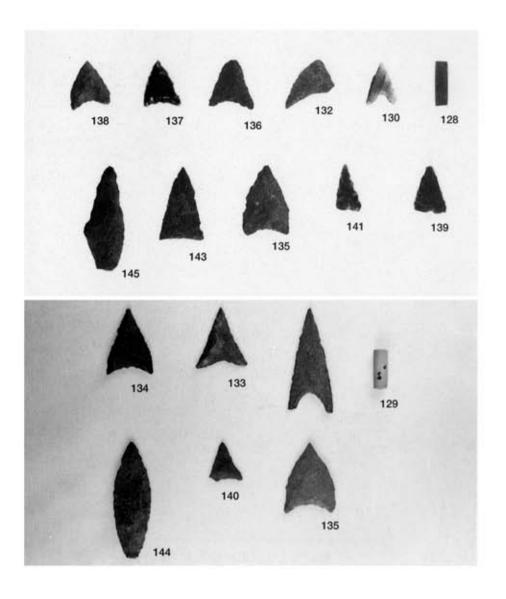
SD002溝状遺構出土遺物

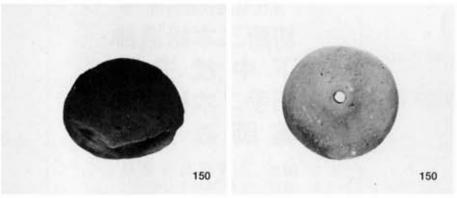


包含層出土遺物



包含層出土遺物 83~127.148 SX001不明遺構出土遺物 146·147





包含層出土遺物

佐賀県文化財調査報告書 第136集 筑後川下流用水事業に係る 文化財調査報告書 5 坊所三本松遺跡 下 中 杖 遺 跡 田手二本松遺跡 薬 師 森 遺 跡

編集 佐賀県教育委員会 発行 佐賀市城内1丁目1番59号 印刷 日之出印刷株式会社 佐賀市高木瀬西6丁目

